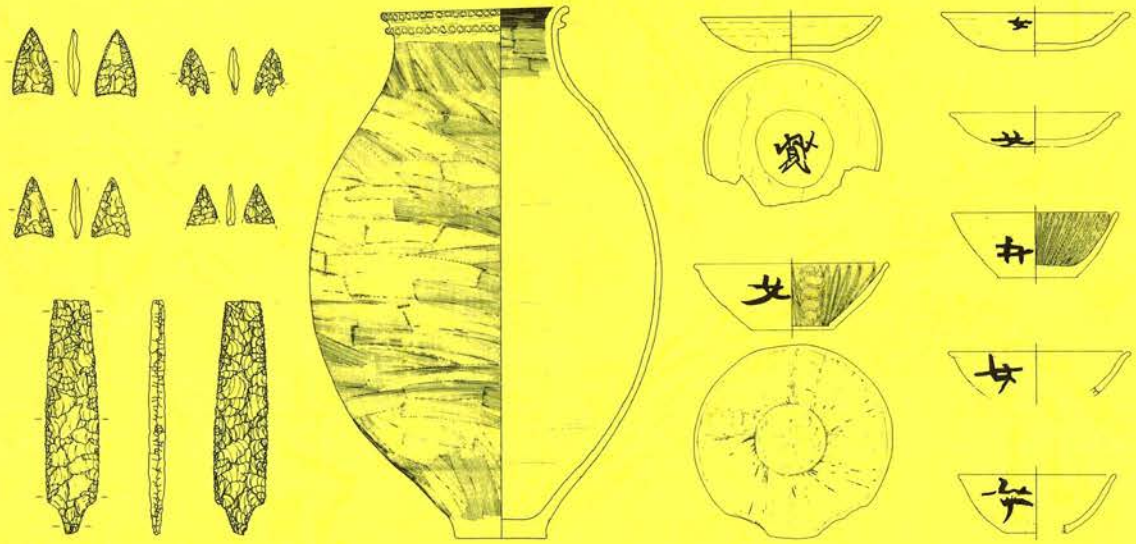
下大内遺跡
屋敷添第2遺跡
中原遺跡

県営圃場整備事業に伴う縄文時代・平安時代・
中世の遺跡の発掘調査報告書



1997

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

下大内遺跡
屋敷添第2遺跡
中原遺跡

県営圃場整備事業に伴う縄文時代・平安時代・
中世の遺跡の発掘調査報告書

1997

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

序

平成７年度、８年度に明野村では、県営圃場整備事業大内工区、屋敷添第２工区、厚芝工区の施工が予定されました。この県営圃場整備事業に先立ち、３カ所で埋蔵文化財の発掘調査が明野村教育委員会により実施されました。この調査報告書には下大内遺跡、屋敷添第２遺跡、中原遺跡の発掘調査の成果が収められています。

下大内遺跡は以前より遺物が表面採集され遺跡であることが知られていました。発掘調査の結果、住居跡15軒から成る平安時代の集落跡と平安時代末頃と思われる共同墓地などが姿を現しました。とりわけ弥生時代の再葬墓と呼ばれる土坑と大型の壷形土器は、新聞報道にも取り上げられただけでなく、山梨県内でも貴重な発見と評価され、壷形土器は山梨県指定文化財にもなりました。これらの発見に地元施工区の方々も一様に驚かれたようで、遺跡見学会には大勢の方が参加下さいました。

屋敷添第２遺跡、中原遺跡はともに遺跡の残り具合が芳しくなく、住居跡１、２軒程度の発見にとどまりましたが、それぞれ地域の歴史解明に寄与する資料となることを期待しております。

発掘調査にあたっては圃場整備事業施工区の関係者に有形無形のご迷惑をおかけいたしました。お詫び申し上げるとともにご協力に深く感謝いたします。また、山梨県教育庁学術文化課、峡北土地改良事務所のみなさまには多方面にわたりご指導、ご教示を賜りましたことを御礼申し上げます。最後に、夏の炎天下での発掘作業に従事された発掘作業員のみなさまのご苦労をねぎらい、感謝申し上げます。

平成９年３月31日

明野村教育委員会

例　言

1　本報告書は、山梨県北巨摩郡明野村内で、県営圃場整備事業にともない発掘調査を実施した以下の3遺跡の発掘調査報告書である。

下大内（しもおおうち）遺跡　　明野村小笠原字大内3137地内ほか
屋敷添（やしきぞえ）第２遺跡　明野村上手字屋敷添1306地内ほか
中原（なかはら）遺跡　　明野村小笠原4072地内

2　発掘調査は以下のとおりに実施した。

下大内遺跡　　平成７年（1995）５月29日～９月４日　調査面積16,000㎡
屋敷添第２遺跡　平成８年（1996）７月３日～９月16日　調査面積16,000㎡
中原遺跡　　平成９年（1997）12月２日～12月28日　調査面積　22㎡
整理、報告書作成　平成８年４月１日～平成９年３月31日

3　発掘調査にあたった組織は次のとおりである。

調 査 主 体　明野村教育委員会
調査担当者　明野村教育委員会社会教育係文化財担当　佐野隆
調査事務局　明野村教育委員会事務局

4　本書の執筆、編集は佐野が行った。遺構、遺物の実測は佐野、橋本、筒井、斉藤、清水さ、八橋が行った。本書中の遺構、遺物の写真は佐野が撮影した。

5　本書作成にあたって次の方々にご指導、ご教示を頂いた。ここにご芳名を記して感謝したい（敬称略）。
猪股善彦、中山誠二、森原明廣、山梨県教育庁学術文化課、北巨摩市町村文化財担当者会

6　本文中の注、参考文献はすべて巻末にまとめた。

7　本遺跡の出土品および諸記録はすべて明野村教育委員会が保管している。

8　調査参加者（敬称略）
阿部恵子、石渡節子、大柴由紀、川名淑媛、小松原千津、清水昭子、清水さゆり、清水みゆき、清水小春、篠原源一、篠原啓子、鈴木晶子、筒井つや子、筒井菜津子、入戸野宏、橋本隆廣、保坂秋蘭、三井啓介、三塚てつ子

凡　例

1　本書中の土師器胎土は次のとおり器種別に分類した。分類は肉眼観察による主観的なものであり、土器によっては異なる器種の胎土分類に近いものがある。そのような場合には器種にこだわらずもっとも近い胎土質分類にあてはめた。

坏　Ａ１類　赤色粒子が混じるキメの細かい緻密な胎土質で、色調は赤褐色もしくは明赤褐色。いわゆる甲斐型坏の胎土である。

Ａ２類　Ａ１類とほぼ同様の胎土質であるが、焼成が悪く色調が明黄褐色。

Ａ３類　赤色粒子が僅かに混じるが石英、長石の粒子が目立つややざらついてキメの粗い胎土質で、色調は暗褐色。北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。

Ａ４類　赤色粒子が僅かに混じるが石英、長石、雲母の小粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は赤褐色。甲斐型Ⅲ期頃の坏によくみられる。

Ａ５類　Ａ１と同様の鉱物粒子を含むがキメが粗くざらついた胎土質で、色調は赤褐色もしくは明赤褐色。北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。

甕　Ｂ１類　雲母、長石、石英粒子が混じるざらついたキメの粗い胎土質で、色調は暗赤褐色もしくは暗褐色。いわゆる甲斐型甕の胎土質である。

Ｂ２類　Ｂ１類と同様の胎土質であるが、色調は黒色。

Ｂ３類　雲母、長石、石英の小粒子と僅かに赤色粒子が混じるキメの細かい胎土質で、色調は黄褐色。北巨摩地方の在地生産土師器の可能性が考えられる。

非甲斐型坏

Ｃ１類　雲母粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は乳白色もしくは乳灰色。現長野県域で生産されたと思われる土師器。

Ｃ２類　雲母粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は赤褐色もしくは暗赤褐色。

Ｃ３類　雲母、長石、石英粒子とごく僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は暗赤褐色。

Ｃ４類　雲母、長石粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は黄橙色。

Ｃ５類　Ｃ４類と同様の胎土質でややキメが細かい。色調はにぶい黄橙色。

ロクロ整形甕

Ｄ１類　雲母、長石、石英の大きめの粒子が混じるキメのやや粗い胎土質で、色調は浅黄橙色。

Ｄ２類　雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調はにぶい黄橙色。

Ｄ３類　雲母、長石、石英の小粒子と僅かの赤色粒子が混じるキメの細かい胎土質で、色調は暗赤褐色。

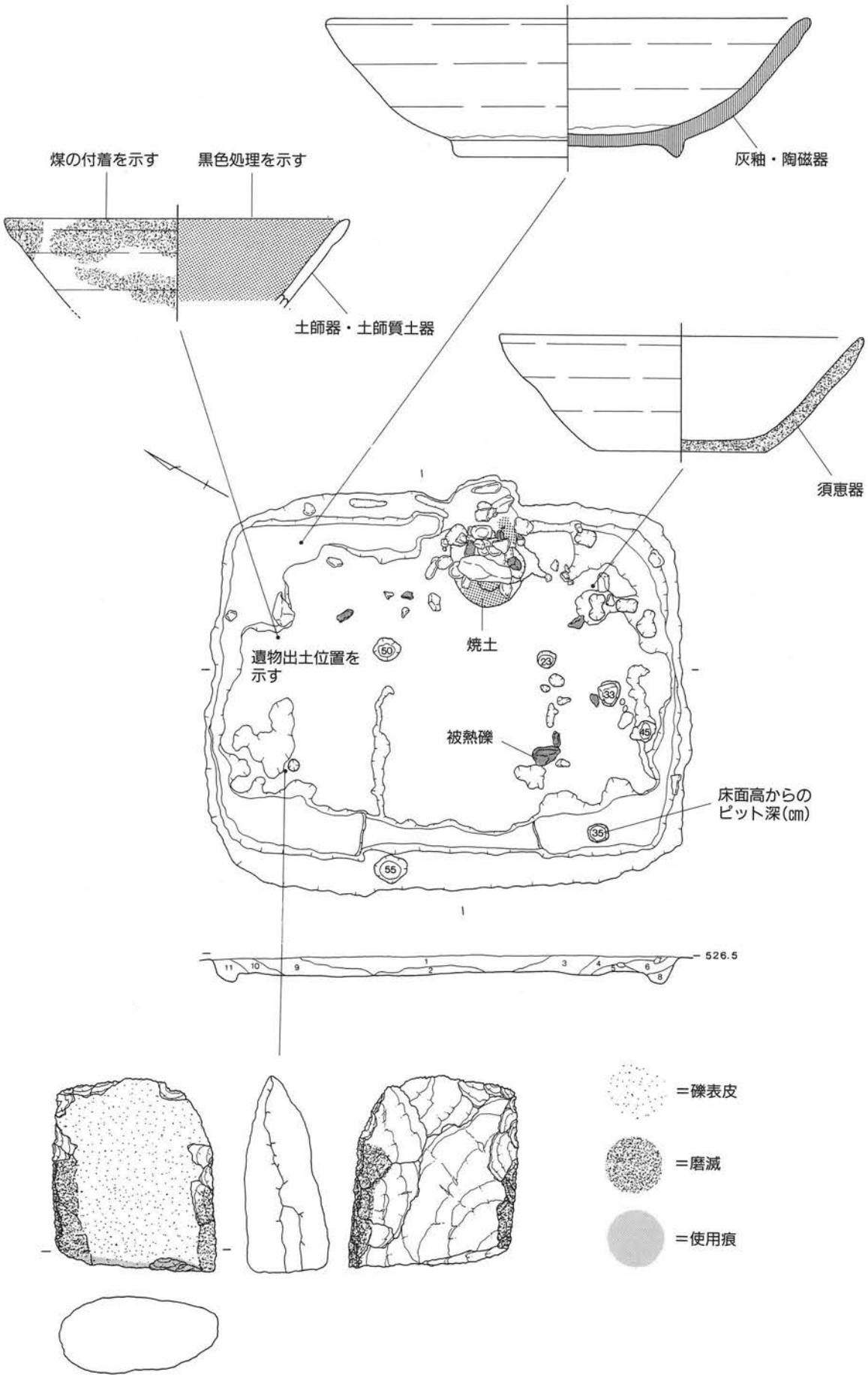
Ｄ４類　Ｄ３類と同様の胎土質で色調は黒色。

土師質土器

Ｅ１類　雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの細かい胎土質で、色調は暗赤褐色。甕Ｂ１類胎土のキメを細かくしたような胎土質である。

Ｅ２類　雲母、長石、石英粒子と僅かの赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土質で、色調は赤褐色もしくは黄褐色。

2　本書挿図中にある数字、記号、スクリーントーンは以下の内容を示す。



本文目次

下大内遺跡

第１章　遺跡をとりまく環境 …… 2

地理環境 …… 2

歴史環境 …… 3

第２章　調査に至る経緯 …… 3

第３章　縄文時代の遺物 …… 6

第４章　弥生時代の遺構と遺物 …… 9

第５章　平安時代の遺構と遺物 ……13

第６章　遺構外出土遺物 ……78

第７章　下大内遺跡検出土坑の内容物について ……パリノ・サーヴェイ株式会社……78

第８章　下大内遺跡の自然科学分析調査 ……パリノ・サーヴェイ株式会社……85

第９章　ま　と　め ……96

屋敷添第２遺跡

第１章　遺跡をとりまく環境……100

地理環境……100

歴史環境……100

第２章　調査に至る経緯……100

第３章　平安時代の遺構と遺物……102

第４章　平安時代末から中世の遺構と遺物……113

中原遺跡

第１章　遺跡をとりまく環境……124

地理環境……124

歴史環境……124

第２章　調査に至る経緯……125

第３章　縄文時代の遺構と遺物……126

図版・写真図版目次

下大内遺跡

第１図　下大内遺跡位置図 …… 2
第２図　平安時代遺跡位置図 …… 4
第３図　遺跡全体図 …… 5
第４図　縄文時代の遺物 …… 7
第５図　縄文時代の遺物 …… 8
第６図　225号土坑 ……10
第７図　225号土坑出土遺物 ……11
第８図　225号土坑出土遺物 ……12
第９図　１号住居跡カマド、１号ピット及び遺物分布図 ……14
第10図　１号住居跡出土遺物 ……15
第11図　１号住居跡出土遺物 ……16
第12図　１号住居跡遺物分布図 ……17
第13図　２号住居跡 ……17
第14図　２号住居跡カマド ……21
第15図　２号住居跡遺物分布図 ……21
第16図　２号住居跡遺物分布図 ……22
第17図　２号住居跡出土遺物 ……23
第18図　２号住居跡出土遺物 ……24
第19図　２号住居跡出土遺物 ……25
第20図　２号住居跡出土遺物 ……26
第21図　２号住居跡出土遺物 ……27
第22図　２号住居跡遺物分布図 ……29
第23図　３号住居跡 ……29
第24図　３号住居跡出土遺物 ……30
第25図　３号住居跡出土遺物 ……31
第26図　３号住居跡遺物分布図 ……32
第27図　４号住居跡、カマド ……35
第28図　４号住居跡出土遺物 ……36
第29図　４号住居跡遺物分布図 ……37
第30図　５号住居跡、カマド ……39
第31図　６号住居跡、カマド ……40
第32図　６号住居跡出土遺物 ……41
第33図　６号住居跡出土遺物 ……42
第34図　６号住居跡出土遺物 ……43
第35図　６号住居跡遺物分布図 ……44
第36図　７号住居跡 ……47
第37図　10号住居跡、カマド ……48
第38図　７号、10号住居跡出土遺物 ……49
第39図　11号、18号住居跡、11号住居跡カマド ……52
第40図　11号、18号住居跡遺物分布図 ……53
第41図　12号住居跡、カマド ……53
第42図　13号住居跡 ……55
第43図　14号住居跡、遺物分布図 ……57
第44図　16号住居跡、遺物分布図 ……58
第45図　11号住居跡出土遺物 ……59
第46図　11号、12号住居跡出土遺物 ……60
第47図　12号～16号住居跡出土遺物 ……61
第48図　16号住居跡出土遺物 ……62
第49図　土坑位置図 ……64
第50図　第１土坑群・第２土坑群 ……65
第51図　第３土坑群・第４土坑群 ……66
第52図　土坑・竪穴遺構 ……67
第53図　土坑・溝及び出土遺物 ……68
第54図　土坑出土遺物 ……69
第55図　土坑出土遺物・遺構外出土遺物 ……70

写真図版１　下大内遺跡遠景・225号土坑 ……132
写真図版２　225号土坑遺物出土状況 ……133
写真図版３　225号土坑遺物出土状況 ……134
写真図版４　225号土坑完掘･縄文時代の遺物･225号土坑遺物 ……135
写真図版５　225号土坑出土広口壷 ……136
写真図版６　225号土坑出土遺物 ……137
写真図版７　１号住居跡・カマド ……138
写真図版８　１号ピット検出状況・出土遺物 ……139
写真図版９　２号住居跡・カマド ……140
写真図版10　２号住居跡遺物出土状況・出土遺物 ……141
写真図版11　３号住居跡・遺物出土状況 ……142
写真図版12　４号住居跡・炭化材出土状況 ……143
写真図版13　４号住居跡カマド・溝切り合い状況 ……144
写真図版14　５号住居跡・カマド ……145
写真図版15　６号住居跡・カマド ……146
写真図版16　６号住居跡遺物出土状況・出土遺物 ……147
写真図版17　７号住居跡・５号土坑内炭化材出土状況 ……148
写真図版18　10号住居跡・カマド ……149
写真図版19　４～10号住居跡出土遺物・11号住居跡 ……150
写真図版20　11号住居跡カマド・遺物出土状況 ……151
写真図版21　11号住居跡遺物出土状況・12号住居跡 ……152
写真図版22　12号住居跡カマド・炭化材出土状況 ……153
写真図版23　13号住居跡・14号住居跡 ……154
写真図版24　16号住居跡・18号住居跡 ……155
写真図版25　11～16号住居跡出土遺物･遺跡より出土した主な墨書土器片 …156
写真図版26　１号竪穴遺構・２号竪穴遺構 ……157
写真図版27　288・289号土坑・同完掘状況 ……158
写真図版28　234号土坑・同完掘状況 ……159
写真図版29　299・300号土坑・300号土坑下層礫 ……160
写真図版30　300号土坑完掘状況・299号土坑完掘状況 ……161
写真図版31　第２土坑群検出状況・同完掘状況 ……162
写真図版32　第３土坑群・第４土坑群検出状況 ……163

写真図版33　第４土坑群・調査参加者 ……164

屋敷添第２遺跡

第１図　遺跡位置図 ……101
第２図　第２調査区全体図 ……101
第３図　１号住居跡・遺物分布図 ……103
第４図　１号住居跡出土遺物 ……104
第５図　１号住居跡出土遺物 ……105
第６図　１号住居跡遺物分布図 ……107
第７図　２号住居跡 ……107
第８図　２号住居跡出土遺物 ……108
第９図　２号住居跡出土遺物 ……109
第10図　２号住居跡出土遺物 ……110
第11図　２号住居跡出土遺物 ……111
第12図　２号住居跡遺物分布図 ……112
第13図　第１調査区全体図 ……117
第14図　土坑位置図 ……117
第15図　土坑出土遺物 ……118
第16図　土坑出土遺物 ……119
第17図　土坑出土遺物・遺構外出土遺物 ……120
第18図　遺構外出土遺物 ……121
第19図　遺構外出土遺物 ……122

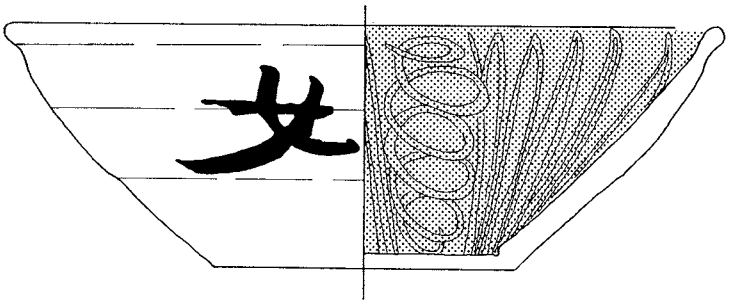
写真図版34　屋敷添第２遺跡１号住居跡・遺物出土状況 ……165
写真図版35　２号住居跡遺物出土状況・１・２号住居跡出土遺物 …166
写真図版36　第１調査区近景・20号土坑 ……167
写真図版37　20号土坑・22号土坑 ……168
写真図版38　43号土坑・第１調査区出土遺物 ……169

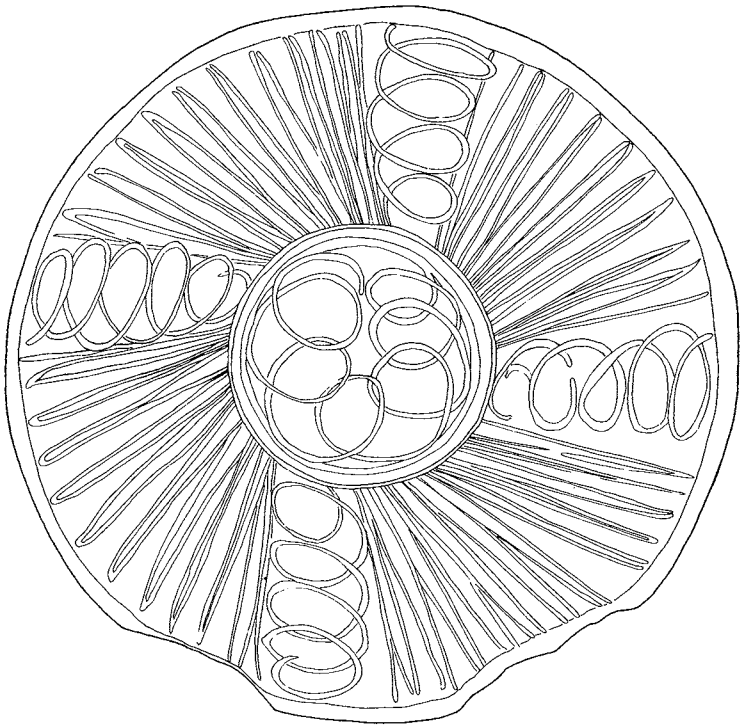
中原遺跡

第１図　中原遺跡位置図 ……124
第２図　中原遺跡調査区 ……125
第３図　１号住居跡 ……126
第４図　１号住居跡出土遺物 ……127
第５図　１号住居跡出土遺物 ……128
第６図　１号住居跡遺物分布図 ……129

写真図版39　中原遺跡遠景・１号住居跡 ……170
写真図版40　埋甕炉・同土器 ……171

下大内遺跡





第１章　遺跡をとりまく環境

地理環境（第１図、写真図版１）

下大内遺跡は山梨県北西部、茅ヶ岳山麓に位置する。遺跡の標高は約525ｍ前後である。

茅ヶ岳山麓は新生代第４紀洪新世に黒富士火山、茅ヶ岳火山の噴火による火山噴出物によって形成され、西に南アルプス（赤石山脈）、南に富士山、北に八ヶ岳が眺望できる。肥沃な火山灰堆積により大根などを中心に、畑作農業が盛んであるが、一面火山性山麓であるために伏流水に乏しく年平均雨量も少ないため、本格的な水田耕作は江戸時代初期の用水建設と新田開発以後に始まった土地柄である（註１）。現在水田は山麓の西端を流れる塩川の旧段丘面上にみられる。

茅ヶ岳に発する南沢川は幅200ｍから300ｍほどの谷を形成して塩川へと注ぐ。この谷が形成する崖は南沢川北側で約20ｍほどになり、下大内遺跡はちょうどこの崖で北風を遮られるような位置にある。現在、遺跡周辺は南沢川北側に一部水田が広がり、ほかは桑畑と普通畑とで利用されている。

遺跡北側には黒色土が厚く堆積する旧河道がある。遺跡の範囲を確認する試掘調査の際、若干の平安時代の遺物が流れ込んでいたため、平安時代には埋没過程にあったと思われる。

茅ヶ岳山麓の西端は秩父山地に発する塩川が南流している。塩川は茅ヶ岳山麓に浅尾面、神取面といった段丘面を形成し、その西端では比高差50ｍほどの断崖を形成する。

塩川は須玉川と合流した後氾濫原を広げ、現在藤井平と呼ばれる平坦面を形成している。藤井平は歴史的に山梨県北西部における水田耕作の中心地であり、現在も水田地帯となっている。

第１図　下大内遺跡位置図（1/10,000）

歴史環境（第2図）

下大内遺跡からは縄文時代草創期、弥生時代、平安時代の遺構が発見されている。

縄文時代草創期では本遺跡の北約3kmに神取遺跡（30）がある。平成4年度に調査され、縄文時代草創期の遺物がまとまって出土している。

弥生時代では南約4kmに宮ノ前遺跡（45）がある。宮ノ前遺跡は藤井平に位置する、弥生時代前期頃の水田跡と甕棺墓が発見された遺跡で、本遺跡で検出された再葬墓を設けた集団を推測する際に重要な遺跡である。そのほか藤井平ではいくつかの弥生時代の遺跡がみられ、後田第2遺跡など古墳時代の遺跡も散見される。

平安時代になると茅ヶ岳山麓でも集落遺跡が急増し、遺跡周辺では屋敷添遺跡（36）、屋敷添第2遺跡（35）、高台・中谷井遺跡（34）、神取遺跡（30）などがある。神取遺跡では、下大内遺跡で検出された墓と思われる土坑群に類似した土坑群が、地下式土坑とともに検出されている。

第2章　調査に至る経緯

明野村では平成7年度に県営圃場整備事業大内工区の施工が計画された。そのため、明野村教育委員会では平成6年度に工区内の埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。工区周辺は以前から土器片や鉄鏃などが表採され、遺跡があると予想されていたがその内容や範囲については不明であった。試掘調査は40,000m²の工区全域を対象に行われ、面積16,000m²が遺跡として確認された。

試掘調査の結果を受けて、明野村教育委員会は事業主体の峡北土地改良事務所と遺跡の取り扱いについて協議を行い、県営圃場整備事業着工前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することとした。調査面積は16,000m²、現地発掘調査経費は8,348,000円である。発掘調査は平成7年5月29日に重機による表土剝ぎ作業に着手し、同年9月4日をもって終了した。

発掘調査で検出された遺構の調査記録と出土遺物の整理作業は平成8年度に実施し、峡北土地改良事務所との協議により整理報告書作成費は6,900,000円とした。

現地での発掘調査期間中、8月19日には北巨摩市町村文化財担当者会との共催で遺跡見学会を実施した。見学会は120人の参加者を得た。

発掘調査は遺構外出土遺物の少ない平安時代の集落が主体であることから、グリッドを設定せず、公共座標系第Ⅷ系による4級基準点を調査区内に2カ所設け、光波測量機により全遺物の出土位置を記録した。遺構の実測は写真測量により500分の1の遺跡全体図を作成し、個々の遺構については必要に応じて簡易遣り方により実測図を作成した。

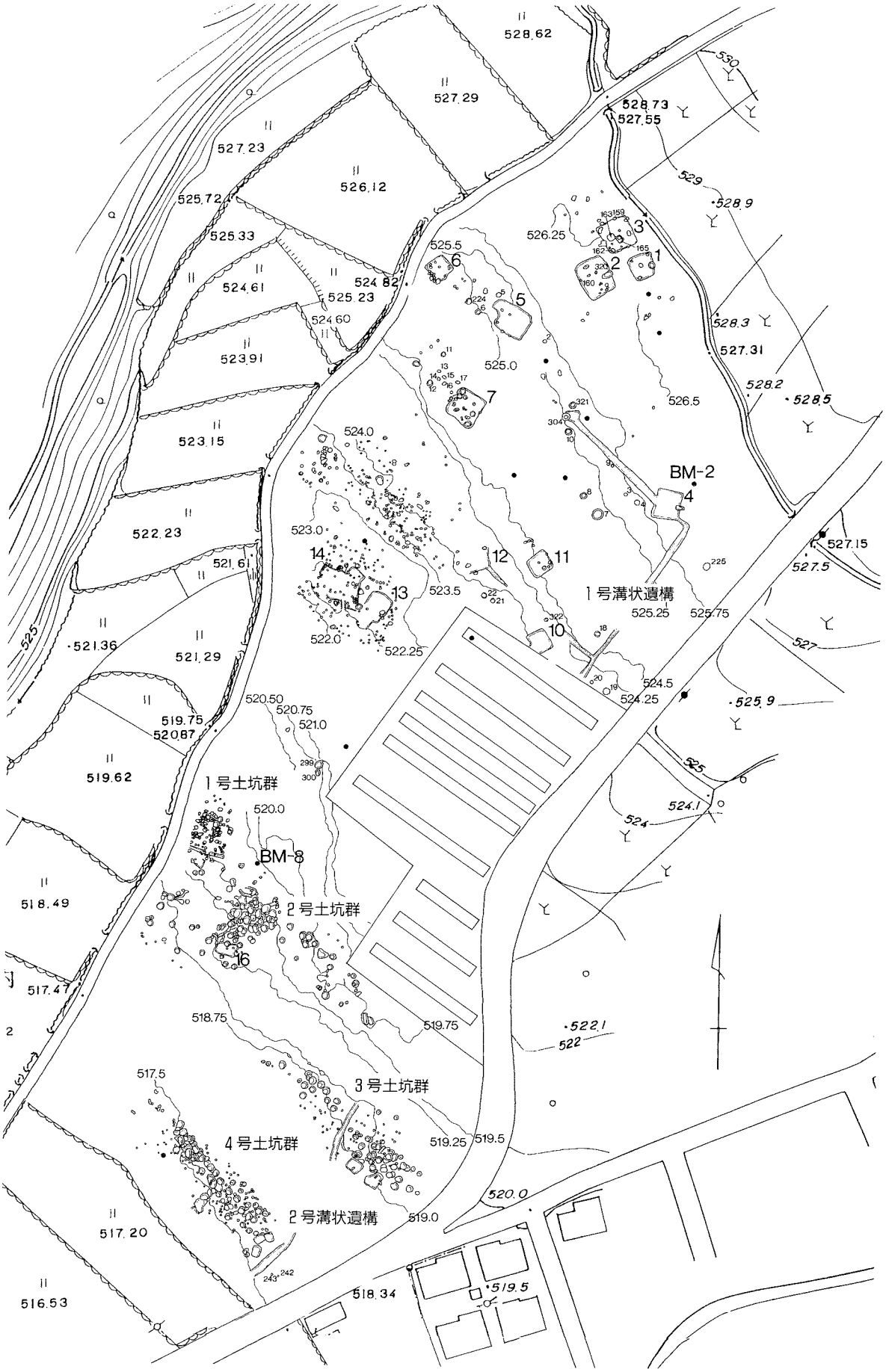
遺跡は現在、圃場整備された水田となっているが、包蔵地は圃場整備事業施工区外にもなお広がっていることが予想される。

遺跡地名表

1	石堂B遺跡（縄文時代晩期）	2	薬師堂遺跡（縄文時代晩期・平安時代）
3	金生遺跡（縄文時代後晩期・平安時代）	4	寺所遺跡（弥生時代中期）
5	旭東久保遺跡（平安時代）	6	青木北遺跡（平安時代）
7	青木遺跡（縄文時代後晩期）	8	東久保遺跡（平安時代）
9	社口遺跡（縄文時代中期・平安時代）	10	当り町遺跡（弥生時代後期）
11	西原北遺跡（平安時代）	12	高内遺跡（弥生時代後期・平安時代）
13	小池遺跡（古墳時代後期）	14	柳坪遺跡（縄文時代中期・弥生時代後期）
15	境原遺跡（弥生時代後期）	16	健康村遺跡（縄文時代晩期）
17	酒呑場遺跡（縄文時代中期・古墳時代前期）	18	長坂上条遺跡（縄文時代晩期）
19	北村遺跡（古墳時代前期）	20	龍角遺跡（古墳時代中期）
21	湯沢遺跡（平安時代）	22	大小久保遺跡（平安時代）
23	湯沢古墳（古墳時代）	24	若神子小学校古墳（古墳時代）
25	諏訪原遺跡（縄文時代中期・平安時代）	26	宮後遺跡（平安時代）

27　梅の木遺跡（縄文時代中期・平安時代）
28　上の原遺跡（平安時代）
29　腰巻遺跡（古墳時代後期・平安時代）
30　神取遺跡（古墳時代前期・平安時代）
31　大豆生田遺跡（古墳時代後期・平安時代）
32　村之内II・III遺跡（平安時代）
33　普門寺遺跡（平安時代）
34　高台・中谷井遺跡（平安時代）
35　屋敷添第2遺跡（平安時代）
36　屋敷添遺跡（平安時代）
37　下大内遺跡（平安時代）
38　中原遺跡（縄文時代中期）
39　中道遺跡（縄文時代晩期・平安時代）
40　三之蔵古墳群（古墳時代）
41　中田小学校遺跡（弥生時代後期・奈良・平安時代）
42　前田遺跡（平安時代）
43　宮の前第2遺跡（奈良・平安時代）
44　駒井遺跡（奈良・平安時代）
45　宮の野前遺跡・北後田遺跡・後田遺跡（縄文時代中期・晩期・弥生時代前期・奈良・平安時代）
46　堂ノ前遺跡（弥生時代後期・平安時代）
47　日ノ雨塚古墳（古墳時代）
48　天王神社遺跡（弥生時代中期）
49　坂井遺跡（縄文時代中期・弥生時代）
50　坂井南遺跡（古墳時代前期）
51　下横屋遺跡・北下条遺跡（弥生時代・平安時代）

第2図　平安時代遺跡位置図(1/100,000)



第3図　遺跡全体図(1/1,000)

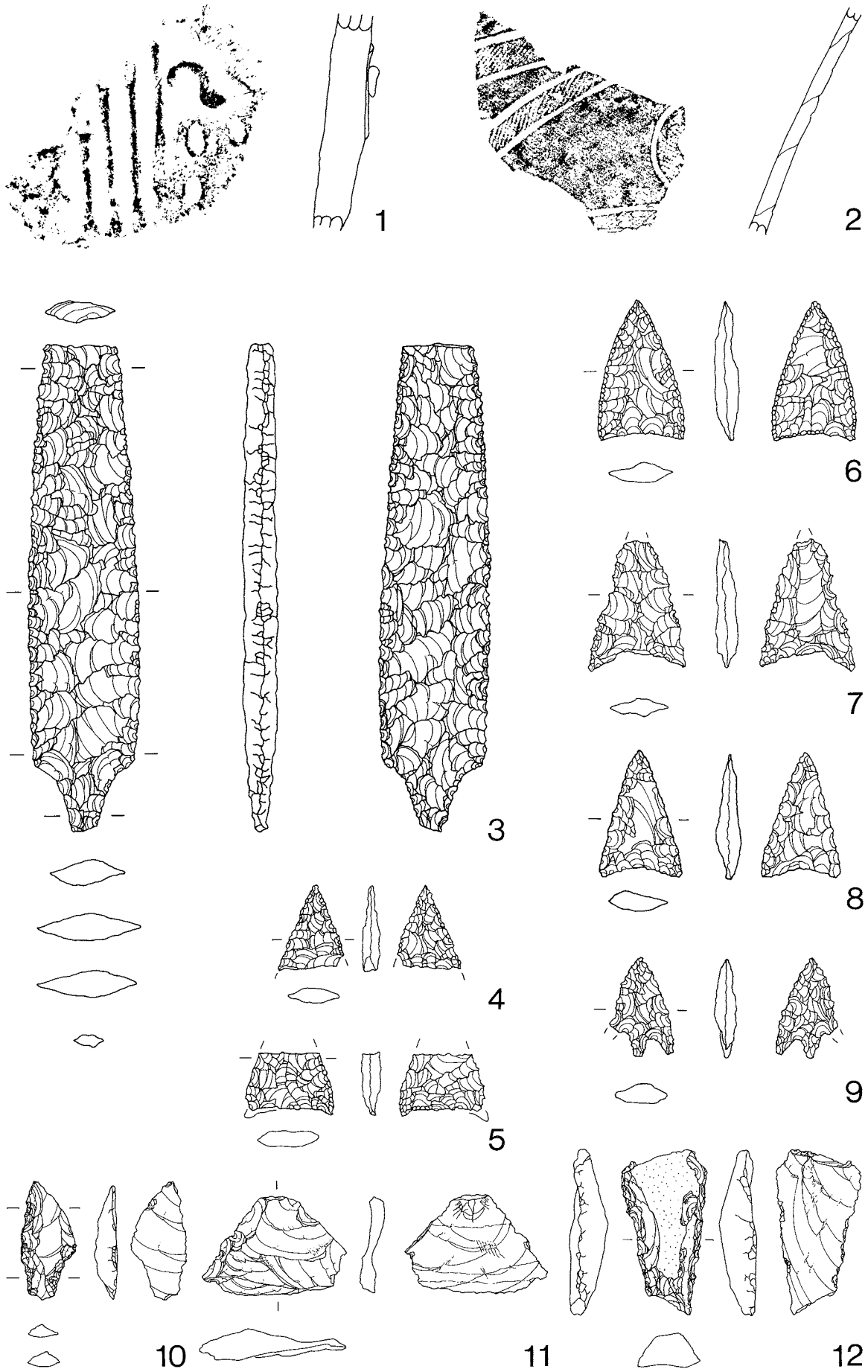
第３章　縄文時代の遺物

下大内遺跡からは縄文時代の遺構は検出されなかったが、以下の遺物が出土している。なお、縄文時代の遺物は遺跡全体からごく疎らに出土しているため、必要に応じて出土位置を述べるほかは、特に出土位置を提示していない（第４図、第５図、写真図版４）。

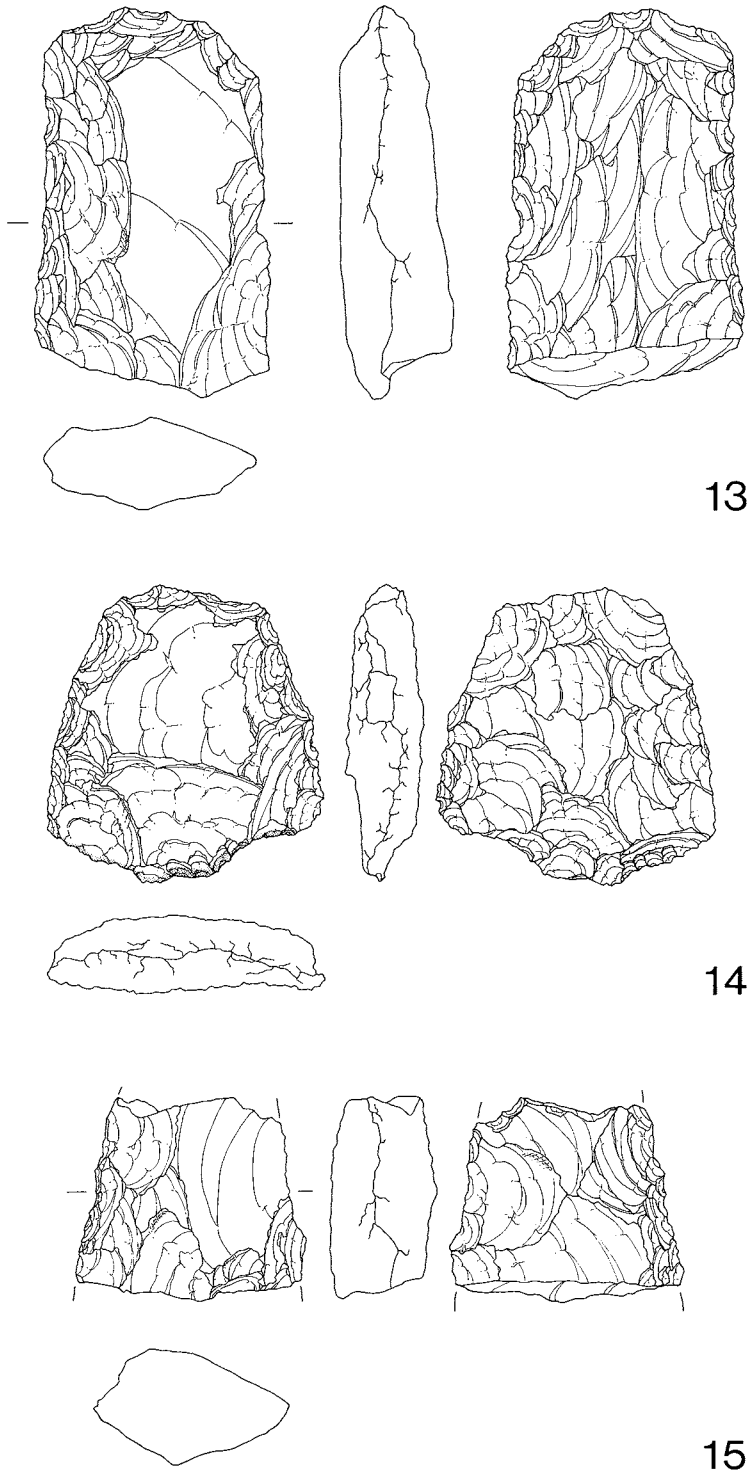
土器は数点が出土したのみである。１は中期末葉曽利式に比定される深鉢片である。やや引いた刺突紋を地紋とし、粘土紐を貼り付けた隆帯で飾る。２は後期前半堀之内２式に比定される深鉢片である。

石器

図版番号	種　別	大きさ(現存長･最大幅･最大厚･重量)	石　材	観　察　所　見
第５図３	有舌尖頭器	8.7cm，2cm，6.5mm，12.42g	青灰色珪質頁岩	丁寧に周縁剥離がなされる。返し部はなく、萩平式に類似する
4	石　鏃	3.1cm，2.3cm，6mm，0.47g	黒曜石	破損品
5	石　鏃	2.2cm，3.1cm，7mm，0.67g	黒曜石	破損品、基部にも若干の破損あり
6	石　鏃	5cm，3cm，9mm，1.21g	黒曜石	周縁に微細な剥離あり
7	石　鏃	4.6cm，3.4cm，8mm，1.08g	黒曜石	未成品か
8	石　鏃	4.5cm，2.9cm，9mm，1.02g	黒曜石	
9	石　鏃	3.5cm，2.3cm，8mm，0.54g	黒曜石	有茎石鏃
10	剥　片		青灰色珪質頁岩	縁辺部に剥離があり、削器かも
11	剥　片		白色珪質頁岩	神取遺跡で多数みられた木葉形尖頭器製作剥片に形状が似る
12	削　器		青灰色珪質頁岩	側縁部に微細な調整がみられることから、削器と判断した
13	打製石斧		ホルンフェルス	破損品、１号溝状遺構より出土
14	打製石斧		ホルンフェルス	図下端に僅かな磨滅がみられるため、破損品を再生、使用したものと思われる
15	打製石斧		頁　岩？	風化により、使用痕は観察できない



第４図　縄文時代の遺物(1/2、３～９　1/1)



第5図　縄文時代の遺物(1/2)

第４章　弥生時代の遺構と遺物

下大内遺跡では弥生時代の壷形土器を埋納した土坑（225号土坑）が１基検出された。この土坑から出土した遺物のほかには弥生時代の遺物は全く出土していない（第６図～第８図、写真図版１～６）。

225号土坑

225号土坑は試掘調査の際に発見された。平安時代の遺構と遺物が全く分布していない区域であるため、試掘調査の際に偶然発見されたのは幸運であった。試掘調査時には確認だけにとどめ、確認面をビニールシートで覆い保護して埋め戻した。

土坑は長径124cm、短径101cm、残存深44cmの楕円形で、しまりのない黒褐色土に黄褐色の地山に似た土のブロックが混じる覆土で埋められていた。確認面から下部へと土器片が連続して出土したため、覆土断面の土層観察は行い得なかった。

土坑からはほぼ完形の壷形土器１点と、ほかに２個体分の壷形土器片、打製石斧１点、黒曜石剥片１点、珪質頁岩剥片１点が出土している。

完形の壷形土器は立位で埋納されていた。土器は土圧によると思われるが、口縁部から胴上半部が内部に向かって落ち込むようにつぶれていた。口縁部の残存状況は悪く、器片が数片出土したのみである。土器内面の底近くにはわずかに焼土が検出された。骨粉、骨片は全く検出されなかった。

この壷形土器を覆うように別個体の土器片が埋納されている。調査時には１種類のみの器片としか気づかなかったが、洗浄して２個体分の器片であることが判明した。この２個体分の器片は器形を復元する程度にしか残っておらず、接合もしない。

土坑底部からは打製石斧１点と黒曜石片１点、珪質頁岩片１点が出土している。

第７図１は、口径27.8cm、器高78.4cm、底径13.4cmの広口壷で、口縁部に２本の突帯を貼りつけ指頭によりつまんで刻みを付けている。器外面は頸部より底部近くまで全面を条痕紋で整形し、内面は口縁部内側から頸部あたりまでを条痕紋で整形している。条痕施紋具は貝殻ではなく、櫛状工具もしくは粗い植物繊維束と思われる。底部には網代痕がみられる。長石、石英、雲母、赤色粒子などが目立つややざらついた胎土質で、色調は明黄褐色である。

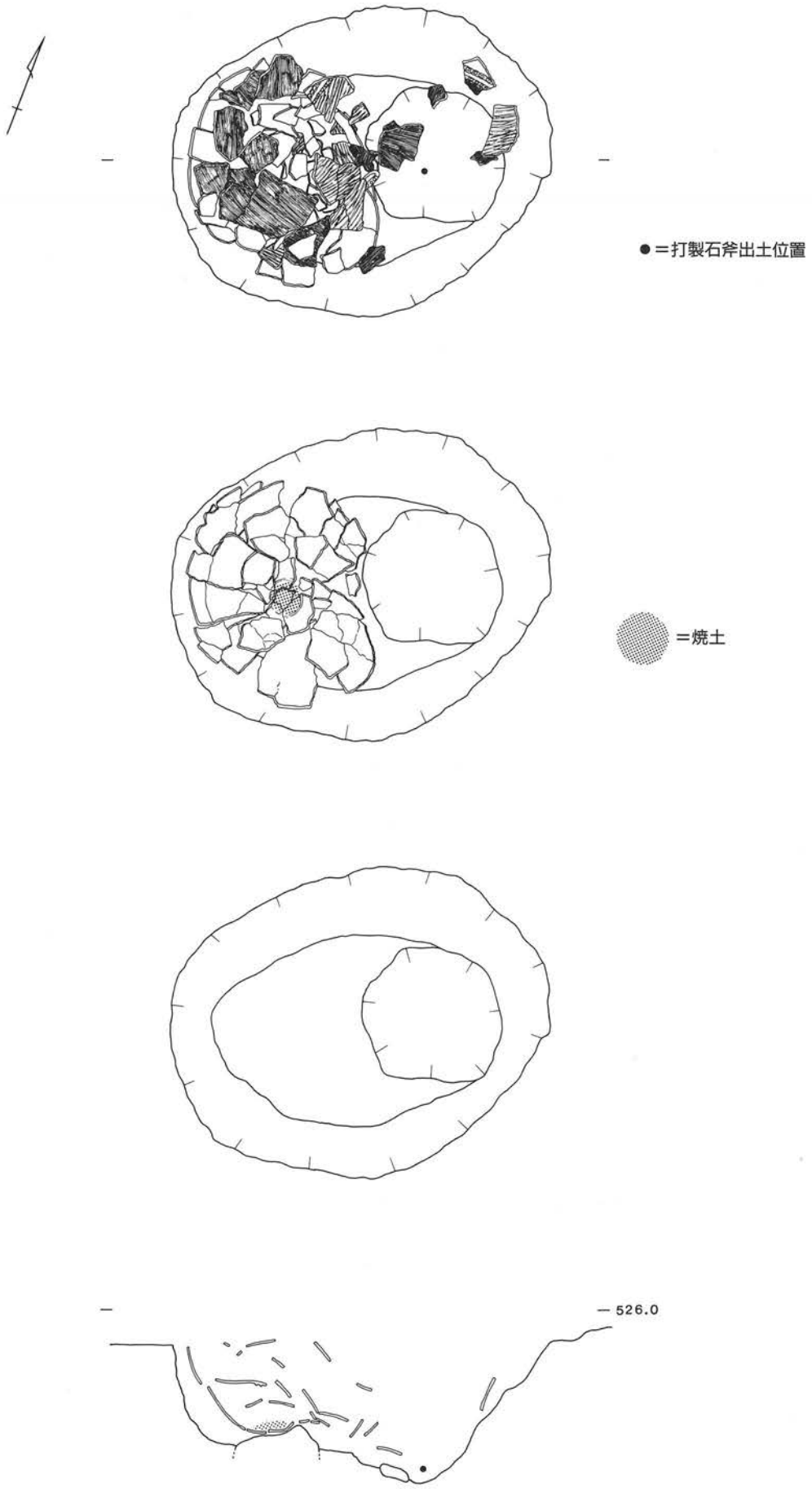
第８図２は、頸部から肩部にかけての器片で、１に比べて広めの条痕紋が施紋される。施紋具は１の土器と異なる。肩部に２本の粘土紐を貼りつけた突帯をもち、指頭により刻みをつけている点は、１の口縁部と同様で、突帯や刻みの形状がよく類似している。胎土質も１と同様で、色調は黄褐色である。

第８図３は胴下半部の器片で、条痕紋の施紋具の観察により２と同一個体と思われるが、接合はしない。

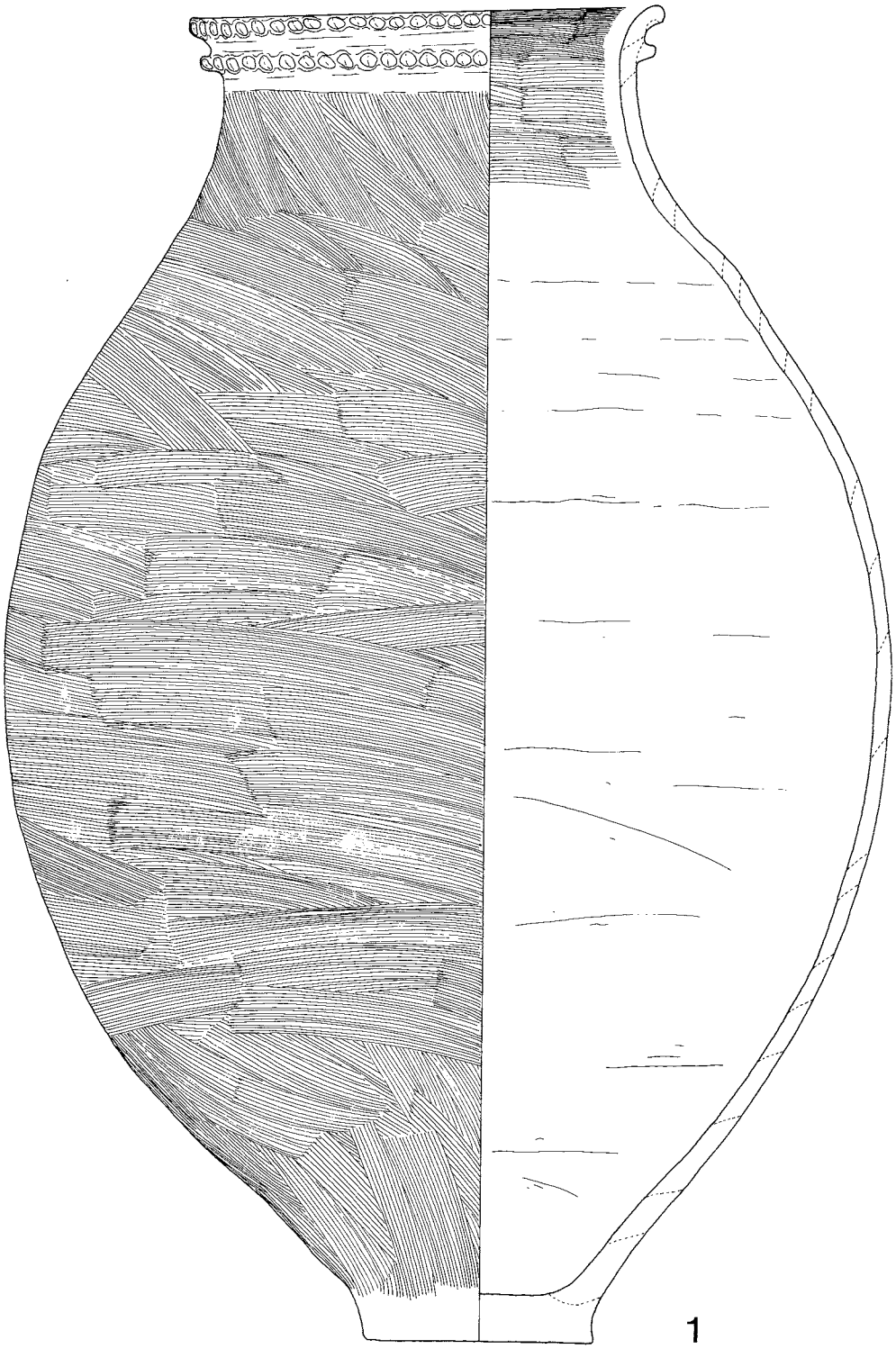
第８図４は胴部片で、１～３に比べると細かい条痕紋で整形されている。胎土、色調は１～３と同様である。

第８図５は粘板岩製の打製石斧で、長さ7.5cm、幅4.3cm、厚さは1.2cm。非常に風化していて細かな剥離面や使用痕は観察できない。

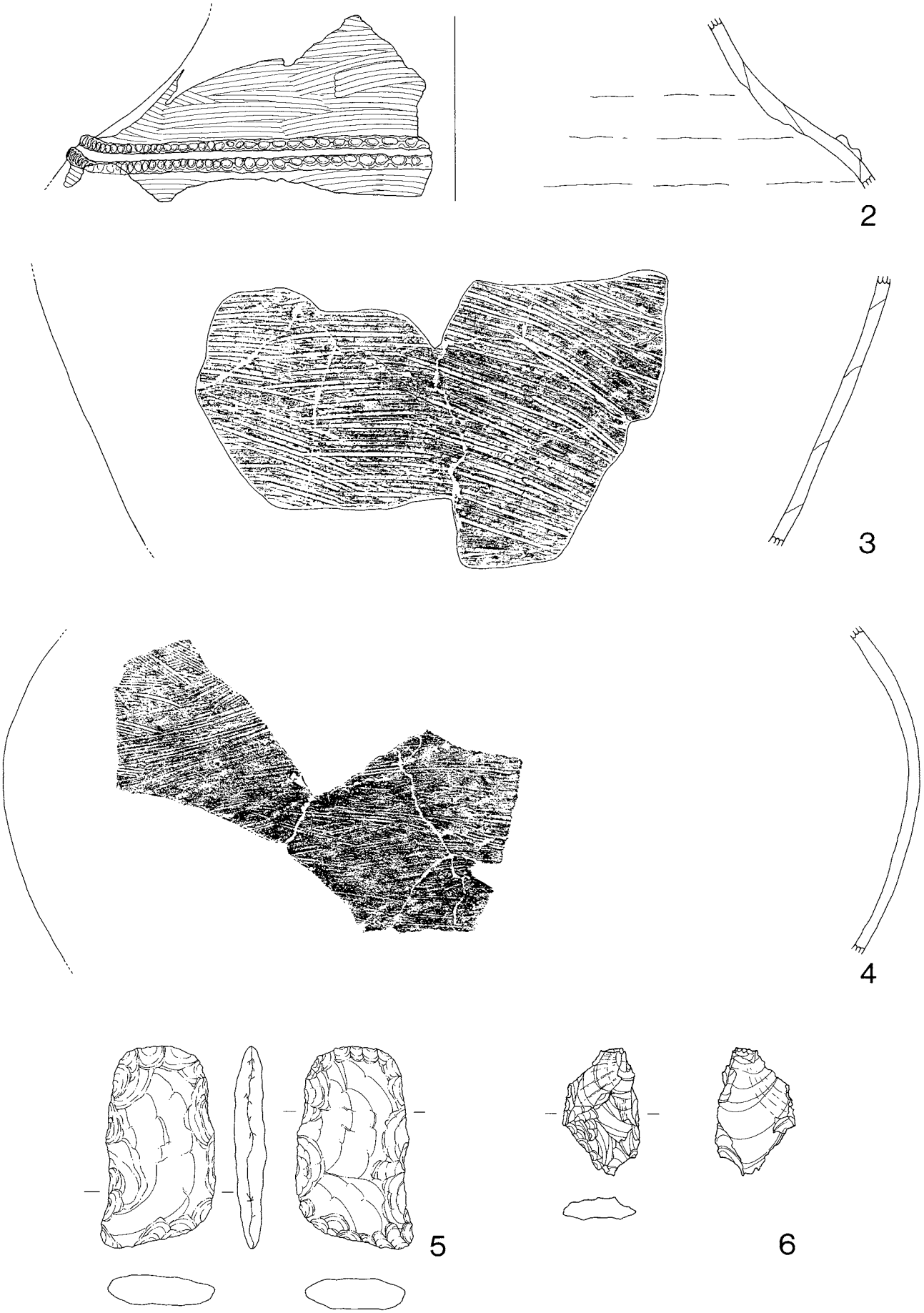
第８図６は黒曜石の剥片で、若干の２次調整がみられる。



第6図　225号土坑(1/20)



第７図　225号土坑出土遺物(1/4)



第８図　225号土坑出土遺物(1/2、６のみ1/1)

第５章　平安時代の遺構と遺物

住居跡

下大内遺跡では平安時代の住居跡12軒が検出された。

１号住居跡（第９図～12図、写真図版７～８）

大きさ　4.5m×4.3m　面積　17.5m²（カマド部を含む。以下同じ）

付属遺構　周溝、１号ピット

調査所見

１号住居跡は、確認面から床面までがわずか５～20cm程度にしか残されていない。そのため、覆土断面の実測は省いたが、暗褐色のしまりのない覆土が堆積していて、容易に遺構確認された。

固くしまった床面は中央部を中心に検出され、壁際近くでは検出されていない。住居中央部は固くしまり、若干くぼんでいる。さらにそのくぼみの中心に円形の落ち込みがあるが、ピットと考えるほどの深さはない。このピットの覆土は炭、焼土粒子がまじる黒褐色土で、上部に貼り床は検出されていない。住居覆土に炭、焼土粒子が混じらないため、住居埋没後に掘り込まれた新しい遺構であると思われる。

カマドは東壁の南寄りに位置しているが、カマド構築礫、被熱礫、焼土がわずかに検出されたにすぎない。

周溝はカマド部を除いてほぼ全周し、南壁沿いでは礫抜き取り痕状の落ち込みがところどころにみられる。

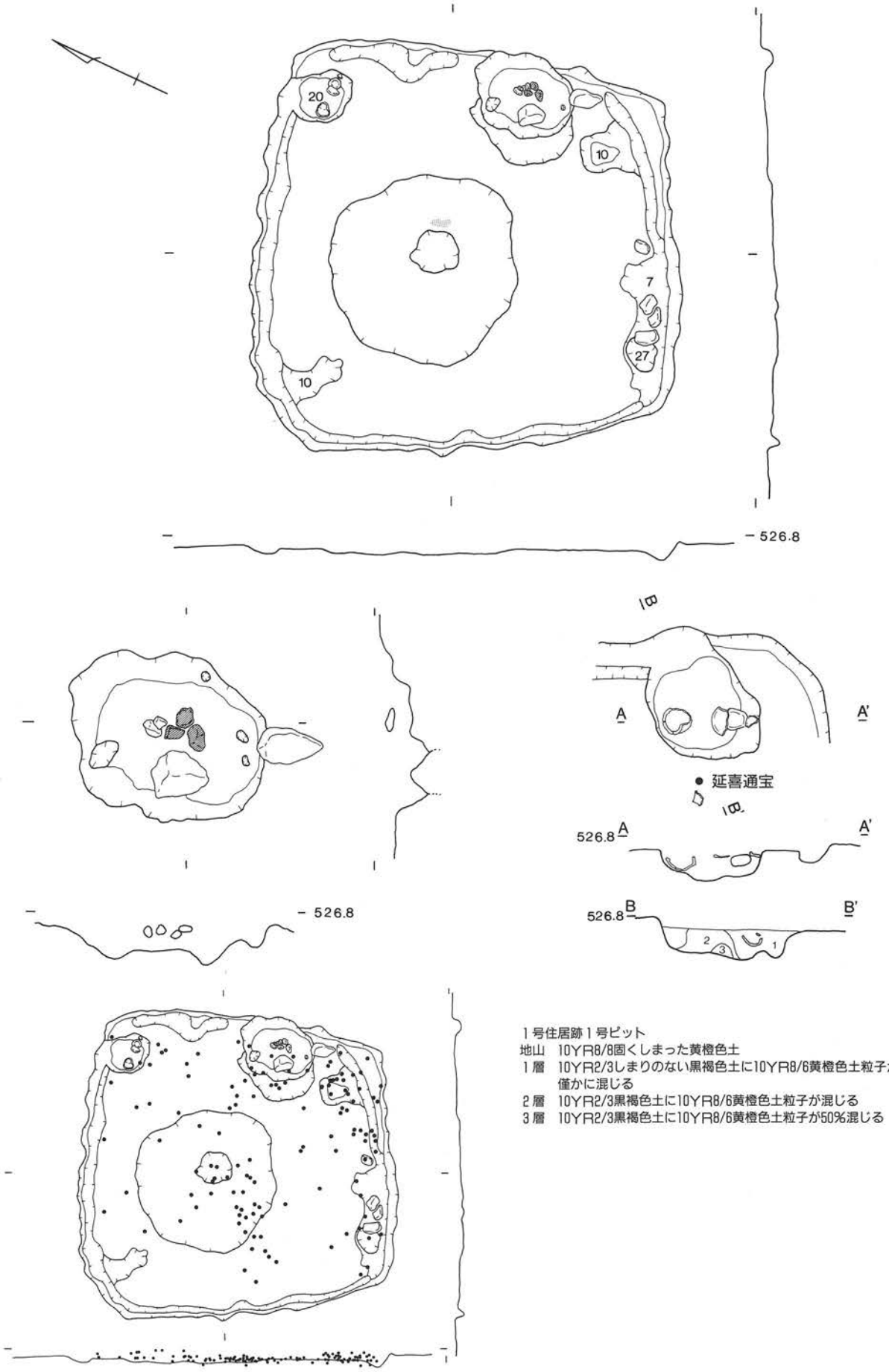
１号住居跡で注意されるのは、住居北東角で検出された１号ピットと、その南15cmほどから出土した皇朝十二銭のひとつ、「延喜通宝」である。

１号ピットはしまりのない黒褐色土が堆積していて、覆土上に貼り床はない。ピットには土師器坏と小型甕が埋納されていた(第10図１、10)。坏と甕は上部が欠けている。住居隅であることから貼り床が検出されないのは自然であるが、甕、皿の上部が破損していることは、住居構築時の破損とも解することができる。しかし、ここでは住居確認の際、住居覆土上面でピットが検出されなかったことと、ピットが住居北東角に丁度位置し住居との関係が想定されること、１号ピットの遺物と１号住居の遺物とでは大きな時期差が認められないことから、１号住居跡とは無関係の別遺構とは考えずにおきたい。

ピットの南側15cmからは土師器甕の口縁部片とともに「延喜通宝」が１枚、床面上で出土している。発見当初、「延喜通宝」とともに出土した甕片は、１号ピットの小型甕の破損部であり、「延喜通宝」は元来、１号ピットに小型甕とともに埋納されていたと考えたが、甕片は全く別個体であった。しかし、１号ピットと埋納された小型甕と坏、更に「延喜通宝」が住居構築、利用、廃絶に係わる何らかの行為に関連した一体の事象である可能性は、出土状況を考えると、高いものと思われる。

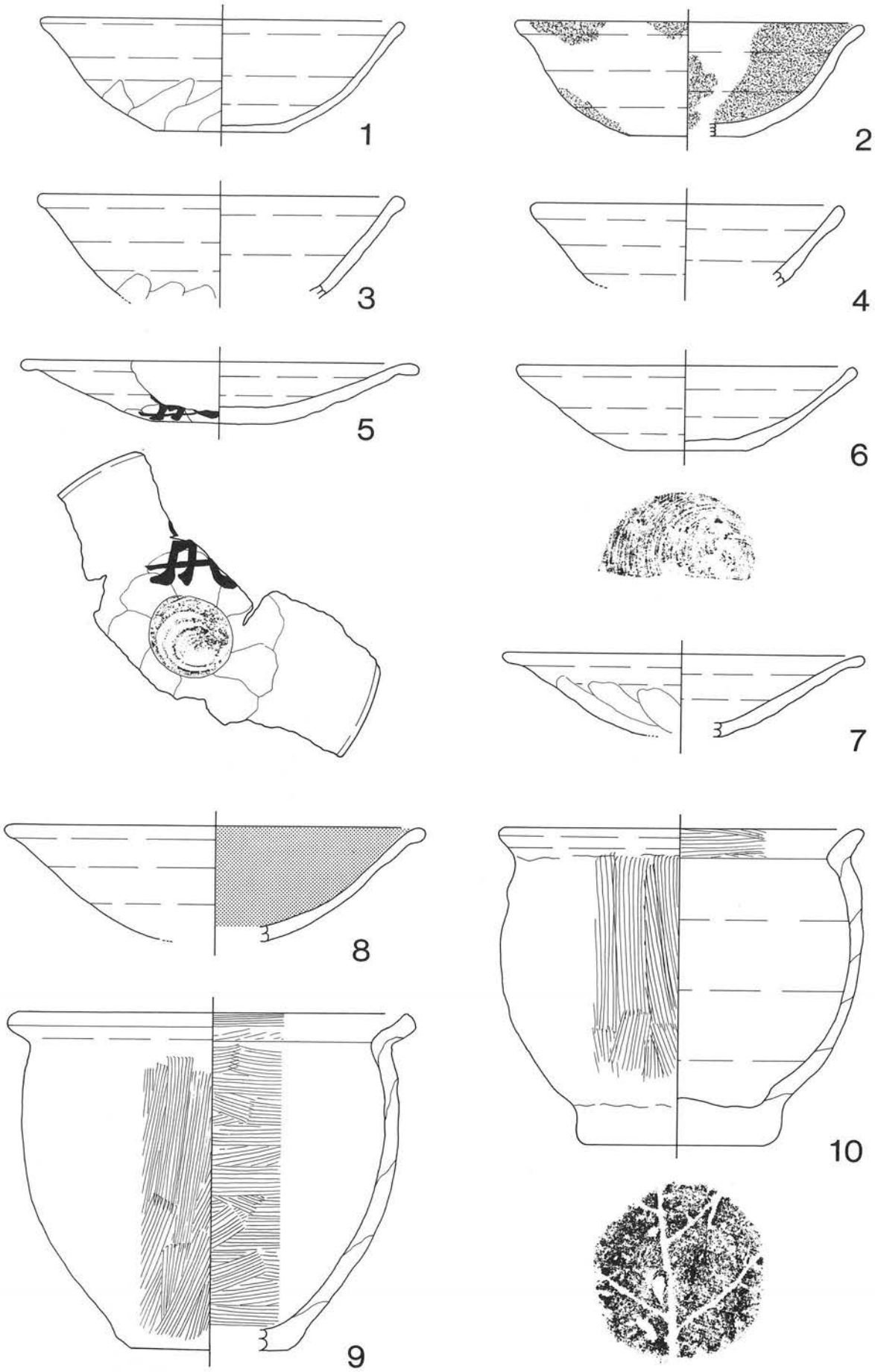
１号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径･器高･底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第10図１	12.9cm,4.0cm,4.8cm	1/2	A１	
2	12.3cm,4.1cm,4.1cm	1/3	A１	内外面に焦げ付着あり
3	13.0cm	口縁部小片	A１	
4	11.0cm	1/5	A２	
5	14.1cm　4.5cm	1/4	C４	墨書あり、判読不可
6	12.0cm,3.0cm,4.3cm	1/3	A４	
7	12.7cm	1/4	A４	
8	14.9cm	1/5	C２	

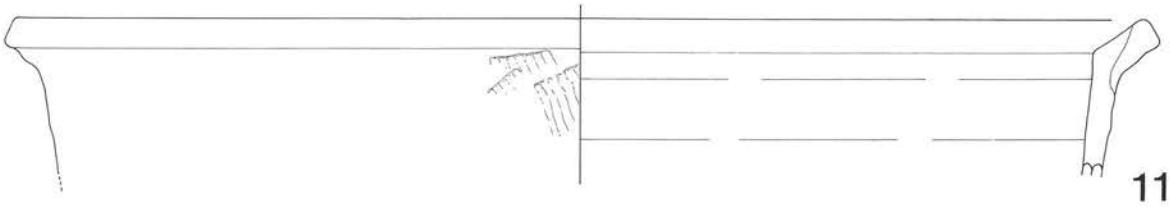


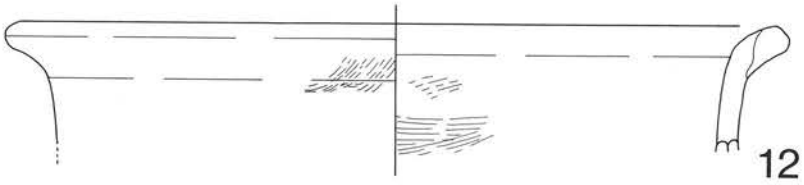
1号住居跡1号ピット
地山　10YR8/8固くしまった黄橙色土
1層　10YR2/3しまりのない黒褐色土に10YR8/6黄橙色土粒子が僅かに混じる
2層　10YR2/3黒褐色土に10YR8/6黄橙色土粒子が混じる
3層　10YR2/3黒褐色土に10YR8/6黄橙色土粒子が50%混じる

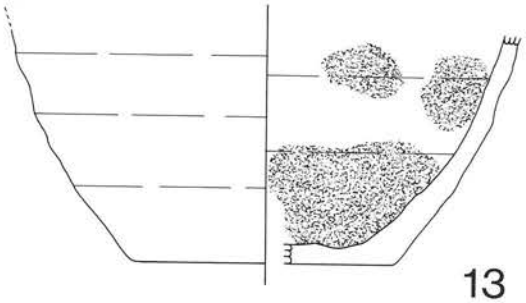
第9図　1号住居跡カマド(1/60)、1号ピット(1/30)及び遺物分布図

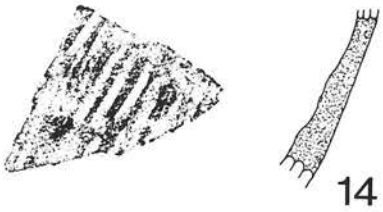


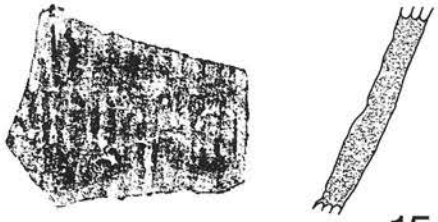
第10図　1号住居跡出土遺物(1/2)

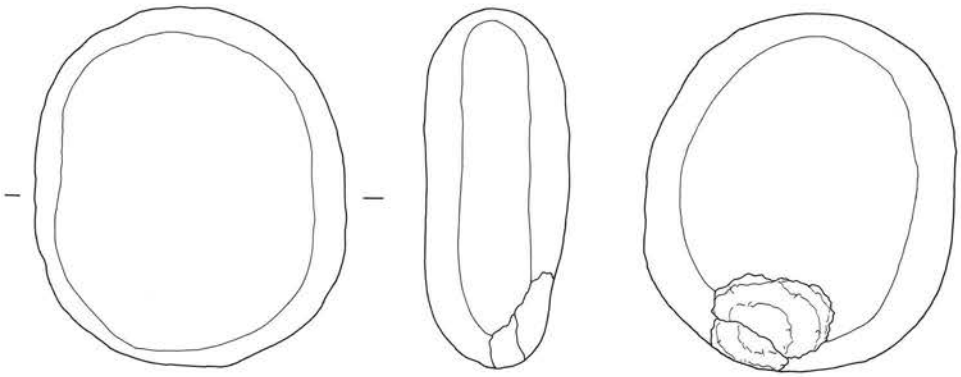


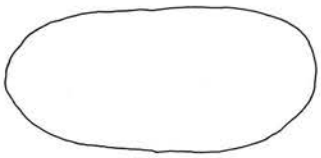




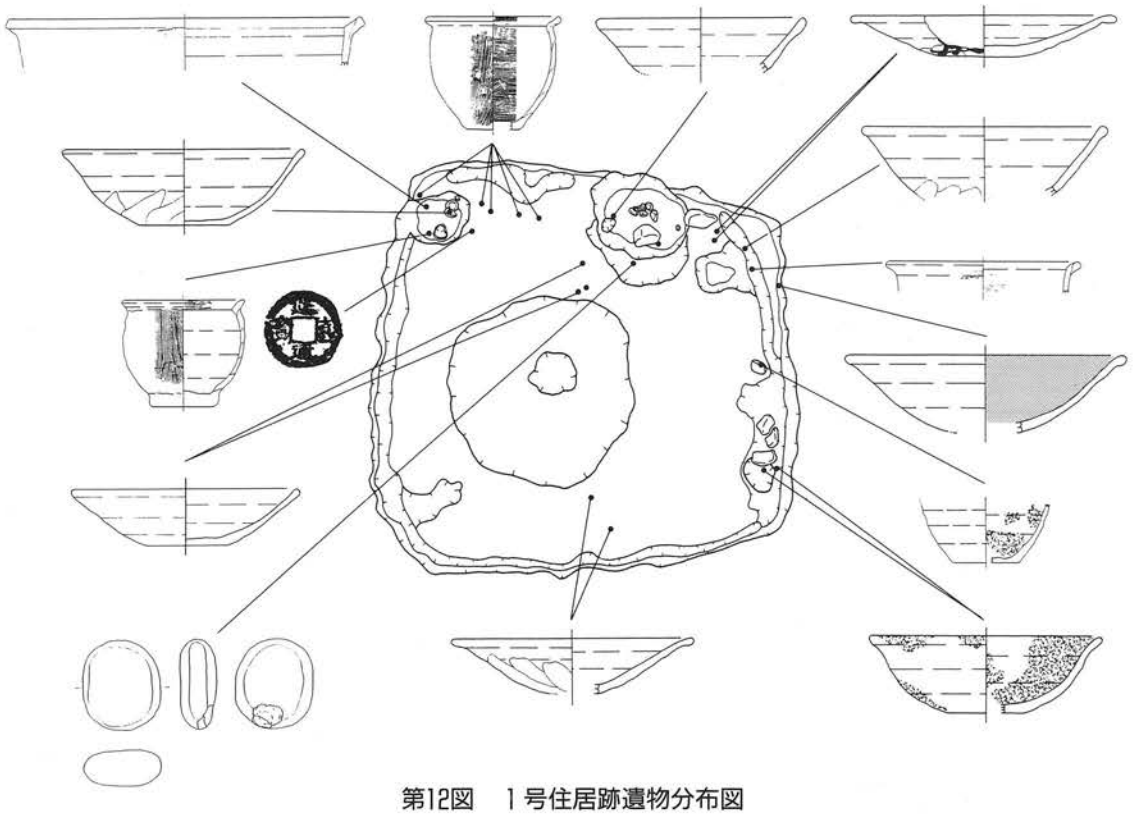




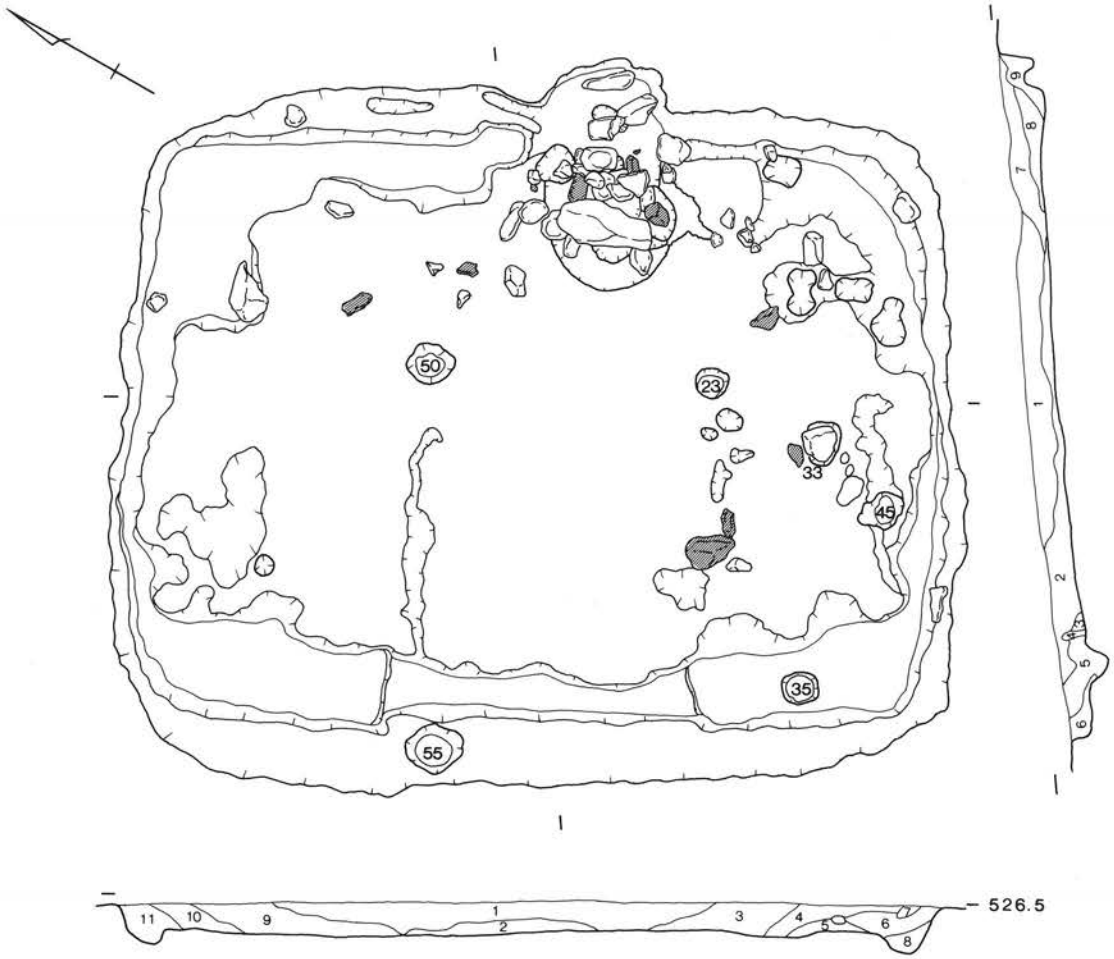




第11図　1号住居跡出土遺物(1/2、17のみ1/1)



第12図　1号住居跡遺物分布図



第13図　2号住居跡(1/60)

9	14.5cm,12.0cm	1/3	B 1	一部が「延喜通宝」と並んで出土
10	12.9cm,11.2cm,6.7cm	3/4	B 1	
第11図11	38.1cm	口縁部小破片	B 1	
12	20.6cm	口縁部小破片	B 3	
13	7.9cm	底部小破片	D 1	内面焦げ付着あり
14		胴部小破片		長石粒子の混じるキメの細かい胎土、灰色(N6/0)
15		胴部小破片		長石粒子の混じるキメの細かい胎土、灰色(N6/0)
16				磨滅痕なし
17				「延喜通宝」

2号住居跡（第13図～22図、写真図版9～10）

大きさ　6.7m×5.6m　面積　35m²

付属遺構　周溝、柱穴

覆土土層　地山　固くしまった明黄褐色土（10YR6/6）

短軸方向
1層7.5YR3/2黒褐色
2層7.5YR3/3暗褐色土に明黄褐色土粒子が混じる
3層7.5YR3/3明黄褐色土粒子が2層に比べてやや多い
4層10YR5/6黄褐色土
5層10YR4/3暗褐色土に明黄褐色土粒子が混じる
6層10YR4/6褐色土に明黄褐色土粒子とブロックが混じる
7層10YR3/2に焼土粒子が多く混じる
8層10YR4/3暗褐色土に焼土粒子が混じる
9層10YR4/6褐色土に明黄褐色土粒子が混じる

長軸方向
1層10YR3/2黒褐色土
2層10YR3/2黒褐色土に黄褐色土粒子が僅かに混じる
3層10YR3/3暗褐色土に黄褐色土粒子がやや多めに混じる
4層10YR4/3暗褐色土に黄褐色土粒子が多く混じる。焼土粒子が僅かに混じる
5層10YR4/3に10YR3/3が混じる暗褐色土
6層10YR4/3暗褐色土に黄褐色土粒子が多く混じる。焼土粒子がやや混じる
7層10YR4/3暗褐色土に黄褐色土粒子が50%混じる
8層10YR4/4褐色土に明黄褐色土粒子が混じる
9層10YR3/3暗褐色土に明黄褐色土粒子が多く混じり明黄褐色土ブロックが僅かに混じる
10層10YR3/3暗褐色土に黒褐色土が混じる
11層10YR4/4褐色土に明黄褐色土粒子がやや混じる

カマド土層
1層10YR2/1黒色土
2層10YR3/2黒褐色土に少量の焼土が混じる
3層10YR2/1黒色土
4層10YR2/2黒褐色土に黄褐色土粒子が少量混じる
5層10YR3/4暗褐色土に2.5YR5/8暗褐色土粒子が30%混じる
6層10YR4/6褐色土に焼土と黄橙色土粒子が混じる
7層10YR2/1黒色土に焼土粒子が混じる
8層10YR2/1黒色土
9層10YR4/4褐色土に10YR6/8明黄褐色土粒子が混じる
10層焼土
11層10YR6/6固くしまった明黄褐色土
12層10YR4/6褐色土
13層10YR3/4暗褐色土に2.5YR5/8暗褐色土粒子と10YR6/6明黄色土粒子が混じる
14層10YR4/6褐色土に焼土と黄橙色土粒子が混じる
15層10YR2/3黒褐色土に焼土が混じる
16層10YR3/2黒褐色土に黄褐色土粒子が僅かに混じる

17層10YR3/4暗褐色土
18層10YR3/4暗褐色土に10YR5/6黄褐色土粒子、焼土粒子が混じる
19層10YR4/6褐色土
20層2.5YR3/6暗赤褐色土
21層2.5YR5/8明赤褐色土（焼土）
22層2.5YR4/8赤褐色土（焼土）
23層10YR2/3黒褐色土
24層10YR3/4暗褐色土に焼土粒子が混じる
25層10YR4/6褐色土に焼土が混じる

調査所見

2号住居は7号住居とともに本遺跡では大型の住居である。竪穴掘り込みは40cmほど残り、黒褐色の覆土がレンズ状に堆積している。南壁沿い覆土には焼土粒子を濃厚に含む部分が検出されている。床面よりやや浮いた状態で、住居竪穴を埋めた覆土に含まれていることから、住居廃絶後に生成したものと考えられる。

住居床面は固くしまった貼り床が中央部を中心に良好に残り、壁際の周溝部では検出されていない。ピット状のくぼみが多数検出されたが、柱穴など住居に付属する施設として認定され得るピットは第13図に図示したもののみである。多くのくぼみは地山に包含される礫の抜き取り痕と判断した。

カマドは良好に残っている。遺構確認面ですでに焼土と、カマドを構築した粘土が確認された。手前側に天井石らしい扁平で長い礫がずれ落ちており、左右の袖石も残っている。袖石周辺には灰色の粘土粒子が混じった暗褐色土が広がり、カマドを構築した粘土が流れ落ちたものと考えた。カマドを覆う覆土断面を観察する際、天井石付近は複雑に石が組み入っていたため十分な観察ができなかった。明らかに被熱痕のある礫が4個ある。

カマド手前には被熱痕のある礫が数個床面上に転がっている。これらの礫は2号住居のカマドを廃棄、破壊して生じたものか、他住居のカマドから生じたものか判断できなかった。

周溝はカマド部を除いて全周する。西壁沿いの周溝はやや幅広で、しかも部分的に狭く、一段高い箇所がみられる。柱穴が西側に偏っていることとあわせて、住居上屋構造に関連するものと考える。周溝を埋める覆土は住居壁沿いの三角形堆積した覆土である。周溝の機能については諸説があるが、2号住居埋没時には周溝に関連する施設が撤去されていると判断される。

柱穴は4本がカマドの手前側で、住居プランよりやや西にずれる位置で確認された。西壁際と、周溝内より検出されたピットの位置は特異である。南壁沿いに検出されたピットは柱穴かどうか不明である。ピット覆土はいずれも黒色、黒褐色のしまりのない土で、炭粒子、焼土粒子は含まない。

西壁沿い周溝から住居中央北側の柱穴に向かって間仕切り溝状の小溝が検出されている。南側柱穴では明確な形での溝は検出されなかった。比較的規模の大きな住居であり、内部空間の使い分けがこうした溝に現れている可能性があろう。

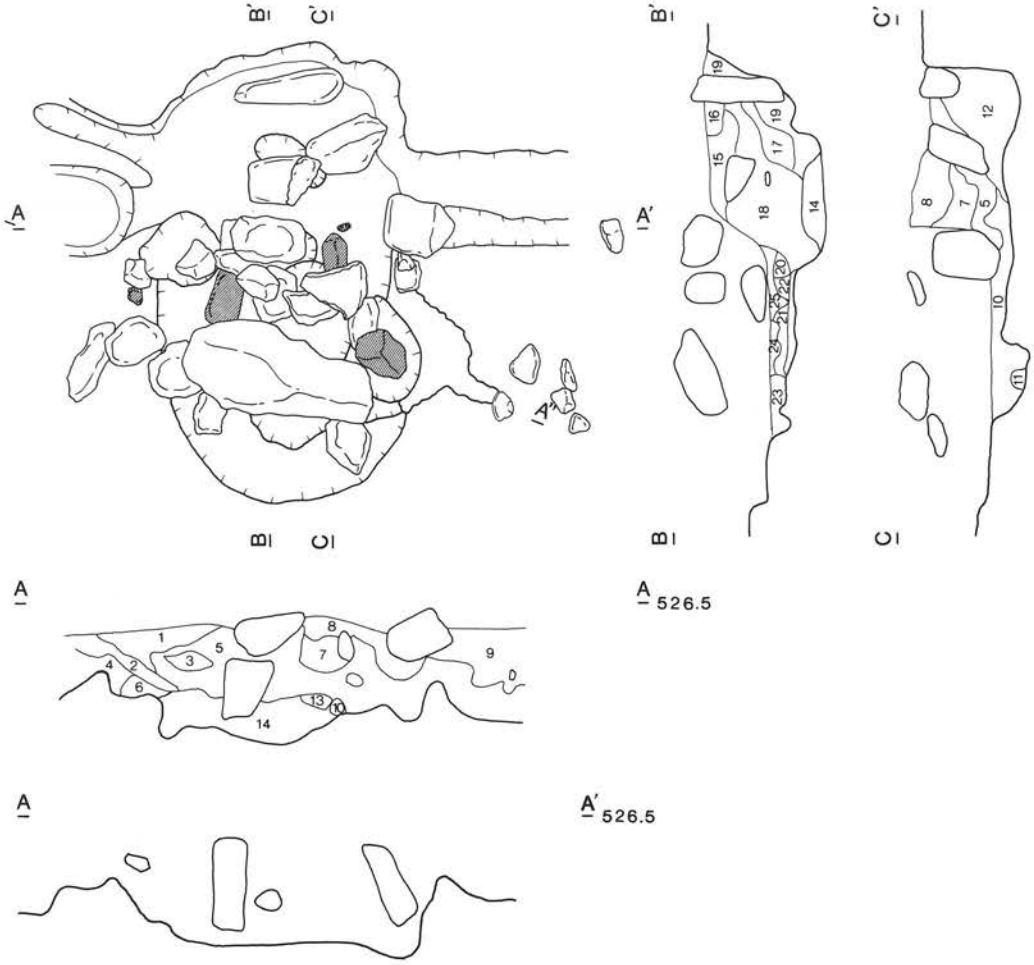
遺物は完形に近い土師器坏と皿が、カマド南側の床面よりやや浮いた位置に、集中して出土している。それらも含めて、「女」と墨書された土器が非常に多い。墨書のある土器片は中央より南側に多い傾向があるものの、住居覆土全体より出土しており、「女」と読めそうな墨書も散在している。

墨書のない土師器も完形に近い坏や皿がカマド南側に多い傾向がある。また、平安時代の竪穴住居では、カマド内に遺物が集中することが多いが、ここでは甕片が若干出土するのみである。

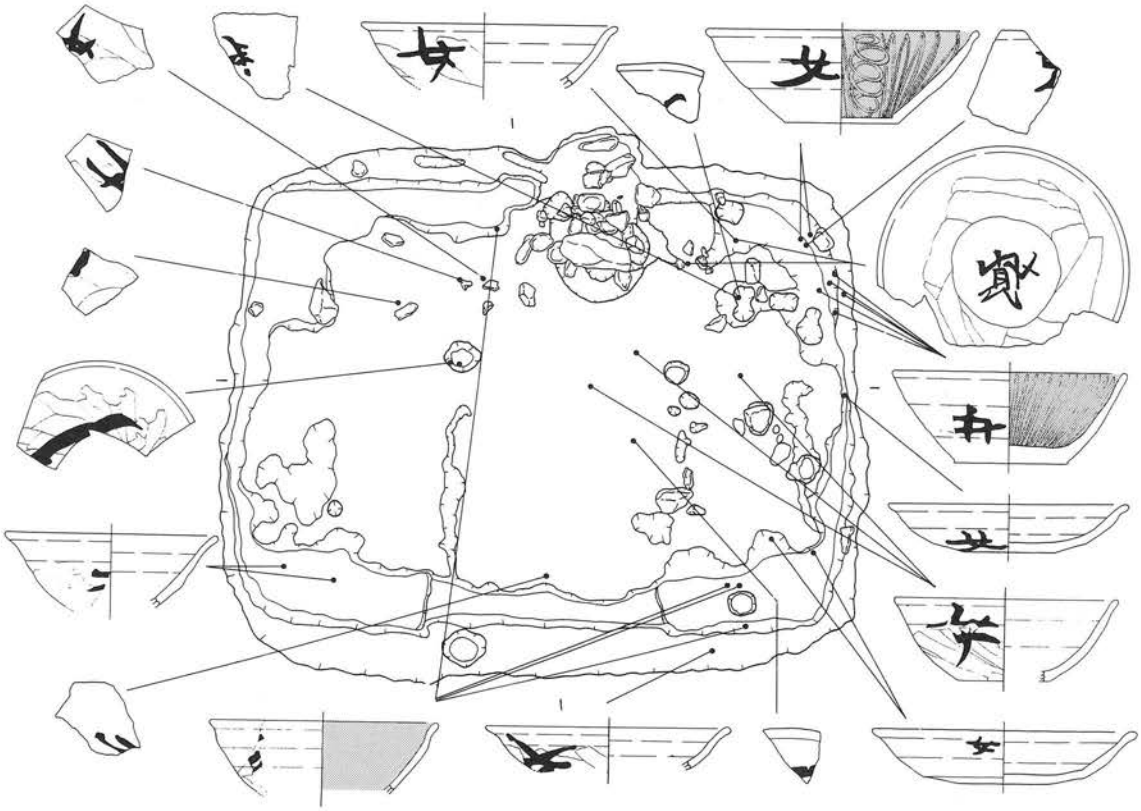
2号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径・器高・底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第17図1	14.4cm,4.9cm,6.0cm	完形	A 1	「女」墨書あり
2	12.2cm,4.8cm,4.9cm	1/5欠損	C 4	「女」墨書あり

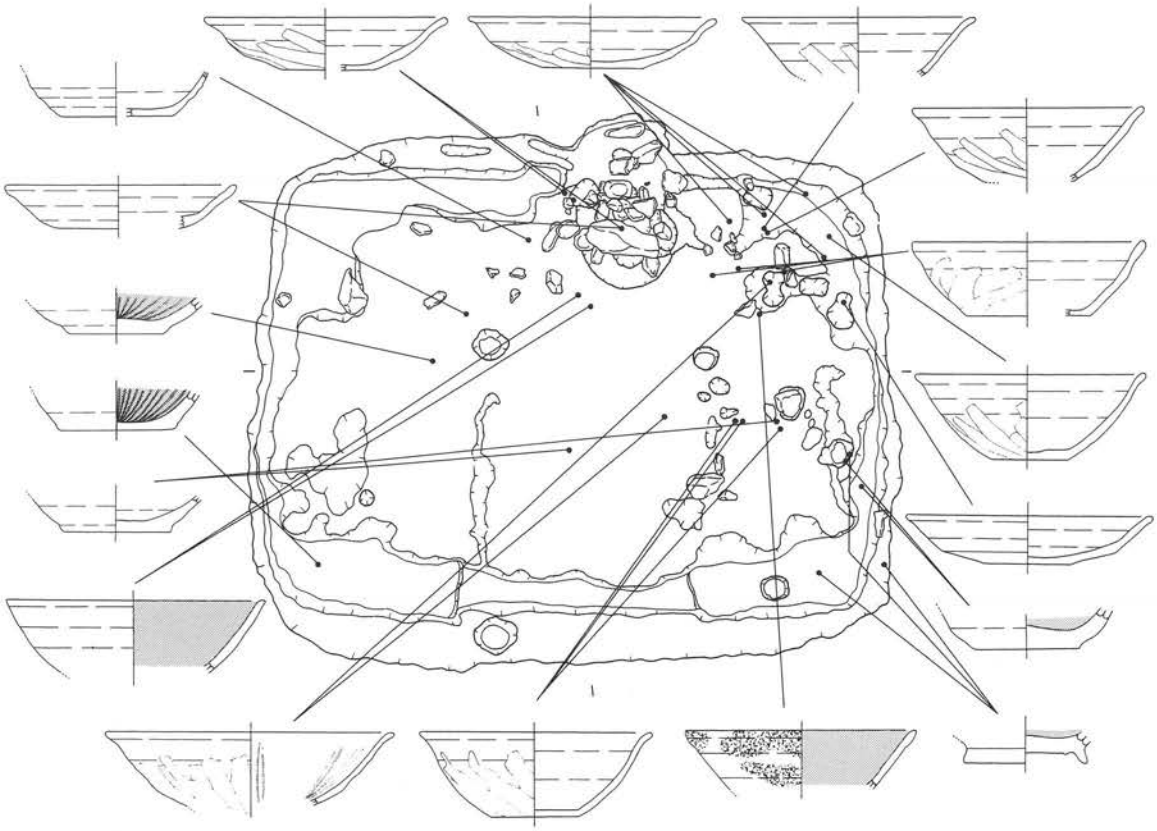
3	11.6cm	底部のみ欠損	A 1	「女」墨書あり
4	13.4cm	1/3	A 1	「女」墨書あり
5	12.1cm,4.5cm,4.0cm	1/2	A 5	
6	11.2cm	口縁部小片	A 1	
7	12.0cm	1/4	A 1	
8	12.0cm	1/4	C 2	
9	12.3cm,4.5cm,4.5cm	1/3	A 1	
10	12.3cm	口縁部小片	A 2	
11	15.3cm	口縁部小片	A 2	
12	12.2cm	口縁部小片	A 1	
第18図13	10.1cm	口縁部小片	C 1	
14	13.6cm	口縁部小片	C 3	
15	12.6cm,2.5cm,4.7cm	1/2	A 1	「女」墨書、みこみ部に渦巻状墨書
16	13.3cm,3.6cm,6.0cm	1/5を欠損	A 2	「女」と読み不明の墨書あり
17	13.2cm	1/5	A 1	
18	12.9cm	口縁部小片	A 1	「女ヵ」
19	13.9cm,2.8cm,4.5cm	1/3を欠損	A 1	「女」
20	12.9cm,2.8cm	1/3	A 1	
21	13.0cm,2.6cm,5.2cm	完形	A 1	
22	12.2cm	口縁部小片	A 4	
23	13.1cm,2.5cm,4.6cm	2/3	A 2	
24	5.8cm	底部小片	C 2	
25	5.6cm	底部小片	C 1	
第19図26	6.1cm	底部小片	C 5	
27	5.0cm	底部小片	C 4	
28	5.6cm	底部小片	C 1	
29	6.5cm	底部小片	C 1	
30		口縁部小片	C 1	「女ヵ」
31		口縁部小片	C 5	
33		口縁部小片	C 3	
34		口縁部小片	A 1	
35		口縁部小片	A 1	
36		口縁部小片	A 1	
37		口縁部小片	A 1	
38		口縁部小片	C 1	
39		口縁部小片	C 1	
40		身部小片	A 1	
41		身部小片	A 1	
42		身部小片	A 1	
43		身部小片	A 1	「女ヵ」
44		身部小片	A 1	「女ヵ」

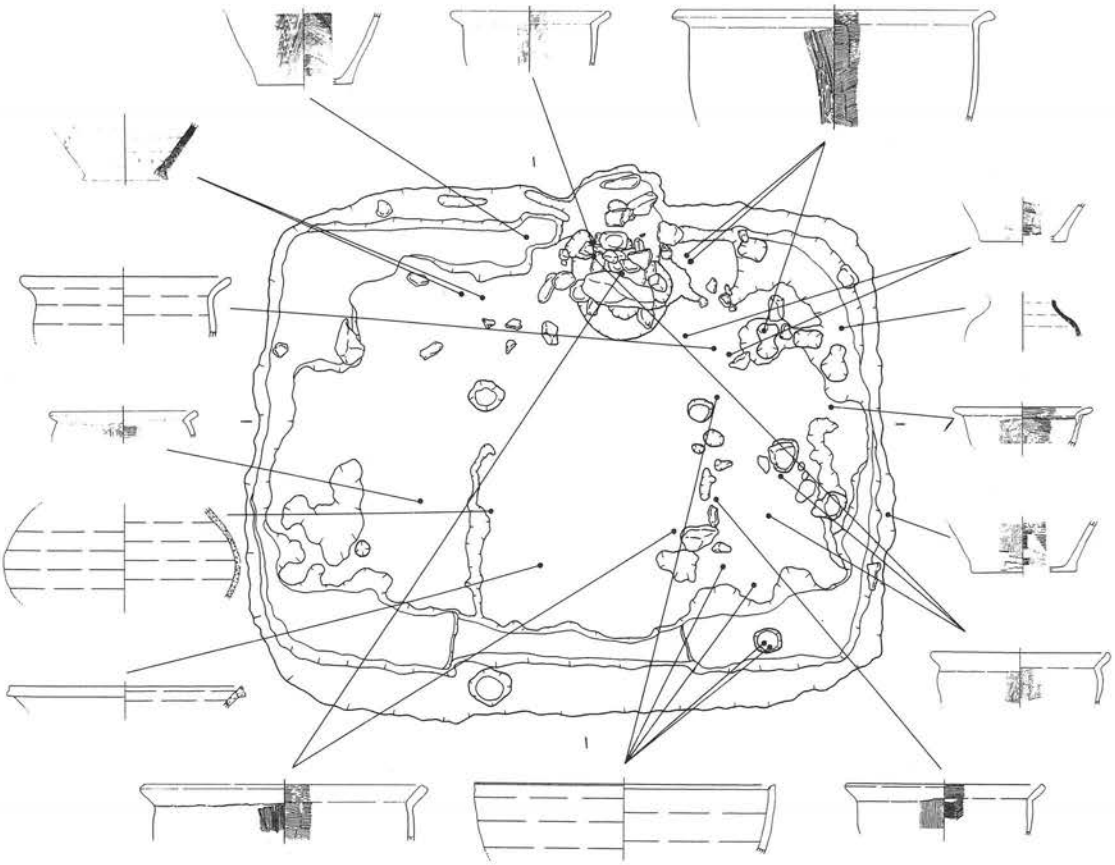


第14図　2号住居跡カマド(1/30)

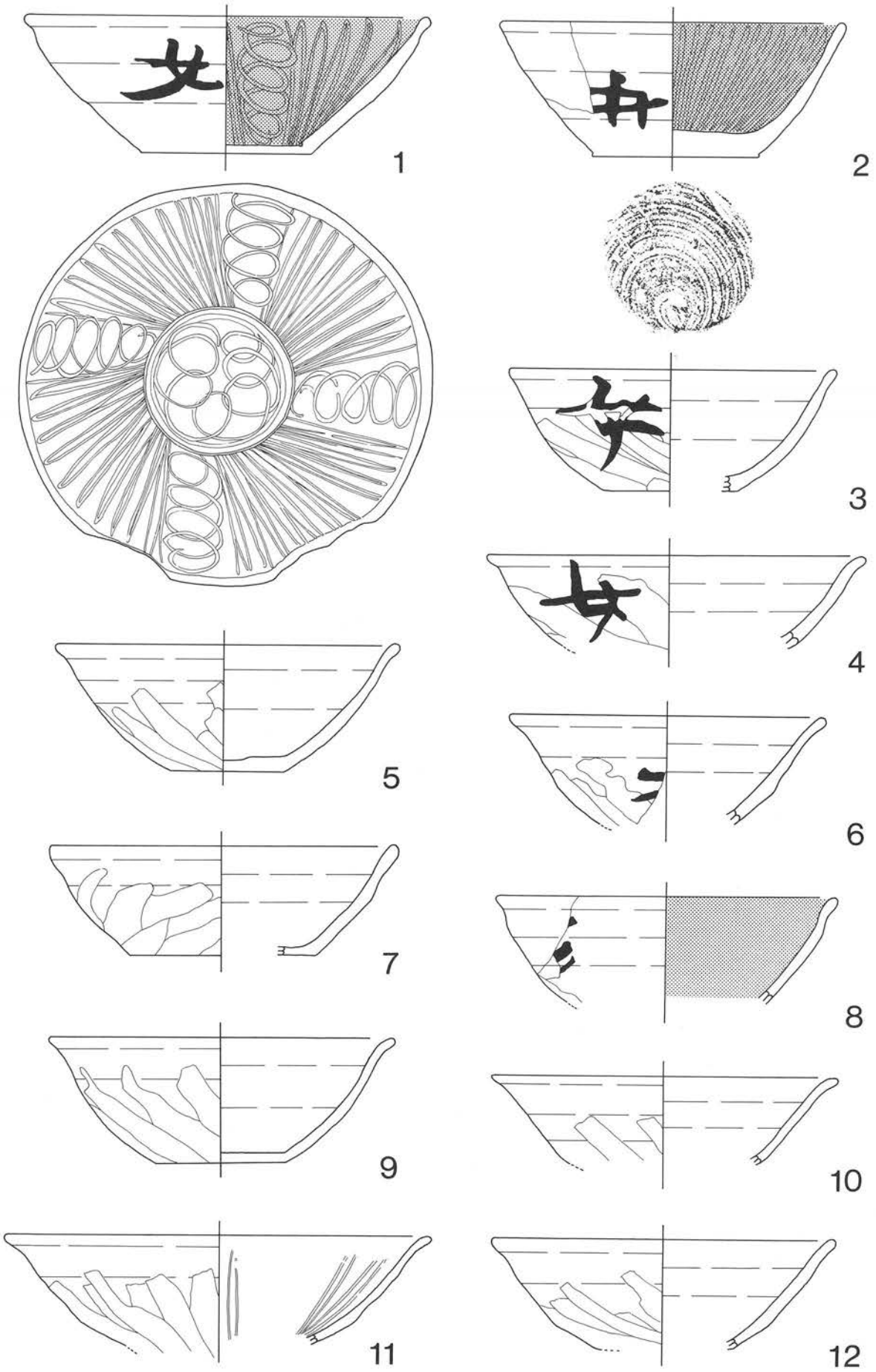


第15図　2号住居跡遺物分布図

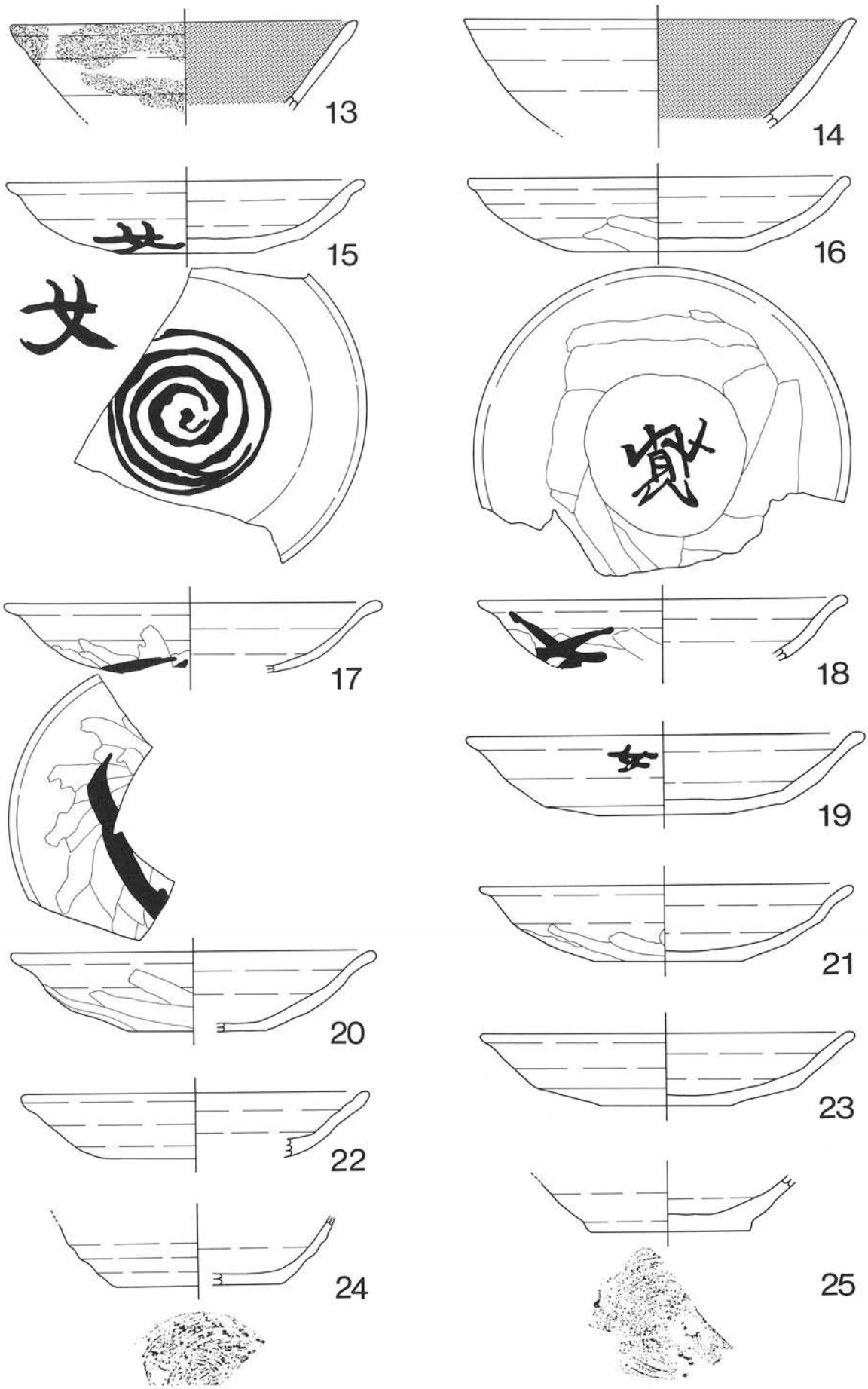




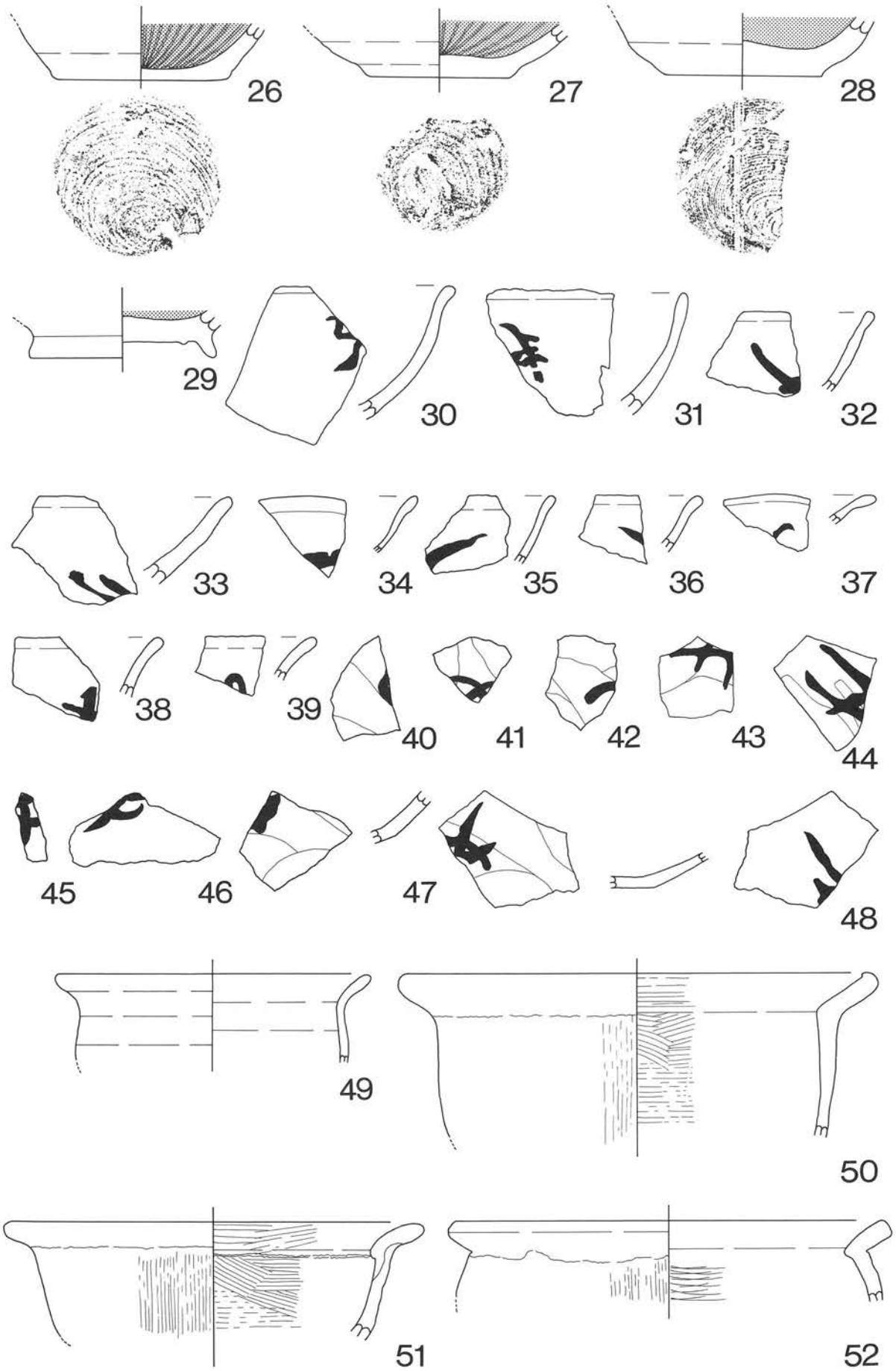
第16図　2号住居跡遺物分布図



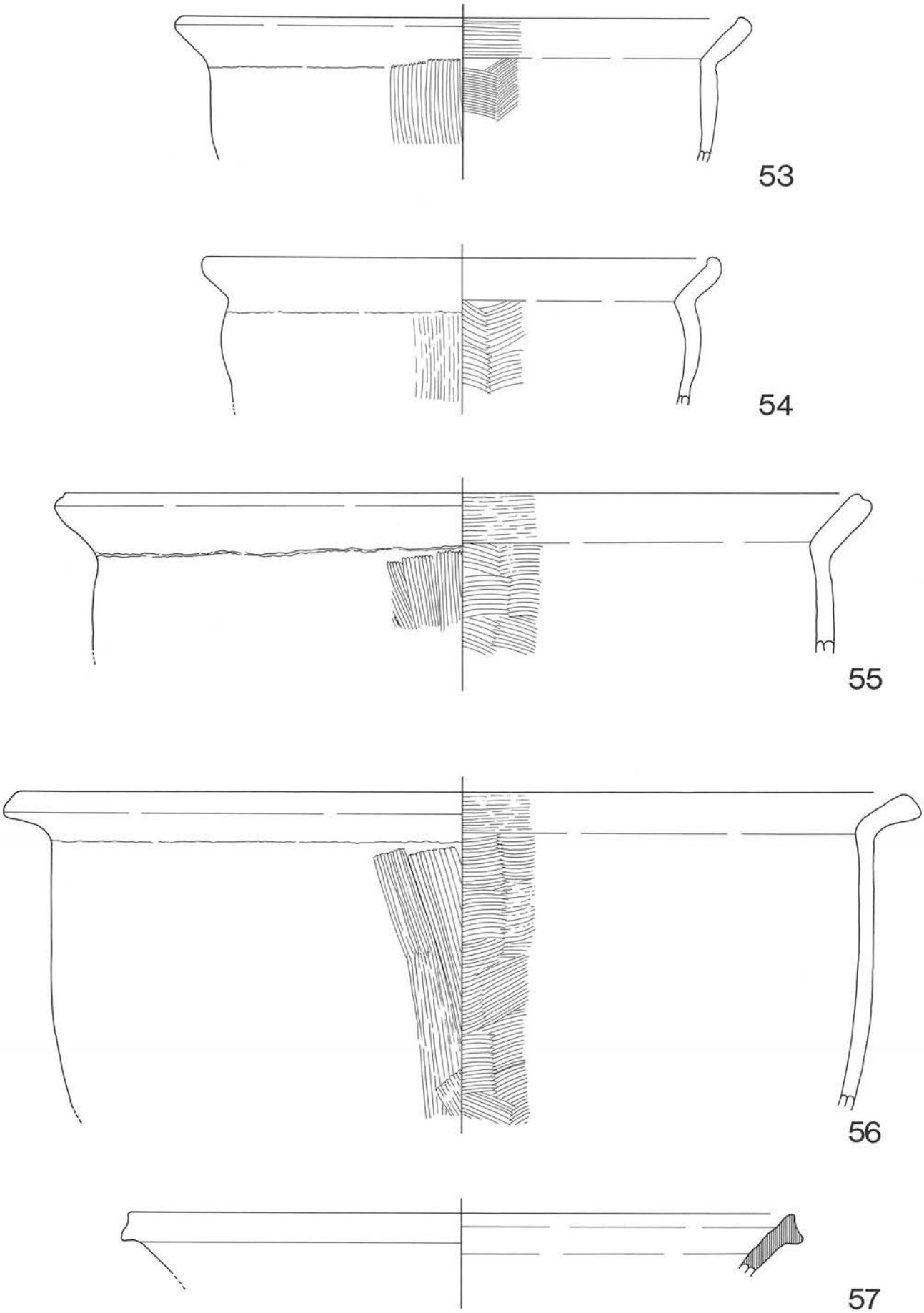
第17図　2号住居跡出土遺物(1/2)



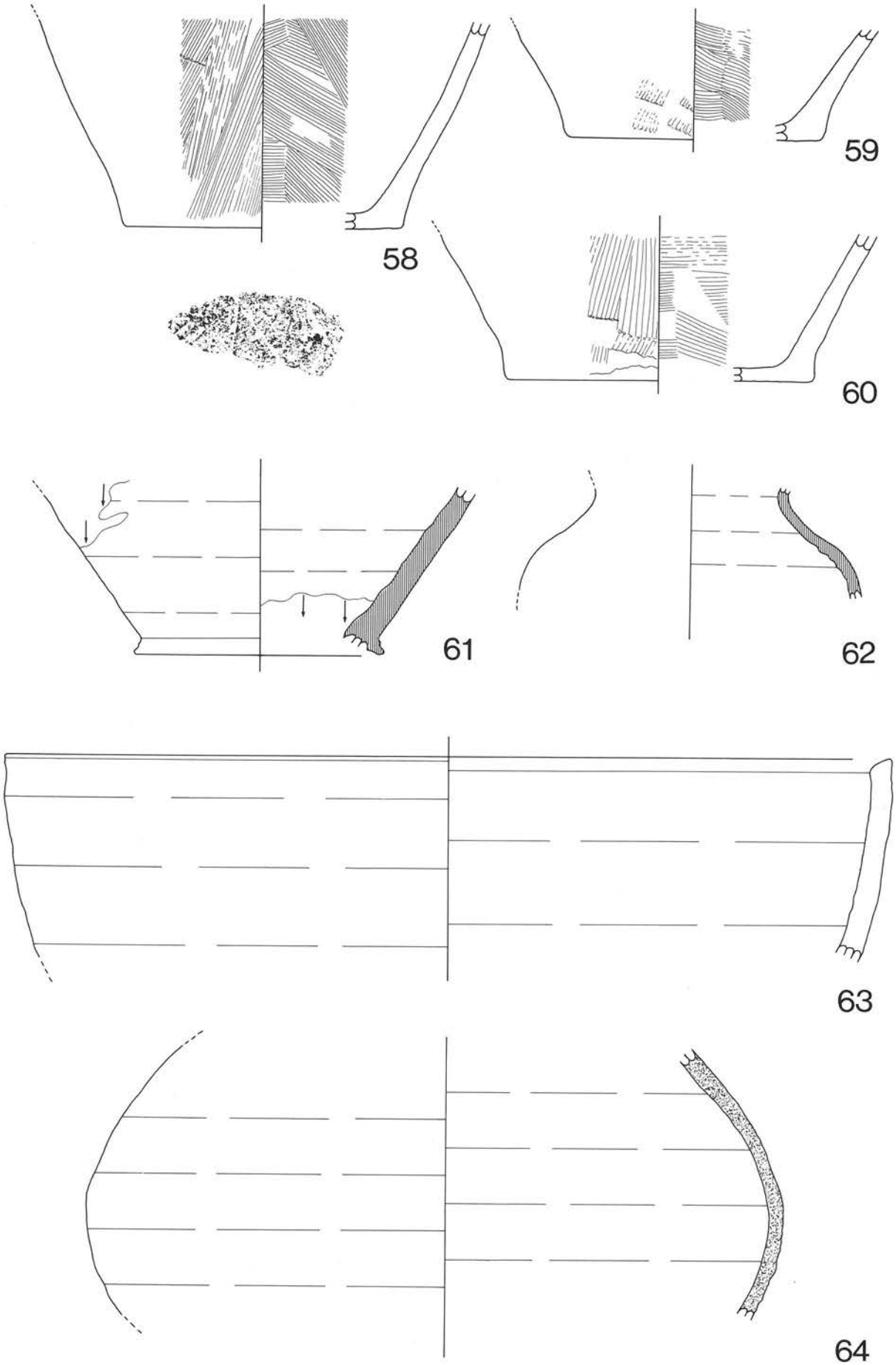
第18図　2号住居跡出土遺物(1/2)



第19図　2号住居跡出土遺物(1/2)



第20図　2号住居跡出土遺物(1/2)



第21図　2号住居跡出土遺物(1/2)

45		身部小片	A 1	
46		身部小片	C 3	「女ヵ」
47		底部小片	A 1	「女ヵ」
48		底部小片	A 1	「女ヵ」
49	11.2cm	口縁部小片	D 2	
50	16.9cm	口縁部小片	B 1	
51	14.9cm	口縁部小片	B 1	
52	15.5cm	口縁部小片	B 1	
第20図53	21.2cm	口縁部小片	B 1	
54	19.2cm	口縁部小片	B 1	
55	30.2cm	口縁部小片	B 1	
56	33.8cm	口縁部小片	B 1	
57	24.6cm	口縁部小片		長石粒子が混じるキメの細かい胎土、灰色(N5/0)
58	10.0cm	底部小片	B 1	
59	9.3cm	底部小片	B 1	
60	11.0cm	底部小片	B 1	
61	8.0cm	底部小片		長石粒子が混じるキメの細かい胎土、灰白色(2.5Y8/1)
62		胴部小片		鉱物粒子が目立たないキメの細かい胎土、灰白色(5Y7/1)、釉調灰オリーブ色(5Y7/1)
63	31.7cm	口縁部小片		雲母、長石粒子が混じるややざらついた胎土、黒色(10YR1.7/1)
64		胴部小片		長石粒子が混じるやや細かい胎土、灰色(N4/0)

3号住居跡（第23図～26図、28図21、写真図版11）

大きさ　5.6m×5.4m　面積　28.8m²

付属遺構　周溝、間仕切り溝

調査所見

重機による表土剝ぎ作業で一部を破損している。

住居竪穴は深さが僅か数cm程度にしか残らず、覆土断面の実測は省いた。覆土はおおむねしまりのない黒褐色土であった。

床面は住居中央部を中心に、周溝とその内側を除き、固くしまった貼り床が良好に残っている。

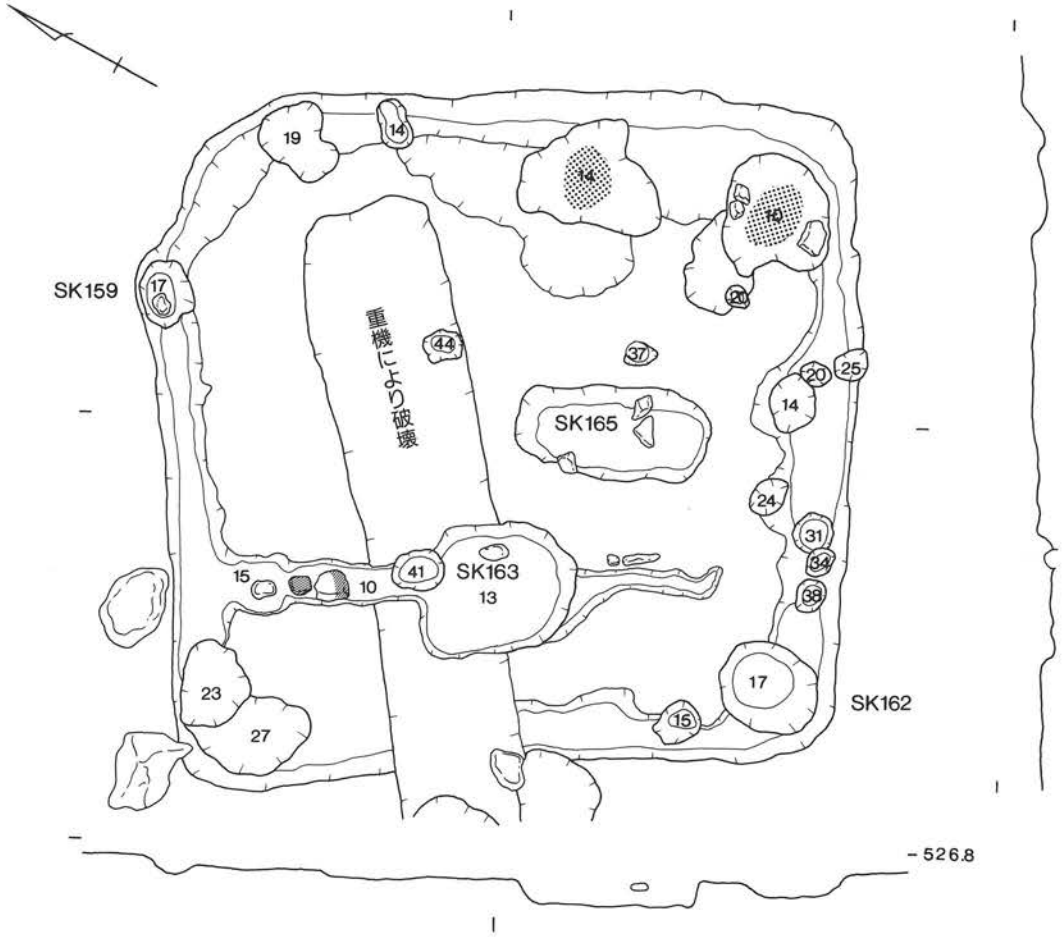
カマドは東壁のほぼ中央部と、住居南東角の2カ所で検出された。東壁中央部のカマドは焼土を含む覆土とカマド底部の掘り込みから、カマドと判断した。南東角のカマドは焼土の堆積と礫、掘り込みによりカマドと判断した。いずれのカマドも遺存状態が悪く、構造はいっさい不明である。ただし、両方のカマドとも、カマド前面がややくぼみ、固く踏みしめられている。両者の新旧関係は覆土上の貼り床の有無、周溝との切り合い関係などの判断基準に恵まれず、確認できなかった。南東角カマドには僅かに礫が残されていることから、こちらが新しいとも思えるが、並行して利用された可能性もあろう。

周溝はカマド部分と西壁の一部を除くとほぼ全周にわたって検出された。周溝内では、住居の四隅にやや大きめのくぼみが検出されている。ピットと呼び得る形状をもつくぼみは南西角のSK162としたピットと北壁のSK159のみで、他は地山礫の抜き取り痕と思われる。

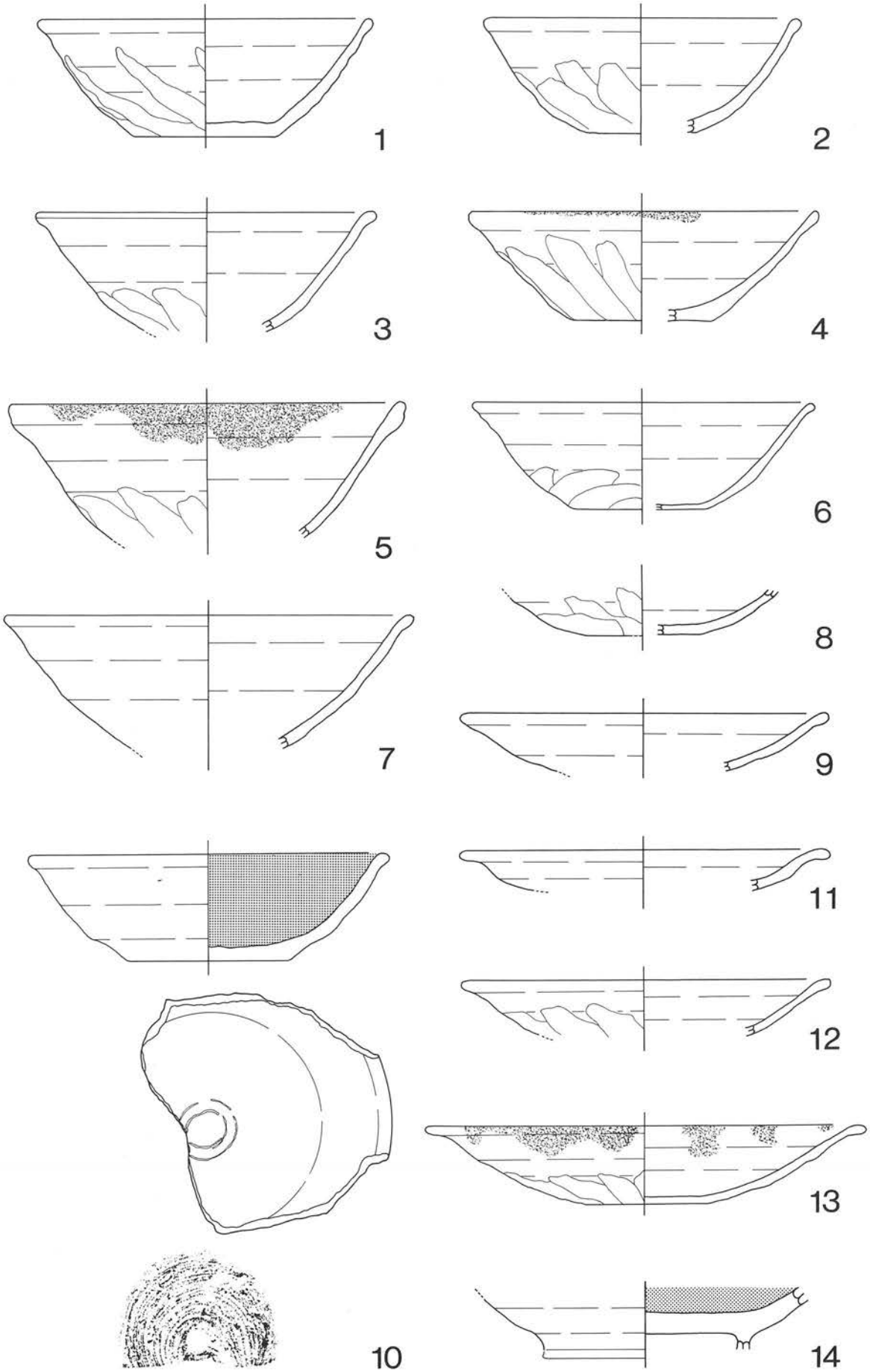
柱穴は、住居中央に深さ40cm前後のピットが3基検出されており、これらが該当する可能性がある。

北壁周溝から南壁に向かって小溝が検出されている。ちょうど柱穴と思われるピットに接している。溝内から

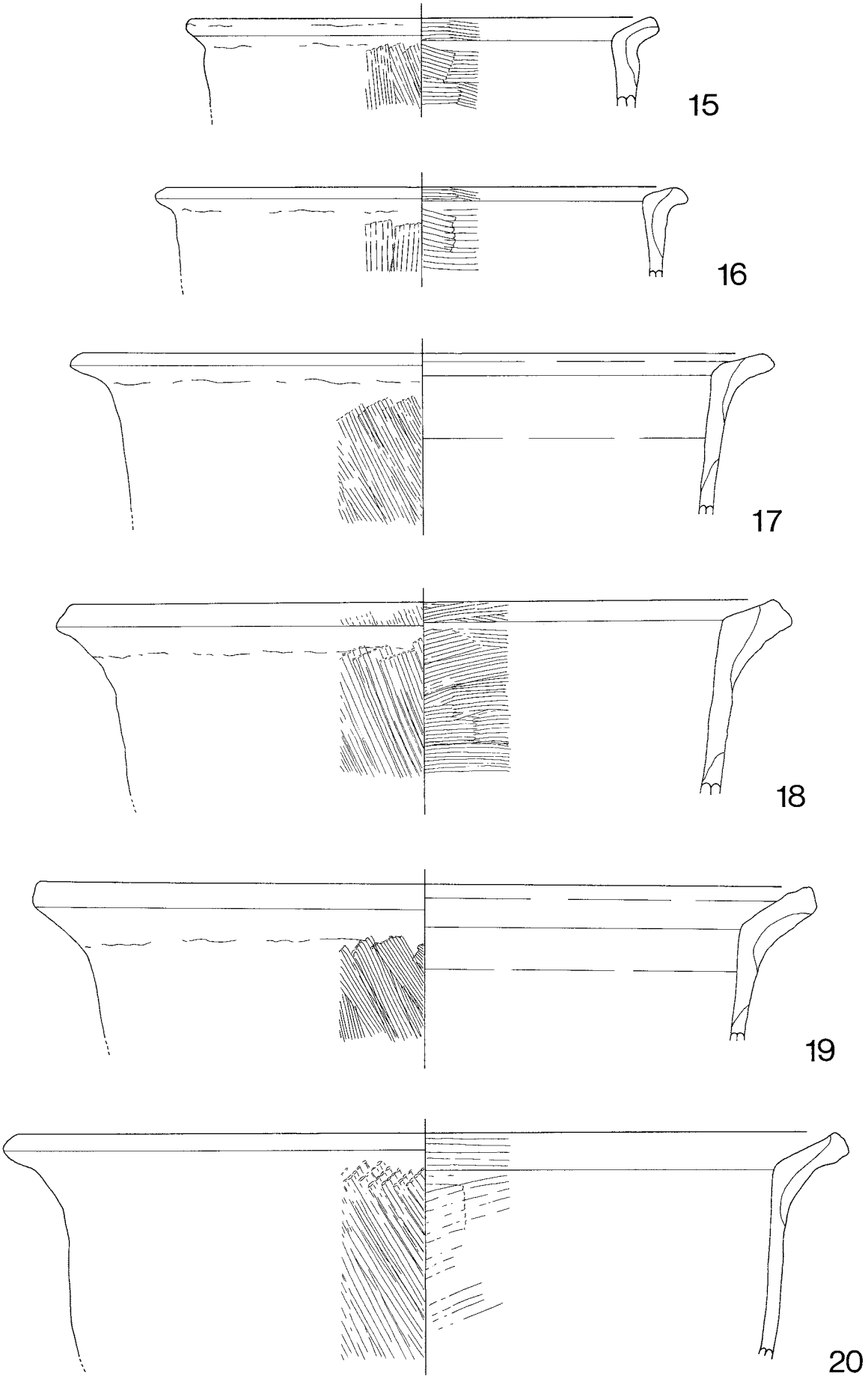
第22図　2号住居跡遺物分布図



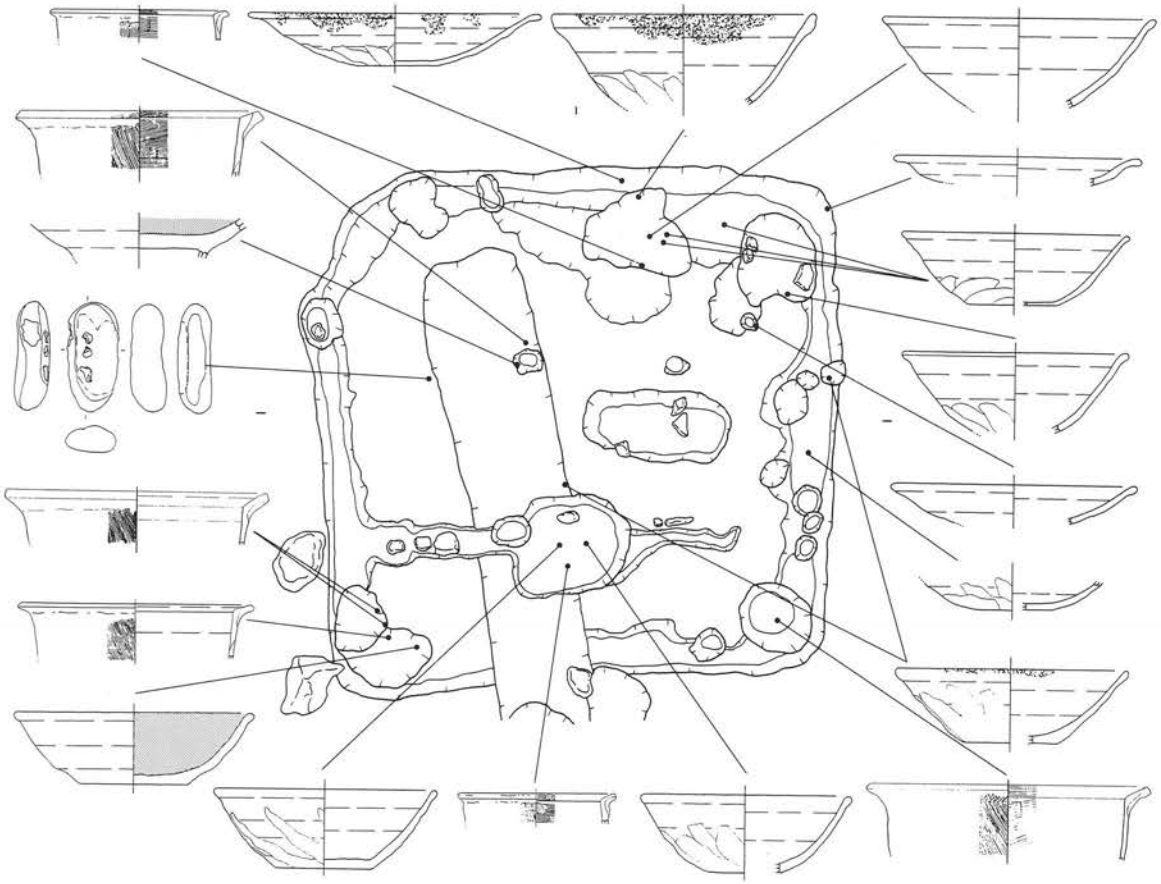
第23図　3号住居跡(1/60)

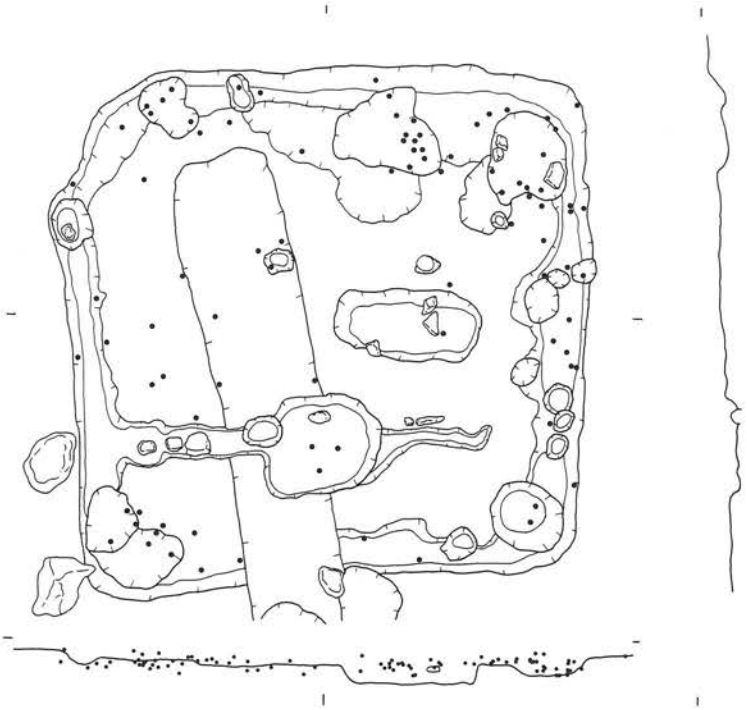


第24図　3号住居跡出土遺物(1/2)



第25図　3号住居跡出土遺物(1/2)





第26図　3号住居跡遺物分布図

被熱痕のある礫が2個出土している。

住居内からSK164、165の2基の土坑が検出されている。いずれもしまりのない黒色土ないし黒褐色土が堆積しており、3号住居との新旧関係は確認できなかった。ただし、いずれの土坑覆土上にも固くしまった貼り床は検出されていない。

遺物は住居全体から出土しているが、住居竪穴の残りが悪いこともあり、いずれも小器片で、完形個体は1点もみられない。できる限り図化したがほとんどが小器片である。

3号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径・器高・底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第24図1	11.8cm,4.2cm,5.0cm	1/2	A 1	
2	11.2cm	1/3	A 1	
3	12.0cm	口縁部小片	A 1	
4	12.4cm	1/6	A 1	口唇部煤付着あり、灯明皿か
5	14.0cm	口縁部小片	A 1	
6	12.1cm	1/4	A 1	
7	14.5cm	1/6	A 2	
8		底部小器片	A 1	
9	13.0cm	1/5	A 1	
10	12.8cm,3.8cm,5.8cm	1/2	C 3	みこみ部円形の沈線状くぼみあり
11	13.1cm	口縁部小片	A 1	
12	13.0cm	口縁部小片	A 1	
13	15.6cm,2.8cm	1/4	A 1	
14		底部小器片	C 3	
15	16.8cm	口縁部小片	B 1	
16	18.8cm	口縁部小片	B 1	
17	25.0cm	口縁部小片	B 1	
18	26.1cm	口縁部小片	B 1	
19	27.8cm	口縁部小片	B 1	
20	30.0cm	口縁部小片	B 1	
21	石器			

4号住居跡（第27図～29図、写真図版12～13）

大きさ　5m×4.2m　面積　22.2m²

付属遺構　周溝

覆土土層　A-A' 地山　固くしまった明黄褐色土（10YR6/6）

1層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に焼土微粒子、炭粒子がごく僅かだけ混じる

2層　しまりのない黒色土（10YR2/1）、1層よりも焼土、炭粒子がやや多く混じる

3層　しまりのない黒色土（10YR1.7/1）にやや大きめの炭粒子が混じる

4層　しまりのない暗褐色土（10YR3/3）に地山ブロック（10YR6/6）が混じる

5層　2層とほぼ同じ。大きめの炭化材、黄橙色土粒子が混じる

6層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に小さめの炭化材と黄橙色土ブロックが混じる

7層　しまりのない黒褐色土（10YR2/3）と黄褐色土（10YR5/8）が半々に混じる。大きめの炭化材、焼土粒子が混じる

8層　しまりのない黒褐色土（10YR2/3）に小さめの炭化材が混じる
9層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）にごくわずか炭粒子が混じる
10層　しまりのない暗褐色土（10YR3/3）に小さめの炭化材が僅かに混じる
11層　明黄褐色の地山ブロック（10YR6/6）
B-B'　1層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に焼土微粒子、炭粒子がごく僅かだけ混じる
2層　しまりのない暗黄褐色土（10YR4/3）ブロック
3層　しまりのない黒色土（10YR1.7/1）
4層　しまりのない黄橙色土（10YR7/8）
5層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）
6層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に黄橙色土粒子、大きめの炭化材が混じる
7層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に焼土、炭の小粒子が混じる
8層　7層と同じだが、炭粒子がやや多く混じる
9層　しまりのない暗褐色土（10YR3/3）に炭粒子が混じる
10層　しまりのない暗褐色土（10YR3/3）に黄褐色土粒子（10YR6/6）が混じる
11層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に炭粒子が多く混じる
12層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）にやや大きめの黄橙色ブロックが混じる
13層　黄橙色ブロック（10YR7/8）

調査所見

遺構確認時にプランを見誤った結果、覆土断面観察用のベルトがたすき掛け状になってしまった。また、試掘坑で一部を破壊してしまった。

住居竪穴は30cmほどが残る。覆土はしまりのない黒褐色土で、炭化材片が混じるが、焼土粒子はほとんどみられない。1号溝状遺構に切られる。

床面は周溝部、壁沿いを除き、固くしまった貼り床が良好に検出された。中央部がややくぼんでいる。

カマドは茅ヶ岳山麓でこれまでに調査されたカマドでは珍しく、地山を掘り残して両袖部を作り出している。したがって、カマドを構築する礫も袖石状に検出された1個を除き、ほとんど出土していない。削平された上部構造については不明であるが、カマド覆土中にややくすんだ黄褐色土がブロック状に入り込んでいることから、袖上部、あるいは天井部までが地山の削り出しでつくられていた可能性もあろう。

周溝はカマド部を除いて全周する。周溝を埋める覆土は住居隅の三角形堆積層と同じかほぼ同じもので、2号住居周溝と同様である。

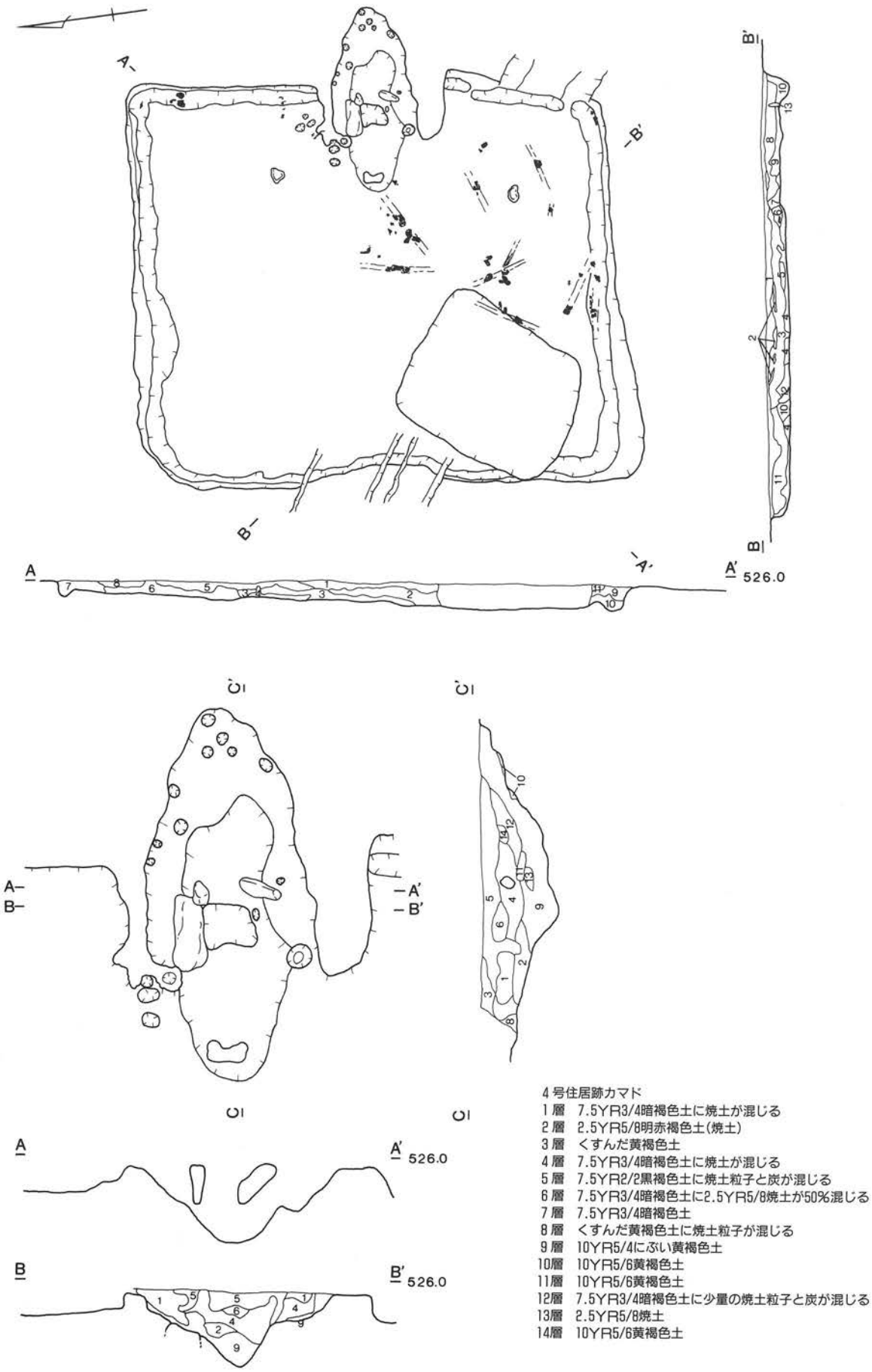
柱穴は検出されなかった。

カマド南西の床面上と覆土からは多量の炭化材が出土している。炭化材は幅7cm前後、厚さ4cm前後の割材状の形状が多く、丸太状のものも一部みられる。遺存状態はさほど良好ではないが、炭化材は放射状に分布し、屋根を構築していた垂木などであったと考えられる。床面上に焼土層が堆積していた箇所はなく、生活時に利用していたらしい遺物もないことから、住居利用中の被災と考えにくい。炭化材の樹種同定結果については巻末付録に報告してある。

遺物はごく僅かで、カマド南側に集中するが、いずれも小器片であり、確実に本住居に由来する遺物は確認できない。

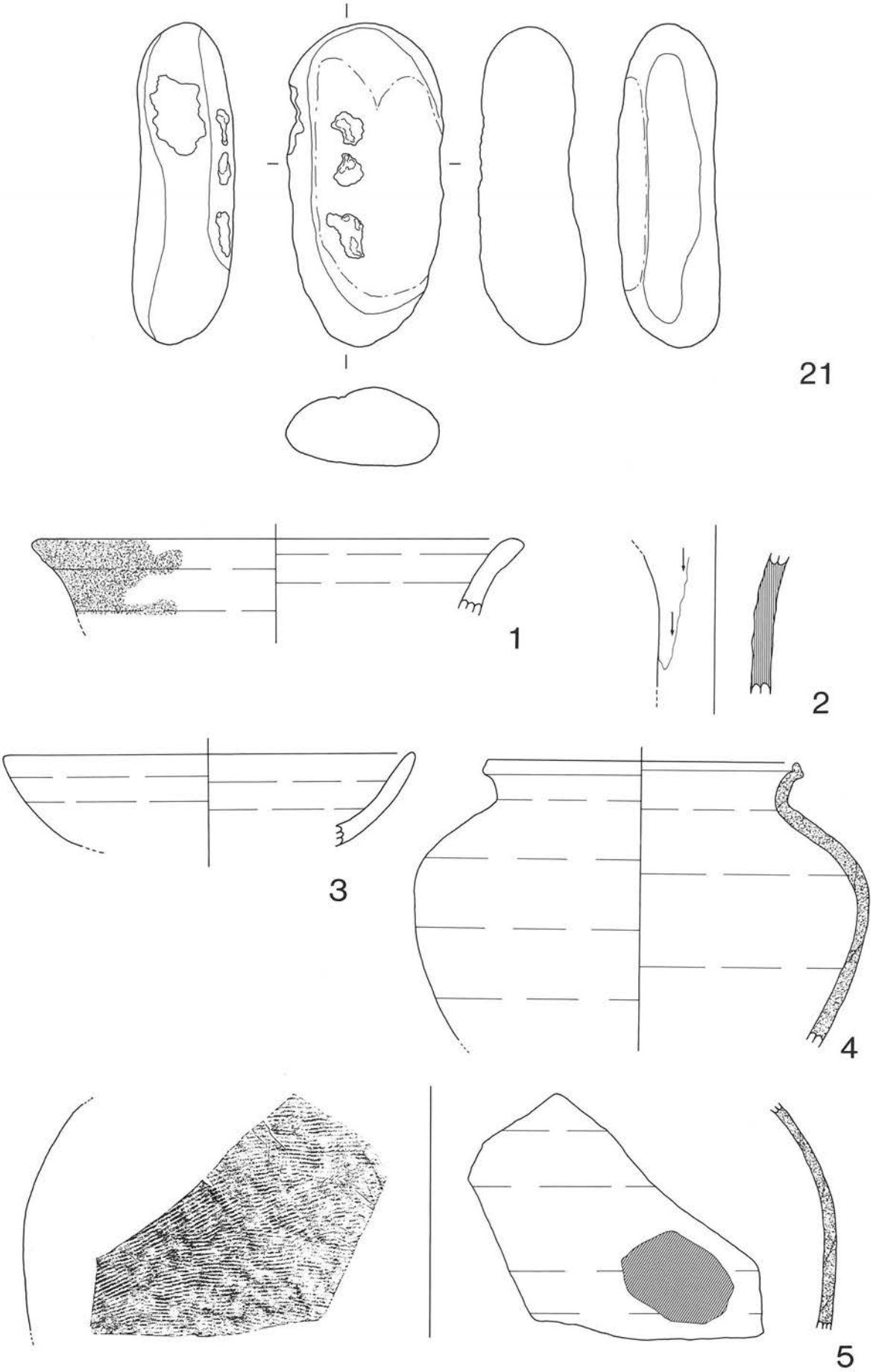
4号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径・器高・底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第28図1	17.4cm	口縁部小片	D 2	
2		頸部小片		鉱物粒子が目立たないキメの細かい胎土、灰白色(7.5Y7/1)
3	14.6cm	口縁部小片	C 2	
4	11.3cm	1/4		長石粒子が混じるキメの細かい胎土、暗灰色（N3/1）
5		胴部小片		長石粒子が僅かに混じるキメの細かい胎土、灰色(7.5Y6/1)内面に磨滅痕あり、転用品か

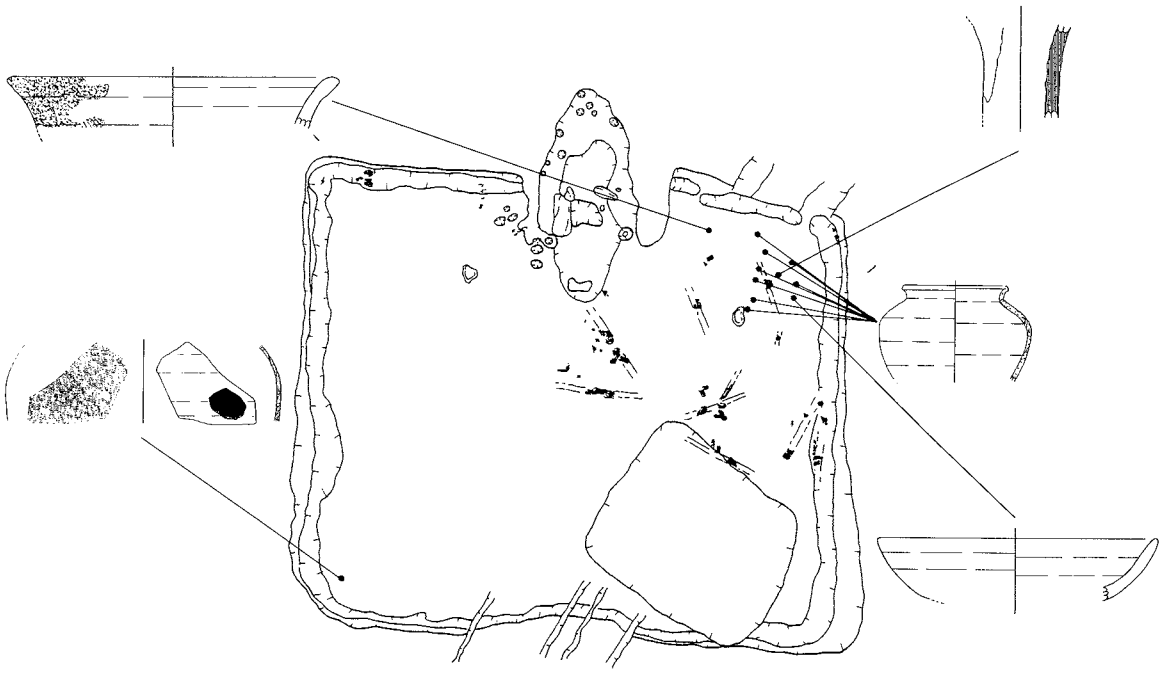


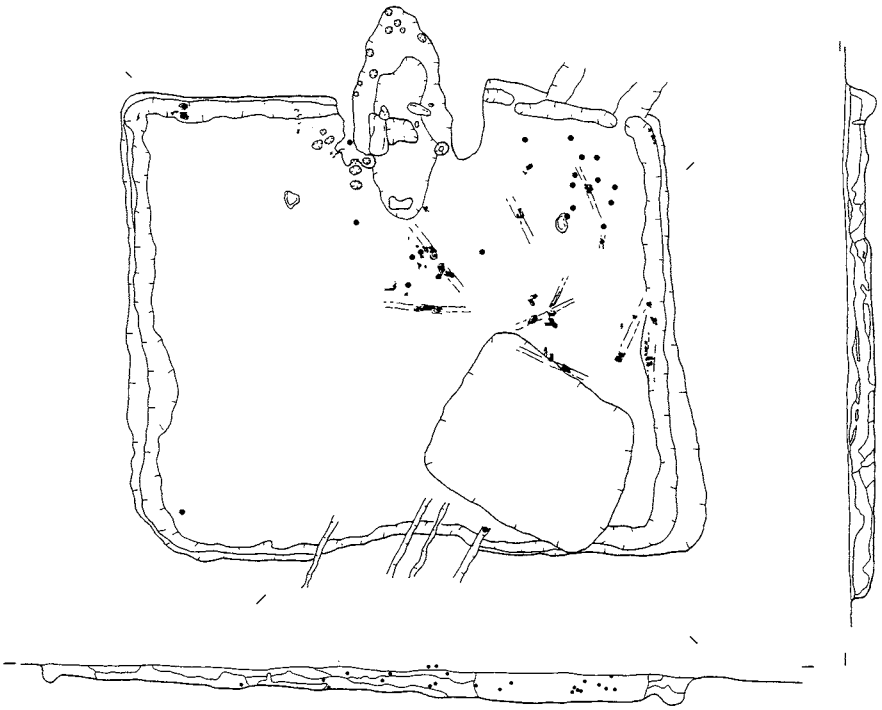
4号住居跡カマド
1層　7.5YR3/4暗褐色土に焼土が混じる
2層　2.5YR5/8明赤褐色土(焼土)
3層　くすんだ黄褐色土
4層　7.5YR3/4暗褐色土に焼土が混じる
5層　7.5YR2/2黒褐色土に焼土粒子と炭が混じる
6層　7.5YR3/4暗褐色土に2.5YR5/8焼土が50%混じる
7層　7.5YR3/4暗褐色土
8層　くすんだ黄褐色土に焼土粒子が混じる
9層　10YR5/4にぶい黄褐色土
10層　10YR5/6黄褐色土
11層　10YR5/6黄褐色土
12層　7.5YR3/4暗褐色土に少量の焼土粒子と炭が混じる
13層　2.5YR5/8焼土
14層　10YR5/6黄褐色土

第27図　4号住居跡(1/60)、カマド(1/30)



第28図　4号住居跡出土遺物(1/2)





第29図　4号住居跡遺物分布図

5号住居跡（第30図、写真図版14）

大きさ　4.8m×5.5m～7.6m　面積　30.1m²

付属遺構　周溝？

調査所見

確認面から床面まで20cmに満たない程度しか、残っていないため、覆土断面の実測は省いた。覆土はしまりのない黒色土で、黄橙色土粒子が均一に混じり、黄橙色土ブロックが若干混じる。

農業用水路が近くにあり地山からして湿気を多く帯びていたためでもあろうが、固くしまった床面は全く検出されなかった。

カマドは住居南角に位置する。僅かの炭粒子、焼土粒子、被熱礫を含む礫の集中がみられた。掘り込みは検出されなかった。礫は無秩序に散在し、カマドの構造を推測することはできなかった。

周溝は西壁沿いに浅く広いくぼみが検出されたのと、東壁沿いに途切れながら溝状にくぼみが検出された他は判然としない。

住居中央でピットが2基、西壁沿いでピットが2基検出されている。これら4基のピットは深さがまちまちであるが、組み合わされて柱穴と考えることもできる。住居中心軸よりも偏るのは2号住居柱穴に類似する。いずれも住居確認面では、検出できなかった。

住居北西側に突出した部分が検出されている。遺構確認時から明瞭に確認できたため、掘り過ぎではない。複数の遺構が切り合っているのか、5号住居本来の形状なのか、覆土が黒色土で薄いため、確認することができなかった。この部分からは全く遺物も出土していない。

遺物はごく小さな土器片が数片出土したのみで、器形を復元実測できる遺物は皆無である。

6号住居跡（第31図～35図、写真図版15～16）

大きさ　3.7m×3.8m　面積　14.1m²

付属遺構　周溝

覆土土層　1層　しまりのない黒色土（10YR2/1）
2層　しまりのない黒色土（10YR2/1）に褐色土粒子が僅かに混じる
3層　黒褐色土（10YR2/2）に褐色土粒子が混じる。焼土粒子がごく微量混じる
4層　3層と同じだが、焼土粒子が混じらない
5層　暗褐色土（10YR3/3）に褐色土粒子が混じる
6層　5層と同じだが、黄褐色土粒子が混じる
7層　黄褐色土（10YR5/6）に黒褐色土粒子が混じる
8層　黒褐色土（10YR3/2）に褐色土粒子が混じる
9層　3層と同じだが、炭粒子が混じる
10層　3層と同じだが、褐色土がより多く混じり、炭粒子が混じる
11層　1層と同じだが、焼土と炭粒子が混じる
12層　黒褐色土（10YR2/2）に炭粒子、焼土粒子が僅かに混じる
13層　黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土粒子が混じり、小さな炭化材が混じる

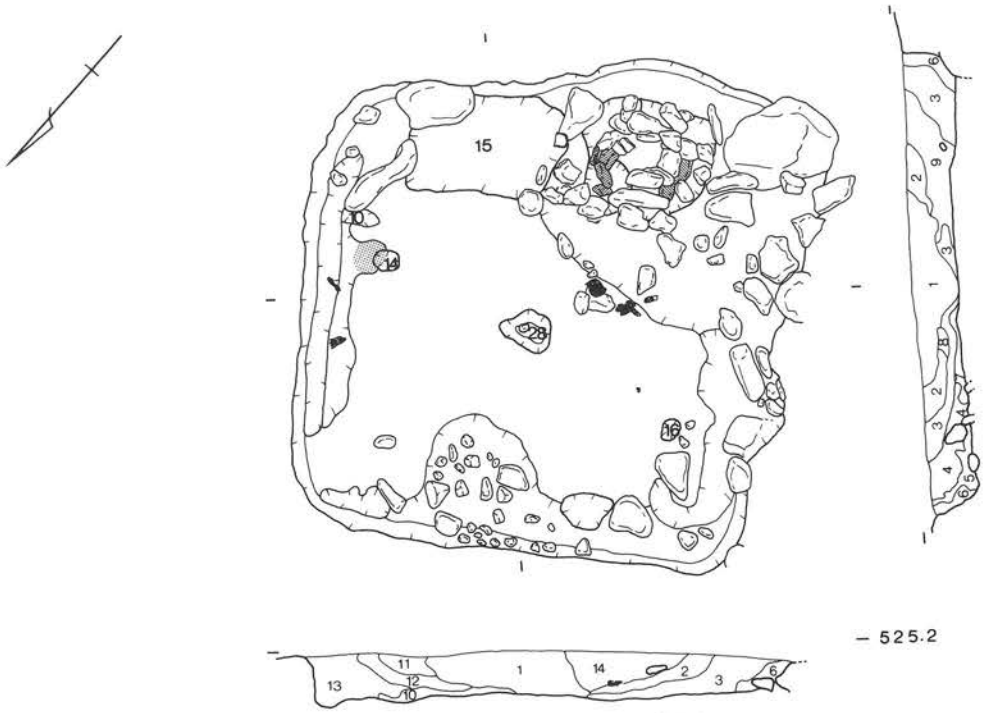
調査所見

竪穴掘り込みは40cmほど残っている。覆土は黒色土、黒褐色土などによりレンズ状に堆積する。周溝を埋める覆土は住居隅の堆積層と同じで、2号住居同様である。

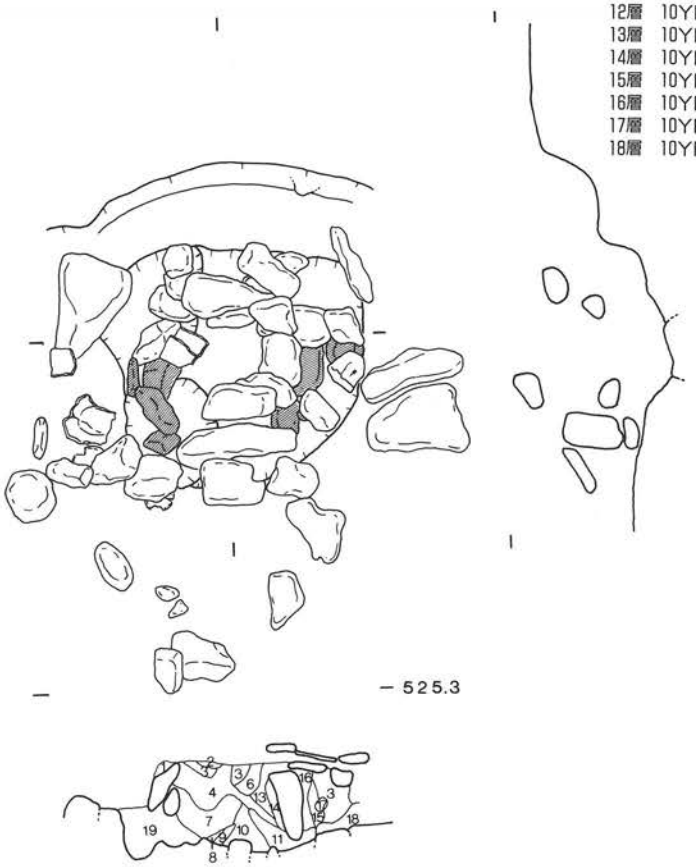
住居中央部を中心に壁際から50～80cmほど離れた範囲に、固くしまった床面が良好に検出された。

カマドは住居南角に位置する。袖石、天井石が良好に残存し、箱状に礫が積まれている様子がよく分かる。被熱痕のある礫は袖石にみられる。残りの良いカマドであるが、2号住居のような灰色粘土は検出されなかった。

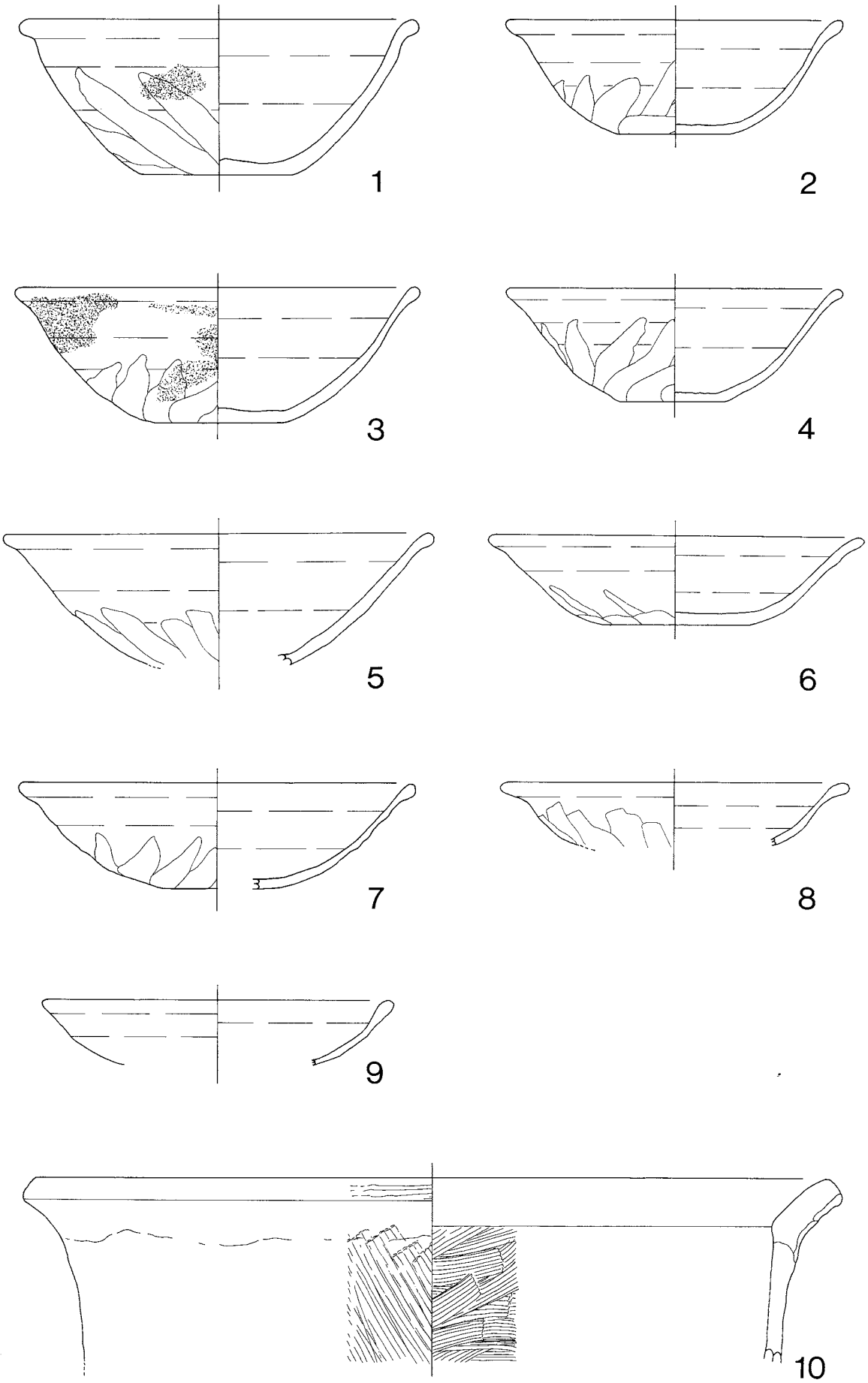
第30図　5号住居跡(1/60)、カマド(1/30)



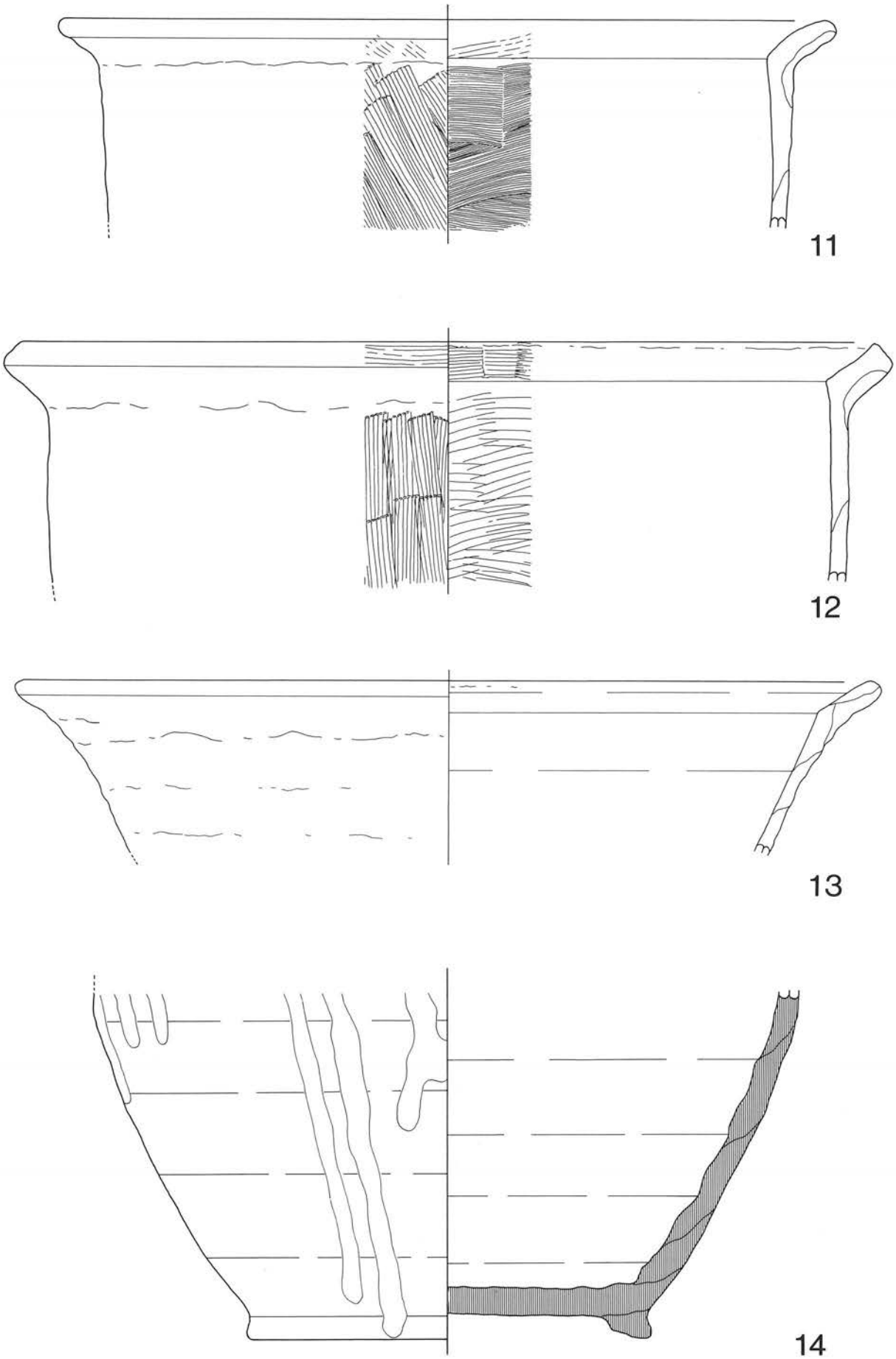
6号住居跡カマド
1層　焼土
2層　10YR2/1黒色土
3層　10YR3/3暗褐色土に少量のにぶい黄橙色土粒子が混じる
4層　10YR3/2黒褐色土に少量の焼土粒子が混じる
5層　10YR7/4にぶい黄橙色土
6層　10YR3/2黒褐色土
7層　10YR3/3暗褐色土に焼土粒子が混じる
8層　10YR3/3暗褐色土
9層　10YR3/3暗褐色土に焼土粒子が混じる
10層　10YR3/2黒褐色土に焼土粒子が混じる
11層　10YR3/3暗褐色土ににぶい黄橙色土粒子が少量混じる
12層　10YR3/2黒褐色土に焼土が少量混じる
13層　10YR3/3暗褐色土に焼土粒子が混じる
14層　10YR2/1黒色土
15層　10YR3/2黒褐色土
16層　10YR3/2黒褐色土に少量の焼土粒子が混じる
17層　10YR4/4褐色土
18層　10YR4/6褐色土



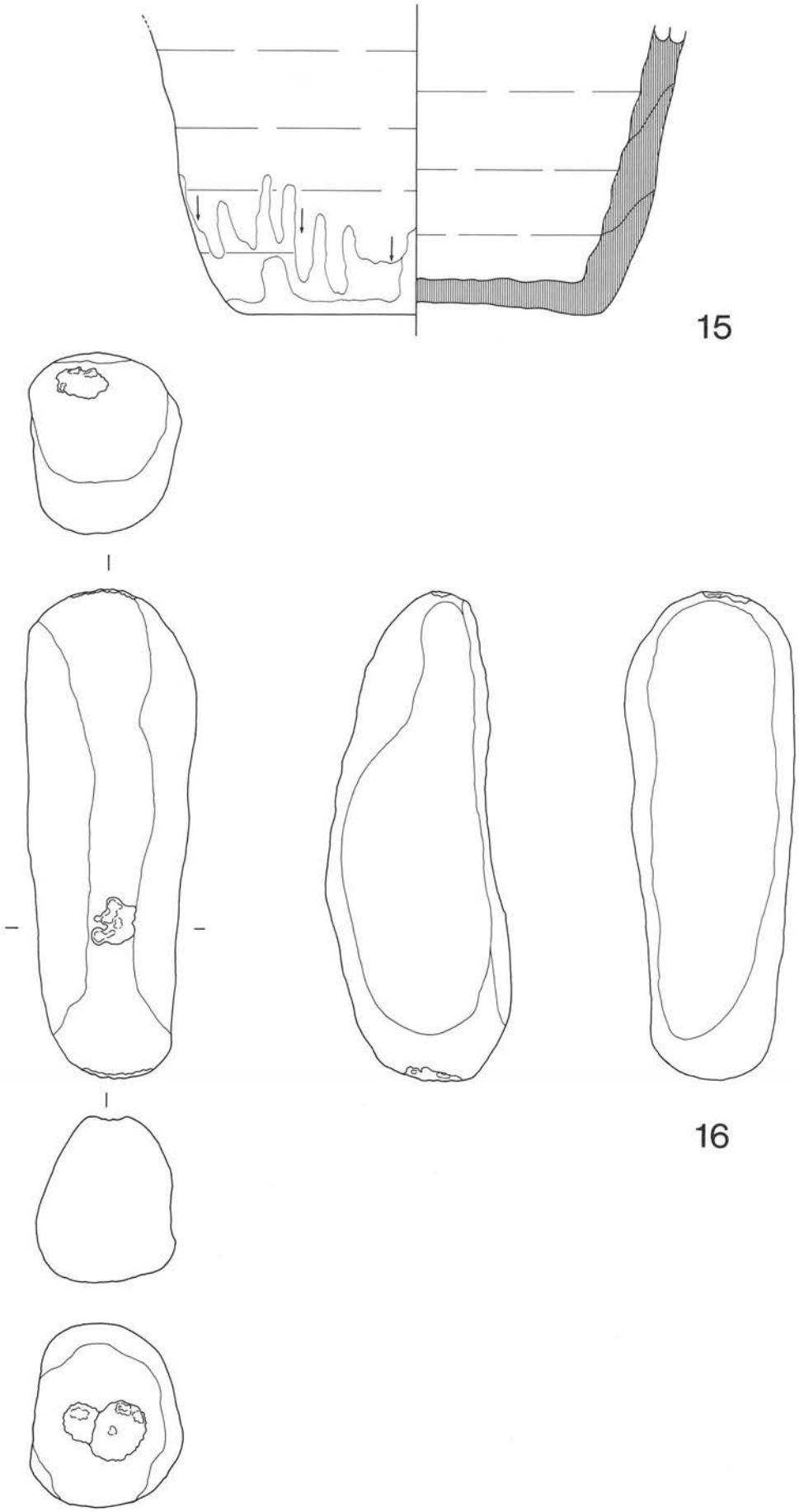
第31図　6号住居跡(1/60)、カマド(1/30)



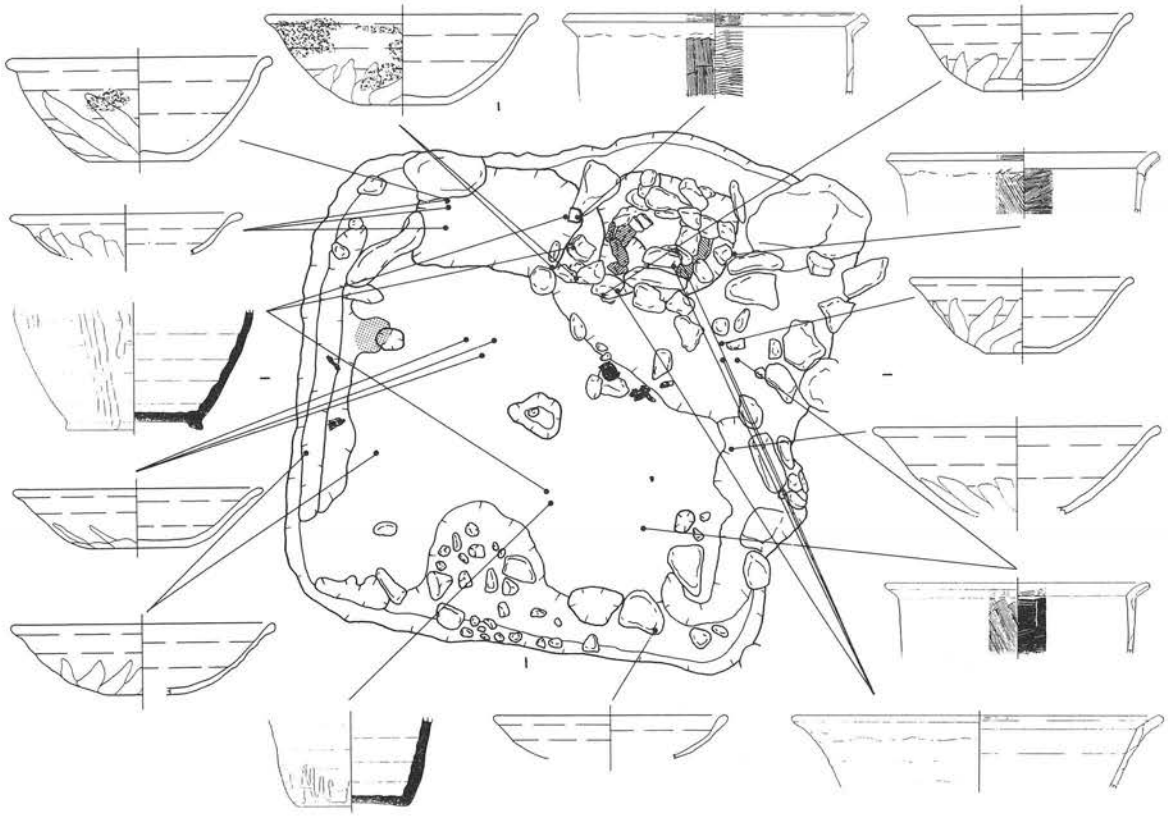
第32図　6号住居跡出土遺物(1/2)



第33図　6号住居跡出土遺物(1/2、13のみ2/5)



第34図　6号住居跡出土遺物(1/2)



第35図　6号住居跡遺物分布図

周溝は西壁沿いに良好に検出された他は、掘り方と区別がつかず、判然としなかった。

住居中央部などで3基のピットが検出されたが、柱穴とは考えられない。

カマド手前と西壁周溝上で炭化材が検出された。炭化材は床面高より10cmほど高い位置で出土している。径8～11cmの柱材のような太い炭化材もみられる。住居覆土、床面上に焼土の塊などはみられず、被災住居か判断しかねる。炭化材の樹種同定結果は巻末に報告してある。

住居床面上からは礫が多数出土した。また、地山から突き出た礫も多数ある。

遺物はカマド内と周辺を中心に出土している。住居中央部の床面からは灰釉甕の底部が2個体正位で出土している。第34図16の石器はカマドのすぐ北側の、床面上20cmほどの高さで第32図3の坏などとともに出土している。

6号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径・器高・底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第32図1	14.1cm,5.5cm,5.4cm	1/3	A 1	
2	12.0cm,4.0cm,4.0cm	ほぼ完形	A 1	
3	14.3cm,4.8cm,4.7cm	2/3	A 1	
4	11.9cm,4.0cm,3.8cm	1/3	A 1	
5	15.3cm	1/5	A 1	
6	13.3cm,3.2cm,5.2cm	ほぼ完形	A 1	
7	14.0cm	1/6	A 1	
8	12.3cm	口縁部小片	A 1	
9	12.4cm	口縁部小片	A 1	
10	29.0cm	口縁部小片	B 3	
11	28.0cm	口縁部小片	B 1	
12	31.9cm	口縁部小片	B 1	
13	39.0cm	口縁部小片	B 1	
14	14.6cm	底部のみ		長石、黒色粒子の混じるキメの細かい胎土、灰白色(7.5Y7/1)、釉調灰オリーブ色(7.5Y5/3)
15	12.0cm	底部のみ		長石、黒色粒子の混じるキメの細かい胎土、灰白色(7.5Y7/1)、釉調灰オリーブ色(7.5Y5/3)
16				上下端に敲打痕あり

7号住居跡（第36図、38図、写真図版17）

大きさ　5.8m×5.4m　面積　29.4m²

付属遺構　周溝、土坑

調査所見

2号住居に並ぶ大型の住居であるが、竪穴掘り込みは20cmほどしか残らず、覆土断面の実測は省いた。覆土はしまりのない黒褐色土である。住居中央部に試掘坑があたり、床面を掘り抜いてしまっている。

床面は住居中央部を中心に固くしまった貼り床が良好に検出されている(図中の一点鎖線で囲まれた範囲)。住居中央の床面が焼けて赤褐色に変化している。1号ピット覆土上は焼土化していない。後述するとおり、1号ピットは柱穴と考えられるから、柱穴のすぐ隣で火を使用するとは考えにくい。これらのことからこの焼土は1号ピットより古いものと考えられる。本住居が建て替えを経ている可能性もあろう。

カマドは住居東角に位置する。掘り込みと礫が2個検出された。焼土が手前側に広がっている。

周溝はカマド部を除いてほぼ全周する。

住居床面より6基のピットと4基の土坑が検出された。住居確認時に土坑とピットは確認できなかった。1号

ピット～４号ピットは住居中央に位置し、深さもほぼ同じことから柱穴と考えられる。いずれのピット覆土も焼土粒子、炭粒子、炭化材が混じる黒褐色土もしくは暗褐色土である。

５号ピットは土坑と称するべきであるが、覆土上に７号住居の貼り床が確認され、住居より古い遺構であると思われる。床面下30cm深の土坑覆土からは厚板状の大きな炭化材が出土している。

１号土坑はしまりのない黒色土（10YR2/2）が堆積し、炭、焼土粒子が混じっている。遺物は出土していない。２号及び３号土坑は１号土坑と同様の覆土で、やはり炭、焼土粒子が混じっている。３号土坑覆土最下部からは棒状炭化材が出土している。いずれの土坑もきちんと円形に掘り込まれているのではなく、むしろ大きめの地山礫を掘り出した痕跡のようにもみえる。

これらの土坑は住居確認時に検出できなかったとはいえ、住居、土坑覆土ともに黒色土ないし黒褐色土であり、住居と同時、もしくは古い遺構であると断言することはできない。５号ピットのみが覆土上に貼り床があることから、住居より古い遺構であると確認できるのみである。一方、住居床面上には若干の炭化材と焼土の広がりが確認できる。この住居を後から掘り込んだ土坑覆土に炭化材が混じる可能性もあろう。

遺物は平安時代末から中世初頭頃の土師質土器片が２片出土したのみである。

７号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径･器高･底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第38図１	8.6cm,2.0cm,5.1cm	1/2	Ｅ２	
２	6.4cm	底部のみ	Ｅ１	

10号住居跡（第37、38図、写真図版18）

大きさ　3.8m×3.2m　面積　12.1m²

付属遺構　周溝

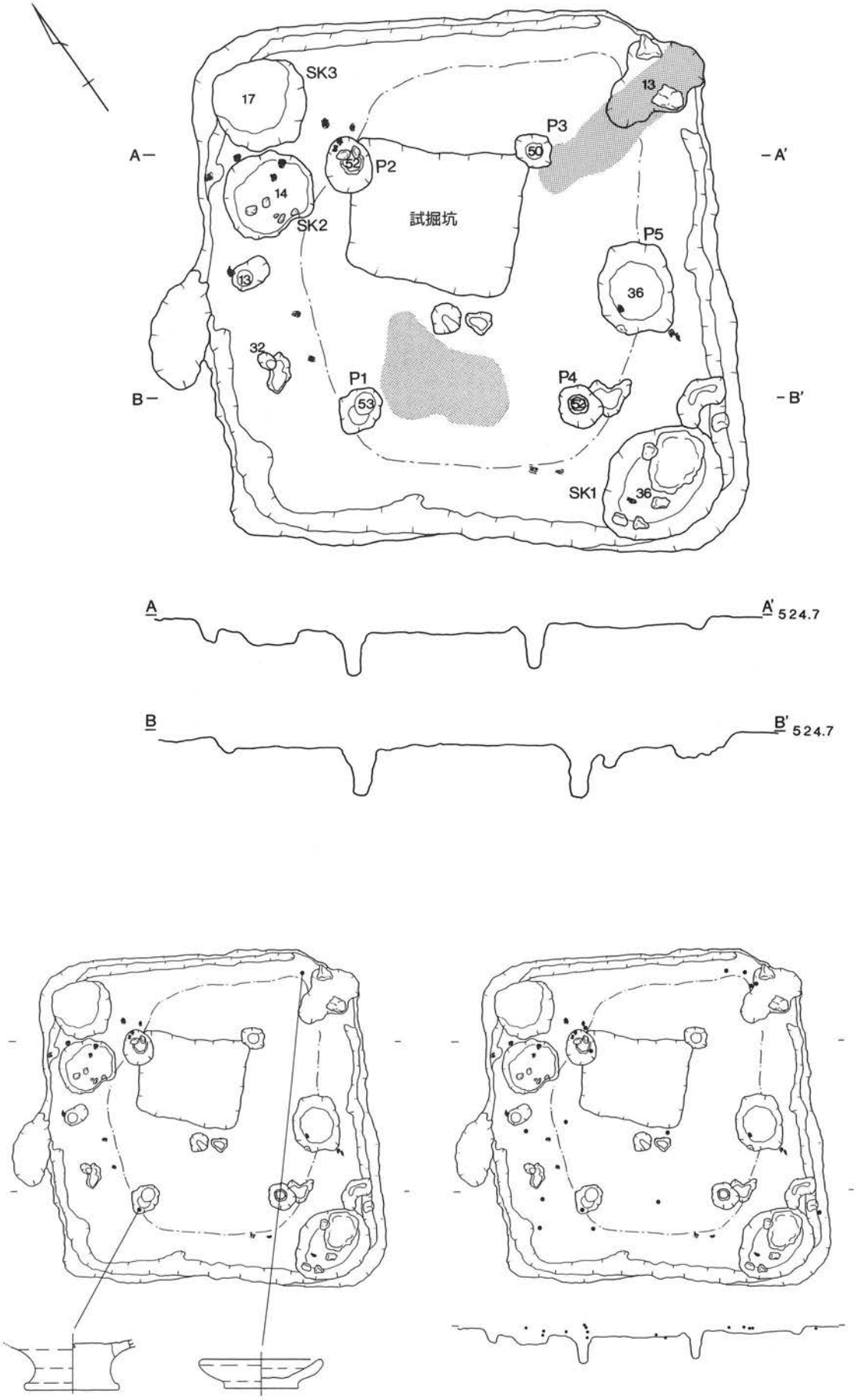
覆土土層　地山　ややしまり粘性のある黄褐色土（10YR5/6）
１層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）
２層　しまりのない暗褐色土（10YR3/3）
３層　しまりのない褐色土（10YR4/4）
４層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）
５層　しまりのない褐色土（10YR4/4）
６層　しまりのない褐色土（10YR4/4）
７層　しまりのない黄褐色土（10YR5/6）
８層　撹乱

調査所見

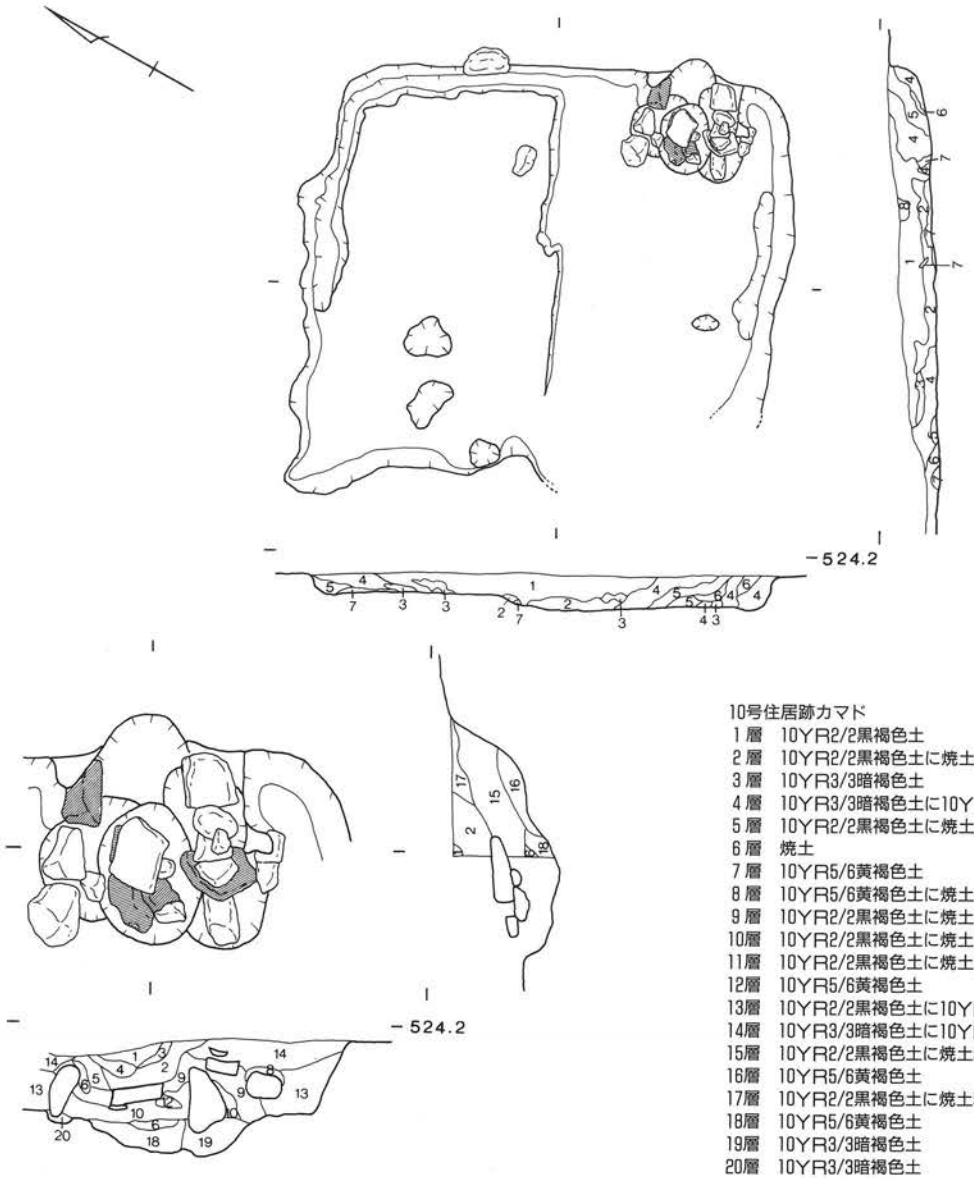
竪穴掘り込みが20～30cmほど残る。南西角は水田石垣の構築のために破壊され、確認できない。黒褐色土などの覆土がレンズ状に堆積する。５層と６層は土色帳で表現しきれないような僅かな土色の差がみられたため分層したが、同一層と考えてよいと思われる。

床面には住居を左右に二分するように段差が検出された。北西側が一段高く、床面は固くしまっていない。南東側、つまりカマドのある側は一段低く、固く踏みしめられた床面が検出された。比高差は約10cmである。高い側の床面を一部掘り下げたが、固い床面が下部より現れることはなく、遺物も出土しなかった。そのため、覆土断面の観察結果ともあわせて、この段差は住居使用時より存在したものと判断した。床面が踏みしめられていないため、上部に板張りなどの構造物があった可能性もあろう。

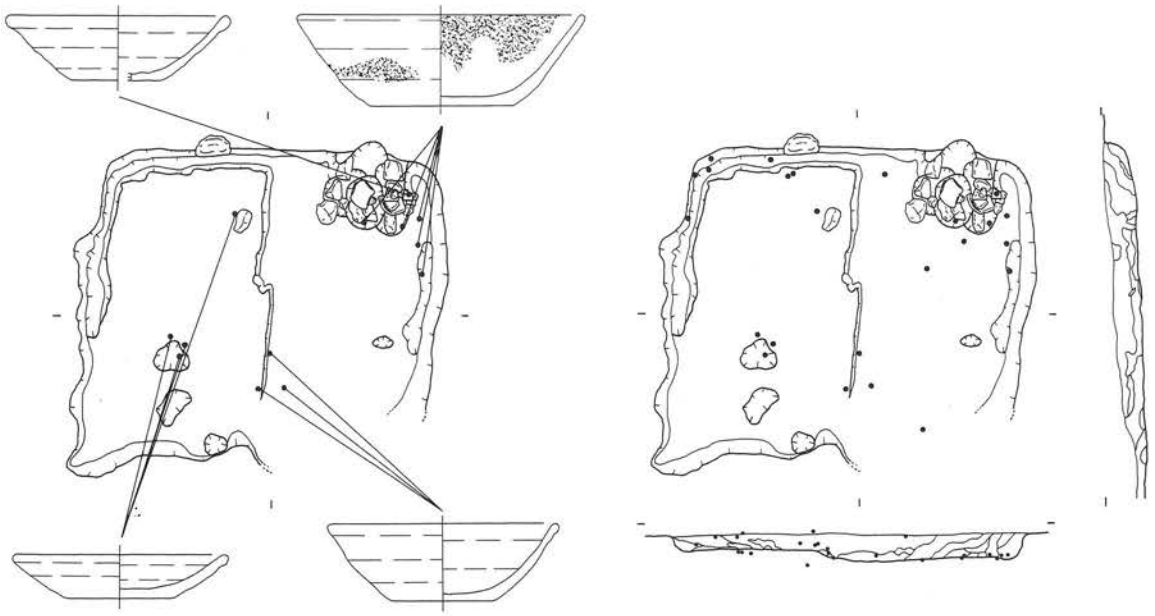
カマドは東壁南東寄りに位置する。被熱痕のある礫を含む礫と焼土、掘り込みを検出した。カマド構築礫が前方に崩れ落ちて複雑に組み入っており、一部覆土断面の実測ができなかった。カマドを構築した粘土などは検出



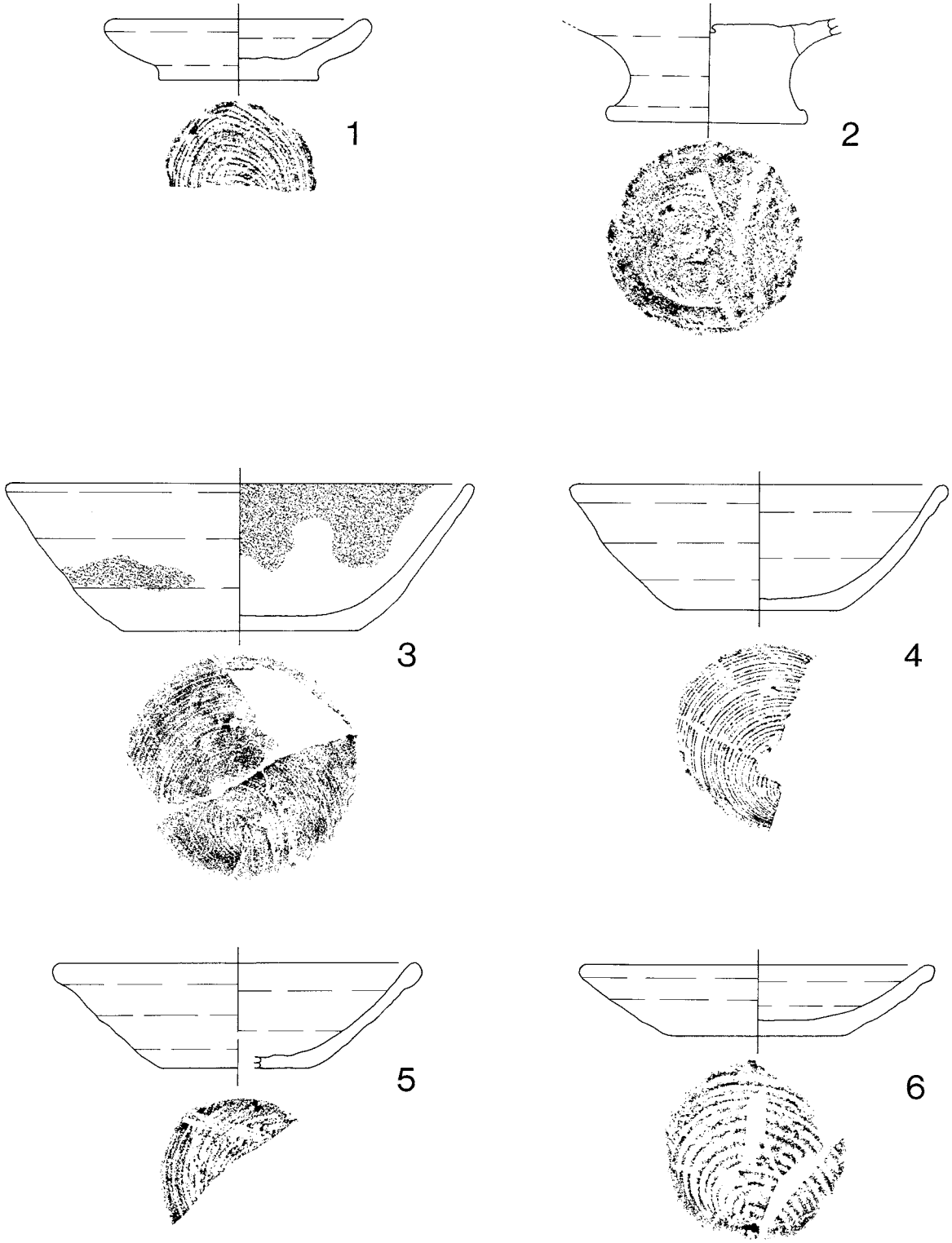
第36図　7号住居跡(1/60)



10号住居跡カマド
1 層　10YR2/2黒褐色土
2 層　10YR2/2黒褐色土に焼土粒子が混じる
3 層　10YR3/3暗褐色土
4 層　10YR3/3暗褐色土に10YR4/6褐色土粒子が混じる
5 層　10YR2/2黒褐色土に焼土粒子が多く混じる
6 層　焼土
7 層　10YR5/6黄褐色土
8 層　10YR5/6黄褐色土に焼土が混じる
9 層　10YR2/2黒褐色土に焼土粒子が混じる
10層　10YR2/2黒褐色土に焼土粒子が混じる
11層　10YR2/2黒褐色土に焼土粒子が混じる
12層　10YR5/6黄褐色土
13層　10YR2/2黒褐色土に10YR4/6褐色土粒子が混じる
14層　10YR3/3暗褐色土に10YR4/6褐色土粒子が混じる
15層　10YR2/2黒褐色土に焼土粒子が混じる
16層　10YR5/6黄褐色土
17層　10YR2/2黒褐色土に焼土粒子が混じる
18層　10YR5/6黄褐色土
19層　10YR3/3暗褐色土
20層　10YR3/3暗褐色土



第37図　10号住居跡(1/60)、カマド(1/30)



第38図　7号、10号住居跡出土遺物(1/2)

されなかった。

周溝は一部に検出されたのみである。北東壁沿いと南壁沿いにしがらみに用いられたのであろうか、細い棒状の炭化材が少量だがまとまって出土している。住居中央部でも同じ炭化材が少量検出されている。

柱穴などピットは確認されなかった。図中の小さなくぼみは浅く不定形で、地山礫の抜き取り痕と思われる。

遺物はカマド周辺と住居中央部で出土している。

10号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径・器高・底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第38図 3	15.1cm,4.8cm,7.7cm	2/3	A 4	
4	12.2cm,4.1cm,5.4cm	1/3	A 4	
5	11.9cm,3.5cm,4.8cm	1/3	A 4	
6	11.5cm,2.3cm,5.8cm	2/3	A 4	

11号住居跡（第39図、40図、45図、46図、写真図版20～21）

大きさ　3.6m×4.1m　面積　14m²

付属遺構　周溝、土坑

覆土土層　地山　しまった明黄褐色土（10YR7/6）
1層　ややしまった黒色土（10YR2/1）
2層　ややしまった黒褐色土（10YR2/2）
3層　しまりのない黒色土（10YR1.7/1）
4層　明黄褐色土（10YR7/6）に黒色土（10YR1.7/1）が若干混じる
5層　黒褐色土（10YR2/2）と明黄褐色土（10YR7/6）がまだらに混じる
6層　しまりのない黒褐色土（10YR2/3）に明黄褐色土粒子（10YR7/6）が混じる
7層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）に明黄褐色土粒子（10YR7/6）が混じる
8層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）
9層　非常に固くしまった褐灰色土（10YR4/1）、18号住居床面

調査所見

18号住居と切り合う。遺構確認時に18号住居覆土及び床面上に散在した焼土が確認され、覆土観察により11号住居覆土上に18号住居の床面と思われる固くしまった褐灰色土層がみられたことから、11号住居が先行する遺構と判断された。竪穴掘り込みは20cmほどが残る。

床面はカマド部と周溝際を除き、ほぼ全面に固くしまった貼り床が検出された。

カマドは東壁南寄りに位置する。被熱礫を含む礫と焼土、掘り込みが検出された。カマドを構築した粘土などは検出されなかった。

周溝はカマド部を除き、ほぼ全周する。周溝に堆積した覆土は住居壁際覆土と同じである。

柱穴は検出されなかった。

住居内からはピットが3基、土坑が2基確認された。1号ピット覆土は、炭、焼土粒子が混じる黒色土(7.5YR2/1)で、ピット覆土上層より土師器皿片などが出土している。2号ピットは土坑と呼ぶべき大きさであるが、黒褐色土（7.5YR2/3）に炭、焼土粒子が混じる覆土が堆積している。器形復元できないような小さな土師器片が出土している。4号ピット覆土は2号ピットと同様で、床面と同じ高さの土坑覆土上部に台石状の平石が置かれている。平石上面には磨滅、敲打痕は認められなかった。住居東壁に隣接して5号ピットが検出された。3号ピットとともに遺物も出土せず、覆土に炭、焼土粒子も混じらない。

遺物はカマド周辺の覆土中に集中して出土している。

11号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径･器高･底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第45図 1	12.0cm,4.3cm,4.6cm	ほぼ完形	A 1	
2	16.2cm	1/5	A 1	
3	11.3cm,2.1cm	1/5	A 1	
4	13.4cm,3.6cm,4.3cm	1/2	A 1	器内面上部にらせん状のミガキ痕あり
5	5.7cm	底部小片	D 3	内外面ロクロナデ整形
6	13.0cm,2.2cm,5.0cm	2/3	A 2	
7	12.9cm,2.2cm,6.7cm	完形	C 1	
8	28.0cm	口縁部小片	B 1	
9	23.9cm	口縁部小片	B 1	
10		底部小片	B 1	
11	8.8cm	底部小片	B 1	

18号住居跡（第39図、40図、写真図版24）

大きさ　不明　面積　不明

付属遺構　周溝？

調査所見

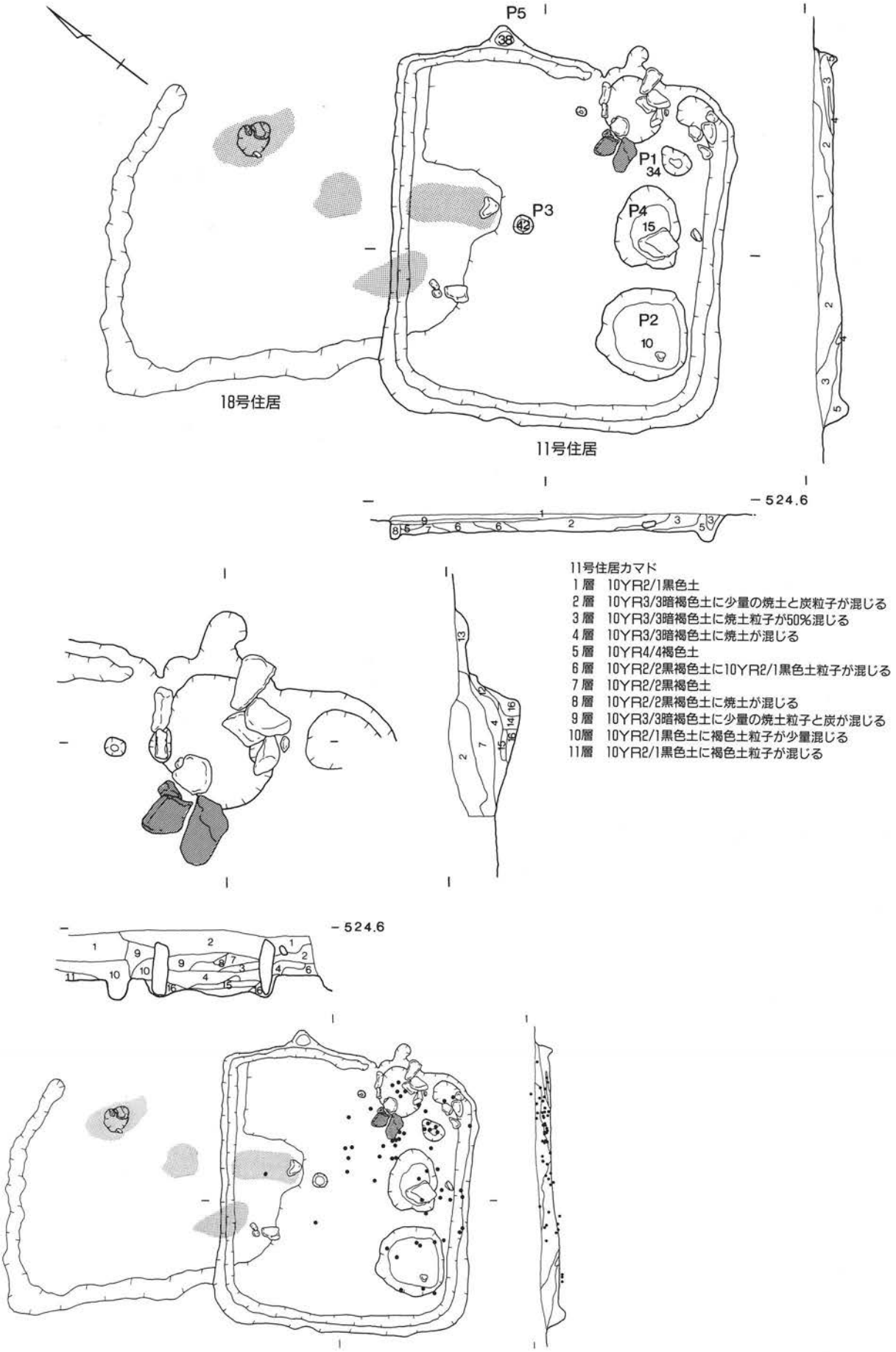
表土直下で床面が検出された。掘り込みは全く残らない。11号住居を切る。明確なプランは確認できなかったが、周溝状の浅い小溝、焼土、貼り床が検出されているため、住居と判断した。焼土の集中が４カ所で確認されたが、炭化材はごく少量である。浅い掘り込みが焼土とともに検出されているが、カマドかどうか不明である。遺物は全く出土しなかった。

12号住居跡（第41図、46図、47図、写真図版21～22）

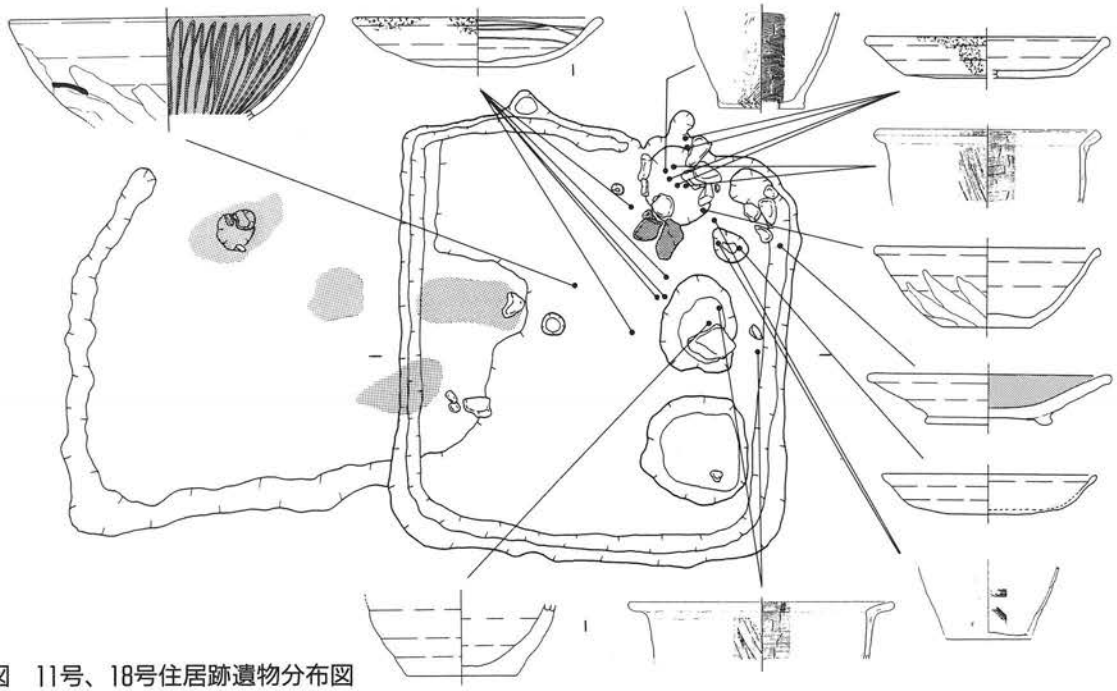
大きさ　不明　面積　不明

付属遺構　周溝？

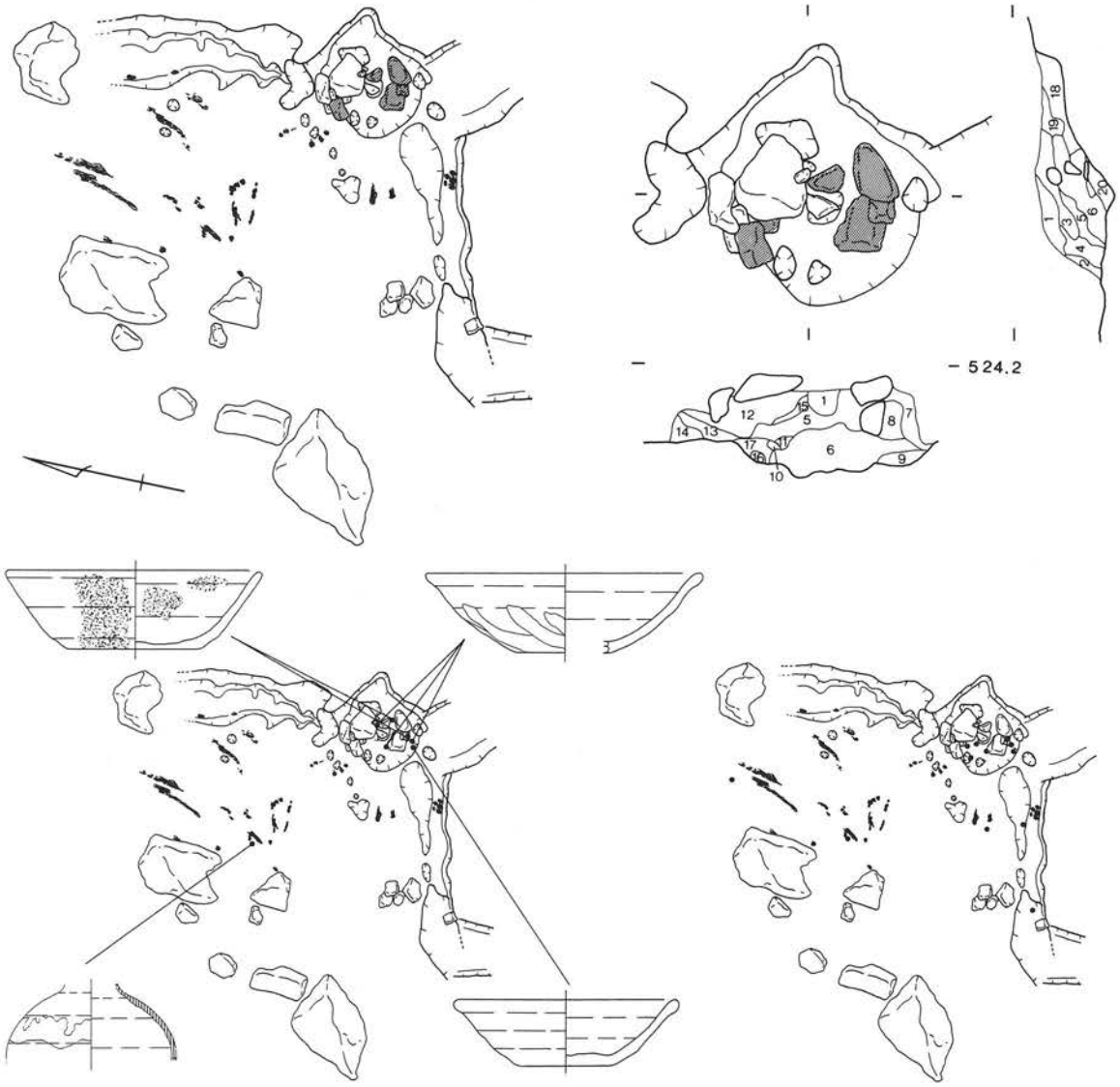
覆土土層（カマド）
1層　10YR3/2黒褐色土に少量の焼土粒子が混じる
2層　10YR3/1黒褐色土
3層　10YR3/2黒褐色土に10YR4/4褐色土粒子と焼土が30％混じる
4層　10YR3/3暗褐色土に少量の焼土粒子と炭が混じる
5層　10YR3/2黒褐色土に少量の炭が混じる
6層　10YR3/3暗褐色土に少量の焼土粒子が混じる
7層　10YR3/2黒褐色土
8層　10YR3/3暗褐色土に焼土粒子が混じる
9層　10YR4/3にぶい黄褐色土
10層　焼土
11層　10YR3/3暗褐色土に10YR5/3にぶい黄褐色土粒子が混じる
12層　10YR3/3暗褐色土
13層　10YR4/3にぶい黄褐色土
14層　10YR3/3暗褐色土に炭が少量混じる
15層　10YR4/3にぶい黄褐色土に焼土粒子が少量混じる
16層　10YR3/2黒褐色土に2.5Y6/4にぶい黄色土粒子が40％混じる
17層　2.5Y6/4にぶい黄色土
18層　10YR5/8しまりなく、粘性の弱い黄褐色土



第39図　11号、18号住居跡(1/60)、11号住居跡カマド(1/30)



第40図　11号、18号住居跡遺物分布図



第41図　12号住居跡(1/60)、カマド(1/30)

19層　10YR4/4しまりなく、粘性の弱い褐色土に焼土が少量混じる
20層　10YR4/3にぶい黄褐色土に焼土が混じる

調査所見

水田造成のため南東角を除き削平されている。2号溝状遺構に切られる。竪穴掘り込みはカマド周囲を除きほとんど残らず、覆土観察はできなかった。

固くしまった床面は確認されなかった。床面と思われる高さでなお、かなりの大きさの地山礫が突き出ている。住居空間内部に突き出ていたのは間違いない。

カマドは南東角に位置する。溝により一部を破壊されている。被熱礫を含む礫と焼土、掘り込みを検出した。粘土などは検出されなかった。

周溝と思われる溝がカマドの左右で一部確認されている。

住居床面からは建築材らしい炭化材が多量に出土した。厚手の板材状、あるいは丸太状の炭化材が多い。樹種同定結果は巻末に報告する。

遺物はカマド周辺に集中する。また、地山礫が突き出ているあたりの覆土からは鉄滓が少量だが出土している。

12号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径・器高・底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第46図12	12.4cm,3.7cm,5.3cm	1/2	A 4	
13	15.2cm	1/4	A 4	
14	14.0cm,4.3cm,7.3cm	2/3	A 4	
第47図1		肩部小片		鉱物粒子が目立たない非常にキメの細かい胎土、灰白色(7.5Y7/1)、釉調オリーブ灰色(10Y6/2)

13号住居跡（第42図、47図、写真図版23）

大きさ　4.8m×4.3m　面積　19.1m²

付属遺構　土坑、礫集積

覆土土層　地山　黄橙色土（10YR8/8）
1層　ややしまった黒褐色土（10YR2/2）に黄橙色土粒子（10YR8/8）が混じる
2層　黄橙色土（10YR8/8）
3層　黒褐色土（10YR2/2）に黄橙色土（10YR8/8）がやや大きめのブロックで混じる
4層　黒褐色土（10YR2/2）に黄橙色土粒子（10YR8/8）がやや多く混じる
5層　黒褐色土（10YR2/2）に黄橙色土粒子（10YR8/8）が多く混じる
6層　黒色土（10YR2/1）に黄橙色土粒子（10YR8/8）が混じる
7層　しまりのない黒色土（10YR2/1）に黄橙色土粒子（10YR8/8）が混じる

調査所見

竪穴掘り込みが30cmほど残る。覆土全体に炭、焼土粒子が僅かに混じる。床面上には他住居覆土にはみられなかった地山に近い土層の薄い堆積が確認されている。

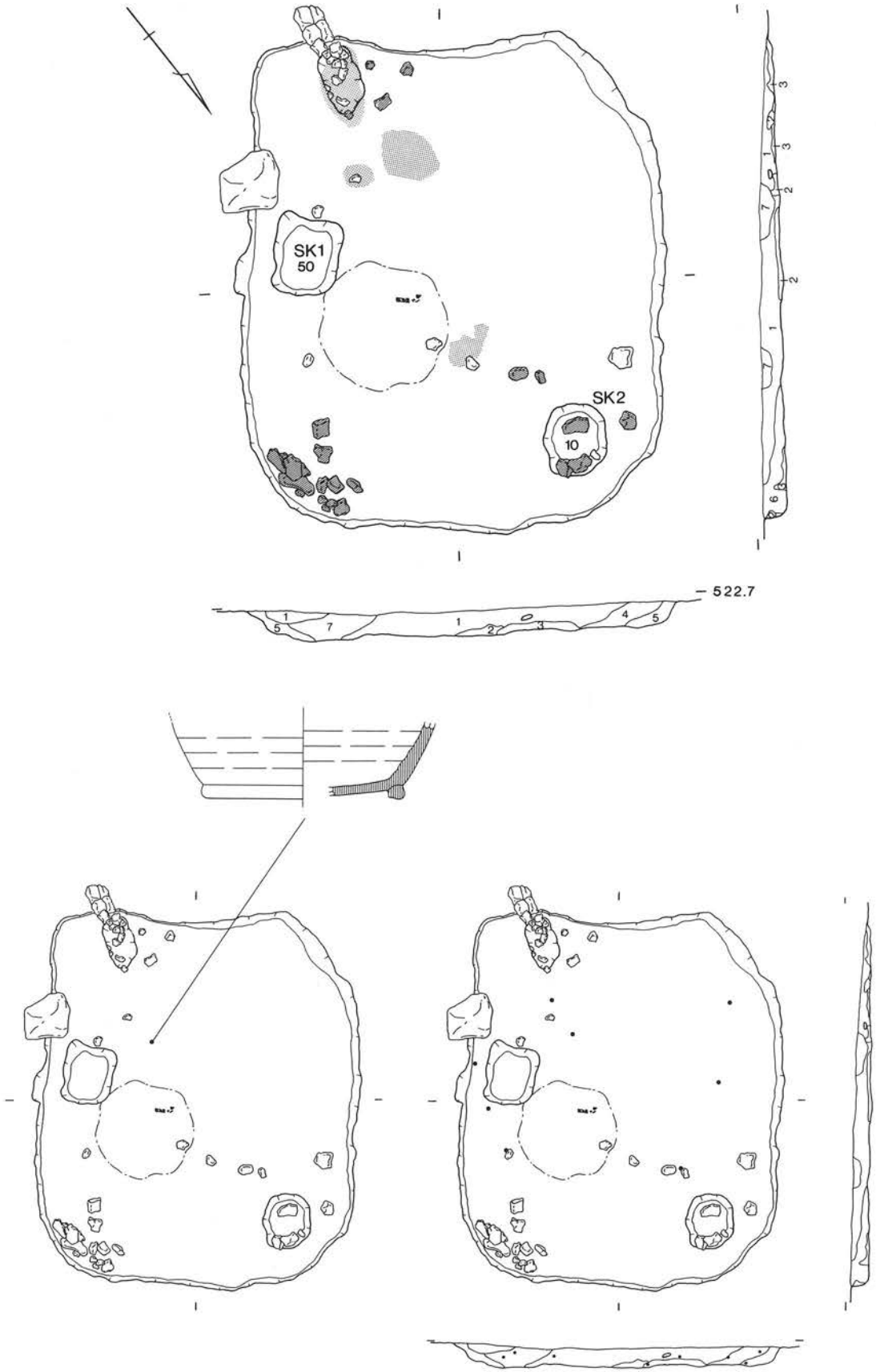
床面はほぼ全面に固くしまった貼り床が良好に検出され、特に固い箇所が確認された（図中一点鎖線に囲まれた範囲）。3カ所で焼土の広がりが検出されている。

カマドは南東角に位置する。若干の被熱礫と掘り込み、焼土が検出されている。ちょうどカマドの位置に地山礫が突き出ており、カマドはこの礫を穿って構築されている。粘土等は検出されなかった。

周溝は全く確認されなかった。

柱穴は検出されなかった。

土坑が2基住居内で検出された。1号土坑覆土は炭、焼土粒子が僅かに混じる黒褐色土（7.5YR2/2）で、黄褐



第42図　13号住居跡(1/60)

色土粒子が若干混じる。遺物は出土していない。２号土坑覆土は黄褐色土ブロックの混じる黒褐色土で、焼土粒子は混じらない。僅かの炭粒子とともに被熱礫が数個出土している。

遺物は灰釉甕底部片が１点と筒状の土製品１点が出土した。覆土中からは鉄滓が出土しているほか、形状不明の小さな鉄製品が数点出土している。

北東角には被熱痕のある、もしくは煤の付着した礫の集中がみられる。住居に関連する礫か、別遺構から投棄された礫かは不明である。礫の集積下からは僅かだが焼土ブロックも検出された。鉄滓、鉄製品の出土、特にしまった床面などとあわせて考えると、本住居が鍛冶に関連した遺構である可能性もあろうか。

13号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径･器高･底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第47図２		底部小片		鉱物粒子が目立たないキメの細かい胎土、灰色(7.5Y6/1)
3			A４	羽口のような強い被熱痕は全く観察されない。小型土器か？

14号住居跡（第43図、47図、写真図版23）

大きさ　7.8m×5.6～6.9m　面積　46.224m²

付属遺構　なし

調査所見

数cm程度の掘り込みを残して検出された。南西部は水田により削平され、プランを確認できない。確認当初は平安時代の大型竪穴住居かと思い、調査を始めた。南壁はほんの２cm程度の立ち上がりが確認できる程度であったが、ほぼ長方形の竪穴形状になるものと思われる。

覆土はしまりのない黒褐色土であったが、掘り込みが浅いため覆土断面の観察はできなかった。

床面は全面にわたって固く踏みしめられていた。北東の張り出し部の床面は地山そのままであった。

カマドと判断し得る遺構は検出されなかった。被熱した礫、焼土粒子、炭粒子、炭化材なども全く検出されていない。北東張り出し部の根本あたりには人頭大ほどの礫20個ほどが床面上で集中して出土したが、被熱痕、煤付着のあるものは皆無であった。

周溝は北東角にそれらしい溝状の落ち込みが検出されたが、部分的である。

柱穴らしいピット群が住居竪穴と思われる長方形プランの中で検出されている。遺構周辺からもピットが多数検出されているが、覆土観察から本遺構と関連するピットを特定することはできなかった。

遺物は住居中央から僅かに出土したのみである。また、竪穴覆土からは鉄滓、小さな形状不明の鉄製品断片が僅かだが、出土している。特に北東張り出し部に鉄滓が多かった。

14号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径･器高･底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第47図４	6.8cm	底部小片		鉱物粒子が目立たない非常にキメの粗い胎土、灰白色(7.5Y7/1)、釉調オリーブ灰色(10Y6/2)
5	30.8cm	口縁部小片		石英、長石粒子が多く混じるキメの粗い胎土、灰白色(7.5Y7/1)

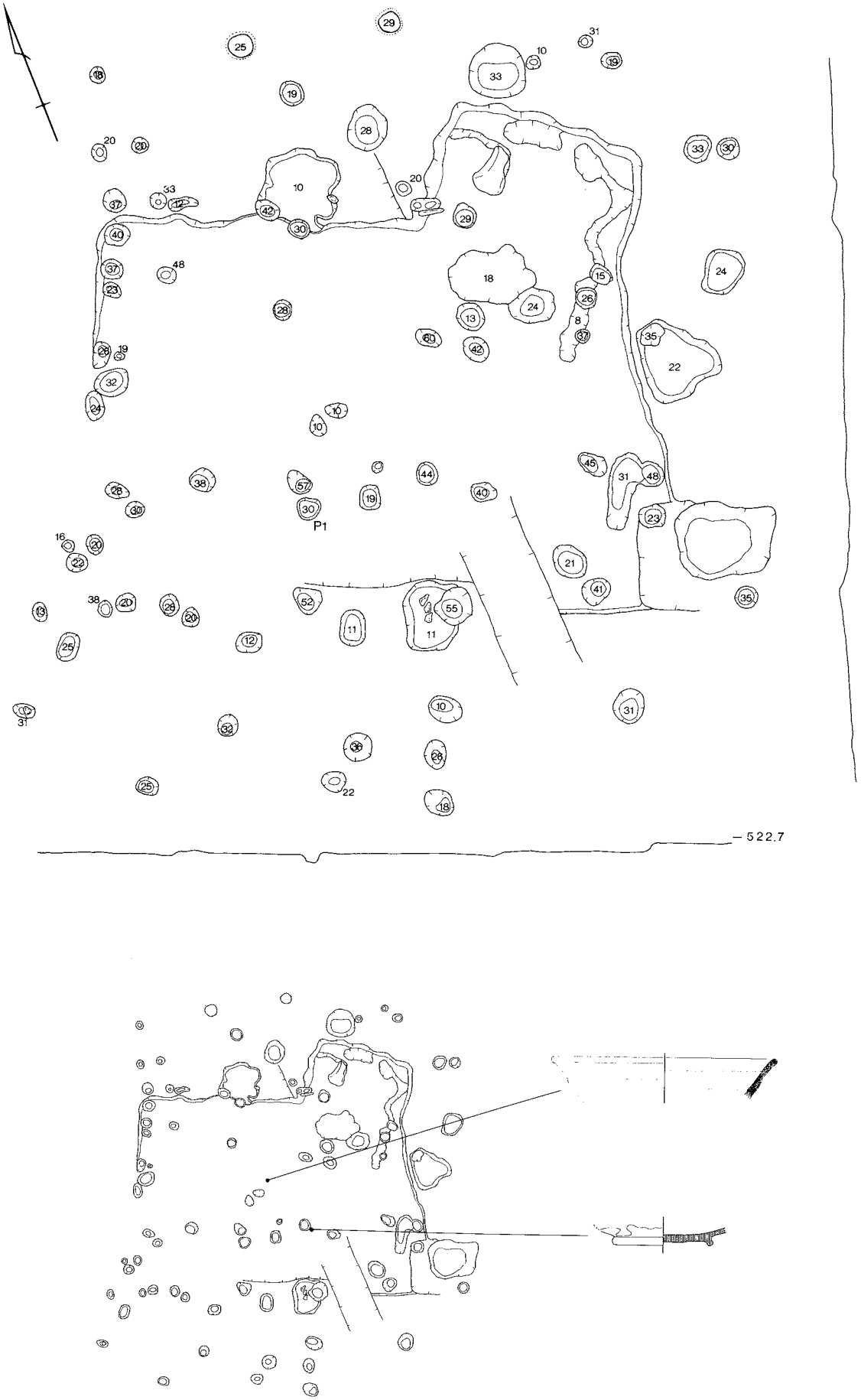
16号住居跡（第44図、47図、48図、写真図版24）

大きさ　2.4m×3.8m　面積　9.1m²（竪穴部のみ）

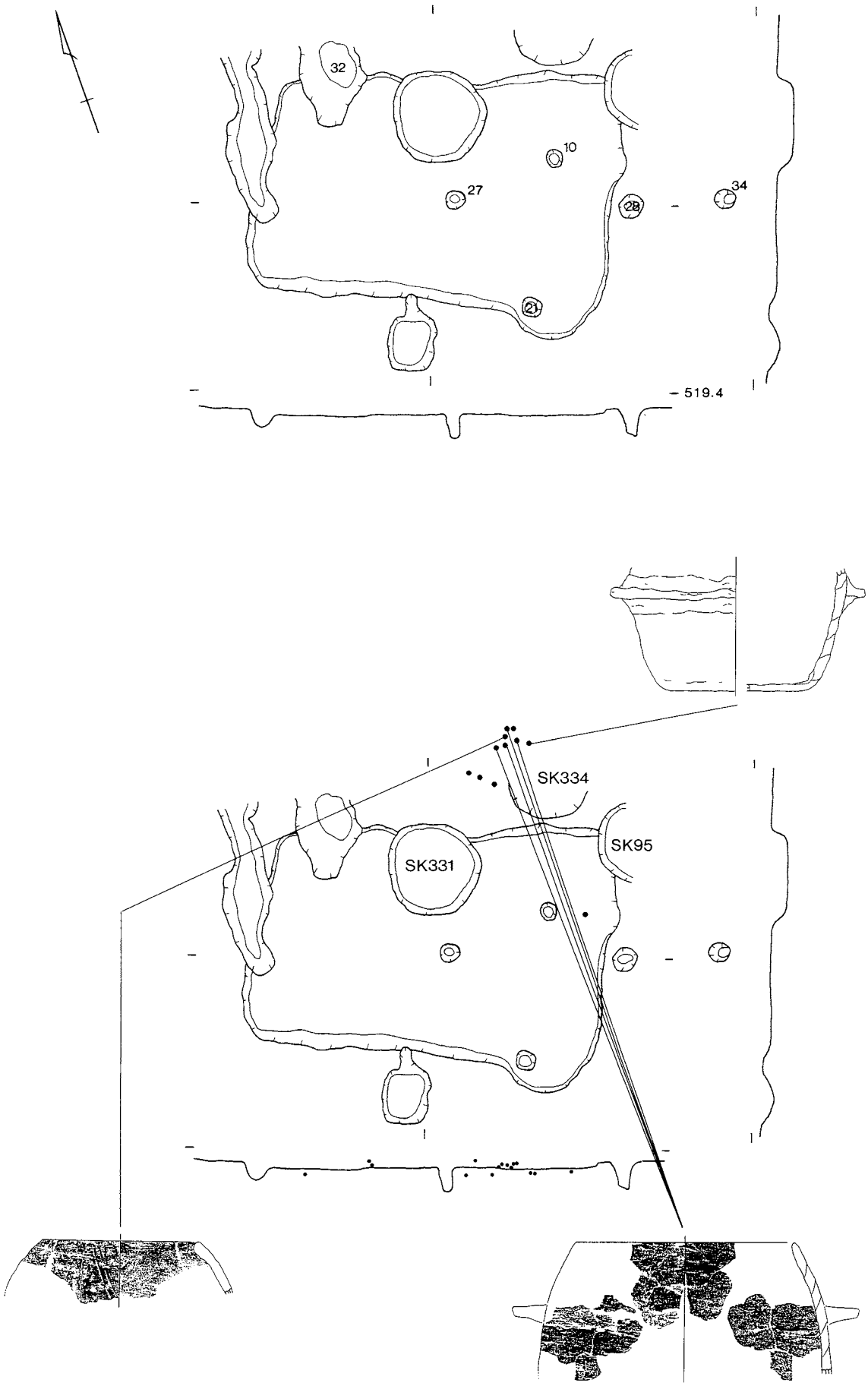
付属遺構　なし

調査所見

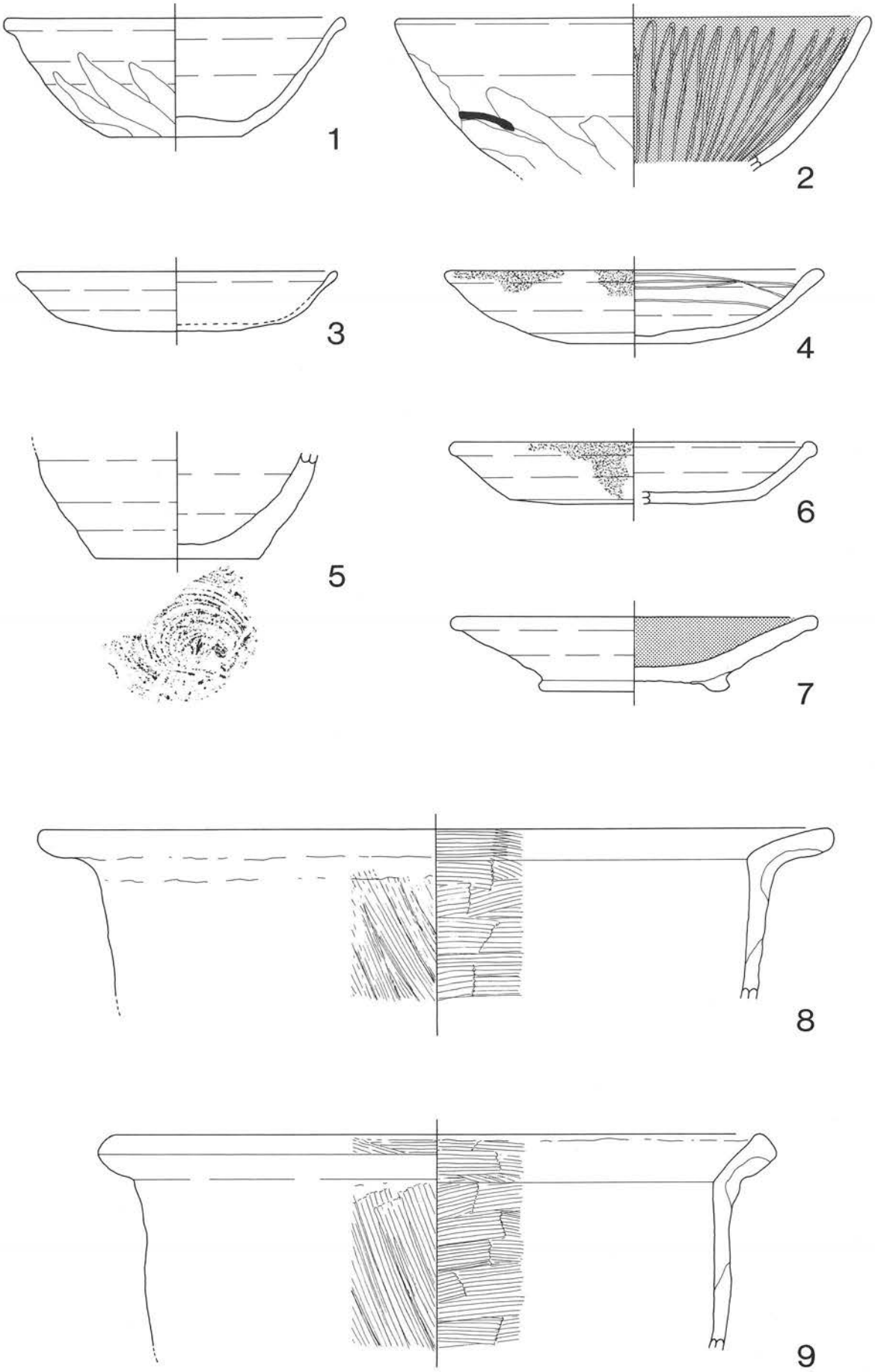
竪穴掘り込みは８cmほどしか残らず、覆土断面の観察はできなかった。覆土はおおむねしまりのない黒褐色土



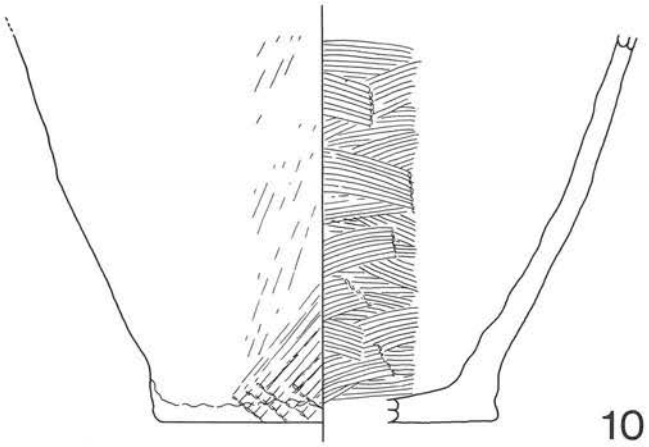
第43図　14号住居跡(1/80)、遺物分布図

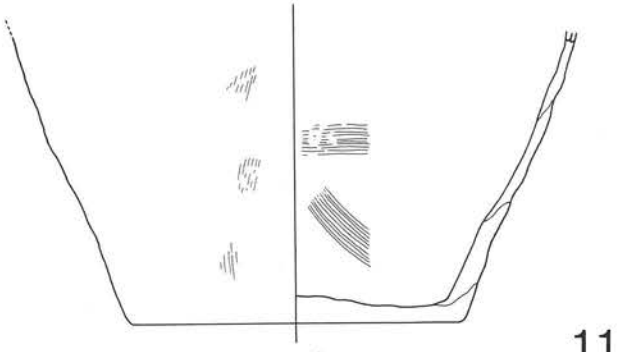


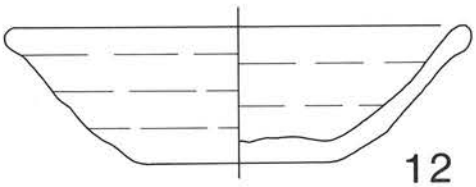
第44図　16号住居跡(1/60)、遺物分布図

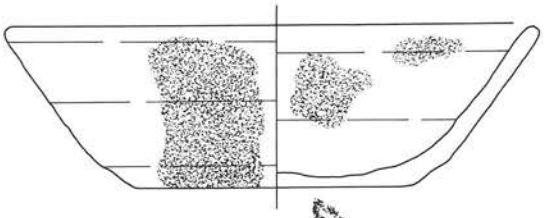


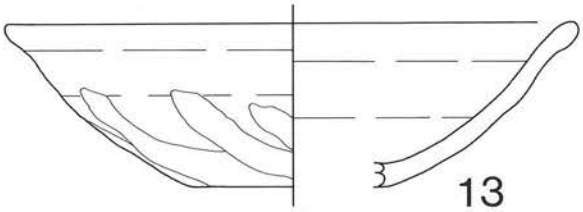
第45図　11号住居跡出土遺物(1/2)



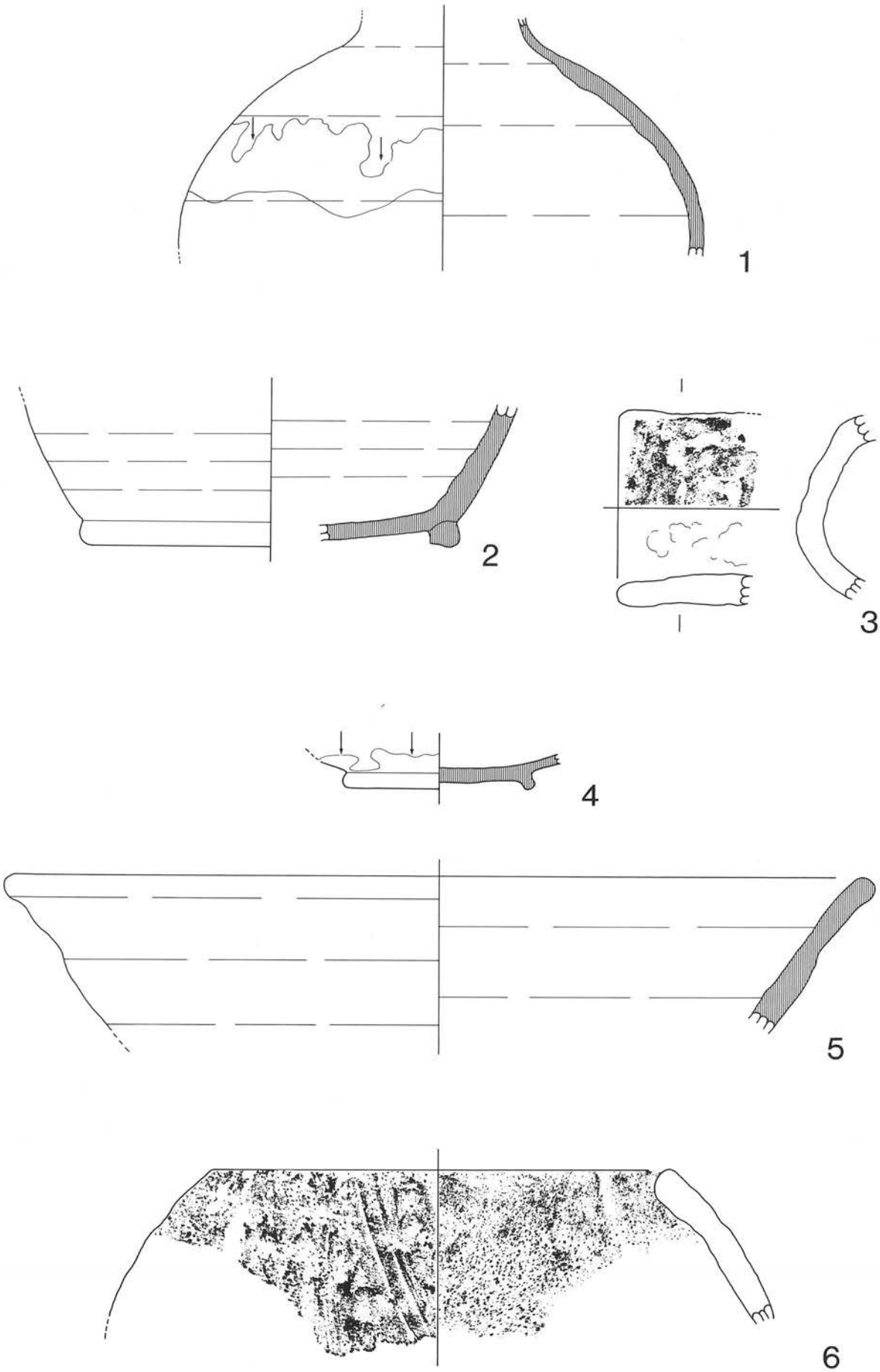




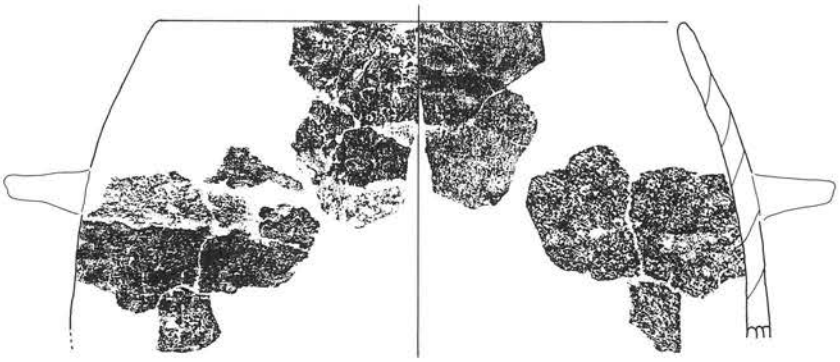




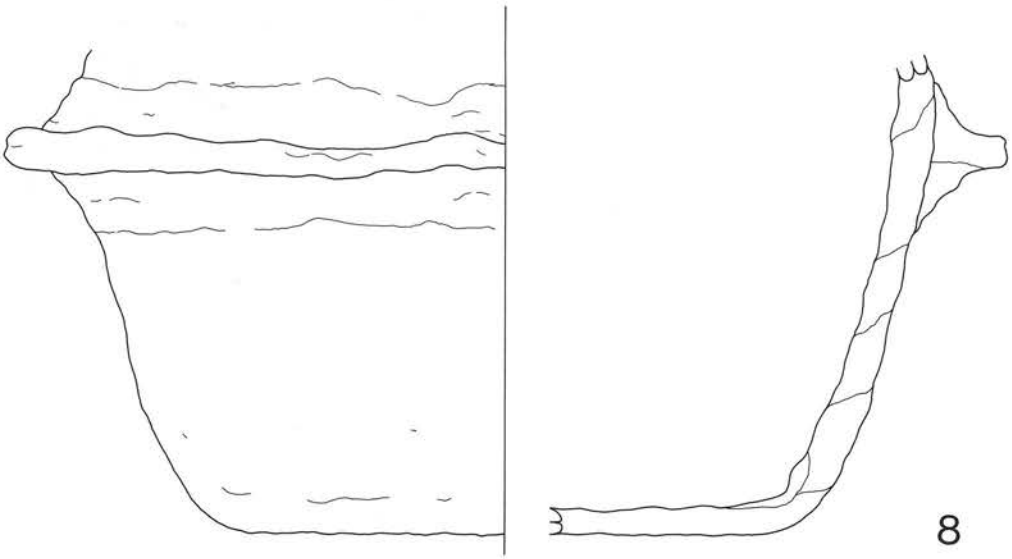
第46図　11号、12号住居跡出土遺物(1/2)



第47図　12号～16号住居跡出土遺物(1/2)



7



8

第48図　16号住居跡出土遺物(1/2)

である。第２土坑群中に位置し、しかも覆土色が類似するため、プラン確認も難しく、95号、331号土坑との切り合い関係もとらえられなかった。

調査の結果、竪穴は小型の長方形プランとなったが、遺構確認面ではさらに北東側にも黒褐色土の堆積がみられた。遺物が竪穴北東側に集中するため、竪穴とは段差をもった同一遺構の空間が北東側に延びていた可能性もあると思われる。

竪穴内では固くしまった床面がほぼ全面にわたって検出された。北東側の遺物が集中する部分では固くしまった床面は検出されなかった。

竪穴内で、カマドと判断される遺構は検出されなかったが、第48図８の羽釜が出土した地点には、焼土粒子を含んだ暗褐色土が堆積した、深さ20cmほどの掘り込みが確認された（第50図土坑配置図中の334号土坑北側に接した小さなピットがそれである）。

周溝は検出されなかった。

竪穴内にピットが３基検出された。いずれも床面を掘り抜いてあり、本遺構にともなうか、あるいは遺構よりも新しいものと考える。

遺物は先述したとおり、竪穴北東側の334号土坑に接した、焼土粒子を含むピット周辺から出土している。竪穴東壁沿いに、ごく小さな土師器片１点と中世のものと思われる素焼きの土器口縁部の小器片が１点出土している。

本遺構は住居としたが、むしろ後述する１号竪穴遺構と共通する性格の遺構と考えられる。

16号住居出土遺物表

図版番号	大きさ(口径･器高･底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第47図６	16.3cm	口縁部小片		長石、石英、赤色粒子が混じるキメの粗いざらついた胎土、灰白色(10YR8/1)
第48図７	26.6cm	小片		長石、石英、赤色粒子が混じるキメの粗いざらついた胎土、灰白色(10YR8/1)
8		1/4		長石、石英、赤色粒子、小石が混じるキメの粗いざらついた胎土、にぶい橙色(7.5YR7/4)

土坑（第49図～55図）

竪穴遺構２基と土坑356基が検出されている。土坑は４群のまとまりを認められ、それぞれ第１～４号土坑群とした。第１、第２土坑群は不規則に群集するかにみえるのに対して、第３、第４土坑群は列状に配されている。２基の竪穴遺構が第３土坑群中で検出され、先述の16号住居は第２土坑群中で検出されている。

これらの遺構は時期を確定する遺物に乏しく、平安時代であると断定できないが、僅かな遺物よりおおむね平安時代末から中世初頭頃と考え、本章で報告する。なお、土坑は一部を除き、調査、観察表にまとめ、実測図の提示は省略する。

１号竪穴遺構（第52図、写真図版26）

大きさ　2.72m×2.88m　面積　7.1m²

付属遺構　なし

調査所見

遺構確認当初は第３土坑群に接しているため、土坑集中部と考え、225号土坑としたが、調査の結果、土坑ではないと判断し、１号竪穴遺構とした。竪穴は深さ10cmほどが残る。覆土はしまりのない黒褐色土である。

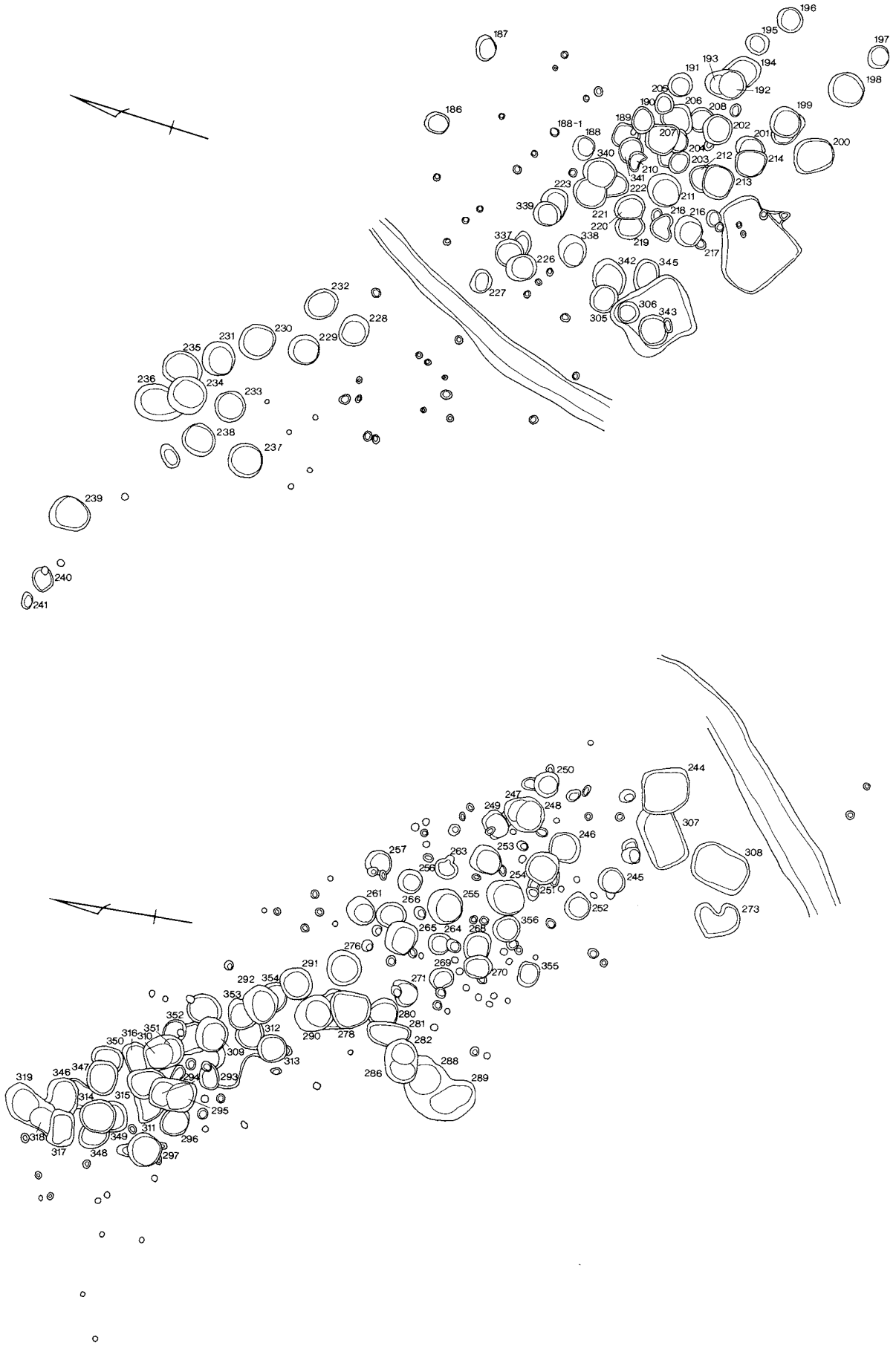
床面はほぼ全面に固くしまっている。遺構北西側が２cmほど高く段差がついている。

カマドと判断されるような遺構は検出されなかった。

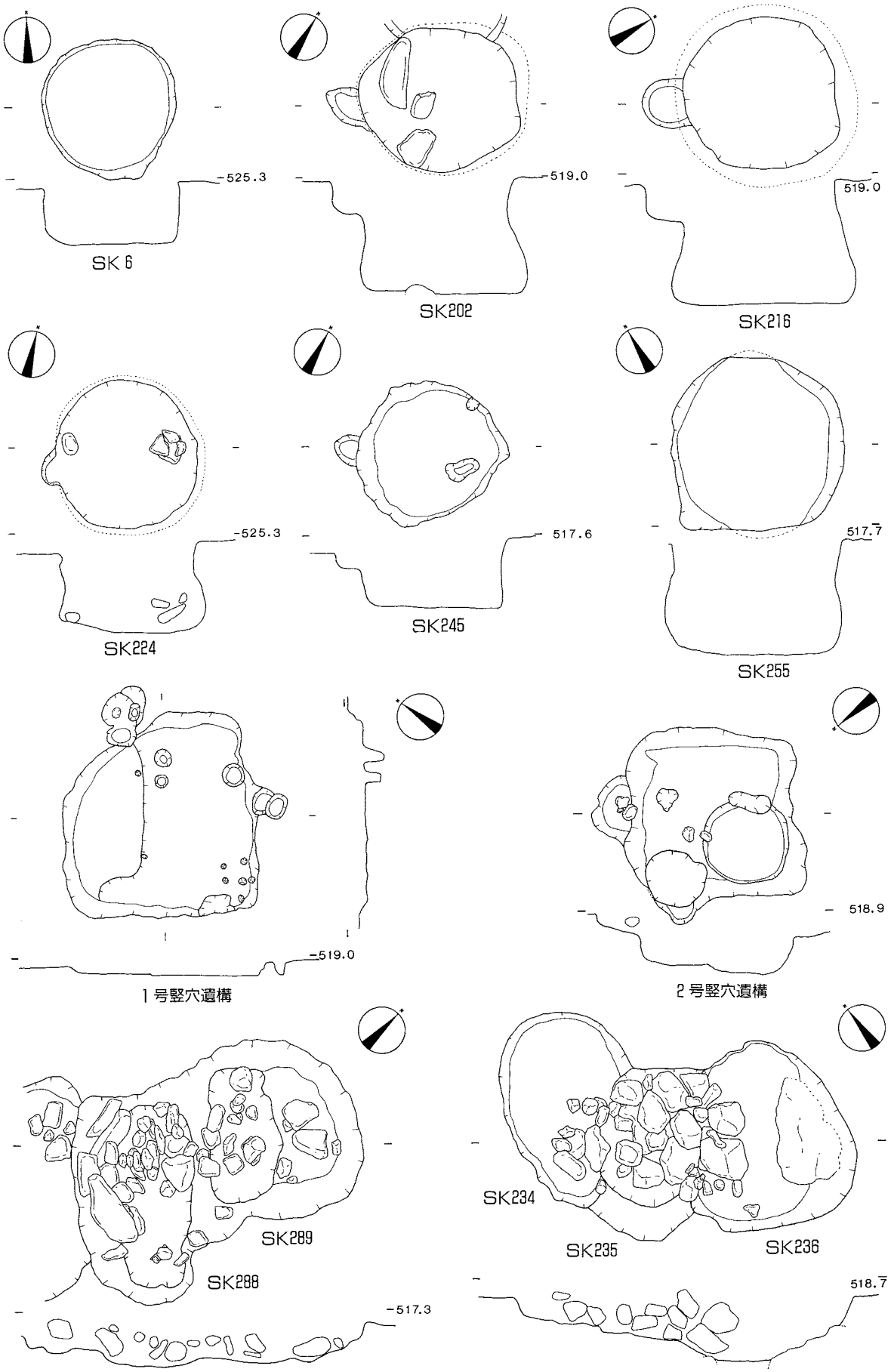
周溝は検出されなかった。

第49図　土坑位置図(1/200)

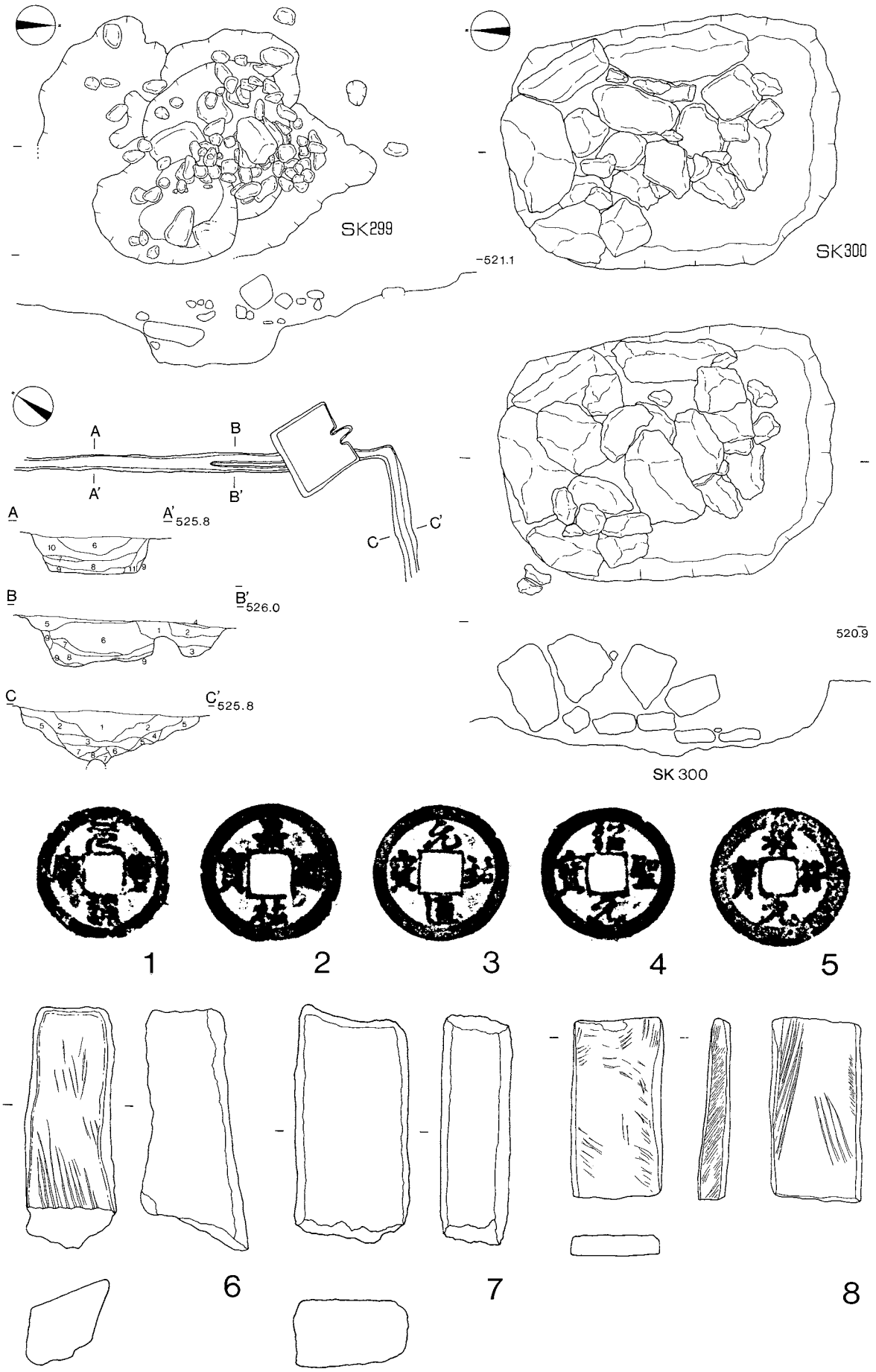
第50図　第１土坑群・第２土坑群(1/200)



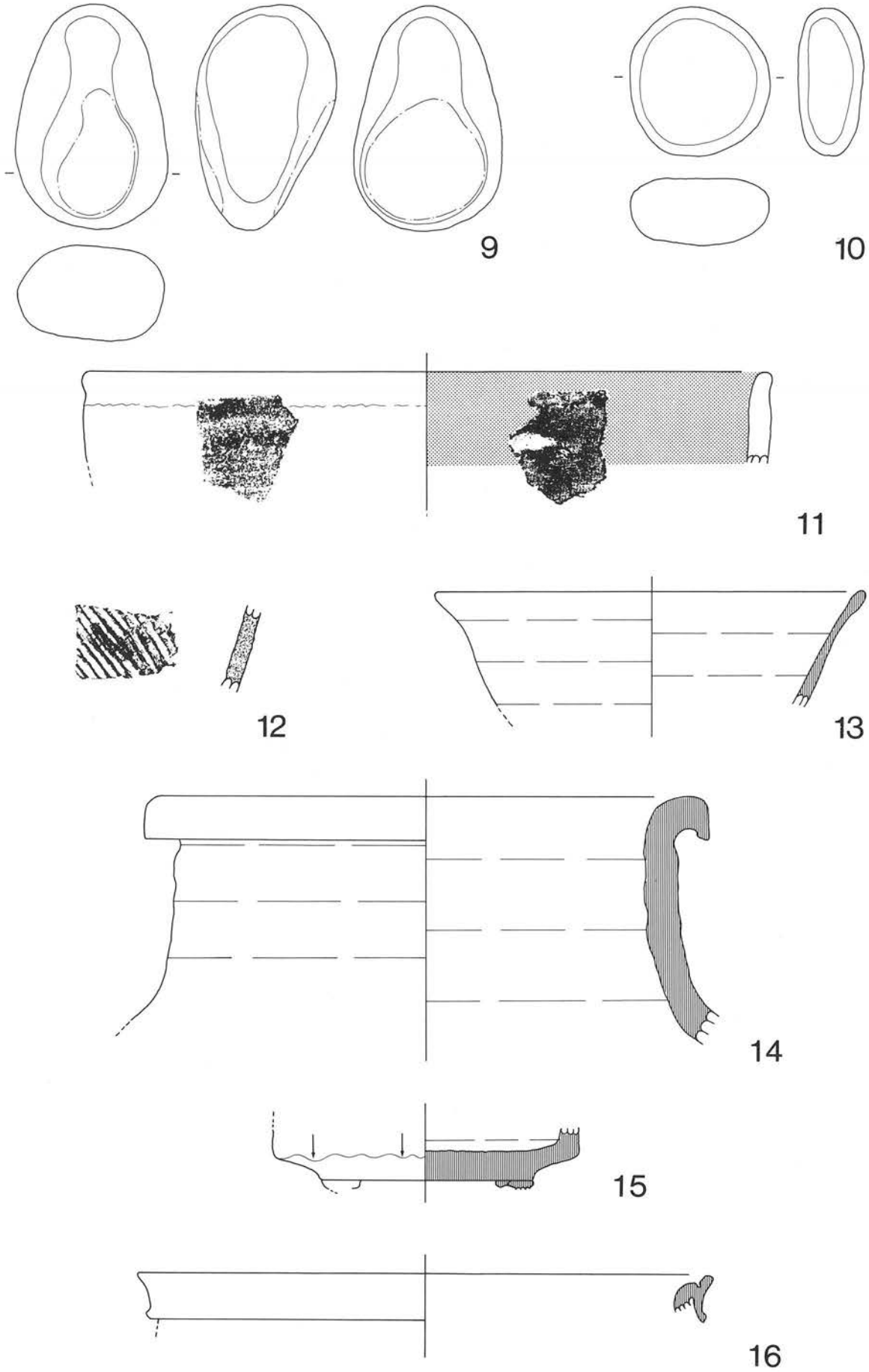
第51図　第３土坑群・第４土坑群(1/200)



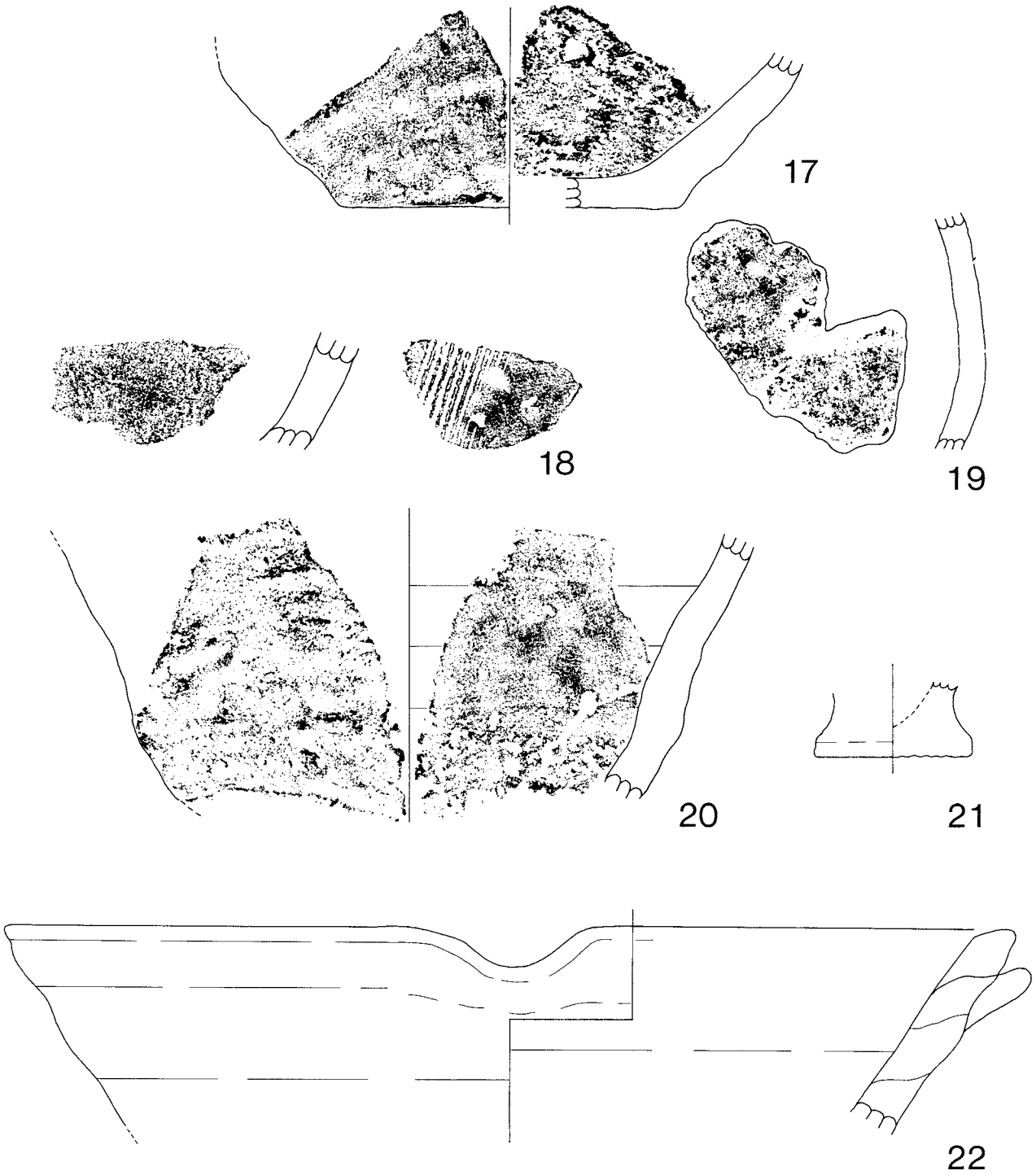
第52図　土坑(1/40)・竪穴遺構(1/80)



第53図　土坑(1/40)・溝(1/400、断面図1/40)及び出土遺物(1～5　1/1、6～8　1/2)



第54図　土坑出土遺物(1/2、16のみ1/4)



第55図　土坑出土遺物・遺構外出土遺物(1/2)

竪穴内からはピットが数基検出されている。いずれも床面を掘り抜いているため、遺構にともなうか、遺構より新しいと思われる。

遺構中央部の、覆土中ほぼ確認面の高さで古銭が３枚出土している（第53図２～４）。「嘉祐通宝」「元祐通宝」「紹聖元宝」と読める。遺構南東角の覆土からはモモと思われる炭化種子が30個ほど出土している。炭化材もごく少量出土している。その他、覆土に流れ込んだと思われるごく小さな土器片が６点出土している。

モモと思われる炭化種子の同定結果については巻末に報告する。

２号竪穴遺構（第52図、写真図版26）

大きさ　2.44m×2.36m　底面積　5.8m²

調査所見

遺構確認当初、土坑と考え344号土坑としたが、調査の結果２号竪穴遺構とした。覆土はしまりのない黒褐色土で分層はできなかった。炭化材小片が多く混じる。

１号竪穴遺構と異なり、床面状の固く踏みしめられた面は検出されなかった。

307号土坑、343号土坑との切り合いは不明である。

遺物は全く出土しなかった。竪穴遺構としたが、１号土坑とは性格が大きく異なると考えられる。

土坑調査、観察表

土坑形状の別は次のとおりとした。

1　土坑壁が垂直に立ち上がるもの

2　土坑壁が袋状に広がるもの

3　土坑壁が斜めに不規則に立ち上がり、土坑というよりくぼみ状に近いもの

番号	長径・(短径)・深さ (cm、空欄は記録なし、不明)	形状	覆　　土(空欄は記録なし、不明)	出土遺物(空欄は遺物なし)・所　見
2	75　　9	1	暗褐色土10YR3/4	
3	70, 65,14	3	黒褐色土10YR2/3に褐色土粒子(10YR4/6)が均一に混じる	
4	80,　20	3	黒褐色土(10YR2/3)	
5	80, 75,11	3	黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色土粒子が混じる	土師器片２点
6	85　43	1	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色土粒子(10YR5/6)と焼土粒子が混じる	第52図
7	130　3	1	黒褐色土(10YR2/2)に炭粒子が混じる	土師質土器片１点
8	100　5	1	黒褐色土(10YR2/3)	
9	150　5	1	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色土粒子、焼土粒子が混じる	内黒土師器片1点、土師器片16点
10	115,100,12	1	黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色土粒子が混じる	内黒土師器片1点
11	76, 67,52	3	黒褐色土(10YR2/3)	
12	100, 68, 9	3	黒色土(10YR2/1)に炭粒子が僅かに混じる	内黒土師器片1点
13	48　15	1	黒褐色土(10YR2/3)	
14	50　15	3	黒褐色土(10YR2/2)	
15	63, 50,13	3	黒褐色土(10YR2/2)	
16	90　20	3	黒褐色土(10YR2/3)	須恵器片1点、土師質椀片1点(第54図11、12)
17	60　15	3	黒褐色土(10YR2/3)に焼土粒子が僅かに混じる	内黒土師器片1点
18	95　51	1	褐色土(7.5YR4/6)	
19	110　56	1	黒色土(10YR2/1)に焼土粒子が僅かに混じる	
20	62　16	1	黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色土粒子が均一に混じる	
21	80, 75, 8	1	黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色土粒子が均一に混じる	
22	100, 90,40	1	黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色土粒子が均一に混じる	

23	90, 84,23	1	暗褐色土(7.5YR3/4)に炭、焼土粒子が混じる	土師器片1点、灰釉椀片1点
24	55 10	1	暗褐色土(7.5YR3/4)に黄褐色土粒子が混じる	
25	64, 54, 8	1	暗褐色土(7.5YR3/4)に炭、焼土粒子が僅かに混じる	
26	61 8	1	暗褐色土(7.5YR3/4)に炭、焼土粒子が僅かに混じる	
27	130,105,13	1	暗褐色土(7.5YR3/3)	
28	54 12	3	暗褐色土(7.5YR3/3)に小石、黄褐色土粒子が僅かに混じる	
29	58 13	3	褐色土(7.5YR4/4)に炭、焼土粒子が僅かに混じる	SK28を切る
30	90, 80,30	1		土師器小片3点、砥石1点(第53図6)
31	80 10	3	黒褐色土(10YR2/3)に炭、焼土粒子、黄褐色土粒子が僅かに混じる	
32	90, 70,15	1	黒褐色土(7.5YR2/2)に焼土粒子が僅かに混じる	
33	87, 76,23	3	暗褐色土(7.5YR2/3)に黄褐色土粒子が均一に混じる 炭、焼土粒子が僅かに混じる	
34	72, 60,15	3	黒褐色土(7.5YR2/2)に炭、焼土粒子、黄褐色土粒子が僅かに混じる	
35	62, 58,13	3	黒褐色土(10YR2/2)に炭粒子、黄褐色土粒子が僅かに混じる	黒色土師器片1点
36	60, 55,12	1	黒褐色土(10YR2/2)に炭粒子、黄褐色土粒子が僅かに混じる	
37	65, 63,16	3	暗褐色土(7.5YR2/3)に炭、黄褐色土粒子が僅かに混じる	
38	小ピット	?	黒褐色土(10YR2/3)に黄褐色土粒子が均一に混じる 炭粒子が僅かに混じる	
39	48, 40,23	1	暗褐色土(7.5YR3/3)に黄褐色土粒子、炭粒子が僅かに混じる	SK46に切られる
40	40 10	3	暗褐色土(7.5YR3/3)に黄褐色土粒子、炭、焼土粒子が均一に混じる	
41	130, 50,25	3	暗褐色土(7.5YR3/3)に黄褐色土粒子が均一に混じる 炭、焼土粒子が多く混じる	覆土上面に焼土あり
42	90, 75,25	3	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色土粒子が均一に混じる 炭、焼土粒子が僅かに混じる	
43	60, 46,26	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色土粒子、炭、焼土粒子が僅かに混じる	
44	53 16	3	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色土粒子が均一に混じる	
45	小ピット	?	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄褐色土粒子が均一に混じる 炭、焼土粒子が僅かに混じる	
46	70 20	3	暗褐色土(7.5YR3/3)に黄褐色土粒子が均一に混じる 炭、焼土粒子が僅かに混じる	SK39を切る
48		1	黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色土粒子(7.5YR4/6)が混じる	SK49、50に切られる
49	98 46	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色土粒子(7.5YR4/6)が多く混じる	SK48、50を切る
50	102 33	1	黒褐色土(7.5YR2/2)に褐色土粒子(7.5YR4/6)、炭、焼土粒子が僅かに混じる	
51	複数土坑か	1	黒褐色土(10YR2/3)に褐色土(10YR4/6)が僅かに混じる	SK54、55に切られる
52	106 26	1	黒褐色土(7.5YR2/2)に褐色土粒子(7.5YR4/6)が僅かに混じる	SK53を切る
53	115 16	1	黒褐色土(10YR2/3)に褐色土(7.5YR4/6)が僅かに混じる	
54	91 49	1	黒褐色土(10YR2/2)に褐色土(10YR4/6)が僅かに混じる	SK53を切る、SK55に切られる
55	118 52	1	黒褐色土(10YR2/3)に褐色土(10YR4/6)が僅かに混じる	土師器小片1点、「元豊通宝」1点、SK50、54を切る
56	117 75	1	暗褐色土(7.5YR3/3)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が僅かに混じる	SK57に切られる、SK85を切る
58	95 35	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が混じる	土師質土器片1点(SK61出土遺物と接合)
59	105 23	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色土粒子(7.5YR4/6)が僅かに混じる	SK63、64を切る
60	土坑2基が複合？	1	黒褐色土(7.5YR3/2)、黒褐色土(7.5YR2/2)	
61	113 52	1	黒褐色土(7.5YR3/1)に褐灰色土粒子(7.5YR4/1)が僅かに混じる	土師質土器片1点(SK58遺物と接合)SK60、63を切る
62	123 54	1	暗褐色土(7.5YR3/3)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が僅かに混じる	
63		1	暗褐色土(7.5YR3/1)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が僅かに混じる	
64-1	104 14	1	暗褐色土(7.5YR3/1)	SK64Bと切り合う
64-2	90 51	1	暗褐色土(7.5YR3/1)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が僅かに混じる	SK64Aと切り合う
65	124 25	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が僅かに混じる	SK66、130に切られる
66	121 37	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に褐色土粒子(7.5YR4/6)が僅かに混じる	SK62、65、67、68を切る
67	114 40	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土(7.5YR5/6)の大粒粒子が混じる	SK66、68に切られる
68		1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が僅かに混じる	SK66、68に切られる
69	98 32	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が僅かに混じる	灰釉椀片(第54図13)、SK63を切る、SK74に切られる
70	111 48	1		
71	114 30	1		
73	118 22	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)、炭、焼土粒子が僅かに混じる	SK74、77を切る
74	111 42	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が僅かに混じる	SK69、73に切られる

75	113 32	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土粒子(7.5YR5/6)が混じる	
76		1		
77	116 34	1		
79	112 29	1		SK77に切られる
80	124 19	1		SK77、79に切られる
81		1		
82	111 49	1		SK91と切り合う
83	107 42	1		須恵器片1点、SK84に切られる
84	104 45	1		SK83を切る
85	121 72	1		SK56を切る
86	104 29	1		土師質土器片1点
87	118 40	1		
88	125 59	1		土師質土器片2点
89	145 46	1		常滑焼甕片1点(第54図14)、土坑2基が複合？
90	47	1		
91	113 51	1		SK82を切る
92		1		
94	123 38	1		土師質土器片1点
95	93 40	1		16号住居を切る
96	100, 90,19	1		
97	90 52	1		
98	118,112,44	1		
99	53 30	3		
102-1		3		
103	120 13	1		
106	86, 84,28	3		
107	88, 65,13	1	暗褐色土(7.5YR3/3)に明褐色土(7.5YR5/6)が僅かに混じる	付近に焼土あり
109	108,100,35	1	暗褐色土(7.5YR3/3)に明褐色土(7.5YR5/6)が僅かに混じる	
110	100, 90, 8	1	暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色土(10YR5/6)ブロックが混じる	
115	93 28	1		
116	70, 65, 8	1		
117	116,110,42	2		
118	70 18	3		
119	93 50	1		
122	108, 90,23	3		
123	126,125,25	1		
125	110 42	3		
126	80, 70,48	1		
127	80, 55,42	3		
131	75, 45,32	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)と焼土粒子が僅かに混じる	
132	80 5	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)が僅かに混じる	SK133、134、140Bを切る
133	80 5	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)と焼土粒子が僅かに混じる	SK132に切られる、SK134を切る
134	100 5	1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)ブロックが混じる	
135-1		1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)ブロックが混じる　炭粒子が僅かに混じる	
135-2		1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)ブロックが多く混じる	
136		1	黒色土(7.5YR1.7/1)に黄橙色土(10YR8/6)ブロックが多く混じる 焼土粒子が僅かに混じる	SK137、138に切られる
137-1		1	黒色土(7.5YR1.7/1)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が多く混じる	SK135-2、136、138を切る、SK137-2に切られる
137-2		1	黒褐色土(7.5YR2/2)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が多く混じる	SK135-2,137-1を切る
138		1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が混じる　焼土粒子が僅かに混じる	SK139-1に切られ、SK139-2を切る
139-1		1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)が混じる	SK138、139-2を切る

139-2		1	暗褐色土(7.5YR3/3)に黄橙色土(10YR8/6)が混じる	SK138、139-1に切られる
140-1		1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)と焼土粒子が僅かに混じる	SK140-2、141を切る、SK142に切られる
140-2		1	黒褐色土(10YR2/2)に黄橙色土(10YR8/6)が僅かに混じる	SK132、140-1、141に切られる
141		1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)ブロックが多く混じる	SK140-1、141に切られる、SK140-2を切る
142		2	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる	SK140、141、147-1、2を切る
143-1		1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる	SK143-2、147を切る
143-2		1	暗褐色土(7.5YR3/3)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる	
144	110　5	1	黒褐色土(10YR2/2)に黄橙色土(10YR8/6)が僅かに混じる　炭、焼土粒子が僅かに混じる	
145	100　5	1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる　炭粒子が僅かに混じる	SK144を切る、SK146に切られる
146	100　5	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる　炭粒子が僅かに混じる	
147-1		1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる　焼土粒子が僅かに混じる	SK147-2を切る、SK142、143に切られる
147-2		1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる	SK141、142、147-1に切られる
148		1	暗褐色土(7.5YR3/3)に黄橙色土(10YR8/6)が僅かに混じる	
149	77, 74,14	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる　焼土粒子が僅かに混じる	
150	75　20	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる	
151		1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土(7.5YR5/6)粒子が混じる	
152		1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる	
153	66, 55,35	1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土(7.5YR5/6)粒子が僅かに混じる	
154		1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる	
155	2基土坑複合か	1	黒褐色土(10YR2/3)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる　焼土粒子が僅かに混じる	SK154、156に切られる
156		1	黒褐色土(7.5YR2/2)に明褐色土(7.5YR5/6)粒子が混じる	SK155を切る
157		1	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色土(7.5YR5/6)粒子が僅かに混じる	土師質土器片1点
158	82, 76,10	1	黒色土(10YR2/1)に黄橙色土(10YR8/6)粒子が僅かに混じる　焼土粒子が混じる	
159	60, 40,20	3		土師器甕片1点
160	48, 40,53	1		
162	90　23	1	しまりのない黒色土(10YR3/2)	土師器小片1点
163	100, 80,13	1	しまりのない黒色土(10YR1.7/1)	
164	100　8	1	しまりのない黒色土(10YR2/1)	
165	153, 80,23	1	黒色土(7.5YR1.7/1)に黄橙色土(10YR7/8)粒子が混じる	
168				撹乱と思われる
169	100, 95,15	1		土師質土器片1点
174	106　22	1		
175	126,118,42	1		
176	101　13	1		施釉陶器片1点(第54図15)
177	110,100,46	1		
179	90, 78,16	3		
180				水田造成時の石抜き痕と思われる
181	68, 65,30	3		
182				水田造成時の石抜き痕と思われる
183	小ピット			
184	小ピット			
185				水田造成時の石抜き痕と思われる
186				水田造成時の石抜き痕と思われる
187				水田造成時の石抜き痕と思われる
188		1		
188-1	ピット			丸石1点(第54図9)
189		1		SK210に切られる
190	78　43	1		
191	80　40	1		
192	116　76	1		

193	116 76	1		
194	110 60	1		
195	77 49	1		
196	86 36	1		
197	82 14	1		
198	122 33	1		
199	114 44	1		
200	139,112,24	3		常滑焼甕片(第54図16)、土師質甕片(第55図17)
201	98 64	1		
202	108,103,80	2		第52図
203	95 70	2		
204	141 72	2		
205	86 26			
206	93 19			
210	34 35			
211	115 65	1		
212	94 42	1		
213	117 49	1		
214	108 78	2		
216	105 87	2		第52図
217	30 22	1		
218				
219	98 66	1		
220	110 65	1		砥石1点(第53図7)
221	112 96	2		
222	85 20			土師質土器片1点
223	90 36			
224	110, 97,55	2		土師器小片4点、灰釉片1点 第52図
225	弥生時代再葬墓			
226	95, 90,53	1		
227	85, 80,25	1		
228	120,110,25	1		
229	110,104,35	1		
230	133,126,50	1		
231	120,115,47	1		
232	130,110,50	1		
233	103,103,15	1		
234	133,105,44	3		第52図
235		3		第52図、土師質土器片1点
236	132, 95,20	3		第52図
237	120 17	1		
238	115 31	1		
239	136,127,19	3		
240	90, 78,10	1		
241	70, 60,14	1		
244	162 19	3		第52図
245	120, 97,44	1	しまりのない黒褐色土に黄褐色土粒子が混じる	第52図、土壌分析実施
246	113 43	2		
247	98 44	1		土師質土器片1点
248	125 39	1		

249	102 17	1		
250	95 39	1		
251	111 61	1		
252	89 46	1		
253	102 53	2		
254	120 58	1		
255	130,117,78	3	しまりのない黒褐色土に黄褐色土粒子が混じる	第52図、土壌分析実施
256	86 15	1		
257	92 20	1		
261	94 35	1		
264	75 16	1		
265	122 66	1		
268	99 28	1		
269	70 20	1		
270	92 38	1		
271	88 18	1		
273	113, 77,35	3		土師質土器片2点
276	114 54	1		
278	107 34	1		
280	97 19	1		
281	107 21	1		
282	116 38	1		
286	111 38	3		
287		1		天目茶碗片1点
288	130,110,26	3		第52図
289	144, 85,29	3		第52図
290	113 22	1		
291	111 30	1		
292	128 45	1		擂り鉢片(第55図18)
293	90 27	1		
294	115 42	1		SK295に切られる
295	111 49	1		SK294、296を切る
296	106 23	1		SK295に切られる
297	127 43	1		「祥符元宝」
299	230,157,40	3	炭粒子が僅かに混じる暗褐色土	第53図、土師質土器片2点(第55図19,20)、丸石1点(第54図10)
300	117, 88,30	3	しまりがなく炭化材が混じる暗褐色土	第53図
301				土師質椀片1点
303	42, 38,19	1		土師器片6点
304	128,120,18	3		土師器片6点、灰釉片1点
305	102 63	1		
306	91 57	1		
307	124,225,12	1		
308	140,240,10	3		
309	113 53	1		
310	101 46	1		
311		1		土師質土器片1点
312		1		土師質土器片1点
313	102 45	2		
314	115 45	1		砥石1点(第53図8)
315	105 43	1		施釉陶器片1点

316	118　29	1		土師質高台付土器片(第55図21)
317	111　58	1		
318	95　50	2		
319	114　34	1		
320	47, 43,46	3		
321	62　16	1		
322	63, 50,80			
323	78, 70,38	1		
324	41　36	1		
325	48, 41,24	1		
326	65, 60,19	1		
327	36, 31,28	2		
328	79, 70,30	1		
329	58, 52,28	3		
330	76　13	1		
331	100, 98,16	1		
332	90　26	1		
333	100	1		
334	80　10	1		
335	130　22	1		
336	97, 94,12	1		
337	82, 72,18	1		
338	107,104,78	2		
339	88　41	1		
340	124　91	1		
341	100　24	1		
342	124　35	1		
343	112　59	1		
344	230,226,69	1		
345	85　21	1		
346	120　32	1		
347	106　20	1		
348	95　15	1		SK314に切られる
349	112　37	1		SK314に切られる
350	90　9	1		SK347に切られる
351	96　34	1		SK310に切られる、SK352を切る
352	82　24	1		SK351に切られる
353	100　26	1		SK292に切られる
354	100　20	1		SK291、292に切られる
355	96　16	1		SK254に切られる
356	100　10	1		

溝状遺構（第53図）

溝状遺構が２条検出されている。

１号溝状遺構

平安時代の土器片が少量だが出土している。４号住居を切ることから平安時代以降の遺構であると推測される。

覆土土層　A-A’　１層　7.5YR3/4暗褐色土に10YR5/6黄褐色土の微粒子が均一に混じる
　　B-B’　２層　7.5YR3/3暗褐色土に10YR5/6黄褐色土粒子が均一に混じる

3層　7.5YR3/3暗褐色土に10YR5/6黄褐色土粒子が均一に混じる
4層　耕作土
5層　7.5YR3/4暗褐色土に10YR5/6黄褐色土粒子が均一に混じる
6層　7.5YR2/2やや粘性がある黒褐色土に焼土粒子が僅かに混じる
7層　7.5YR3/2黒褐色土に10YR5/6黄褐色土粒子が均一に混じる
8層　7.5YR2/1黒色土に10YR5/6黄褐色土の小ブロックが混じる
9層　10YR5/6固くしまって砂質の黄褐色土（地山）
10層　7.5YR2/1黒色土に10YR5/6黄褐色土粒子が均一に混じる
11層　7.5YR2/1黒色土に10YR5/6黄褐色土粒子が均一に混じる
C-C'　1層　7.5YR2/3暗褐色土に7.5YR6/6橙色土の微粒子が均一に混じる
2層　7.5YR2/3黒褐色土に7.5YR6/6橙色土の粒子が均一に混じる
3層　7.5YR3/4暗褐色土に7.5YR6/6橙色土の小ブロックが混じる
4層　7.5YR3/4暗褐色土に7.5YR6/6橙色土の小ブロックが混じる
5層　7.5YR6/6しまった粘性のある橙色土（地山）
6層　7.5YR3/4暗褐色土に7.5YR6/6橙色の小ブロックが混じる
7層　7.5YR2/2黒褐色土
8層　7.5YR2/2黒褐色土に7.5YR6/6橙色土粒子が混じる

2号溝状遺構

1号溝状遺構とつながる溝と考えられる。少量の土師器が出土している。

第6章　遺構外出土遺物（第55図22）

縄文時代から平安時代までを除く遺構外出土遺物では片口注口土器片1点のみを報告する。胎土質は長石、石英、雲母、赤色粒子の混じる黄褐色土でキメが細かい。内外面ナデ調整で、内面は丹念に磨かれ平滑に仕上げられている。推定口径は33cmである。

第7章　下大内遺跡検出土坑の内容物について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下大内遺跡は、平安時代後期(10世紀後半)～中世の集落および墓域である。今回、調査区内より出土したSK245およびSK255の2基の土坑は墓坑と考えられるが、遺体の埋納を示唆する骨片副葬品などは確認されていない。

このような場合に、遺体埋納の痕跡を自然科学的に検証する方法として、リン酸分析が知られている。リン酸分析は、人体（特に人骨）に多量に含まれ、しかも土壌中で比較的移動しにくいとされるリン酸の含有量を測定し、その値から痕跡を定性的に把握する方法である(竹迫ほか，1981)。また、リン酸を保持しにくい土壌の場合はリン酸の富化について明瞭な傾向が得られない場合が多いため、炭素含量もあわせて測定する方法がある。土壌中に含まれている有機炭素の大部分は植物起源である。リンは植物遺体にもある程度は含まれていることから、炭素含量の値から全体のリン酸量に対する植物遺体の影響を相対的に知ることができる。沖積地に立地する豊島馬場遺跡では、この方法を利用して、方形周溝墓の周溝内埋葬の問題について良好な結果が得られている（東京都北区教育委員会，1995)。

そこで、今回は、豊島馬場遺跡の分析方法を参考にし、遺構覆土中のリン酸および有機炭素の含量から、遺体埋葬の有無について検討した。

1．試　　料

調査対象は、SK245およびSK255の２基である。

SK245は、平面プランがほぼ円形を呈し、直径約１ｍを計る。土坑壁面は垂直、あるいはやや傾斜を持つ。底面は平坦であるが、さらに下位に円形の掘り込みの認められる場所もある。一方、SK255は平面プランがSK245と同様にほぼ円形を呈すが、壁面は底部から中部にかけて軽く抉り込まれており、底部も中央部でやや低くなっている。

試料は、２基の土坑の覆土から採取された(図１)。その方法は、両土坑で同様である。すなわち、平面プラン上に直行する格子が設けられ、格子により区画された範囲で下位～上位にかけて覆土が採取された。この方法で採取された試料は、SK245では121点、SK255では132点であった。SK255では、さらに底部サンプル１点が採取された。また、対照試料としてSK255付近の耕土試料２点が採取された。

協議のうえ、これらの試料から、SK245は78点、SK255は76点、対照試料は２点、合計156点を選択した。なお、試料の詳細は表１・２、および図２に示す。

2．方　　法

リン酸含量は、土壌標準分析・測定法委員会（1986）などを参考に、過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法で測定した。試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）５㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HClO_4$）10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg/g）を求める。

一方、有機炭素量については風乾細土試料の一部を微粉砕し、0.5㎜篩を全通させた微粉砕試料を用いる。微粉砕試料1,000㎎前後を精秤し、助燃剤（酸化コバルト）5.0ｇと混合する。混合試料をサンプルボードに乗せ、CNコーダー（柳本制作所製：MT-600）に挿入する。挿入された混合試料をキャリアガス（He）気流中で950℃に加熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO_2及びN_2の組成にする。次いで希釈、分取の工程を経て、TCD検出器により炭素及び窒素の濃度を測定する。この測定値から、乾土あたりの有機炭素量（T-C%）を求める。

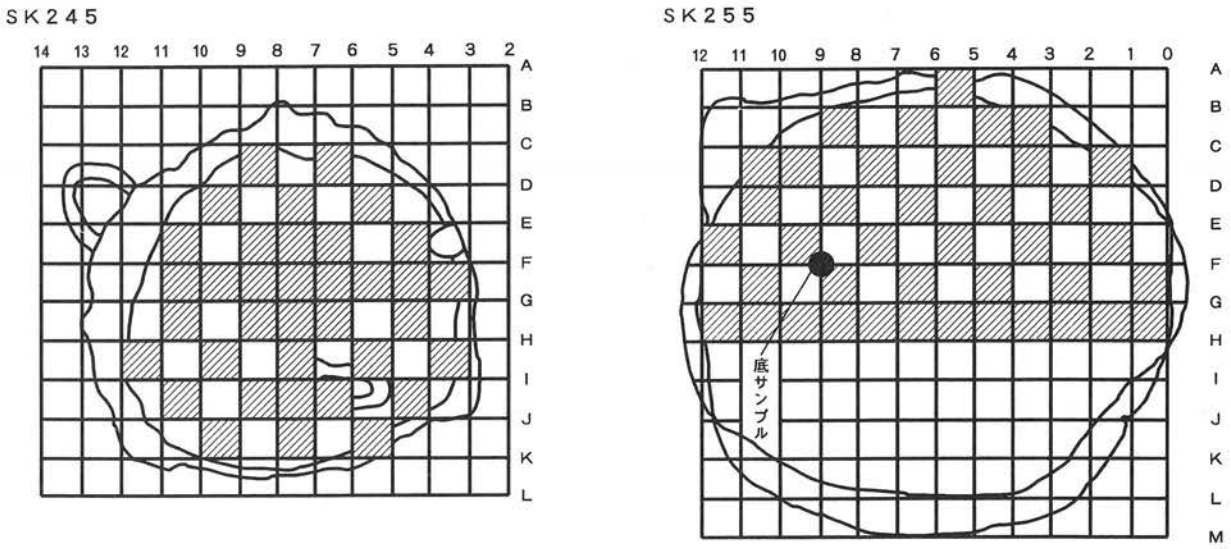


図１　SK245とSK255の試料採取位置
斜線部および●で示した部分から試料が採取された。

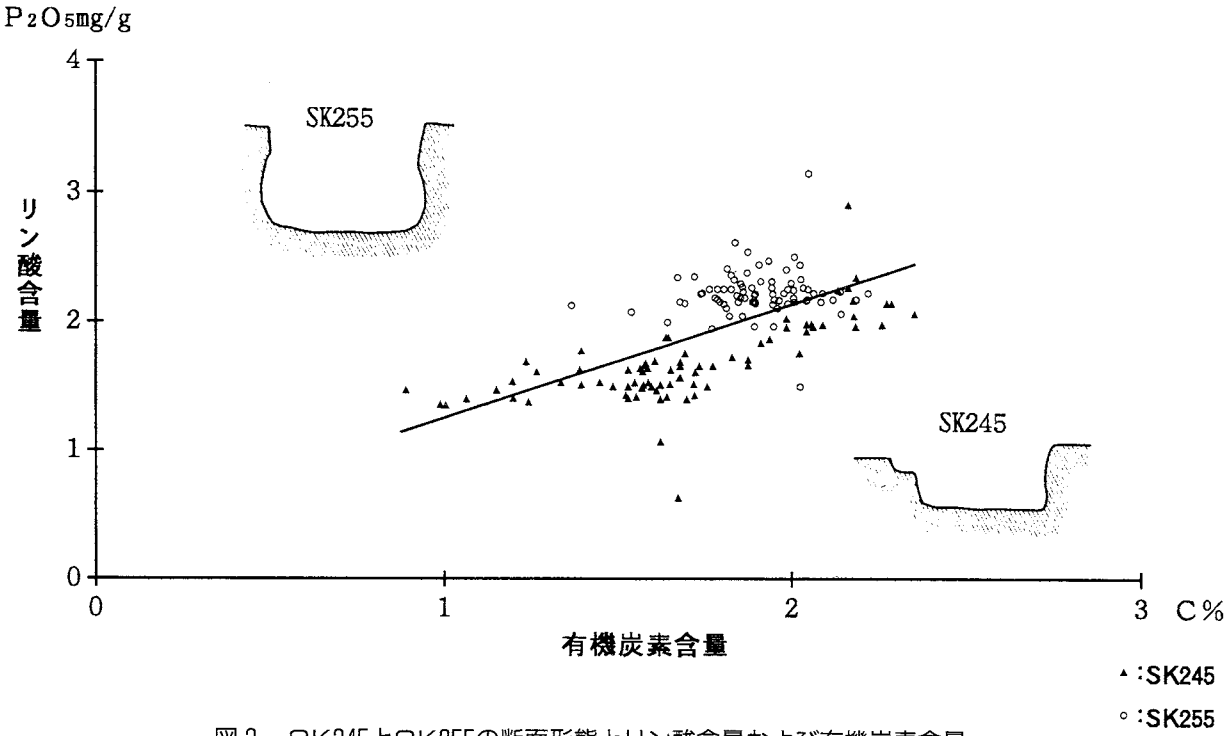


図2　SK245とSK255の断面形態とリン酸含量および有機炭素含量
各土坑のリン酸含量と有機炭素含量の相関関係を示す。直線は回帰直線を示す。

測定値をもとに、最大値・最小値・平均値といった基本統計量を求めた。さらに相関関係について調べるために散布図を作成した。相関が認められる場合には、最小2乗法による回帰直線を求め、正の方向に極端に逸脱する試料の有無を調べる。これは、植物遺体の影響を差し引いてもリン酸含量の高い試料を抽出するためである。

3．結　　果

結果を表1・2に示す。以下に、各土坑毎の結果について記す。

・SK245

覆土中のリン酸含量は1.7P_2O_5mg/g前後、有機炭素量は1.8%前後を示す試料が多い。また、リン酸含量と有機炭素含量の分散はともに0.1程度であり、バラツキは大きい。

層位的に試料を選択したD－5列、D－7列、D－9列、G－4列、G－8列、G－10列、I－6列、I－8列、I－10列では覆土上位から下位にかけてリン酸・有機炭素含量が低下する傾向が認められる。

・SK255

覆土中のリン酸は2.4P_2O_5mg/g前後、有機炭素量は1.6%前後を示す試料が多い。また、リン酸含量と有機炭素含量の分散は0.03と0.02であり、ともにバラツキが小さい。

SK245と比較して、全体的にリン酸含量の高い傾向が見られる。また、層位的に試料を選択した列のうちB－6列、D－4列、G－10列では、底部や覆土の下位で有機炭素含量に比べてリン酸含量が高い。

対照試料は土坑覆土と比較して、リン酸・有機炭素含量ともに低い。

4．考　　察

SK245ではリン酸で1.7P_2O_5mg/g前後、有機炭素量で1.8%前後を示し、バラツキが大きい。SK255ではリン酸で2.4P_2O_5mg/g前後、有機炭素量で1.6%前後を示し、バラツキが小さい。また、SK245や対照試料と比較して、

表1　SK245のリン酸・有機炭素含量測定結果(1)

試　料　名	リン酸含量 P205mg/g	有機炭素 C%	土　色	土　性
SK245　C－6－5	1.51	1.57	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　C－6－6	1.47	0.89	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　C－8－5	1.49	1.57	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　C－8－6	1.47	1.15	7.5YR4/4褐	L
SK245　D－5－1	1.98	2.09	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－5－3	1.99	2.04	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－5－5	1.57	1.68	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－5－6	1.51	1.39	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－7－1	2.25	2.13	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－7－3	1.97	2.18	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－7－5	1.40	1.62	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－7－6	1.35	1.00	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－9－1	2.15	2.29	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　D－9－3	1.97	2.06	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　D－9－5	1.43	1.72	7.5YR4/4褐	L
SK245　D－9－6	1.36	0.99	7.5YR4/4褐	L
SK245　E－4－5	1.51	1.62	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　E－4－6	1.64	1.58	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　E－6－5	1.57	1.68	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　E－6－6	1.68	1.58	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　E－7－6	1.69	1.68	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　E－8－5	1.42	1.64	7.5YR4/3褐	L
SK245　E－8－6	0.63	1.67	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　E－10－5	1.07	1.62	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　E－10－6	1.76	1.69	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　F－3－6	1.64	1.56	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　F－4－6	1.66	1.77	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　F－5－6	1.63	1.39	7.5YR4/3褐	L
SK245　F－6－6	1.50	1.59	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　F－7－6	1.66	1.68	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　F－8－6	1.73	1.83	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　F－9－6	1.88	1.64	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　F－10－6	1.53	1.45	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－4－1	2.03	1.99	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　G－4－3	1.87	1.94	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　G－4－5	1.63	1.53	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－4－6	1.88	1.64	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－6－1	2.35	2.19	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　G－6－3	1.93	2.04	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－6－5	1.40	1.70	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－6－6	1.50	1.49	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－7－6	1.50	1.76	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　G－8－1	2.17	2.18	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　G－8－3	1.96	1.99	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　G－8－5	1.52	1.65	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－8－6	1.47	1.61	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－10－1	2.15	2.27	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　G－10－3	1.99	2.06	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　G－10－5	1.63	1.65	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　G－10－6	1.43	1.52	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　H－3－6	1.54	1.20	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　H－5－5	1.70	1.60	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　H－5－6	1.53	1.58	7.5YR3/4暗褐	L

表1　SK245のリン酸・有機炭素含量測定結果(2)

試　料　名	リン酸含量 P205mg/g	有機炭素 C%	土　色	土　性
SK245　H－7－5	1.84	1.91	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　H－7－6	1.71	1.87	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　H－9－5	1.61	1.72	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　H－9－6	1.67	1.87	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　H－11－5	1.62	1.57	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　H－11－6	1.67	1.58	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　I－4－6	1.61	1.27	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　I－6－1	2.05	2.18	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－6－3	1.78	1.39	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－6－5	1.50	1.53	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－6－6	1.53	1.55	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　I－7－6	1.53	1.34	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　I－8－1	2.07	2.36	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－8－3	1.98	2.26	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－8－5	1.66	1.73	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－8－6	1.76	2.02	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　I－10－1	2.91	2.16	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－10－3	2.27	2.16	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－10－5	1.52	1.72	7.5YR3/2黒褐	L
SK245　I－10－6	1.41	1.20	7.5YR4/3褐	L
SK245　J－5－6	1.38	1.24	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　J－7－5	1.42	1.55	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　J－7－6	1.69	1.24	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　J－9－5	1.41	1.53	7.5YR3/4暗褐	L
SK245　J－9－6	1.40	1.06	7.5YR3/4暗褐	L
最大値	2.91	2.36		
最小値	0.63	0.89		
平均値	1.68	1.69		
分　散	0.10	0.11		

土性：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
土色：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。
L…壌土（砂と粘土を半々に感じる）

全体的にリン酸含量の高い傾向が見られた。

ここで、土壌中に自然に存在するリン酸含量、すなわち天然賦存量と今回の結果を比較する。リン酸の天然賦存量は3.0P_2O_5mg/gで、最大でも5.0P_2O_5mg/gと推定される（Bowen，1983：Bolt and Bruggenwert，1980：川崎ら，1991：天野ら，1991）。今回の結果は、天然賦存量の最大値を大きく超える試料はほとんどみられない。これは覆土が壌土であり、リン酸を保持しにくい状況であったためと考えられる。

ところで、両土坑のリン酸含量と有機炭素含量の相関関係を散布図上に示すと、右上がりの分布を示す（図2）。回帰直線を求めると、相関係数は約0.6を示し、正の相関関係がみられる。これは、リン酸含量の高い試料ほど有機炭素含量が高いことを示す。また、この土坑の覆土は黒褐色～暗褐色を呈し、植物質起源の腐植が混入していると考えられ、動物質起源のリン酸は富化されていないといえる。したがって、覆土は植物起源のリン酸の影響を強く受けていると考えられる。

しかし、SK255では試料の分布の中心が回帰線の上方にある。特に、B－6列の底部付近の試料番号B－6－5は回帰線から離れている。回帰線に垂線をおろした長さは、植物質のリン酸の影響を除外した大きさを相対的に示している。そのため、回帰線から離れているということは、植物質以外のリン酸の影響を少なからず受けてい

表2　SK255のリン酸・有機炭素含量測定結果(1)

試　料　名		リン酸含量 P205mg/g	有機炭素 C%	土　色	土　性
SK255	A－5－9	2.19	1.78	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－3－8	2.48	1.93	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－3－9	2.27	1.89	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－4－9	2.26	1.79	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－6－1	2.55	1.88	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－6－3	2.23	2.22	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－6－5	3.15	2.05	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－6－7	2.15	1.99	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－6－8	2.32	1.95	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－6－9	2.19	1.85	10YR2/3黒褐	L
SK255	B－8－9	2.30	1.85	10YR2/3黒褐	L
SK255	C－1－9	2.14	1.80	10YR2/3黒褐	L
SK255	C－3－9	2.45	1.91	10YR2/3黒褐	L
SK255	C－5－9	2.32	1.91	10YR2/3黒褐	L
SK255	C－7－9	2.42	1.81	10YR2/3黒褐	L
SK255	C－9－9	2.05	1.86	10YR2/3黒褐	L
SK255	C－10－8	1.97	1.89	10YR2/3黒褐	L
SK255	C－10－9	1.95	1.77	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－2－8	2.11	1.96	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－2－9	2.18	2.05	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－4－1	2.27	1.94	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－4－3	2.25	2.01	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－4－5	2.22	1.90	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－4－7	2.18	2.12	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－4－8	2.26	1.99	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－4－9	2.41	1.99	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－6－8	2.18	2.19	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－6－9	2.23	2.06	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－8－1	2.35	1.67	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－8－3	2.14	1.95	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－8－5	2.17	1.96	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－8－7	2.34	2.03	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－8－8	2.26	2.05	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－8－9①	2.45	2.02	10YR2/3黒褐	L
SK255	D－10－9	2.16	1.79	10YR3/4暗褐	L
SK255	E－1－9	2.26	1.80	10YR2/3黒褐	L
SK255	E－3－9	2.26	1.76	10YR2/3黒褐	L
SK255	E－5－9	2.16	2.01	10YR2/3黒褐	L
SK255	E－7－9	2.21	1.89	10YR2/3黒褐	L
SK255	E－9－9	2.19	1.87	10YR2/3黒褐	L
SK255	底サンプル	2.00	1.64	10YR2/3黒褐	L
SK255	E－11－9	2.08	1.54	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－0－9	2.36	1.72	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－2－1	2.62	1.84	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－2－3	2.22	1.95	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－2－4	2.23	1.98	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－2－7	2.27	2.03	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－2－8	2.24	1.86	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－2－9	2.16	1.89	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－4－9	2.26	1.83	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－6－9	2.11	1.81	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－8－8	2.19	2.01	10YR2/3黒褐	L
SK255	F－8－9	2.15	1.89	7.5YR3/2黒褐	L

表2　SK255のリン酸・有機炭素含量測定結果(2)

試　料　名	リン酸含量 P205mg/g	有機炭素 C%	土　色	土　性
SK255　F－10－9①	2.21	1.84	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－0－9	2.15	1.69	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－1－9	2.16	1.68	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－2－9	2.16	1.85	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－3－9	2.18	1.95	10YR2/3黒褐	L
SK255　G－4－9	2.33	1.84	10YR2/3黒褐	L
SK255　G－5－9	2.23	2.09	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－6－1	2.51	2.01	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－6－3	2.39	1.87	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－6－5	2.17	2.04	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－6－7	2.16	1.89	10YR3/2黒褐	L
SK255　G－6－8	2.16	2.09	10YR3/2黒褐	L
SK255　G－6－9	2.24	2.14	10YR3/2黒褐	L
SK255　G－7－9	2.07	2.14	10YR3/2黒褐	L
SK255　G－8－9	2.16	1.89	10YR3/2黒褐	L
SK255　G－9－9	2.23	1.74	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－10－1	2.37	1.83	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－10－3	2.28	1.86	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－10－5	2.31	2.00	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－10－7	1.97	1.95	7.5YR3/2極暗褐	L
SK255　G－10－8	2.18	1.79	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－10－9	2.22	1.74	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　G－11－9	2.05	1.82	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　耕土①	1.50	2.03	7.5YR3/2黒褐	L
SK255　耕土②	2.13	1.37	7.5YR3/2黒褐	L
最大値	3.15	2.22		
最小値	1.50	1.37		
平均値	2.23	1.90		
分　散	0.03	0.02		

土性：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
土色：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。
L…壌土（砂と粘土を半々に感じる）

ると考えられる。したがって、SK255については動物質起源のリン酸が富化されていると言うことができる。すなわち、遺体を埋納したためにリン酸の富化が生じた可能性がある。なお、SK255は土坑の壁が底部から中部にかけて軽く抉り込まれるのに対し、SK245は壁がほぼ垂直に立ち上がる点で異なる。今回みられた内容物の差が、このような土坑の断面形態の変異に結びつくものであるかどうかは、今後さらに複数の土坑について同様な調査を行い、試料を蓄積したうえで検討したい。

〈引用文献〉

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bowen,H.J.M（1983）環境無機化学―元素の循環と生化学―．浅見輝男・茅野充男訳，297p.,博友社［Bowen,H.J.M.（1979）*Environmental Cemistry of Elements*］.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309p.,学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）*SOIL CHEMISTRY*］，p.235-236.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.,博友社.

F.W.Hamond（1983）Phosphate analysis of archaeological sediments.In R.Reeves-Smyth and Hamond,F.（eds.）

Landscape Archeology in lreland.p.47-80,Oxford:BAR British Series116.
川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，149p.：p.23-27.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」，156p：p.39-40,博友社.
竹迫　紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部　隆（1981）神谷原遺跡への土壌学的アプローチ．神谷原Ⅰ，p.412-416，八王子市椚田遺跡調査会.
東京都北区教育委員会（1995）北区埋蔵文化財調査報告16集　豊島馬場遺跡（本文編），383p.

第８章　下大内遺跡の自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

下大内遺跡は茅ヶ岳扇状地の段丘上に位置する。今回の発掘調査では、弥生時代前期末から中期初頭にかけての再葬墓１基、平安時代の住居跡14基、中・近世の墓の可能性がある土坑群（約350基）などが確認されている。このうち、弥生時代前期末から中期初頭の再葬墓は、県内での調査事例が少なく、弥生時代葬制を検討する貴重な資料とされる。また、平安時代の住居跡には、焼失住居と考えられるものが３基認められている。中・近世の土坑群は４つの群に分かれており、その中には火葬墓の可能性がある土坑が１基認められている。

今回の調査では、上記した各時期の遺構の性格に関する情報を得ることを目的として、出土した炭化材や種実遺体の種類同定、再葬墓や土坑内に遺体が埋納された可能性を検討するためにリン酸および腐植含量測定を実施する。

１．出土炭化材の樹種

⑴　試　　料

試料は、住居構築材や燃料材と考えられる炭化材79点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表１に記した。

⑵　分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

⑶　結　　果

樹種同定結果を表１に示す。１試料中に２種類認められるものが３点あった。また、保存状態が悪いために種類の同定に至らない試料については、観察できた範囲の結果を記し、木材組織が全く観察できない場合には不明とした。その他の種類は、針葉樹１種類（ヒノキ属）、広葉樹６種類（オニグルミ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・サクラ属・トネリコ属）とイネ科タケ亜科に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）　ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は穏やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana*（Maxim.）Kitamura）　クルミ科クルミ属

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および２～４個が複合、横断面では楕円形、管

表1　炭化材の樹種同定結果(1)

遺　構　名	時代・時期	出土位置・試料名など	用途など	樹　　種
PH－01	平安時代後半	カマド覆土内炭化材	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
PH－02	平安時代後半	カマド覆土内炭化材	燃料材	広葉樹
PH－03	平安時代後半	カマド覆土内炭化材	燃料材	サクラ属
PH－04	平安時代後半	覆土内炭化材No. 1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 3	住居構築材	イネ科タケ亜科
		覆土内炭化材No. 4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 5	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		覆土内炭化材No. 6	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 7	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 8	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 9	住居構築材	クリ
		覆土内炭化材No.10	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.11	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		覆土内炭化材No.12	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.13	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.14	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.15	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.16	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.17	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.18	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.19	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.20	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.21	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		カマド覆土内炭化材	燃料材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
PH－07	平安時代後半	覆土内炭化材No. 1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		覆土内炭化材No. 3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 5	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 6	住居構築材	クリ
		覆土内炭化材No. 7	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 8	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 9	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		覆土内炭化材No.10	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.11	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.12	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				ヒノキ属
		覆土内炭化材No.13	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.14	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.15	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.16	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		覆土内炭化材No.17	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.18	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.19	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		土坑1　土坑覆土炭化材	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		土坑3　土坑覆土炭化材	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		Pit 5　土坑覆土炭化材	住居構築材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
PH－12	平安時代後半	覆土内炭化材No. 1	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				イネ科タケ亜科
		覆土内炭化材No. 2	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 3	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 4	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 5	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

表１　炭化材の樹種同定結果(2)

遺　構　名	時代・時期	出土位置・試料名など	用途など	樹　　種
PH－12	平安時代後半	覆土内炭化材No. 6	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 7	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No. 8	住居構築材	樹皮
		覆土内炭化材No. 9	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.10	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.11	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.12	住居構築材	不明
		覆土内炭化材No.13	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.14	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.15	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.16	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.17	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.18	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.19	住居構築材	オニグルミ？
		覆土内炭化材No.20	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.21	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		覆土内炭化材No.22	住居構築材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		カマド	燃料材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
PH－13	平安時代後半	カマド覆土内炭化材	燃料材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
SK153		土坑覆土炭化材	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
SK225	弥生時代	土坑覆土炭化材	燃料材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
SK293	中世？	土坑覆土炭化材	燃料材	トネリコ属
SK306	中世？	土坑覆土炭化材	燃料材	クリ
				イネ科タケ亜科
SK309	中世？	土坑覆土炭化材	燃料材	トネリコ属
SK310	中世？	土坑覆土炭化材	燃料材	ヒノキ属
竪穴状遺構	中世？	土坑覆土炭化材	燃料材	ヒノキ属

壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列する。放射組織は同性～異性III型、１～４細胞幅、１～40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・サクラ属（*Prunus*）　バラ科

環孔性を帯びた散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または２～８個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性III型、１～３細胞幅、１～30細胞高。

以上の特徴から、少なくとも常緑のバクチノキ亜属や栽培種のウメ・モモ等は除外される。

・トネリコ属（*Fraxinus*）　モクセイ科

環孔材で孔圏部は２～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または２個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、１～３細胞幅、１～20細胞高。

・イネ科タケ亜科（Gramineae subfam. Bambusoideae）

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科は、タケ・ササ類であるが解剖学的特徴では区別できない。

⑷ 考　察

炭化材は、発掘調査所見より、住居構築材や燃料材と考えられる。平安時代後半の住居跡から出土した、住居構築材と考えられる炭化材は、いずれの住居跡でもクヌギ節を中心とした樹種構成であった。同様の結果は、長坂町健康村遺跡で検出された平安時代の住居構築材の樹種同定結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，1994）でも確認されている。これらの結果から、平安時代の住居構築材にはクヌギ節や同亜属のコナラ節が広く利用されていたことが推定される。

クヌギ節・コナラ節以外の種類では、クリ・オニグルミなど強度の高い木材が多く、住居構築材の用材選択に強度が意識されていたことが推定される。また、タケ亜科は材質を考慮すれば、壁や屋根に利用されたと考えられる。

一方、平安時代の住居跡のカマドから出土した、燃料材と考えられる炭化材は、基本的には住居構築材と同様の用材選択がうかがえる。PH－03では、住居構築材に確認されなかったサクラ属が使用されているが、試料数が少ないために用材選択の違いを反映しているのか否かは不明である。

弥生時代の再葬墓（SK225）や中世？の墓坑群から出土した燃料材とされる炭化材は、前述のコナラ節、針葉樹のヒノキ属、落葉広葉樹のクリ・トネリコ属、タケ亜科に同定された。この結果から、時代や用途により用材選択が異なっていた可能性があるが、試料数が少ないため断定には至らない。

住居構築材は、関東地方における調査結果から、遺跡周辺の植生を反映することが指摘されている。また、燃料材も、基本的には遺跡周辺から入手していたと考えられる。これらを考慮すると、平安時代の遺跡周辺にはクヌギ節・コナラ節の入手が容易な環境にあったことが推定される。また、中世においては種類構成が異なることから、植生が異なっていた可能性があるが、現時点では断定には至らない。今後、周辺地域でさらに類例を蓄積し、明らかにしたい。

２．種実遺体の種類

⑴ 試　料

種実遺体試料は、中世？の墓坑群の可能性があるSK306の覆土から出土した炭化物（SK306土坑覆土炭化物）１点と、中世？とされる遺構（竪穴状遺構）から出土した種実遺体１点である。

⑵ 分析方法

緩やかに乾燥させたあと、双眼実体顕微鏡で観察し、同定した。

⑶ 結　果

SK306土坑覆土の炭化物は、イネ（*Oryza sativa* L.）である。籾殻や炭化米（胚乳）が癒着し、塊状になっている。炭化米の中には粒として確認できるものがあり、大きさは４㎜程度。胚が位置する部分は欠如し、大きく窪んでいる。表面には、縦に平行な隆起構造が数本認められる。

一方、竪穴状遺構から検出された種実はモモ（*Prunus parsica* Batsch）であり、核（内果皮）２個体が認めら

れる。炭化しており、大きさは2㎝程度。核の形は球形で、やや偏平である。基部は丸く大きな臍点があり、へこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体として粗いしわ状に見える。

(4) 考　察

検出されたイネ、モモ共に、栽培種として渡来した種類である。本遺跡周辺で、中世にこれらの種類が栽培されていたことが推定される。両種とも各地の遺跡から多くの出土例が報告されており、山梨県でも長坂町健康村遺跡で平安時代の遺構から出土報告がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1994)。また健康村遺跡ではイネ・モモの他にも、オオムギ・アワ・ウメ等も出土しており、これらの植物も栽培されていたことが推定されている。本遺跡でも、イネ・モモ以外にこれらの種類が栽培されていた可能性があるが、現時点では明らかではない。

イネが出土したSK306は、中世の墓坑群に伴う可能性が指摘されている。このことから、イネは供物として遺体と共に埋納された可能性がある。塊状ではあるが、籾殻が付着していることから、いわゆる「おにぎり」のようなものではなく、籾の状態で埋納されたことが推定される。

一方、モモについては出土遺構の用途などに関する詳細が明らかではないため、どのような状況で炭化・埋積したものかは不明である。

3．遺体埋納の可能性

(1) 試　料

調査対象は、弥生時代前期末から中期初頭の再葬墓（SK225）と中世の火葬墓の可能性がある土坑（SK300）の2基である（表2)。

SK225は、調査区北東端で検出される。平面プランが楕円形を呈し、壁面はやや傾斜を有し、底面に石が認められる。内部には、弥生時代中期突帯付条痕文土器2個体が入れ子状に合わせて埋納されていたと考えられるが、発掘時には土圧などにより既に破損していた。試料は、土器内土壌6点と、対照試料として土坑内覆土1点が採取された。

SK300は平面プランが隅丸方形を呈するが、底部～下層に敷石、上層に集石が見られる。集石には、赤変部や煤が付着する部分など被熱がうかがえる。また、底部には炭化物や骨片らしい白色粉も見られた。試料は、集石の間や敷石の下部から8点が採取された。また、対照試料として現耕作土、土坑覆土、住居跡床面直上などから4点が採取された。

分析の際は、これら全点（19点）を用いた。

(2) 方　法

リン酸分析については、土壌標準分析・測定法委員会（1986）などを参考に、過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法で測定した。試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる（風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO_3）5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（$HCLO_4$）10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後に、蒸留水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン含量（P_2O_5mg/g）を求める。

一方、腐植含量測定については風乾細土試料の一部を微粉砕し、0.5㎜篩を全通させた微粉砕試料を用いる。微粉砕試料1,000㎎前後を精秤し、助燃剤(酸化コバルト)5.0gと混合する。混合試料をサンプルボードに乗せ、CNコーダー（柳本制作所製：MT-600）に挿入する。挿入された混合試料をキャリアガス（He）気流中で950℃に加

表2　リン酸・腐植含量測定結果

試料名		リン酸含量 P_2O_5mg/g	腐植含量 C%	土色	土性
SK225	対照試料	2.87	3.4	10YR3/2黒褐	CL
	壷棺内覆土①	1.00	3.3	10YR3/2黒褐	CL
	壷棺内覆土②	1.18	3.5	10YR3/2黒褐	LiC
	壷棺内覆土③	1.26	3.5	10YR3/3暗褐	LiC
	壷棺内覆土④	1.18	2.6	10YR3/2黒褐	LiC
	壷棺内覆土⑤	1.36	3.1	10YR3/2黒褐	LiC
	壷棺内覆土⑥	1.18	2.2	10YR3/2黒褐	LiC
SK300	① 耕土（対照試料）	5.75	4.6	10YR3/2黒褐	LiC
	② 耕土（対照試料）	1.87	2.4	10YR3/2黒褐	LiC
	③ 耕土（対照試料）	1.97	2.2	7.5YR3/2黒褐	LiC
	④ 覆土（土坑内）	2.36	2.5	10YR3/2黒褐	LiC
	⑤ 覆土（炭化物混じり）	4.22	17.5	7.5YR1.7/1黒	LiC
	⑥ 覆土（炭少ない褐色土）	3.11	4.4	10YR2/2黒褐	LiC
	⑦ 覆土（炭化物混じり）	3.26	10.3	10YR2/1黒	LiC
	⑧ 覆土（敷石下）	3.27	3.9	10YR2/2黒褐	LiC
	⑨ 覆土（敷石下）	3.23	3.4	10YR2/2黒褐	CL
	⑩ 覆土（敷石下）	2.62	7.4	10YR2/3黒褐	CL
	⑪ 覆土（敷石下）	3.31	3.3	10YR2/2黒褐	LiC
	⑫ 覆土（床最下部）	3.15	3.1	10YR2/2黒褐	LiC

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性の判定法による。
CL：埴壌土（わずかに砂を感じるが、かなりねばる）
LiC：軽埴土（わずかに砂を感じ、よく粘る）

熱燃焼する。発生した燃焼ガスを純化させ、CO_2およびN_2の組成にする。次いで希釈、分取の工程を経て、TCD検出器により炭素および窒素の濃度を測定する。この測定値から、乾土あたりの有機炭素量（T-C%）を求め、1.724を乗じて腐植含量（%）とした。

(3) 結　果

結果を表2に示す。以下に、各遺構毎に結果を述べる。

・SK225

壷棺内覆土のリン酸含量は、対照試料の2.87P_2O_5mg/gに対して、1.20P_2O_5mg/g前後と低い値になっている。また、壷棺内でほぼ同様な値であり、特に含量の高い試料は見られない。この値は、先に調査したSK245やSK255のリン酸含量平均値1.87P_2O_5mg/gと比較しても低い。

・SK300

対照試料は、耕作土表層でリン酸含量が極端に高い。土坑内覆土のリン酸含量は、対照試料の耕作土表層と比較すると低いが、それ以外の耕作土試料よりは高い。

腐植含量は、炭化物を含む試料で極端に高い値（試料番号⑤の17.5%、試料番号⑦の10.3%）である。また、腐植含量の高い試料で、リン酸含量も高くなっている。ただし、敷石下や床最下部の試料では3.20P_2O_5mg/g前後であり、SK225の壷棺内覆土（1.20P_2O_5mg/g前後）およびSK245やSK255（平均値1.87P_2O_5mg/g）と比較して、高い傾向にある。

(4) 考　察

・弥生時代前期末から中期初頭の再葬墓（SK225）

壷棺内土壌のリン酸含量は対照試料とした土坑覆土試料よりも低かった。現在の土壌におけるリン酸の天然賦存量は3.0P_2O_5mg/g、最大でも5.0P_2O_5mg/gとされ(Bowen, 1983：Bolt and Bruggenwert, 1980：川崎ら，1991：天野ら，1991)、この値と比較しても明らかに低い。また、対照試料と壷棺内土壌は土質が埴壌土・軽埴土であ

り、化学成分を保持しやすい粘土分を多く含む土壌からなる。そのため、骨が再葬されていたとすれば、覆土中にその痕跡が残留しやすいことが考えられる。今回の結果では、壷棺内土壌でのリン酸の富化は認められず、骨の再葬の可能性を追証することは難しい。ただし、壷棺が壊れていたことを考慮すると、遺体成分が流亡している可能性もある。対照試料とした覆土試料でリン酸含量が高かったこともこのことに起因する可能性がある。

・中世の土坑（SK300）

本土坑覆土試料のリン酸含量は、対照試料より高い値を示した。また、上記した天然賦存量と比較しても同等あるいは高い値を示している。これらのことと、試料の土質が化学成分を保持しやすい埴壌土あるいは軽埴土からなることから、土坑内にはリン酸が富化していることが推定される。次に腐植含量と合わせて、リン酸富化の原因について検討する。

覆土試料⑤・⑦は腐植含量も高かったことから、リン酸の由来として植物遺体を考える必要がある。それら以外の覆土試料では腐植含量は高くなく、動物遺体に由来するリン酸の富化の可能性がある。特に覆土試料の中でリン酸含量が比較的高かった試料⑧・⑨・⑩・⑫は、土坑中央部に位置する敷石の直下あるいは底最下部より採取されたものであることから、土坑下層中央部にリン酸が濃集していることがうかがえ、遺体が設置されていた可能性がある。

なお、対照試料の試料番号①（耕作土）でリン酸含量が高かった点については、現代の耕作に伴う施肥の影響が考えられ、他試料で含量が低い点は層位的あるいは平面的に離れていて影響が少なかったのかもしれない。

〈引用文献〉

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bowen,H.J.M.(1983)環境無機化学―元素の循環と生化学―．浅見輝男・茅野充男訳，297p.,博友社[Bowen,H.J.M.(1979) *Environmental Cemistry of Elements*].

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，309p.,学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）*SOIL CHEMISTRY*］，p.235-236.

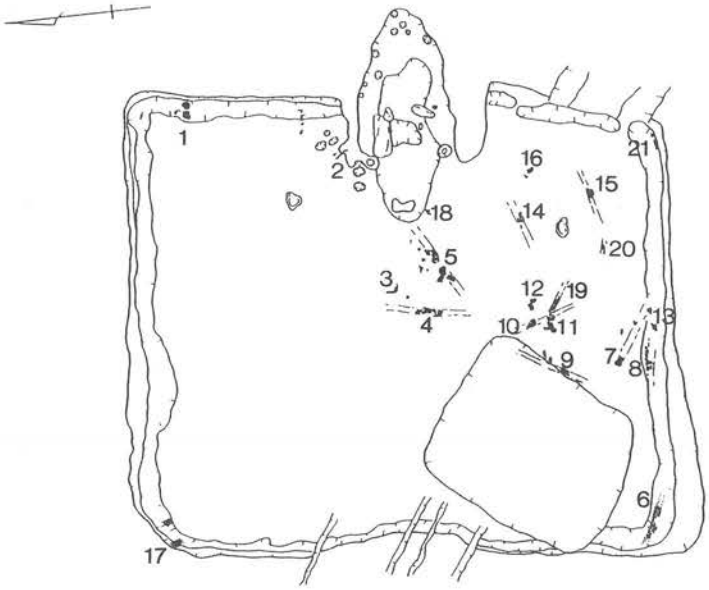
土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.,博友社.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

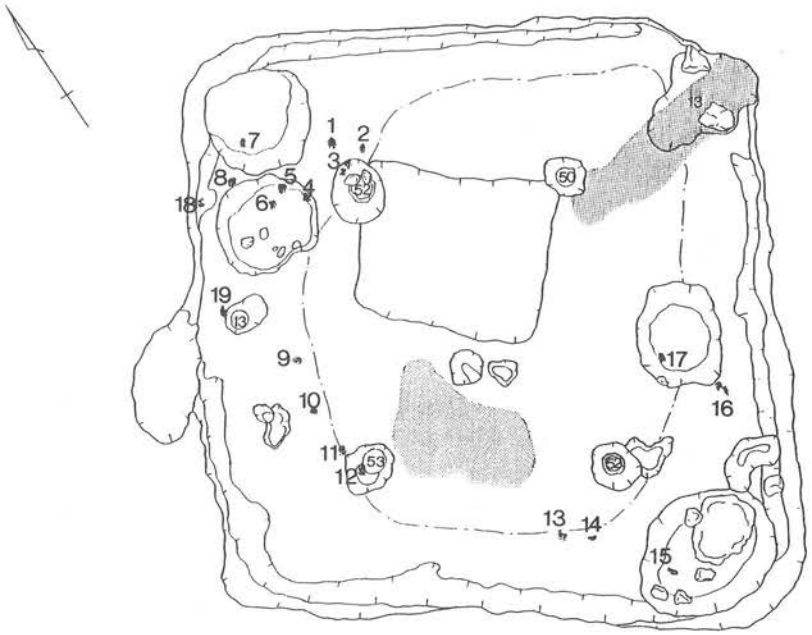
パリノ・サーヴェイ株式会社（1994）健康村遺跡自然科学分析調査報告.「山梨県北巨摩郡長坂町健康村遺跡―（仮称）東京都新宿区立区民健康村建設事業に伴う発掘調査報告書―」，p.116-128，新宿区区民健康村遺跡調査団.

ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」，p.39-40，博友社.



PH04

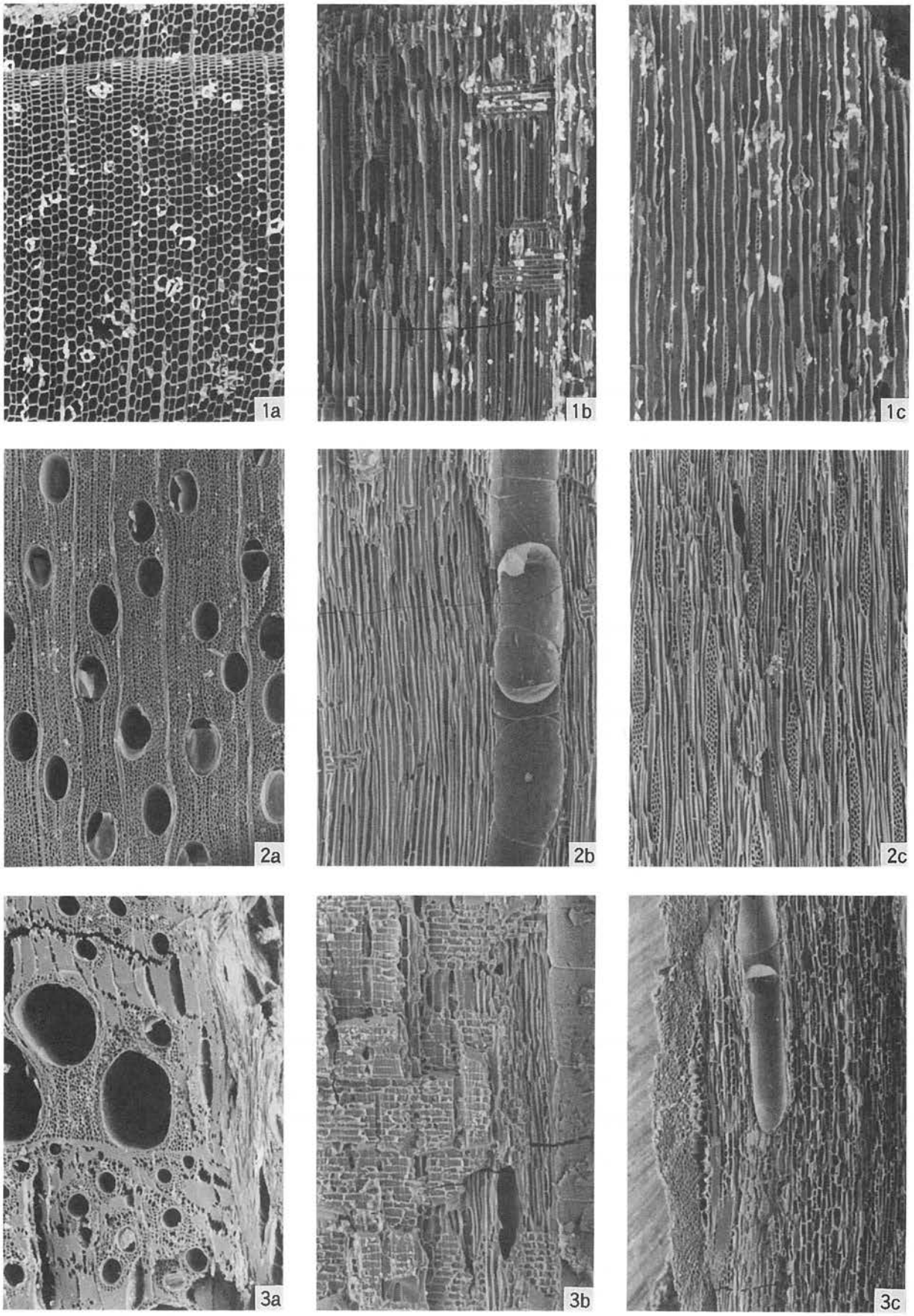
PH12



PH07

図1　炭化材出土位置と試料番号

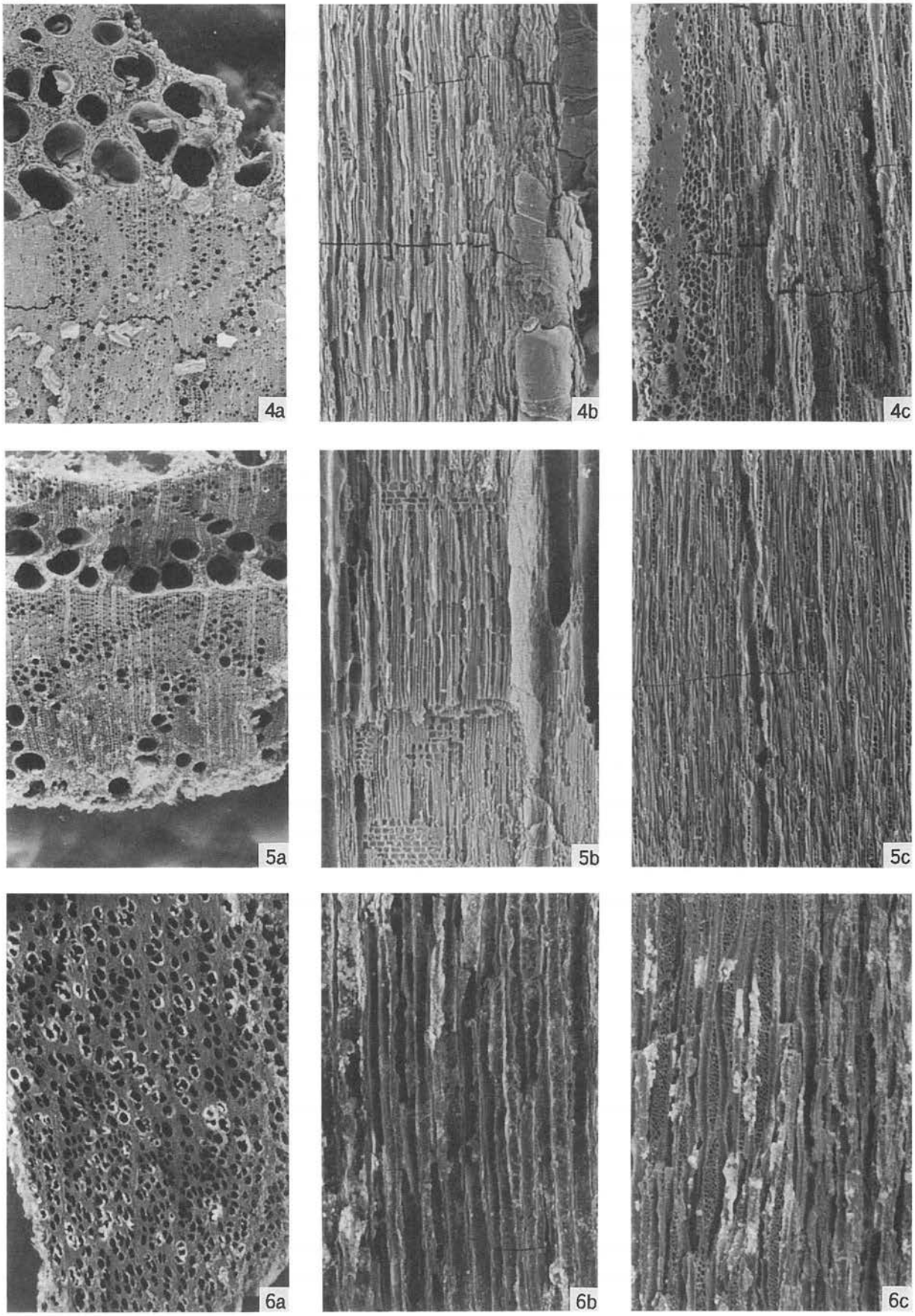
図版1　炭化材(1)



1．ヒノキ属（PH-07　覆土内炭化材　No12）
2．オニグルミ（PH-12　覆土内炭化材　No19）
3．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（PH-04　覆土内炭化材　No14）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

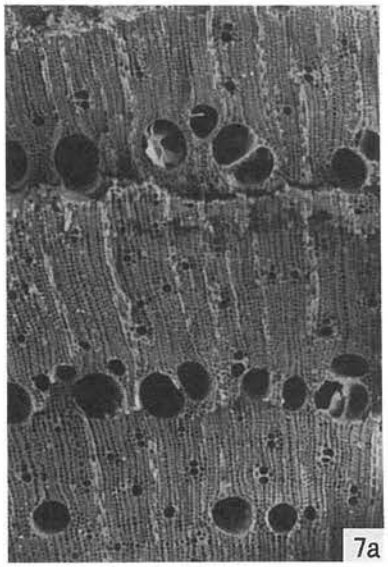
図版2　炭化材(2)

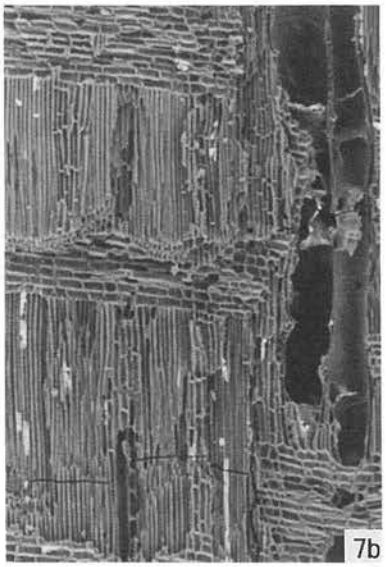


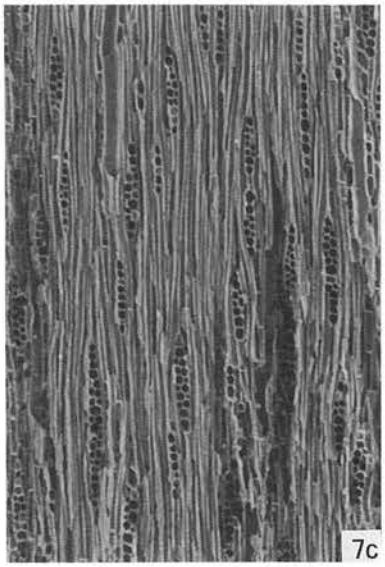
4．コナラ属コナラ亜属クヌギ節（PH-04　覆土内炭化材　No.11）
5．クリ（SK306　土坑覆土内炭化材）
6．サクラ属（PH-03　カマド覆土内炭化材）
a：木口，b：柾目，c：板目

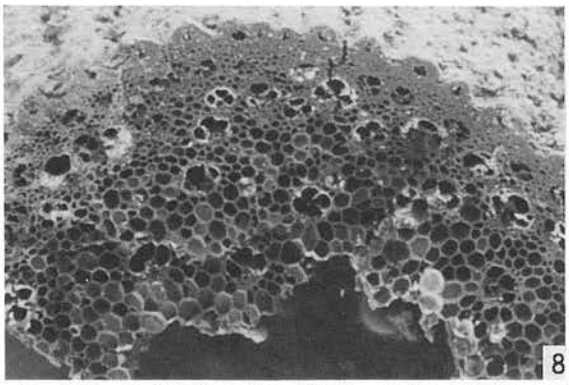
200μm：a
200μm：b，c

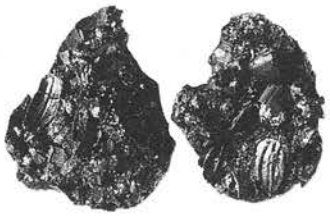
図版3　炭化材・種実











7．トネリコ属（SK293　土坑覆土炭化材）　a：木口，b：柾目，c：板目
8．イネ科タケ亜科（PH-04　覆土内炭化材　№3）　横断面
9．イネ（SK306　土坑覆土炭化物）
10．モモ（竪穴状遺構）

200μm：7a，8
200μm：7b，7c
1cm：9－10

第9章　ま　と　め

縄文時代

縄文時代で注意されるのは、縄文時代草創期に位置づけられる有舌尖頭器である。茅ヶ岳山麓では神取遺跡で草創期の居留地らしい遺物のまとまりが調査されているが、それとほぼ同じ頃の遺物と考えておきたい。神取遺跡とは遺物の量、種類が全く異なり、わずかに有舌尖頭器1点、剥片数点が出土していることから、神取遺跡と比較してさらに短期的な遺跡利用がなされたと考えておきたい。剥片類については草創期と限定することができないが、第4図10、11などはその可能性が高いと考える。有舌尖頭器のみの出土ではないことから、ごく短期的で、かつ狩猟活動の一環として利用されたにせよ、本遺跡が単なる狩猟場ではないことを想定しておきたい。

茅ヶ岳山麓に限らず、平安時代の集落と縄文時代の集落の立地が重複することは多い。下大内遺跡でも縄文時代の遺物が僅かながら出土している。ただし、本報告のごとく遺構は全く確認されていない。未調査域に遺構が存在する可能性もあるが、茅ヶ岳山麓における縄文時代遺跡の状況と比較して、本遺跡では遺構をともなうような利用は行われていなかったと考えておきたい。

弥生時代

弥生時代の遺構では225号土坑が1基のみ検出された。ほぼ完形の条痕紋系広口壷を埋納していた土坑は、山梨県内では初出例といってよく、出土当時から話題となり、広口壷は現在、県文化財に指定されている。

225号土坑を検討するにあたって、調査者には条痕紋土器そのものを論ずる力量がないため、遺構の性格に限定して考えたい。

前述の報告のとおり、土坑にはほぼ完形の広口壷1個体を立位で安置し、2別個体の器片で蓋状に覆って埋納してある。壷内底部近くには僅かだが焼土が検出され、土坑底部からは粘板岩製打製石斧1点、黒曜石剥片が出土している。人骨等は検出されなかったが、弥生時代前半の墓制に関連した遺構と推測される。

山梨県内では、甲府盆地西部を縦断するバイパス道の建設にともなう発掘調査により、弥生時代前半の内容が徐々に明らかになりつつあるが、方形周溝墓以前の墓制については、山梨県内は依然、不明な点が多い。一方、東海地方から東北地方南部では、土坑に土器を埋納する再葬墓が、方形周溝墓成立以前の墓制として知られている。東海地方では条痕紋系土器を用いた単棺型壷棺再葬墓が、また東北地方南部では複棺型壷棺再葬墓が多く、その成立経緯と系統が異なるとされている（設楽1994）。下大内遺跡225号土坑は、これらの単独あるいは複数の大型壷形土器を、多くの場合立位で土坑に埋納する再葬墓に類似する点が多く、再葬墓との判断が許されよう。

山梨県内の、弥生時代前期末から中期初頭にかけての墓制に関連する事例では、北巨摩郡大泉村寺所遺跡2号土坑、5号土坑、6号土坑（新津、八巻1987）、北巨摩郡明野村中村道祖神遺跡93号土坑（大森1990）、東八代郡中道町菖蒲池遺跡31号土坑ほか6基の土坑（森原1993）が挙げられる。

これらの事例では、立位の大型壷形土器の埋納はみられないが、条痕紋系土器の破片が礫などとともに出土している。さらに、寺所遺跡2号土坑の灰、焼土の検出、石鏃の出土、菖蒲池遺跡の黒曜石製石鏃や剥片、粘板岩製の打製石斧状石製品の出土（註2）が注目される。これらが下大内遺跡225号土坑に類似する要素と考えれば、弥生時代前半には、単棺型壷棺再葬墓と併行して土坑墓が墓制として存在していたことが推測されよう。

平安時代

2号住居出土の墨書土器について

2号住居から「女」の墨書のある土器が出土している。同一文字が同一遺構から一括して出土している近隣の

事例は北巨摩郡大泉村寺所遺跡２号住居跡、12号住居跡、25号住居跡の「福」あるいは「口」の墨書、13号住居跡から出土した「福」の墨書26点、韮崎市後田遺跡Ｃ区１号住居跡の「子」、高根町東久保遺跡８号住居跡の「家」、武川村宮間田遺跡42号、43号住居跡の「生」の墨書などが知られる（平野1992、山下1994）。

こうした墨書土器の集中が意味するところについて、調査者は門外漢のため、特定の意見を述べることはできない。そこで２号住居の墨書土器の出土状況について気付いた点を述べたい。

２号住居から出土した墨書土器は破片まで含めて総数30点で、「女」と墨書されていることが判読できるものが10例以上はあろうか。これらの出土状況について気付く点は、完形に近い個体がカマド周囲に集中する傾向にあることである。これらカマド周辺出土の完形個体については２号住居に直接関連するものと考えてよかろう。

一方、覆土中からも墨書された土器小破片が出土している。住居竪穴のかなりの部分を削平されている遺構であるため、これら破片資料が覆土中に埋没した当初から破片であったのかは推測すら許さないのであるが、そのすべてが当初完形に近い個体であった可能性も低いように思われる。

当初より完形ではなく、しかも覆土中に埋没した土器片は、２号住居と直接関連しない、つまり他の遺構に生活した人々により投棄、廃棄された遺物と考えられる。「女」と墨書された土器が当初から２号住居に集中して存在していたことと、他遺構から２号住居にのみ集中して投棄、廃棄されたことの意味の違いは大きいように思われる。ちなみに本書に報告したとおり、２号住居以外の住居跡からの墨書土器の出土はごく僅かで、しかも「女」と墨書された例は皆無である。

土坑群について

本遺跡で検出された土坑群について、調査に携わったものとして気付いた点を述べてみたい。土坑、ピットは多数検出され、すべてが同一の機能、性格を有するとは考えられ得ない。ここでは第１～４号土坑群とした土坑の集中域で検出された土坑について考えたい。

まず、土坑覆土は土坑観察表中で記録なしとして空欄になっているものも含めて、しまりのない黒褐色ないし黒色土に地山起源と思われる黄褐色系土の粒子が均一に混じり、一部には炭、焼土粒子が混在するものがほとんどである。この覆土の様相は、大半の土坑が、時期差は当然あろうが、同じ過程で埋没した可能性が高いことを示唆する。土坑断面形状はおおむね垂直に立ち上がるものと若干袋状になるものとがある。この形状の違いが示すところについてはよく分からない。

第７章に報告した２土坑より採取した土壌のリン・カルシウム含有量の分析では、動物性の物質、たとえば人間の遺体などに起源するリン・カルシウムの顕著な富化について二通りの見解が示されている。発掘中には人骨、骨粉の検出は皆無であった。遺跡が立地する茅ヶ岳山麓の火山灰性土壌が強い酸性を示し、人骨の残りが悪いことに作用している可能性もあろう。

個々の土坑の大きさにもある傾向がみられるように思う。すなわち、土坑はおおむね円形で、その径は90cm、100～110cm、120cmほどの３種が多い。この大きさの集中は、土坑の機能と大きく関連するものと予想される。仮に土坑を墓穴とした場合、子供、成人女性、成人男性などに対応したものか、あるいは棺として用いられた製品の規格に対応したものの可能性もあろう。

土坑群から出土した遺物はごく断片的なものばかりであるが、平安時代の土師器の小片、灰釉陶器の小片、須恵器の小片、平安時代末から中世にかけてのものと思われる土師質土器の小片などのほか、北宋銭を主とする古銭の出土も注目される。同じ明野村内の中村道祖神遺跡は中世とされる地下式土坑と土坑170基が集中して検出されている。これらの土坑からは銭貨の他、15世紀から17世紀頃に位置づけられる土師質土器皿、内耳土器、白磁皿などが出土している。銭貨は14基の土坑から51枚が出土しており、出土する場合は４～６枚程度の複数枚出土

する傾向がある。

本遺跡土坑群での銭貨出土状況は、１号竪穴遺構で３枚、他は55号、297号土坑から１枚ずつの出土がみられた。１号竪穴遺構は固くしまった床面の存在や、周囲の土坑の状況から削平された地下式土坑とは考えられないから、中村道祖神遺跡と対比できる事例は、２基の土坑と２枚の銭貨のみとなる。

このように本遺跡出土の銭貨は少数で、統計的意味合いから論ずることは難しいが、あえて推論するならば、いずれも北宋銭であり、中世後半から戦国時代にかけて大量に日本に搬入された「洪武通寶」「永楽通寶」が皆無である点は、土坑群の時期を推定する手がかりになるものと考える。中村道祖神遺跡での、170基の地下式土坑と土坑から出土した近代以前の銭貨が51枚中、13世紀以降の銭貨は11枚で、25.6％の出現率となっている。本遺跡における５枚の銭貨のうち１枚は13世紀以降の銭貨であってよい確率である。ただし、中世と判断される中村道祖神遺跡の土坑群のうち41号土坑では５枚の出土銭貨いずれもが11世紀に初鋳年代をもつもので占められている。宋銭が日本に本格的に流入するのが12世紀中頃以降で、墓坑に副葬され始めるのは12世紀後半からのことであるという（註３）。

以上の点から、調査者としては確信を持てないながらも、これら土坑群を平安時代末から中世初頭にかけての墓穴群と位置づけてみたい。しかしながら、下大内遺跡の新しい時期の銭貨が無いことを過大に評価することには慎重であるべきとも考える。

一方、一見無秩序に土坑が集中する第１土坑群、第２土坑群と、土坑列が形成されている第３土坑群、第４土坑群の差が何かを示唆するものと思われる。この点については、本遺跡の集落変遷とも関連させながら、検討すべきと考えるが、調査者の力量の及ばない事項であるため、専門研究者の見解を待ちたい。

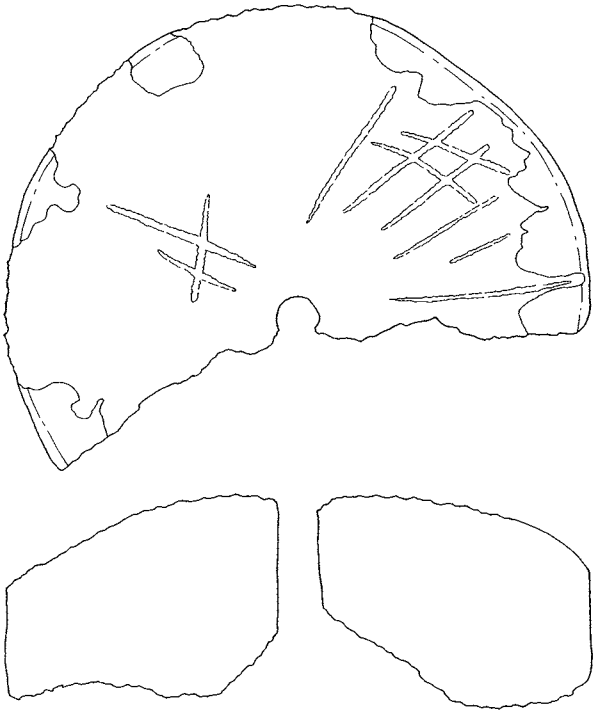
註

註１　明野村誌編纂委員会　1996　『新装　明野村誌』明野村役場
註２　森原明廣氏のご教示による
註３　国立歴史民俗博物館編　1997　『お金の玉手箱－銭貨の列島2000年史－』

引用参考文献

大森隆志　　1990　『中村道祖神遺跡　明野村文化財調査報告５』明野村教育委員会
設楽博巳　　1994　「壷棺再葬墓の起源と展開」考古学雑誌79巻4号
新津健　八巻与志夫　1987　『寺所遺跡』山梨県教育委員会
平野　修　　1992　「山梨県内の墨書土器と線刻土器」『研究報告』第４集　帝京大学山梨文化財研究所
森原明廣　　1993　「菖蒲池遺跡」『年報９』山梨県埋蔵文化財センター
山下孝司　　1994　「墨書土器に関する一考察」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会

屋敷添第２遺跡



第１章　遺跡をとりまく環境

地理環境（第１図）

屋敷添第２遺跡は茅ヶ岳山麓西端に塩川が形成した河岸段丘面上に位置する。南北に涸れ沢と思われる谷がはしり、遺跡はその中間の尾根状に位置する。遺跡の標高は第１調査区が481ｍ、第２調査区が490ｍほどである。付近には点々と湧水があり、近世以降の集落中にみられる井戸も10ｍ程度の浅いものが多い。平安時代にあってもそうした湧水が利用できたのであろう。

歴史環境

周囲の平安時代の集落では、北側の谷を越えた隣接尾根上に屋敷添遺跡がみられる。屋敷添遺跡は平成３年度に県営圃場整備事業にともない発掘調査が行われ、配石遺構をともなう縄文時代集落とともに平安時代の集落跡が発見されている（本書『下大内遺跡』第１図参照）。本遺跡から東へ約１㎞には縄文時代中期末の集落遺跡である駒飼場遺跡がある。

第２章　調査に至る経緯

平成８年度に県営圃場整備事業明野地区屋敷添第２工区の施工が計画され、事業主体の峡北土地改良事務所より埋蔵文化財の有無に関する照会があった。そのため、明野村教育委員会では平成７年度に工区116,000㎡を対象に、試掘調査を実施した。

試掘調査では、前述の屋敷添遺跡に隣接する尾根と、屋敷添遺跡南の谷部が工区に含まれることから、縄文時代の水場遺構あるいは平安時代の集落遺跡の存在が予想された。また、工区内に所在した水田を造成した際に縄文時代の遺物が出土したともいう。

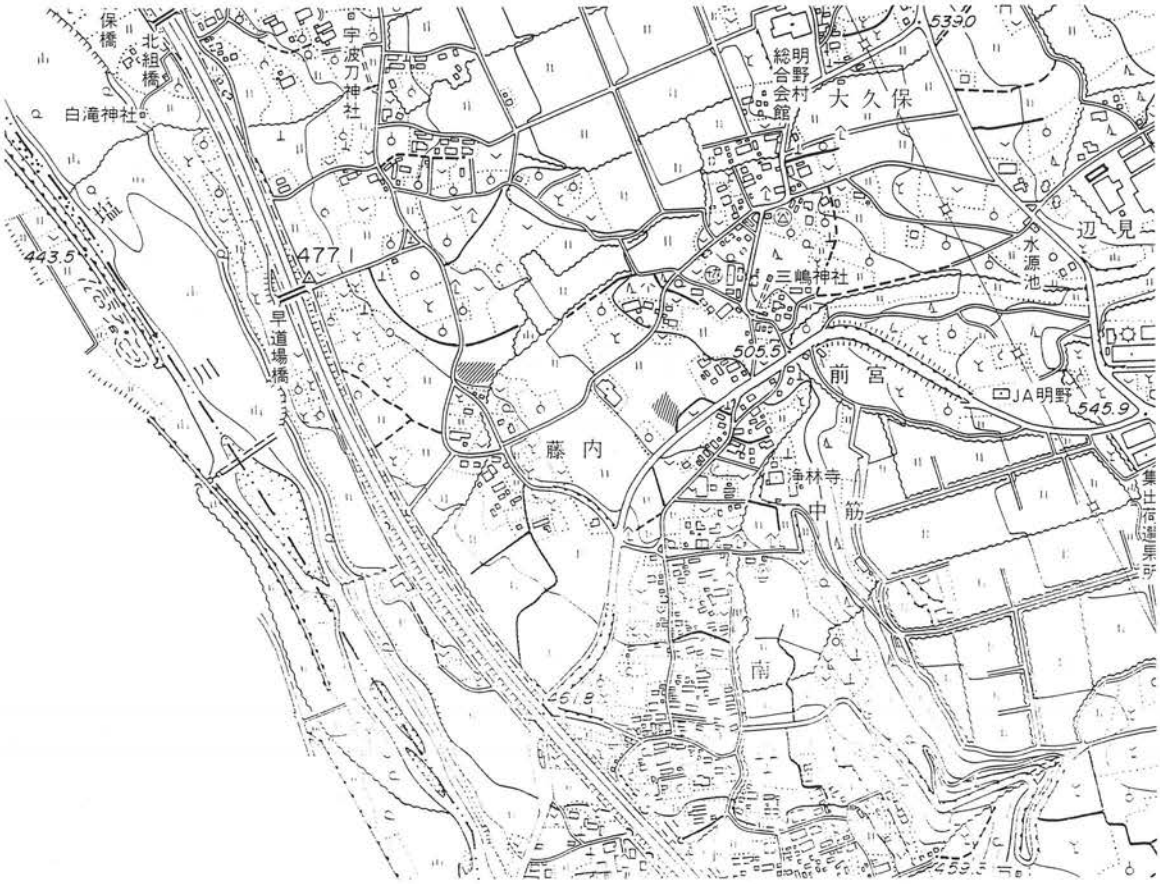
試掘調査の結果、各所で縄文時代と平安時代の遺物が出土した。しかし、縄文時代の遺物はすべて磨耗が激しく、屋敷添遺跡あるいは駒飼場遺跡から谷を流れて埋没した遺物であることが推測された。実際、試掘調査では縄文時代の遺構を確認することはできなかった。また、平安時代の遺物は完形に近い坏などが発見されたが、過去の水田造成の際にかなりの削平を受けているらしいことが判明した。また、本書で第１調査区としている区域からは、時期不明のピット群が発見された。

こうした試掘調査の結果を受け、明野村教育委員会では峡北土地改良事務所と工事施工前の埋蔵文化財発掘調査計画について協議し、調査面積16,000㎡、調査経費は11,430,000円（含む整理・報告書印刷製本費）とし、調査経費負担協定を締結した。

発掘調査は平成８年７月３日、重機による遺跡の表土剝ぎ作業から開始した。先述のとおり、試掘調査では多量の遺物が出土していたものの、特に縄文時代の遺構の存在については可能性が低かった。平安時代の集落についても削平を免れ、遺構が残存している範囲はそう広くはないことが予想されていた。そこで、調査面積の大半は、重機による表土剝ぎ作業と並行して、重機によりトレンチを設置し、遺構確認をあわせて行った。第１調査区、第２調査区として設定された発掘調査区は、試掘調査とこのトレンチ調査の結果、設定したものである。

遺構精査は７月22日より第１調査区から開始し、７月31日第１調査区の調査を終了した。第２調査区は８月１日に調査開始、９月16日調査を終了した。

発掘調査では各調査区内に４級基準点２点ずつを設け、光波測量器を用い遺構、遺物の位置を記録した。遺物の出土地点は全点を記録した。遺構は数が少ないことを予想し、航空写真測量は行わず、簡易遣り方、平板を用いて実測した。



第1図　遺跡位置図(1/10,000)

第2図　第2調査区全体図(1/400)

発掘調査の途中9月8日には、山梨県農務部主催の「ふるさと探検隊」行事の一環で、本遺跡の見学会と体験発掘会が行われた。この行事は親子で参加し、村内の土地改良事業に関連する施設、工事現場などをめぐりながら、水質調査などを行い、自らの郷土を知ろうという趣旨で実施され、20組の親子の参加をみた。参加した子供たちにとっては、調査担当者の説明よりも、平安時代の住居跡から実際に出土する土師器がはるかに雄弁であったようである。

調査記録と出土遺物の整理は調査終了後より開始され、平成9年3月31日に報告書の刊行をもって終了した。

第3章　平安時代の遺構と遺物

平安時代では、第2調査区で2軒の竪穴住居跡が検出された。

1号住居跡（第3図～6図、写真図版34、35）

大きさ　3.57m×4.1～4.6m　面積　14.7m²

付属施設　なし

調査所見

竪穴掘り込みは10cmほど残るのみで、覆土断面の観察はできなかった。覆土はおおむねしまりのない黒褐色土である。遺構北西部は水田のため削平され確認できなかった。

床面は壁際を除きほぼ全面にわたって固く踏みしめられた面が検出された。

カマドは住居南東角に位置する。被熱痕のある礫、掘り込みが検出されたが、焼土はみられなかった。

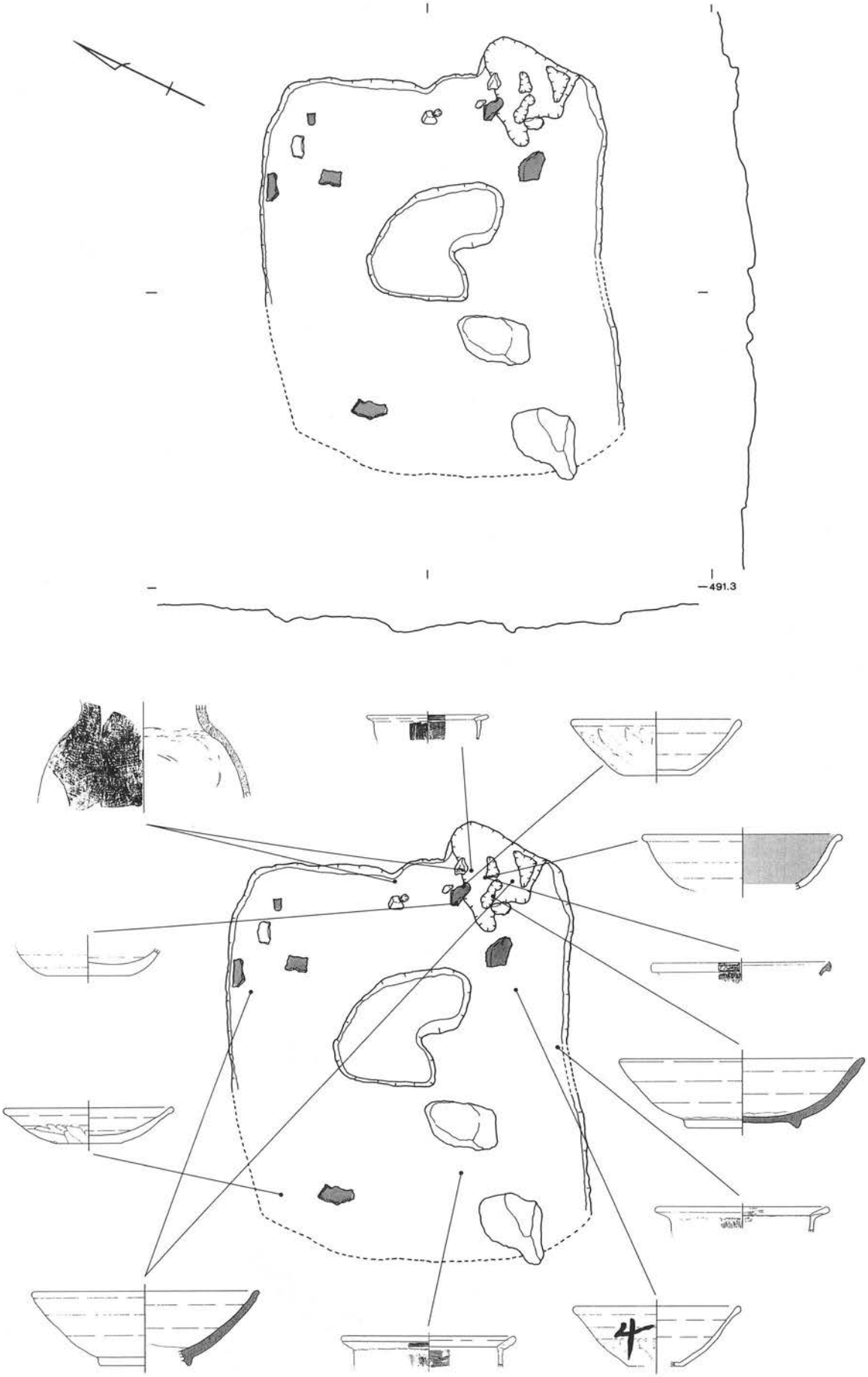
周溝、柱穴は検出されなかった。

住居中央に不定形のくぼみが検出された。覆土は住居覆土と同様で、上面に住居床面はみられない。遺物は出土しなかった。

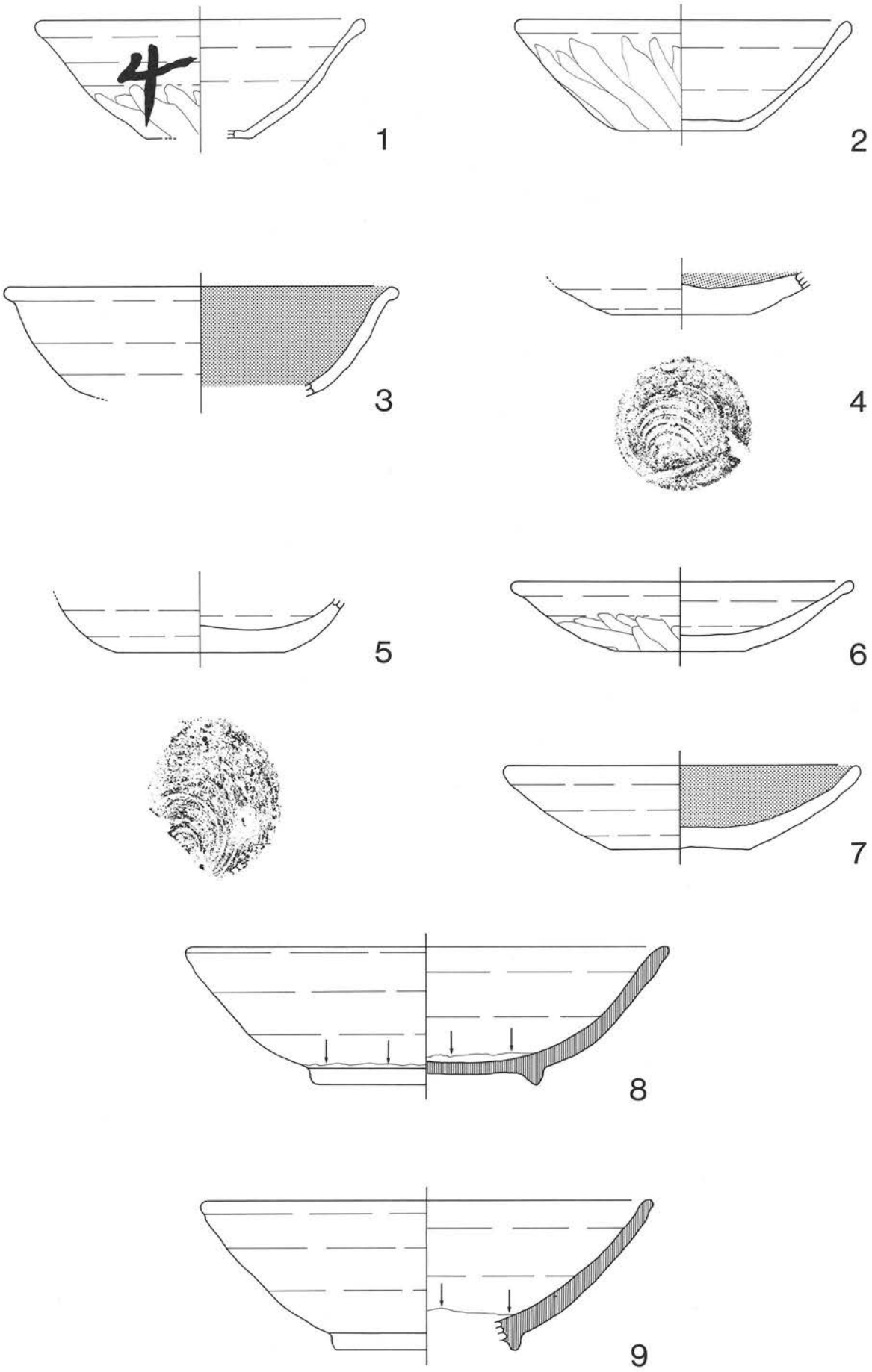
遺物はカマドに集中する。

1号住居出土遺物表

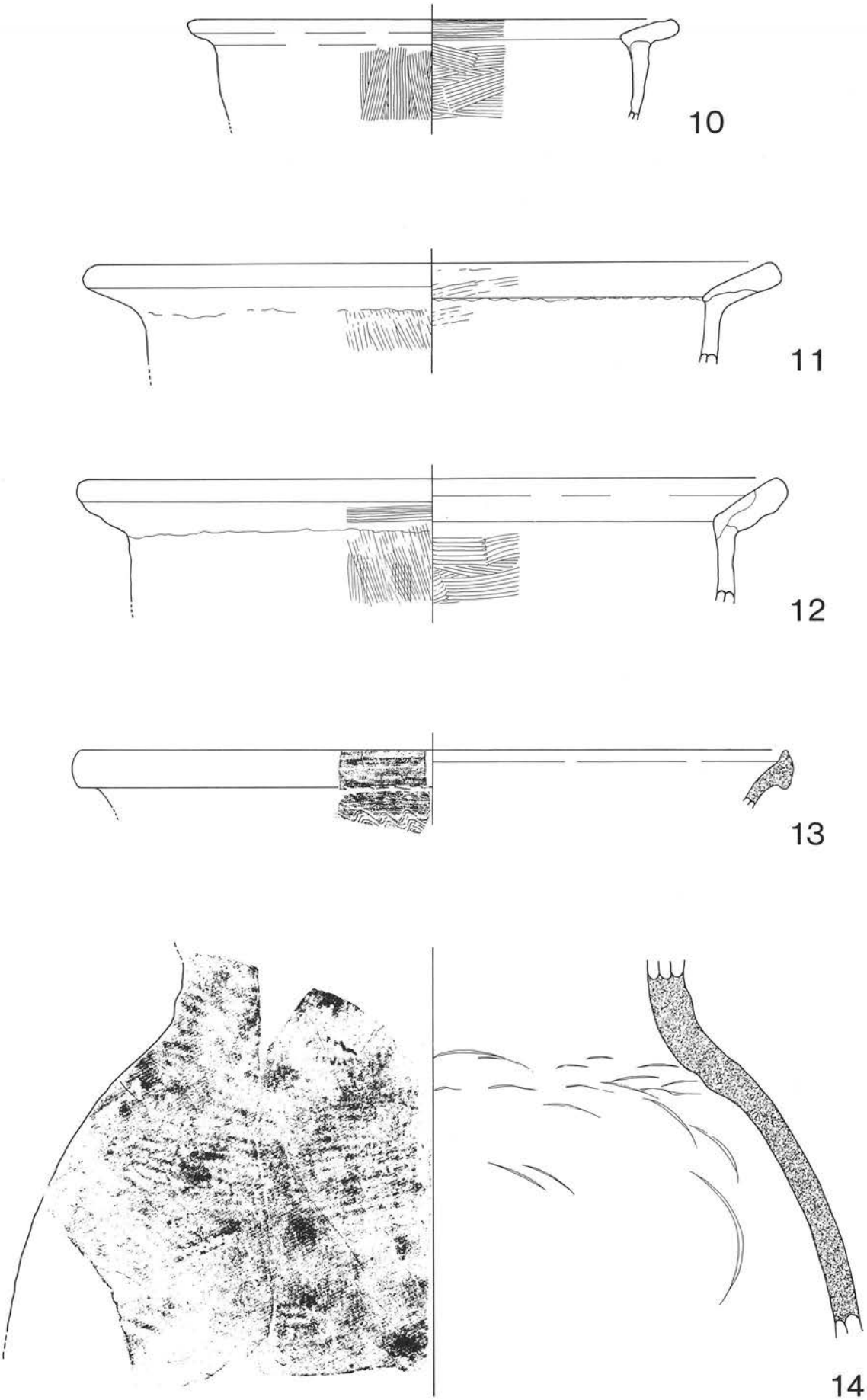
図版番号	大きさ(口径・器高・底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第4図1	11.6cm	1/3	A 2	「千」墨書あり
2	12.9cm,4.0cm,4.6cm	1/5欠損	A 1	
3	14.9cm	1/6	C 3	
4	4.9cm	底部小片	C 1	
5	6.1cm	底部小片	D 3	
6	12.0cm,2.5cm,4.6cm	1/3	A 1	
7	12.6cm,3.0cm,4.8cm	1/6	C 2	
8	17.1cm,4.9cm,8.1cm	1/4		鉱物粒子が目立たない緻密な粘土　7.5Y7/1灰白色
9	16.0cm,5.3cm,6.6cm	1/2		鉱物粒子が目立たない緻密な粘土　7.5Y7/1灰白色
10	17.1cm	口縁部小片	B 1	
11	24.3cm	口縁部小片	B 1	
12	24.8cm	口縁部小片	B 1	
13	25.1cm	口縁部小片		長石粒子が混じるややキメの粗い胎土　N6/1灰色
14		胴部小片		長石、雲母粒子が混じるややキメの粗い胎土　5Y6/1 生焼けの須恵器



第３図　１号住居跡(1/60)・遺物分布図



第４図　１号住居跡出土遺物(1/2)



第５図　１号住居跡出土遺物(1/2)

2号住居跡（第7図～12図、写真図版35）

大きさ　不明　　面積　不明

付属施設　なし

覆土土層　地山　しまった黄褐色土（10YR5/6）
1層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）
2層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）
3層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）に黄褐色土粒子（10YR5/6）が30％混じる
4層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土粒子（10YR5/6）が5％混じる
5層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土粒子（10YR5/6）が5％混じる。炭、焼土粒子が混じる
6層　ややしまった黒褐色土（10YR3/2）に黄褐色土粒子（10YR5/6）が10％混じる。炭、焼土粒子が混じる
7層　ややしまった黄褐色土（10YR5/6）
8層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）
9層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）
10層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）
11層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）
12層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）
13層　しまりのない黒褐色土（10YR2/2）に黄褐色土粒子（10YR5/6）が5％混じる
14層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）
15層　黄橙色土（10YR7/8）に黒褐色土（10YR3/2）が40％混じる
16層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）に黄褐色土粒子（10YR5/6）が10％混じる
18層　しまりのない黒褐色土（10YR3/2）
19層　黒褐色土（10YR2/2）に炭、焼土粒子が40％混じる

調査所見

遺構西半は造田のため削平されている。2軒の住居が切り合っているようにもみえたが、確認面では判断できなかった。覆土断面8層の立ち上がりが、2軒の住居の切り合い部である可能性もある。

床面は一部に固くしまった面が検出できたのみである。地山に大小の礫が数多くあり、住居構築時にそれらの礫を抜いたらしく、床はしまりがなく掘り方まで下げるとでこぼこになってしまった。

カマドは東壁南寄りに位置する。被熱礫、焼土、炭粒子が検出された。掘り込みは確認されなかった。このカマドと考えられる部分の前には焼土と炭がかなりまとまって検出された。住居南側の張り出し部にも被熱礫と僅かなくぼみが検出され、これが別住居のカマドになる可能性もある。

周溝は北壁沿いに不連続に溝が検出されたが、礫の抜き取りによる凹凸が激しく、周溝かどうか定かではない。

柱穴は検出されなかった。

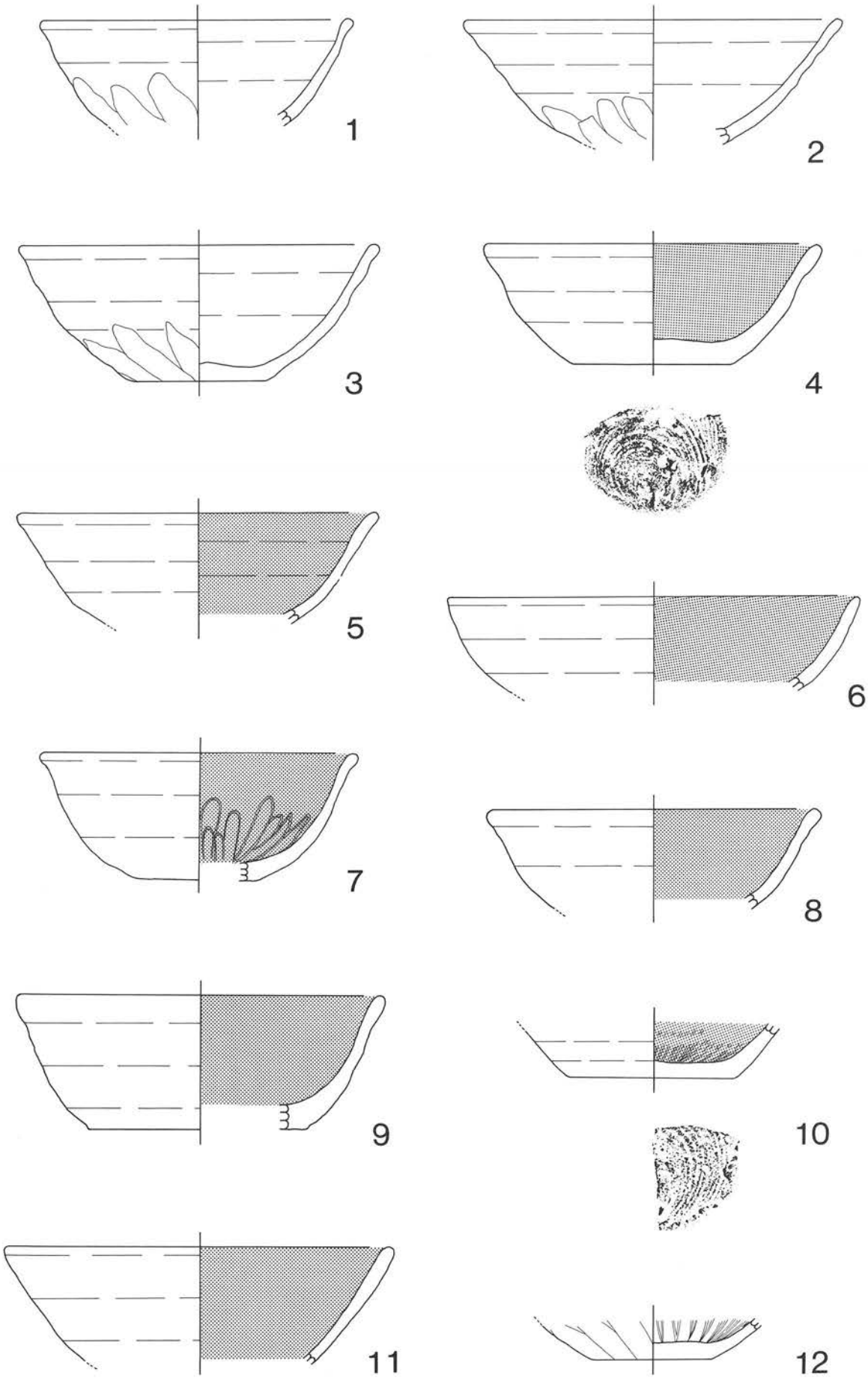
遺物は全面から出土しているが、完形に近い個体がカマド前部に多い。

2号住居出土遺物表

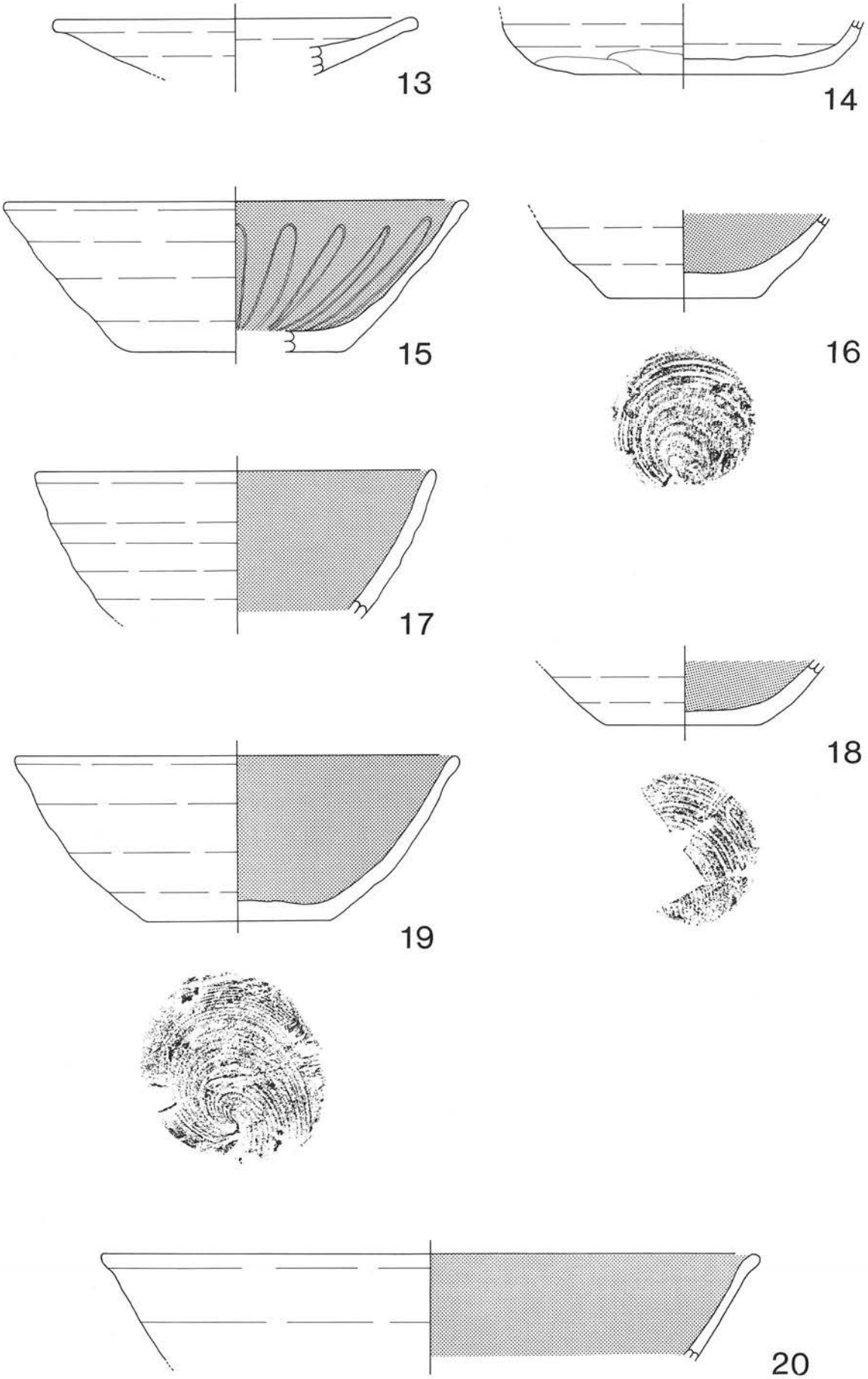
図版番号	大きさ(口径・器高・底径)	遺存状態	胎土質	観　察　所　見
第8図1	11.2cm	1/5	A 1	
2	13.3cm	1/6	A 1	
3	12.7cm,4.8cm,4.8cm	1/3	A 1	
4	11.9cm,4.3cm,5.6cm	1/3	C 1	
5	12.8cm	口縁部小片	C 2	
6	14.6cm	口縁部小片	C 2	
7	11.2cm	1/6	C 2	
8	11.8cm	1/5	C 1	
9	13.1cm	1/6	D 2	
10		底部小片	D 3	

第6図　1号住居跡遺物分布図

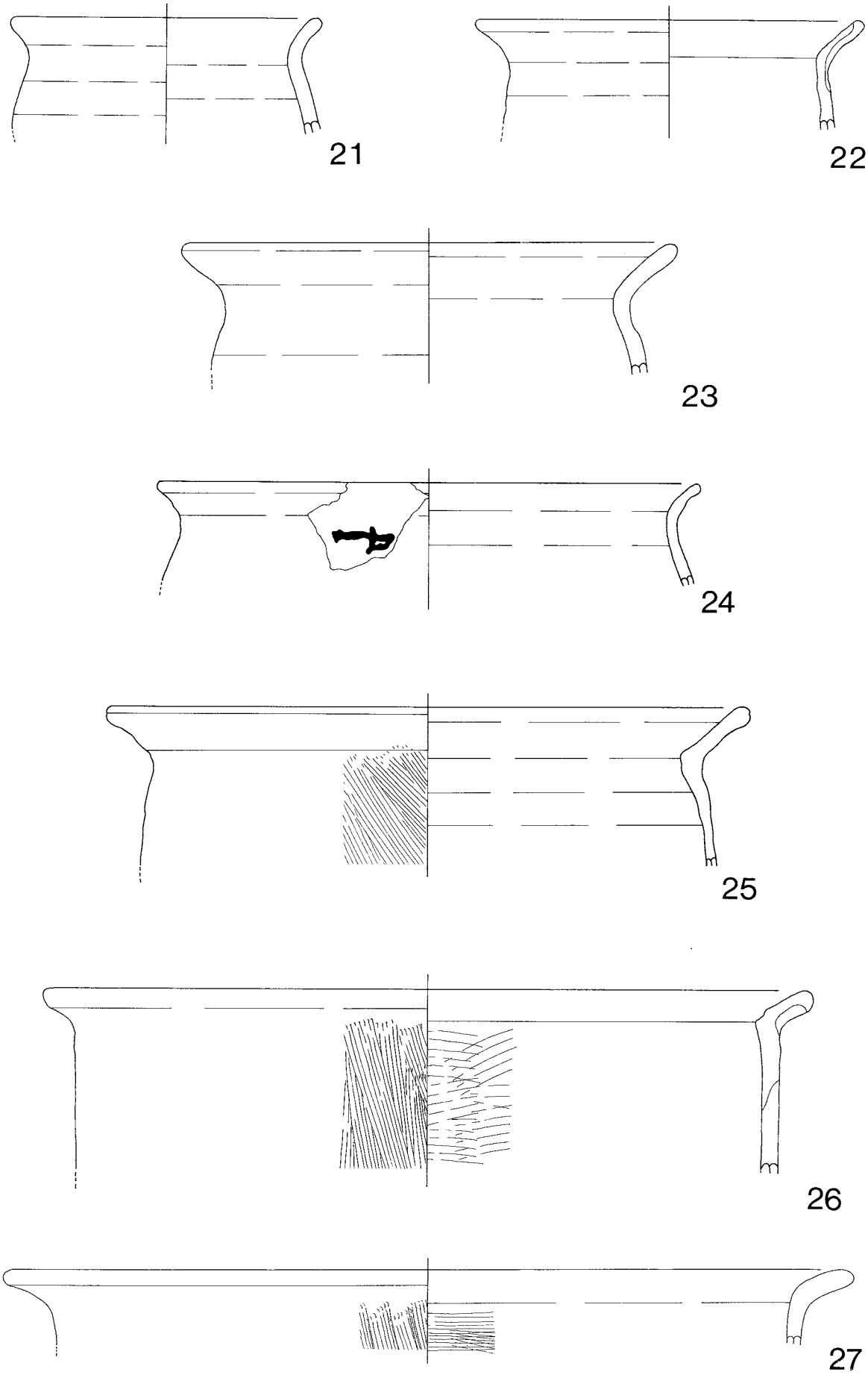
第7図　2号住居跡(1/60)



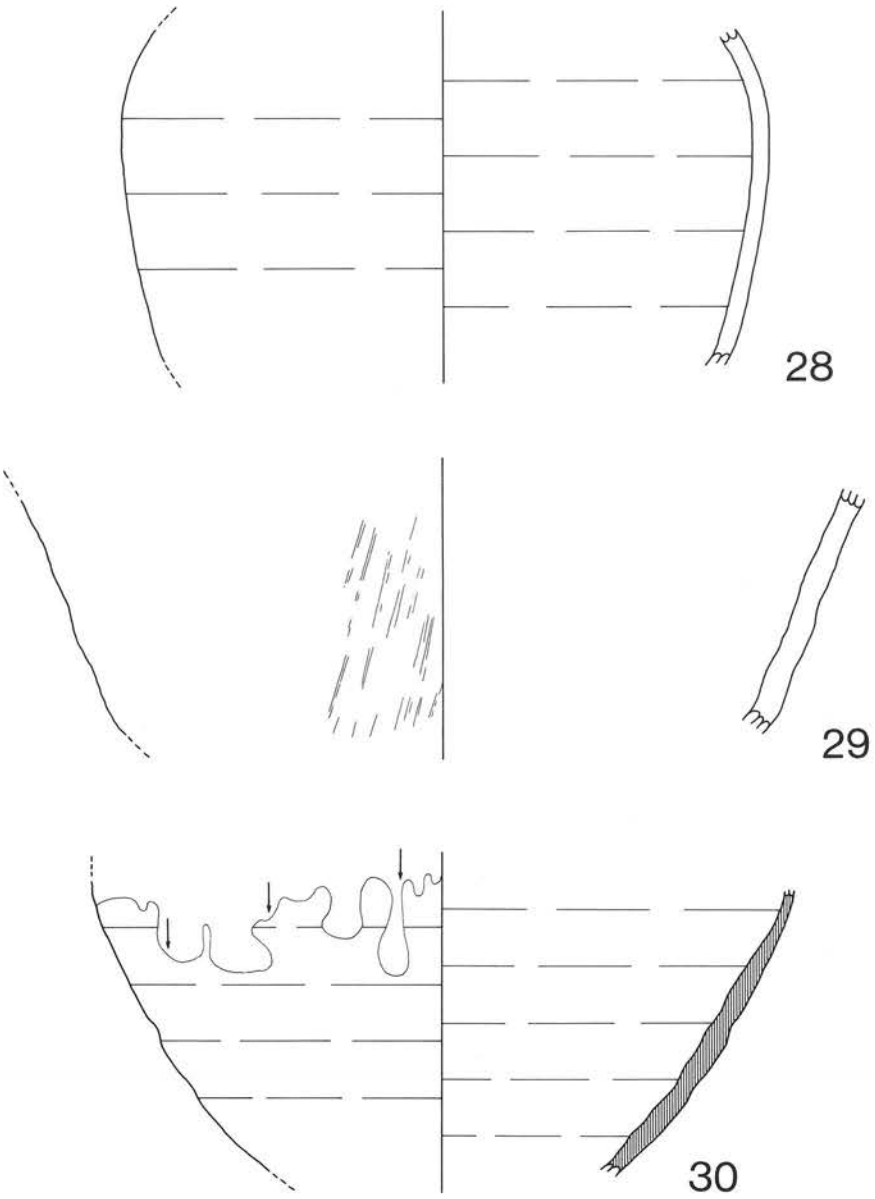
第8図　2号住居跡出土遺物(1/2)



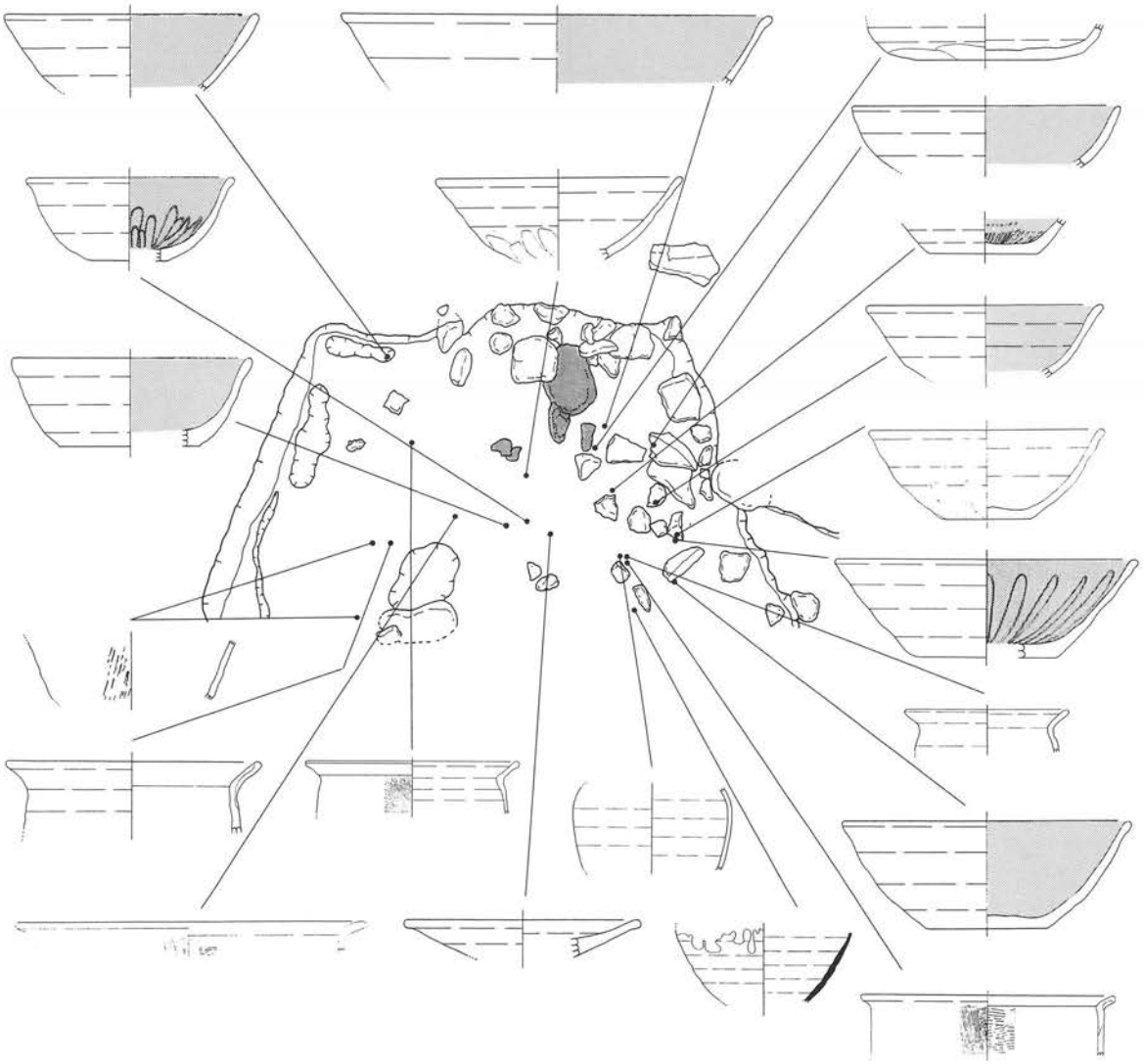
第9図　2号住居跡出土遺物(1/2)

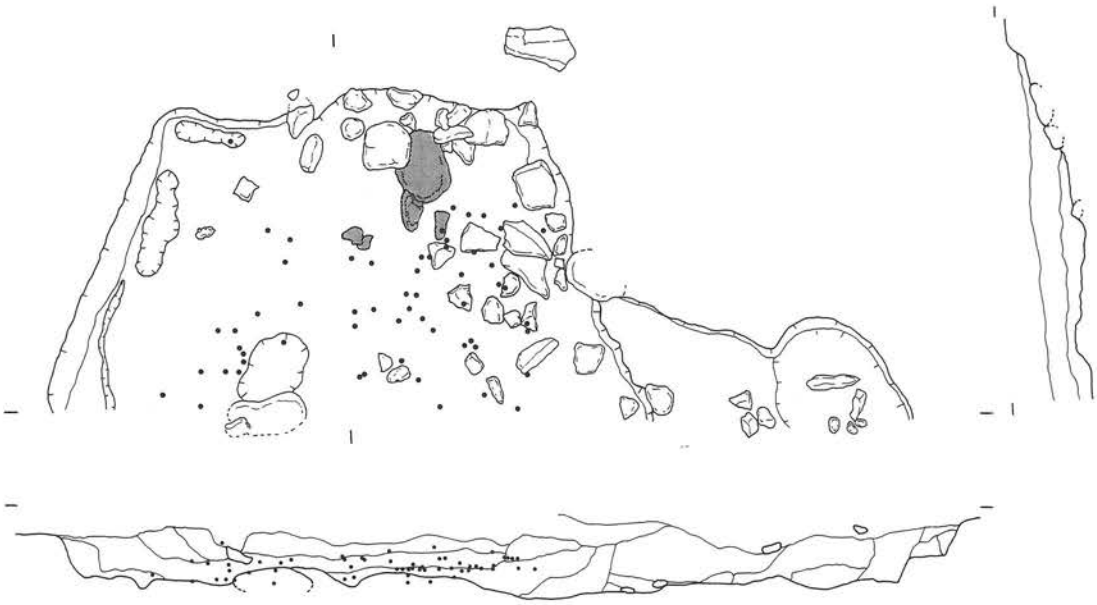


第10図　2号住居跡出土遺物(1/2)



第11図　2号住居跡出土遺物(1/2)





第12図　2号住居跡遺物分布図

11	13.8cm	1/6	C 2	
12	4.3cm	底部小片	A 1	
13	13.9cm	口縁部小片	C 2	
14	7.2cm	底部小片	A 1	
15	16.3cm,5.3cm,7.6cm	1/5	C 3	
16	5.3cm	底部小片	C 1	
17	14.1cm	口縁部小片	C 2	
18	5.4cm	底部小片	C 2	
19	15.7cm,5.8cm,6.5cm	3/2	C 2	
20	23.2cm	口縁部小片	C 2	
21	11.1cm	口縁部小片	D 2	
22	13.9cm	口縁部小片	D 2	
23	17.7cm	口縁部小片	D 2	
24	17.2cm	口縁部小片	D 2	
25	19.4cm	口縁部小片	B 1	
26	27.4cm	口縁部小片	B 3	
27	37.9cm	口縁部小片	B 1	
28		胴部小片	D 3	ロクロ整形甕
29		胴部小片	B 3	
30		胴部小片		鉱物粒子が混じらない緻密な粘土　7.5Y7/1　灰白色

第４章　平安時代末から中世の遺構と遺物

第１調査区からピット群が検出された。平安時代末から中世にかけての土師質土器が出土するピットもあり、ピット群を一括してここに報告する（第13図～17図、写真図版36～38）。

ピット断面の形状は次のとおりとする。

１類　ピット壁がほぼ垂直に立ち上がるもの

２類　ピット壁が袋状になるもの

３類　ピット壁が斜めになり、ピットというよりくぼみに近いもの

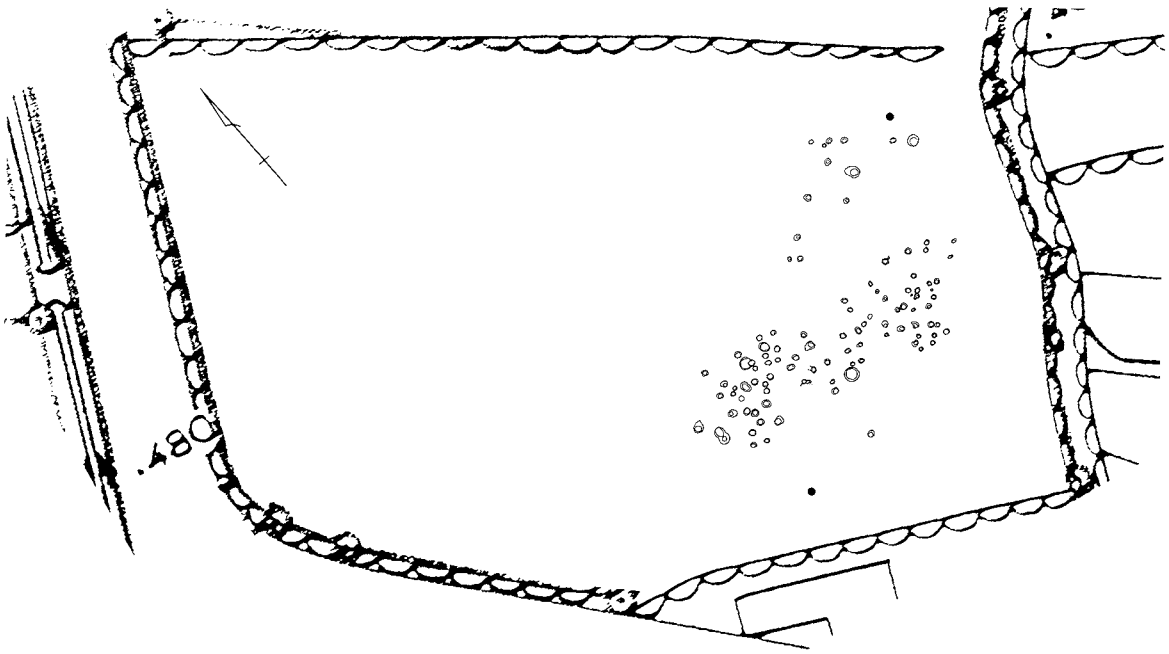
ピット調査表

番　号	長径・短径・深さ(cm)	形状	出土遺物・所　　見
1	30,27,31	1	
2	32,28,26	1	
3	42,37,22	3	
4	41,36,21	1	
5	41,39,16	3	
6	42,41,25	1	
8	27,23,23	3	
9	40,35,27	3	砥石
10	32,30,36	1	土師質坏片１点、土師質椀片14点、天目茶碗片１点

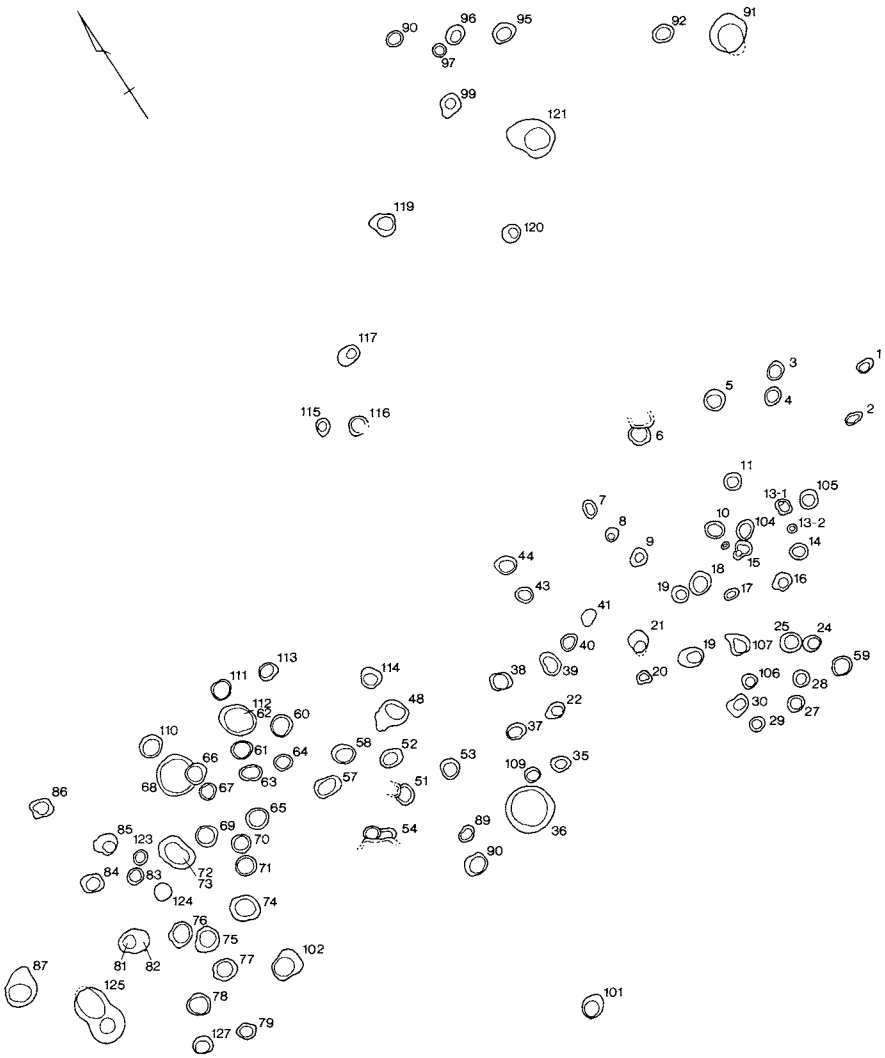
11	32,31,18	1	
13-1	44,38,43	3	
13-2	20,14,25	3	土師質土器片１点
14	55,40,42	1	
15	56,51,26	1	
16	59,57,37	1	土師質土器片１点
17	35,25,27	1	
18	53,50,29	1	土師質土器片１点
19	44,33,42	1	
20	26,25,28	1	土師質皿２点(第15図４、６)円礫１点
21	39,33,28	1	
22	50,42,58	1	土師質小皿(第15図２)ホルンフェルス剝片１点
24	33,29,38	1	土師質土器片１点
25	58,53,49	3	
27	35,26,22	1	
28	41,36,45	1	
29	35,34,39	1	
30	50,35,44	1	土師質小皿片２点、施釉陶器片２点、円礫１点
35	40,35,38	3	青磁片１点
36	71,70,69	1	
37	42,41,53	1	縄文中期土器片１点、珪質頁岩石核１点、施釉陶器１点
38	46,42,43	1	
39	40,31,30	1	土師質土器片１点
40	32,29,34	1	
41	44,43,31	1	土師質小皿器片１点
43	32,27,18	3	青磁片１点(第16図８～10)、土師質土器片１点、凹石１点、砥石１点、珪質頁岩原石２点
44	40,40,24	3	土師質土器片１点
48	70,66,30	3	内黒坏片１点、土師器片１点(磨耗激しい)
51	40,34,23	1	
52		3	青磁片１点(43号ピットと接合)、土師質土器片２点
53	42,37,29	1	
54	92,40,60	3	
57	46,46,35	1	
58	47,46,48	1	
59	49,42,46	1	
60	62,56,20	1	
61	37,37,25	1	
62	75,70,53	1	
63	37,30,20	1	
64	40,40,64	1	
65	32,32,31	1	土師器片１点(磨耗著しい)

66	40,32,20	3	
67	30,30,23	1	
68	70,62,60	1	土師質小皿片１点、白磁？片１点、染め付け磁器片１点
69	36,32,20	1	
70	32,32,36	1	
71	45,40,40	1	
72	70,70,64	1	土師器甕片１点(やや磨耗あり)
73	72号ピットと同一遺構		
74	55,28,40	3	
75	50,40,45	1	土師器片１点(磨耗あり)
76	42,40,35	1	施釉陶器片１点、天目茶碗片１点
77	27,27,43	1	土師質土器(内耳？)片１点
78	70,70,40	1	土師質小皿片２点、土師質土器片２点、珪質頁岩原石１点
79	30,30,27	1	内黒土器片１点、土師器甕片１点、内耳？片１点
80	70,70,87	1	内耳？片１点(77号ピット遺物と同一個体か)
81	67,40,78	1	内耳？片３点
82	81号ピットと同一遺構		
83	24,24,45	1	内耳？片１点、土師質土器片１点
84	48,45,49	1	
85	40,40,43	1	土師質土器片１点
86	48,43,35	1	
87	65,53,45	3	土師器片１点、内耳？片１点、黒曜石剥片１点
89	38,30,40	1	内耳？片１点
90	55,53,65	1	土師質小皿１点、土師質小皿片１点
91	65,60,55	1	
92	43,40,38	1	
95	50,48,64	1	
96	30,30,38	1	
97	24,24,26	1	
98	25,25,38	1	
99	42,40,65	1	
101	45,42,40	1	
102	70,50,70	1	土師質小皿片１点、扁平丸石５点
104	30,23,34	1	
105	65,45,58	1	土師器片２点(磨耗あり)
106	23,23,15	1	施釉陶器片１点
107	70,63,67	1	内耳？片１点、染め付け磁器片２点
108	43,43,50	1	土師質土器片１点
109	40,40,39	1	
110	51,51,33	1	
111	34,34,41	1	

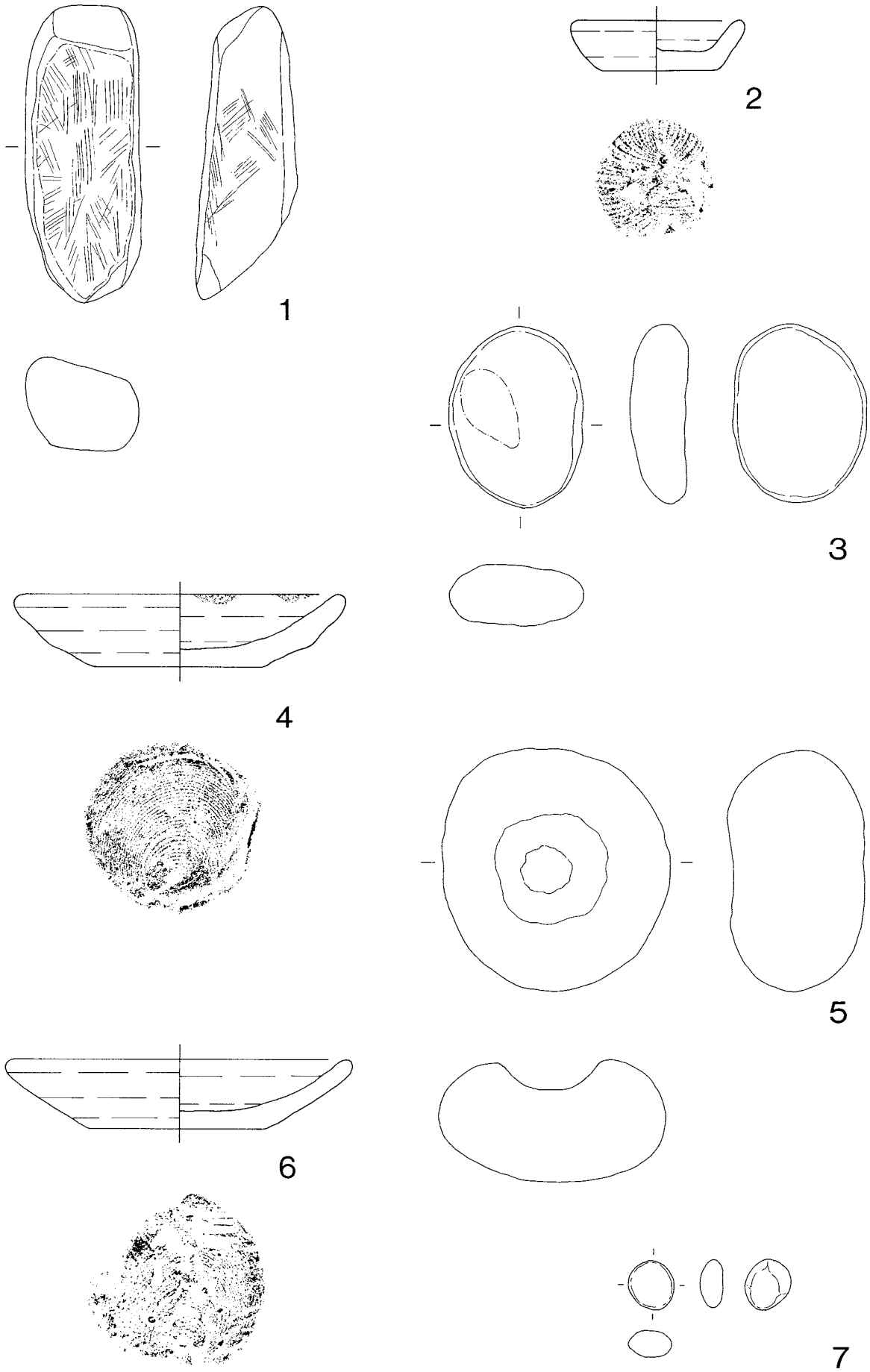
112	62号ピットと同一遺構		
113	31,31,31	1	
114	53,44,30	3	
115	24,24,19	1	
116	36,36,18	1	
117	48,48,25	3	
118	56,56,37	3	
119	44,44,34	1	
120	29,29,18	1	
121	92,77,47	1	
123	33,33,45	1	
124	37,37,25	1	
125	74,74,78	1	施釉陶器片３点、内耳片３点、土師質土器片９点、黒曜石剝片１点
127	70,70,44	1	



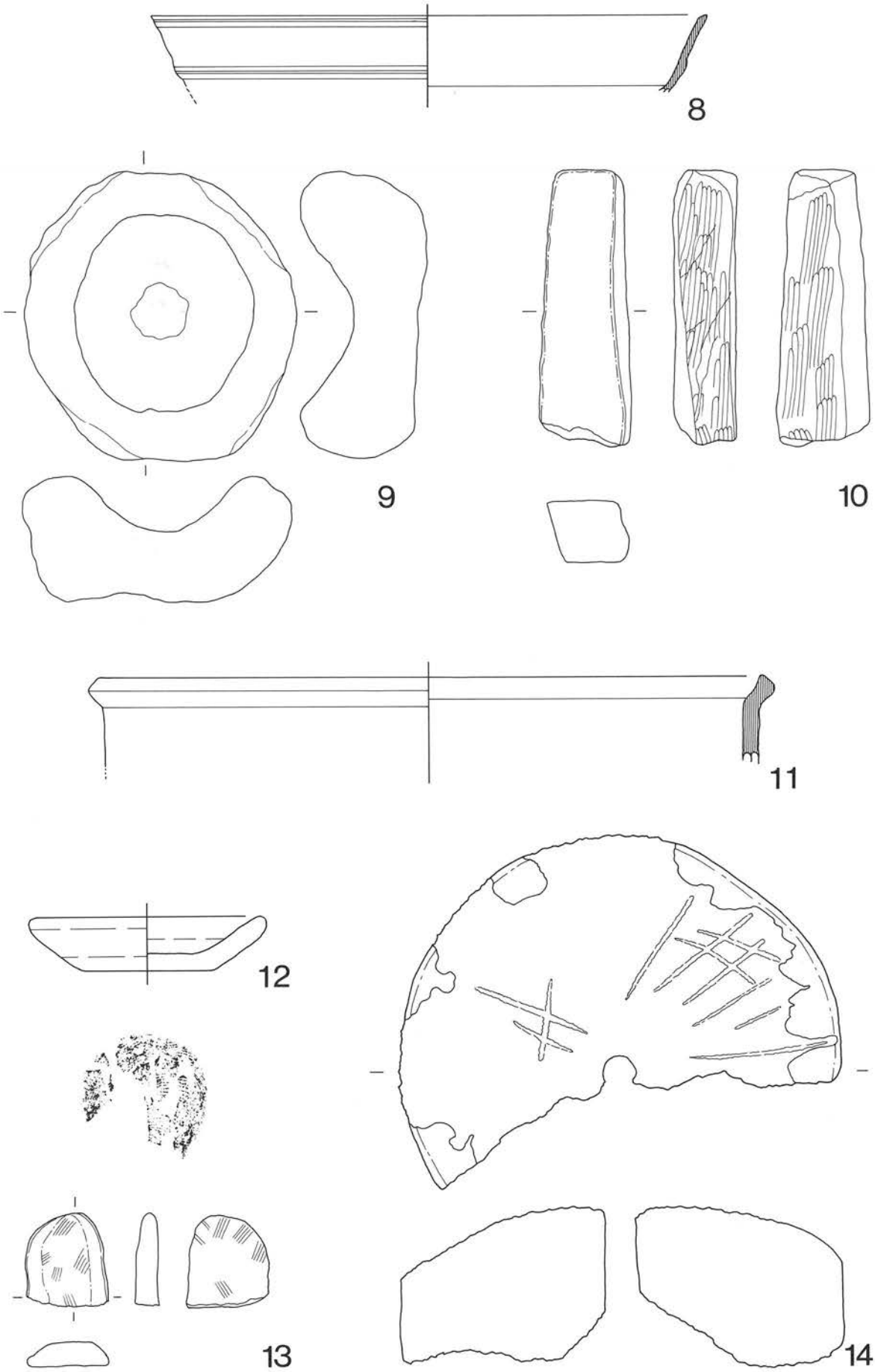
第13図　第１調査区全体図(1/400)



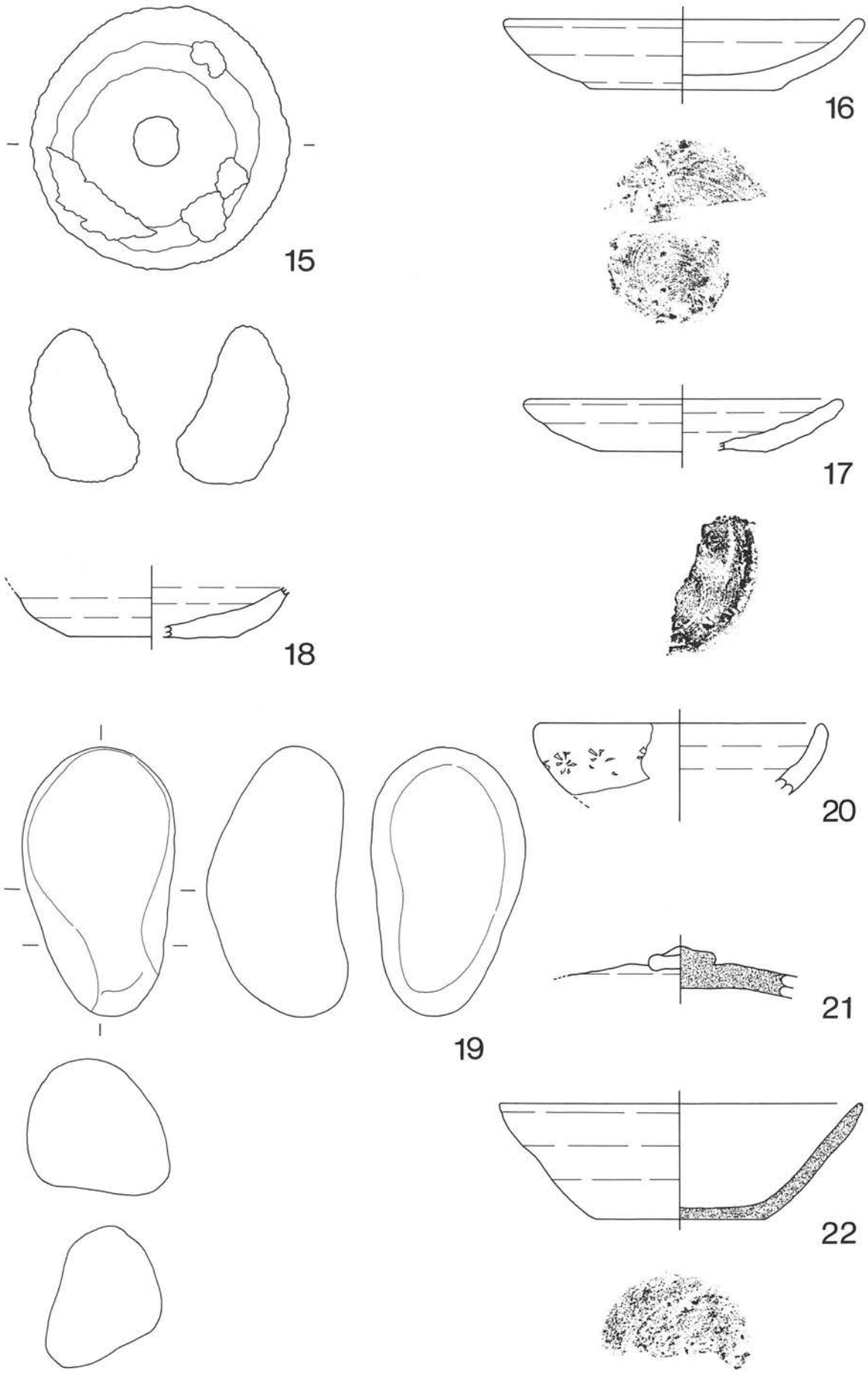
第14図　土坑位置図(1/120)



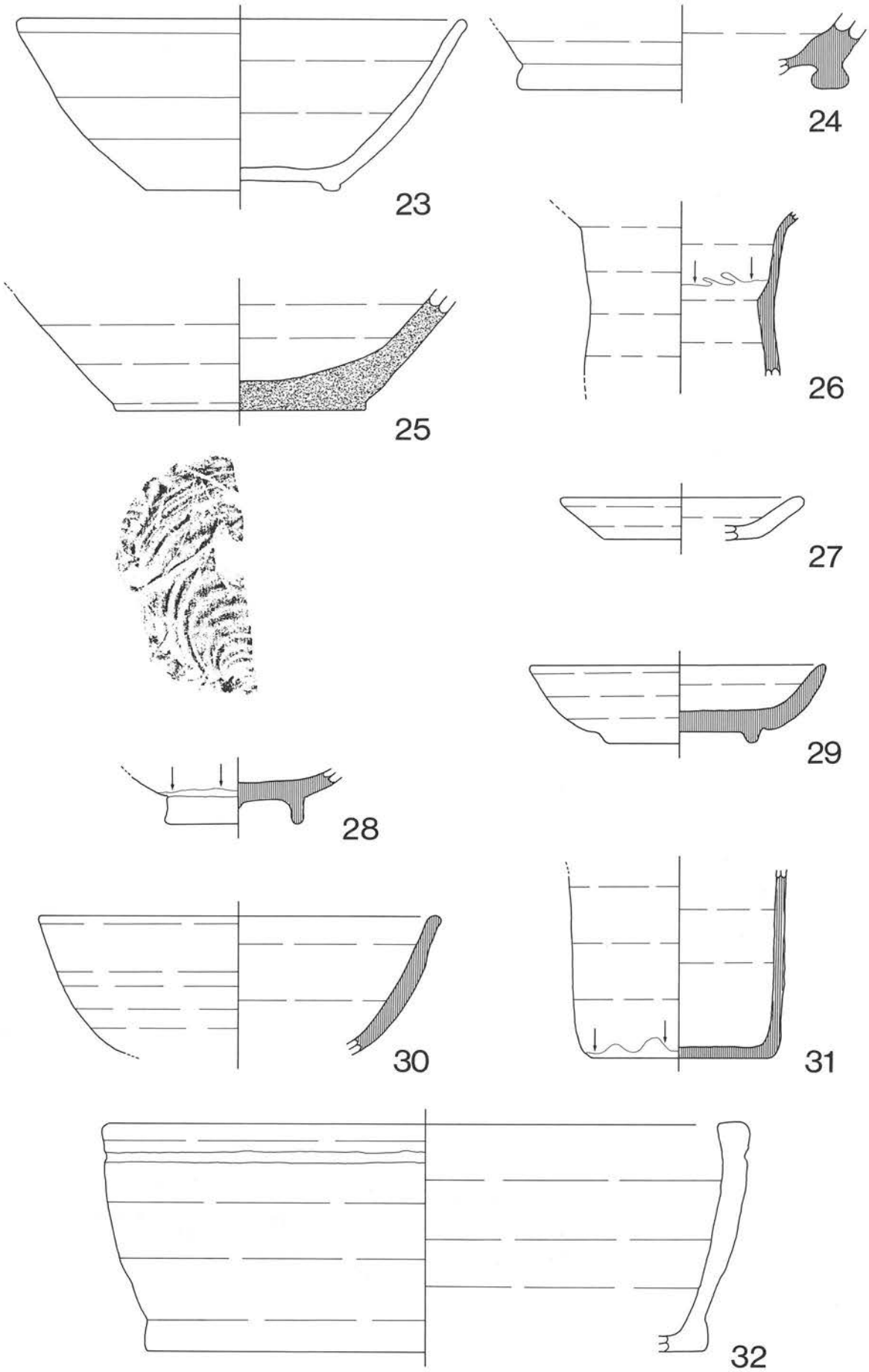
第15図　土坑出土遺物(1/2)



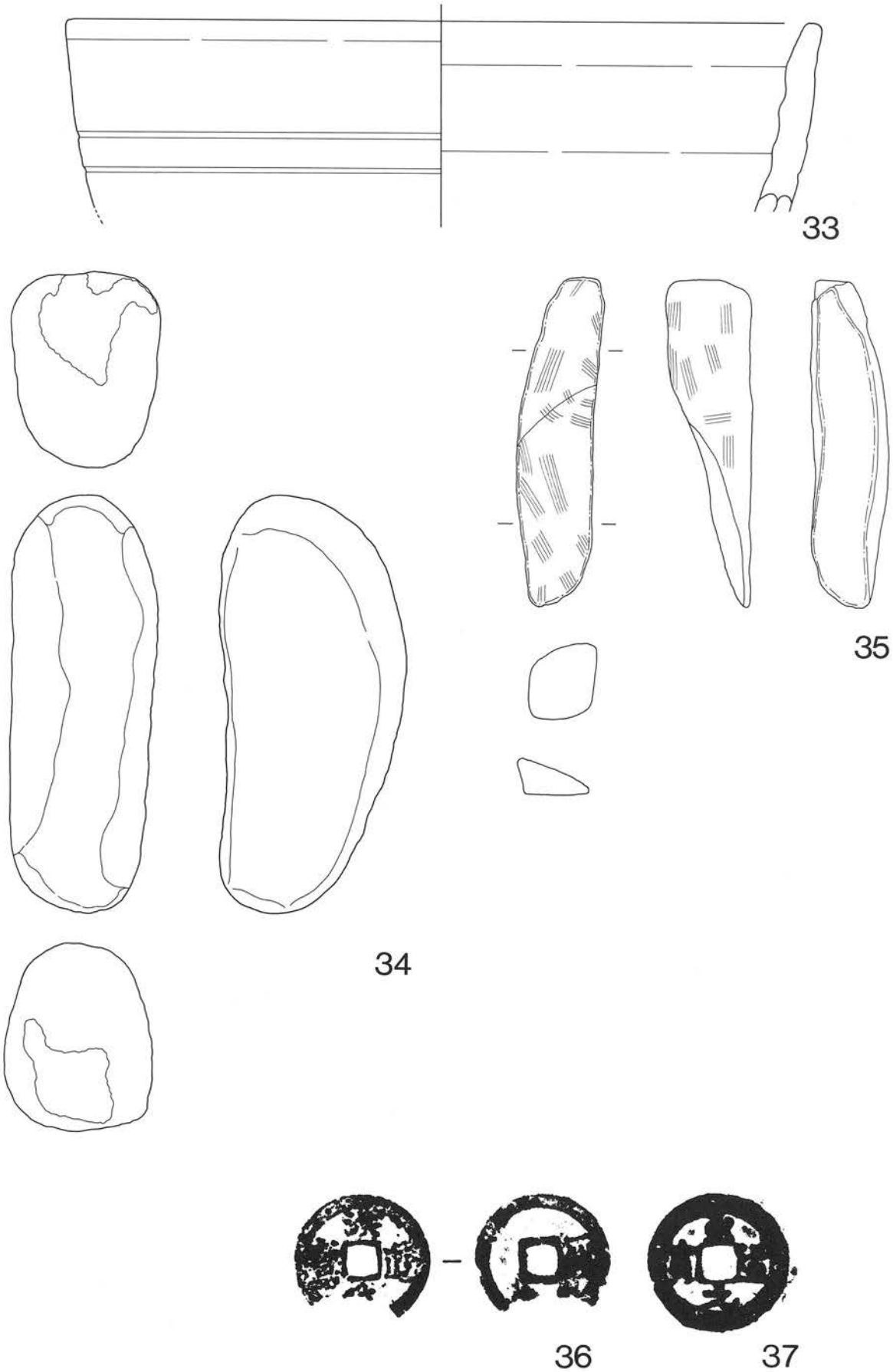
第16図　土坑出土遺物(1/2、14のみ1/4)



第17図　土坑出土遺物・遺構外出土遺物(1/2、15のみ1/4)

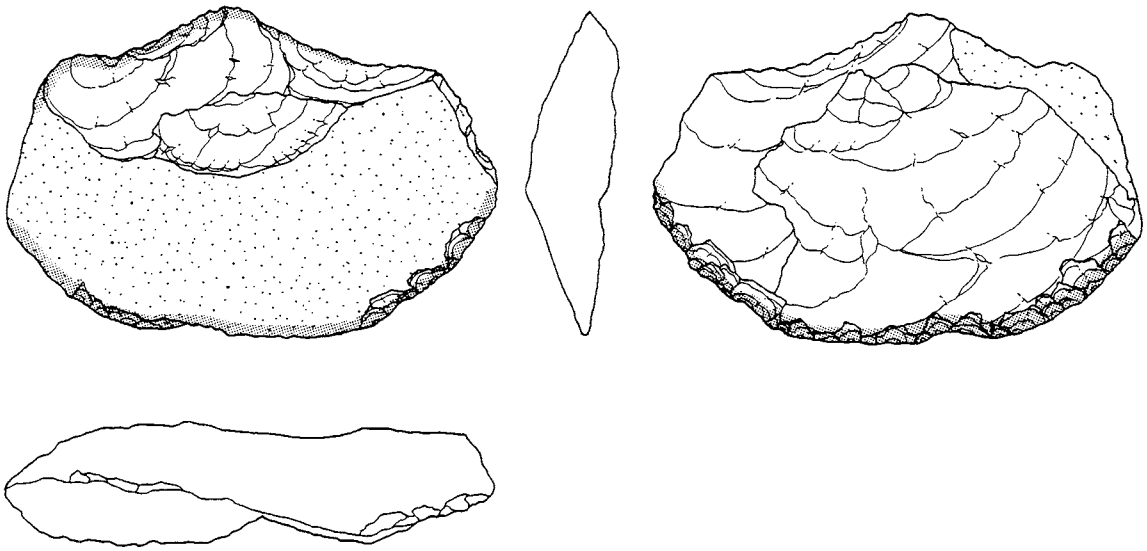


第18図　遺構外出土遺物(1/2)



第19図　遺構外出土遺物(1/2、36・37は1/1)

中原遺跡



第１章　遺跡をとりまく環境

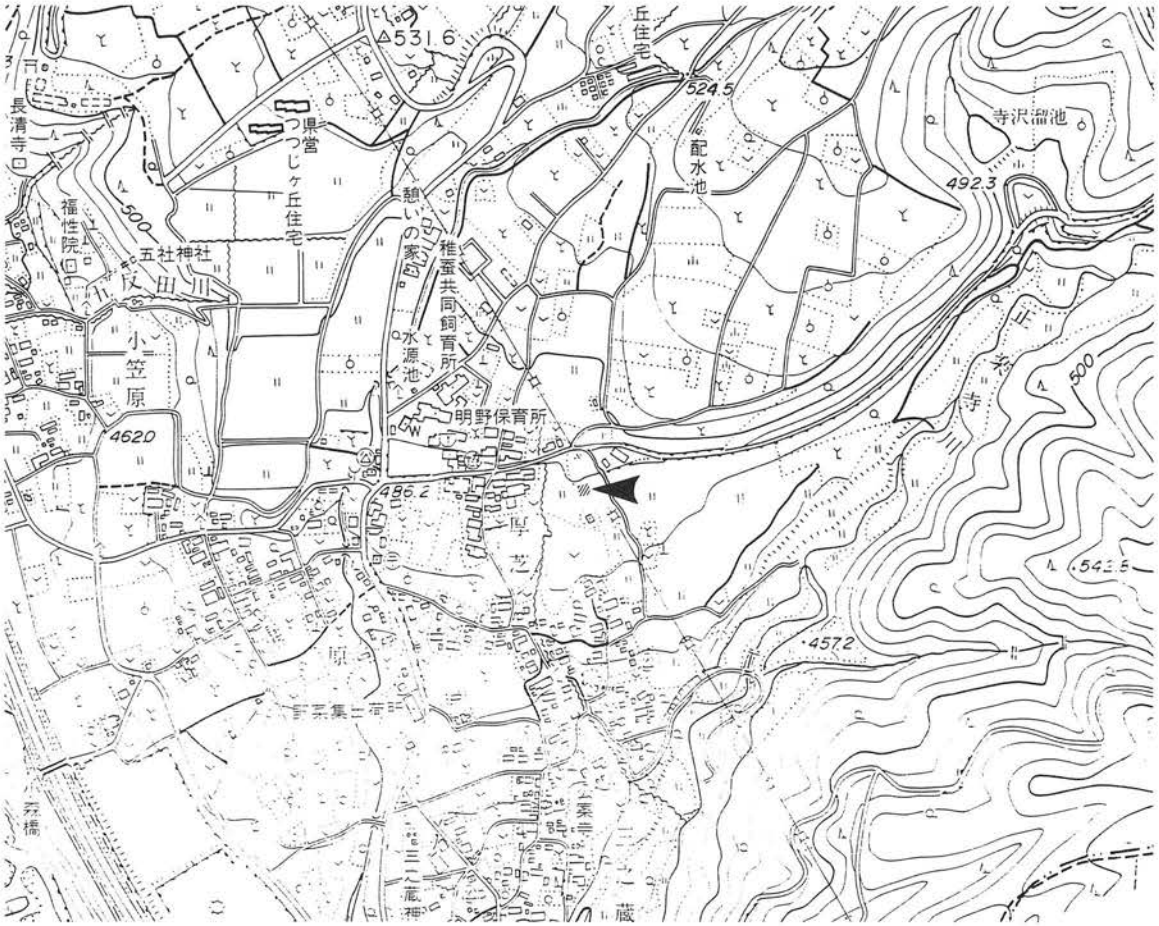
地理環境（第１図）

中原遺跡は正楽寺川北の尾根尻に立地する。標高は約488ｍで、正楽寺川との現比高差は60ｍほどである。遺跡が立地する尾根は北側の南沢川と南の正楽寺川がそれぞれ茅ヶ岳山麓を開析した結果、形成されたもので、遺跡の北側で両河川の扇状地へと連なる。遺跡はこの扇状地につながり尾根が広く開けた地点に展開する。正楽寺川北の南面する尾根斜面は現在、小さな水田が棚田状につくられている。

歴史環境

遺跡周辺の縄文時代遺跡では、1.4㎞北に中期末葉曽利式を主体とする駒飼場遺跡がある。本遺跡と同じ中期中葉の遺跡は、北5.5㎞に諏訪原遺跡がみられる。縄文時代中期の遺跡が多い茅ヶ岳山麓であるが、本遺跡周囲は遺跡密度の低い地帯である。

遺跡の西側には、小笠原長清の居館と伝えられる土塁跡が残る。小笠原長清は、平安時代末に茅ヶ岳山麓域におかれた勅使牧「穂坂の牧」に関連して茅ヶ岳山麓を支配したとされ（明野村誌）、遺跡から北へ800ｍほどの明野村小笠原字原地区には長清の菩提寺長清寺があり、長清の墓とされる五輪塔が現在も残されている。また、遺跡から東300ｍには、馬倹場と呼ばれるテラス状の狭い水田が数枚連なった遺構が残され、村文化財に指定されている。



第１図　中原遺跡位置図(1/10,000)

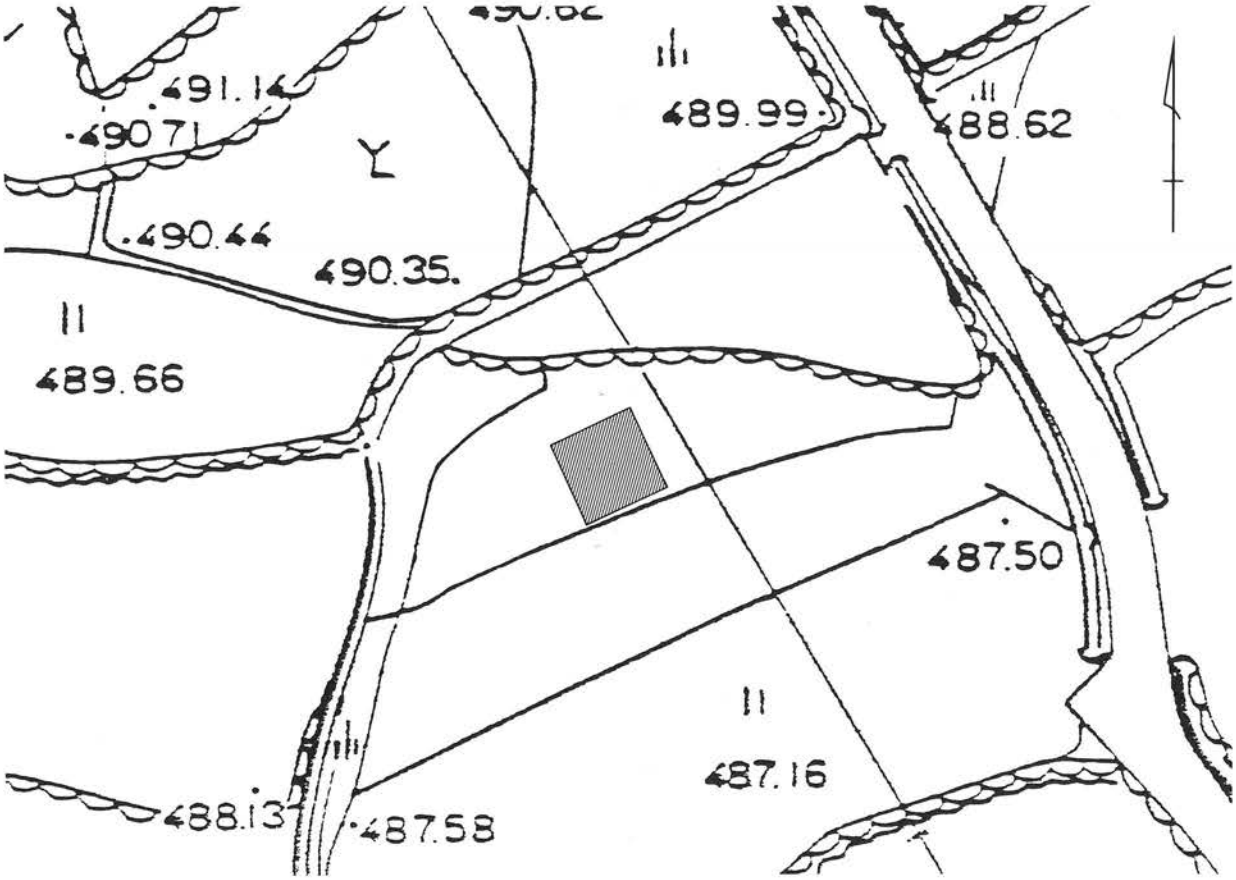
第２章　調査に至る経緯

平成６年度、明野村では県営圃場整備事業厚芝工区の施工が計画された。明野村教育委員会では平成５年度に工区予定面積101,000㎡を対象に、埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施した。工区は、縄文時代中期初頭の埋設土器が過去に出土している中原遺跡に隣接している。さらに、伝小笠原長清居館跡にも隣接することから、縄文時代中期及び平安時代末から中世の遺跡が予想された。

試掘調査は工区西側に重点を置いて進めたが、結果は縄文時代中期中葉の住居跡らしい遺構１カ所を確認するにとどまる、意外な結果に終わった。調査の結果から、中原遺跡の主体部は現在の厚芝集落北端部と重なっていることと、伝小笠原長清居館の外郭には特別の施設が設けられ得ない可能性があることが判明したが、前述のとおり、小さな棚田状の水田が造成されているため、削平により遺構が壊滅している可能性も否定できない。

調査結果を受け、明野村教育委員会では事業主体である峡北土地改良事務所と協議し、施工前に埋蔵文化財の発掘調査を行うことを確認した。調査面積22㎡、調査経費は11,430,000円（屋敷添第２遺跡調査費と一括）である。その後、工区地権者で構成する施工委員会の都合により、施工区が第１工区、第２工区、第３工区とに分割され、第１工区が平成６年に施工された。第１工区には埋蔵文化財は確認されなかったため、発掘調査は実施しなかった。

第２工区及び第３工区の施工は平成９年度とされた。明野村教育委員会では上記確認により、峡北土地改良事務所と発掘調査系に関する負担協定を締結し、平成８年12月２日、重機による表土剝ぎを開始した。発掘調査は12月13日に着手し、平成８年12月28日をもって現地での調査を終了した。現地調査終了後、調査記録と出土遺物の整理作業を始め、平成９年３月31日、発掘調査報告書の刊行をもって一連の発掘調査を終了した。



第２図　中原遺跡調査区(1/400)

第３章　縄文時代の遺構と遺物

１号住居跡（第３図～６図、写真図版39、40）

大きさ　不明　面積　不明

付属施設　不明

調査所見

試掘調査で僅かな焼土粒子をともなう埋設土器１基を確認した。調査では、埋設土器を縄文時代の竪穴住居にともなう埋甕炉ととらえ、埋設土器を中心に遺物が出土する範囲で遺構の確認につとめた。埋設土器は水田表土直下で検出されていたため、住居竪穴の掘り込みは全く残っていない状態であり、覆土観察は行い得なかった。

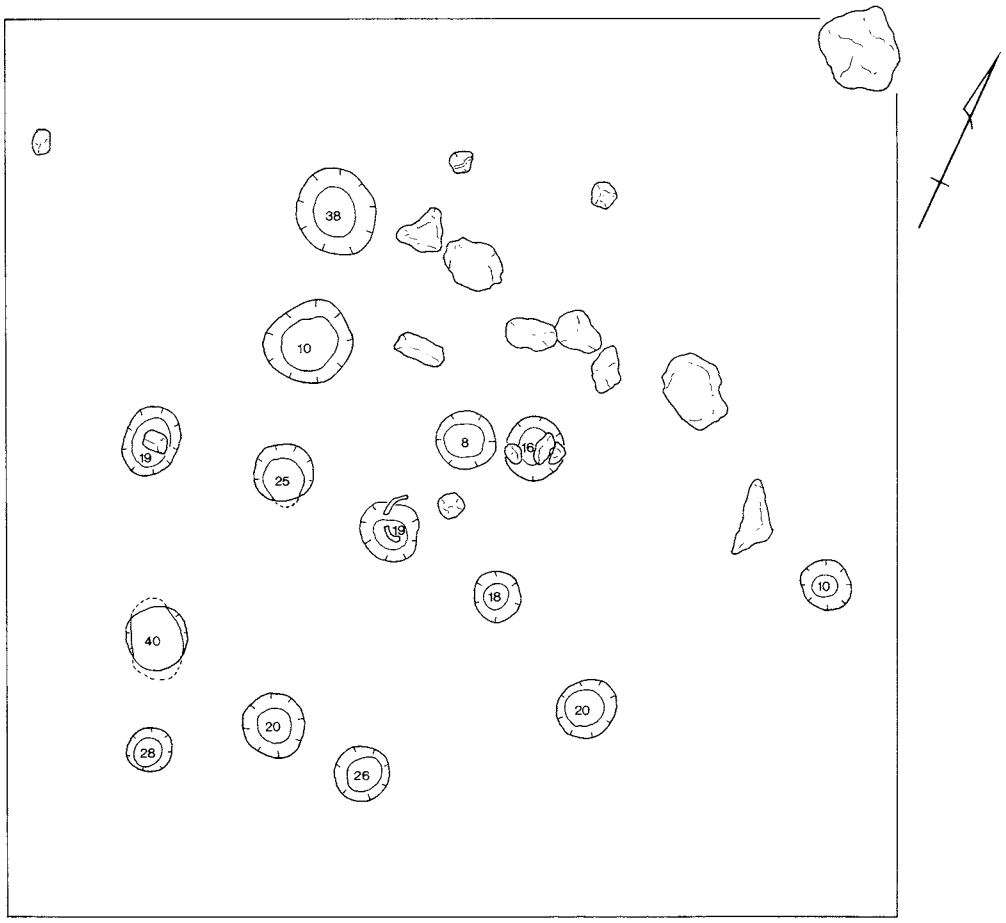
床面、周溝は確認できなかった。

埋設土器は焼土粒子が僅かにともない、土器の上下部を欠いていることから埋甕炉と判断したが、土器周辺に掘り込み、炭の集中は確認できなかった。

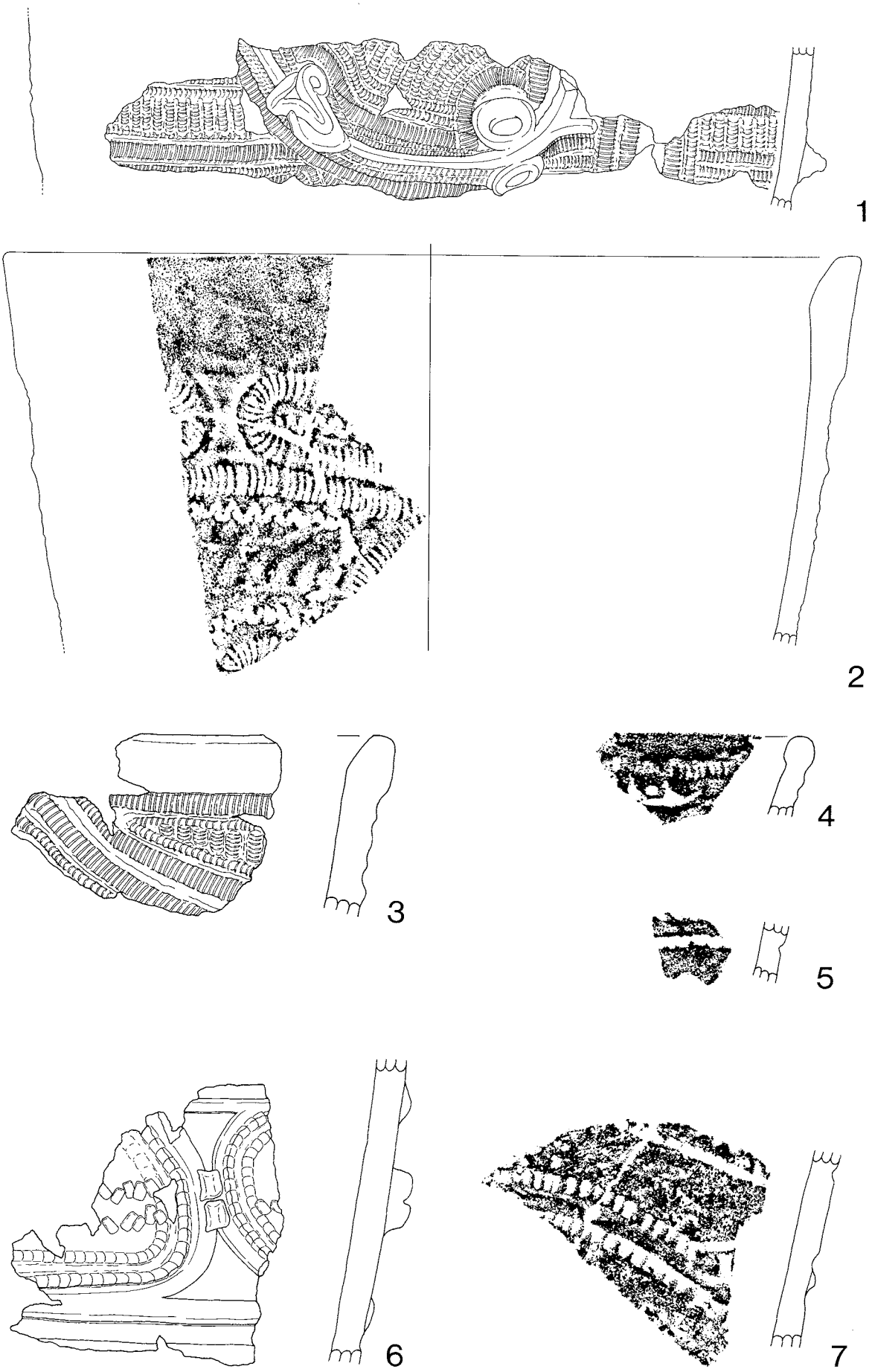
ピットは14基検出されたが、深さ大きさがまちまちで、住居柱穴かどうか判断できない。

遺物は埋設土器の他、縄文土器片、石器類が出土している。

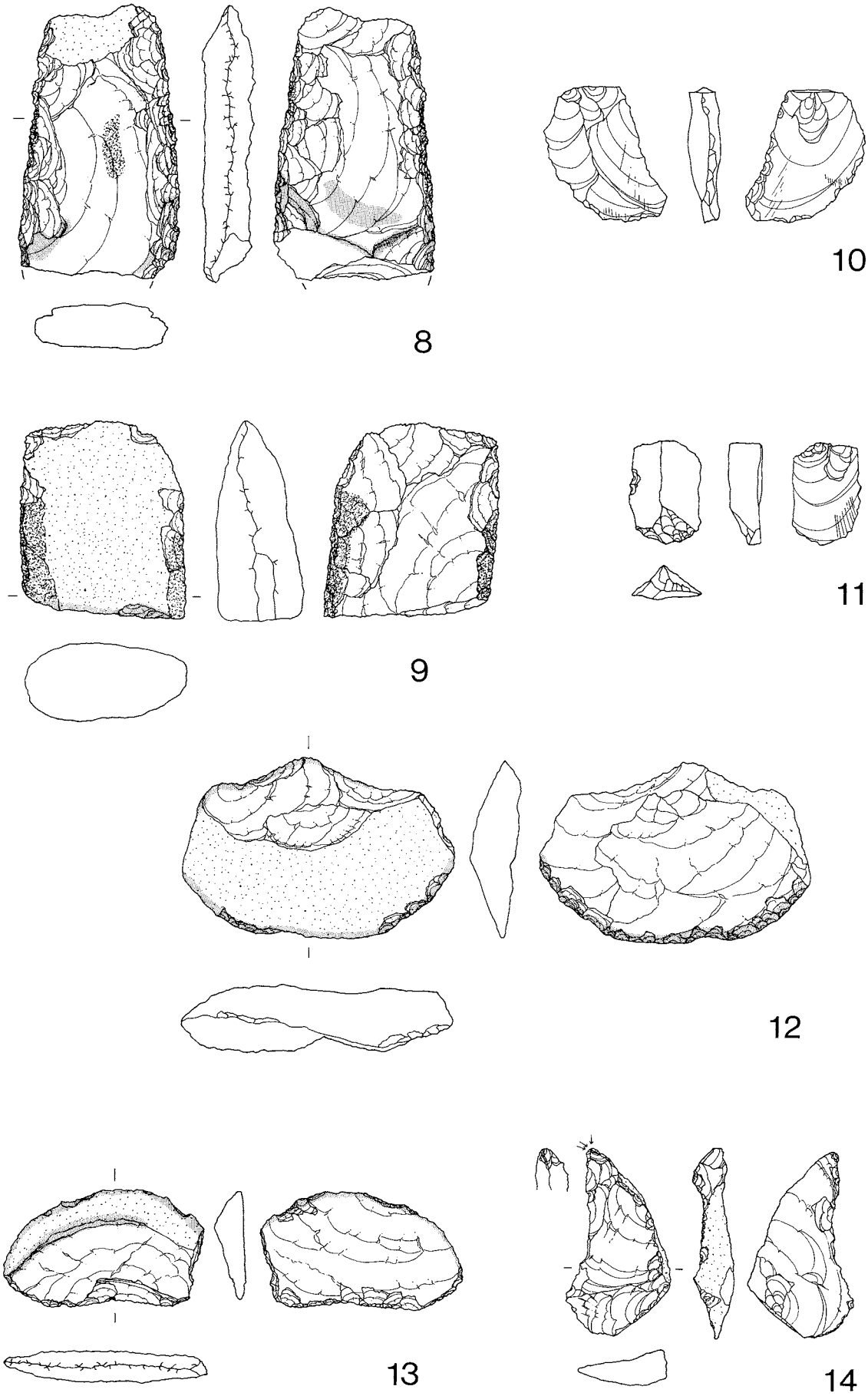
第４図１は埋設土器で、深鉢胴上部あたりと思われる。全周せず1/2を欠く。風化が著しく微細な観察はできないが、半裁竹管によると思われる押し引き紋を主体に施紋され、高く盛り上がった隆帯が弧を描いて貼りつけられる。長石、石英の大きな粒子、雲母粒子、赤色粒子の混じるややキメの粗い胎土質で、色調は明赤褐色である。上下割れ口は磨耗しており、埋設当初から上下を欠いていたものと思われる。



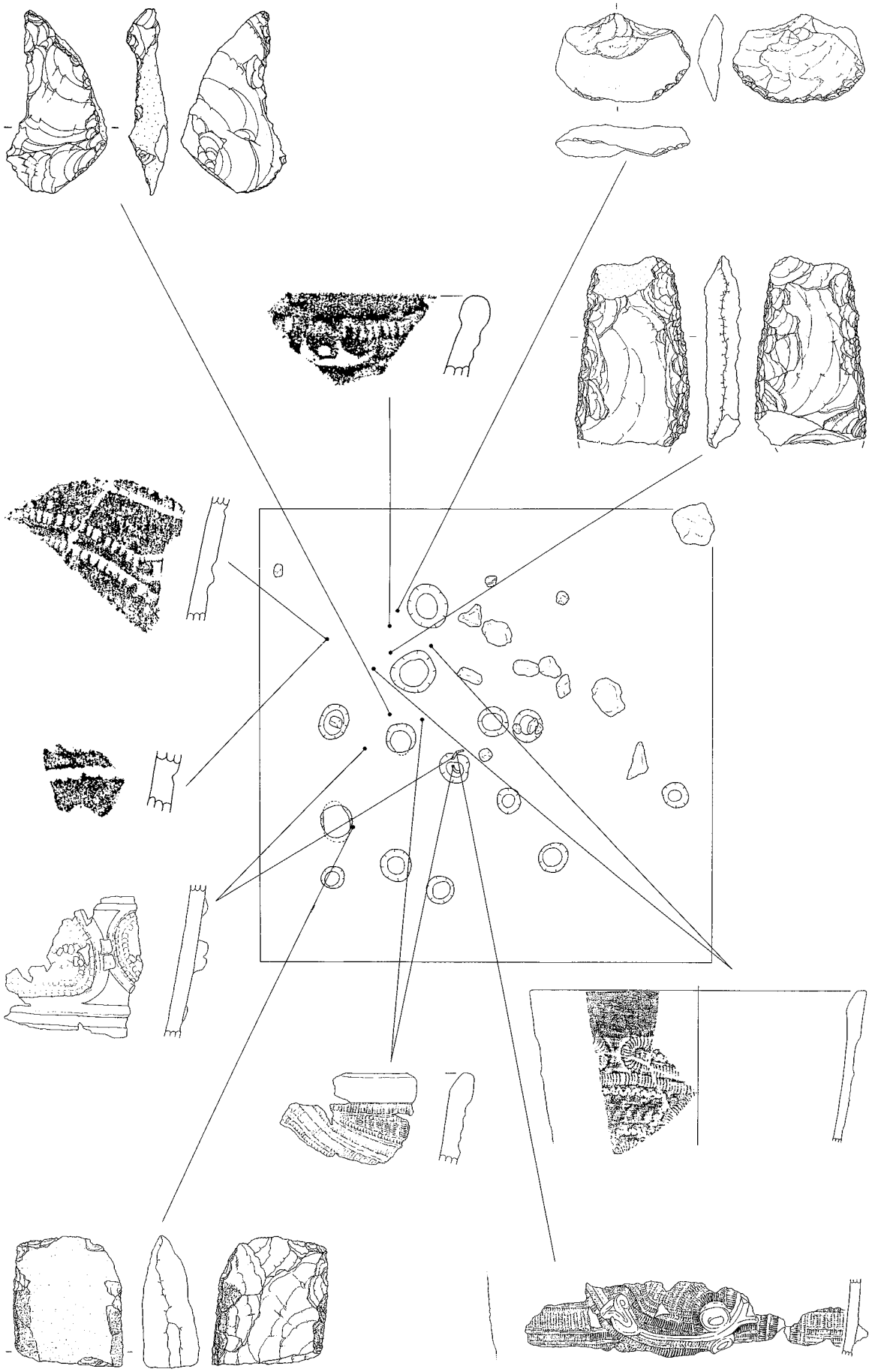
第３図　１号住居跡(1/40)



第４図　１号住居跡出土遺物(1/2、１・２は2/5)



第５図　１号住居跡出土遺物(1/2、10・11は1/1)



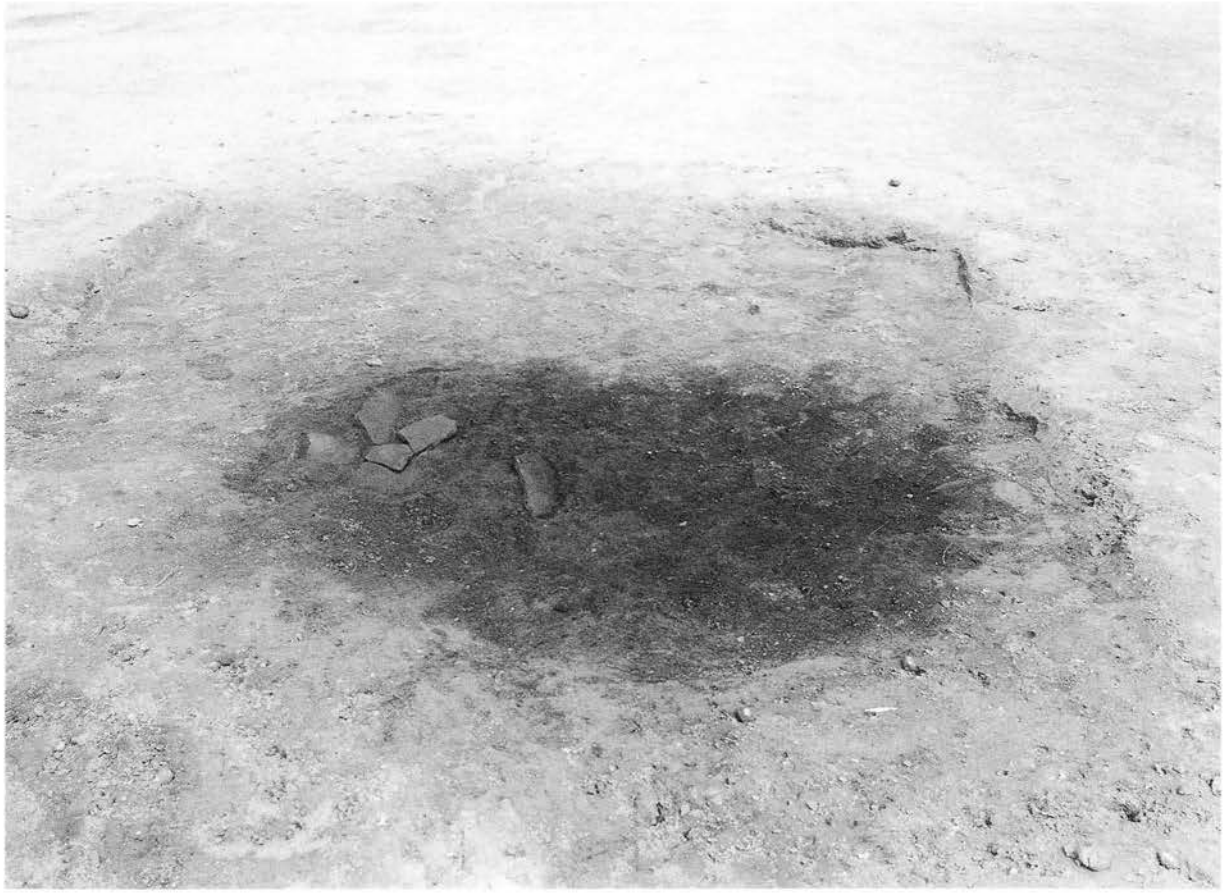
第6図　1号住居跡遺物分布図

2は深鉢口縁部片で、押し引きによる楕円紋の下に1帯の押し引き帯がめぐる。さらに下にはいわゆる「みずち紋」が描かれていると思われる。1と同様のキメの粗い胎土である。3は口縁部小破片で、押し引きにより施紋される。4も同様であるが、玉抱き三叉紋が描かれる。5は三角形の押し引き紋が施紋される。6は深鉢胴部片で、隆帯を楕円に貼りつけたなかに沿って押し引き紋2列がめぐる。7も胴部片で、貼りつけ隆帯の両脇を押し引き紋でおさえてある。3から7の胎土質は1と同様である。

第5図8はホルンフェルス製打製石斧で、刃部を欠損している。柄装着痕と思われる磨滅が観察される。図空白部は節理面である。9は安山岩製打製石斧で、片面に大きく礫表皮を残す。やや風化しているが、磨滅痕が観察される。10は黒曜石剥片で、縁辺部に2次調整がみられる。11は黒曜石剥片で、小型ながらも端部に調整が集中することから掻器と考えた。12は砂岩剥片で、片面に大きく礫表皮を残す。端部に細かな剥離と磨滅が観察でき、横刃形石器と判断した。13も同じく横刃形石器と判断した。ホルンフェルス製で、形状が12に似ている。図上端に磨滅が観察されたが、この上側縁部は磨滅の結果もあろうが鈍く丸まっている。図下端部は磨滅が明瞭に観察できないが、細かな剥離が並び鋭いことから、こちら側を刃部と考えた。14は珪質頁岩剥片である。図上端部に樋状の小さな剥離が観察されることから、彫器として使用された可能性もあろう。

写 真 図 版

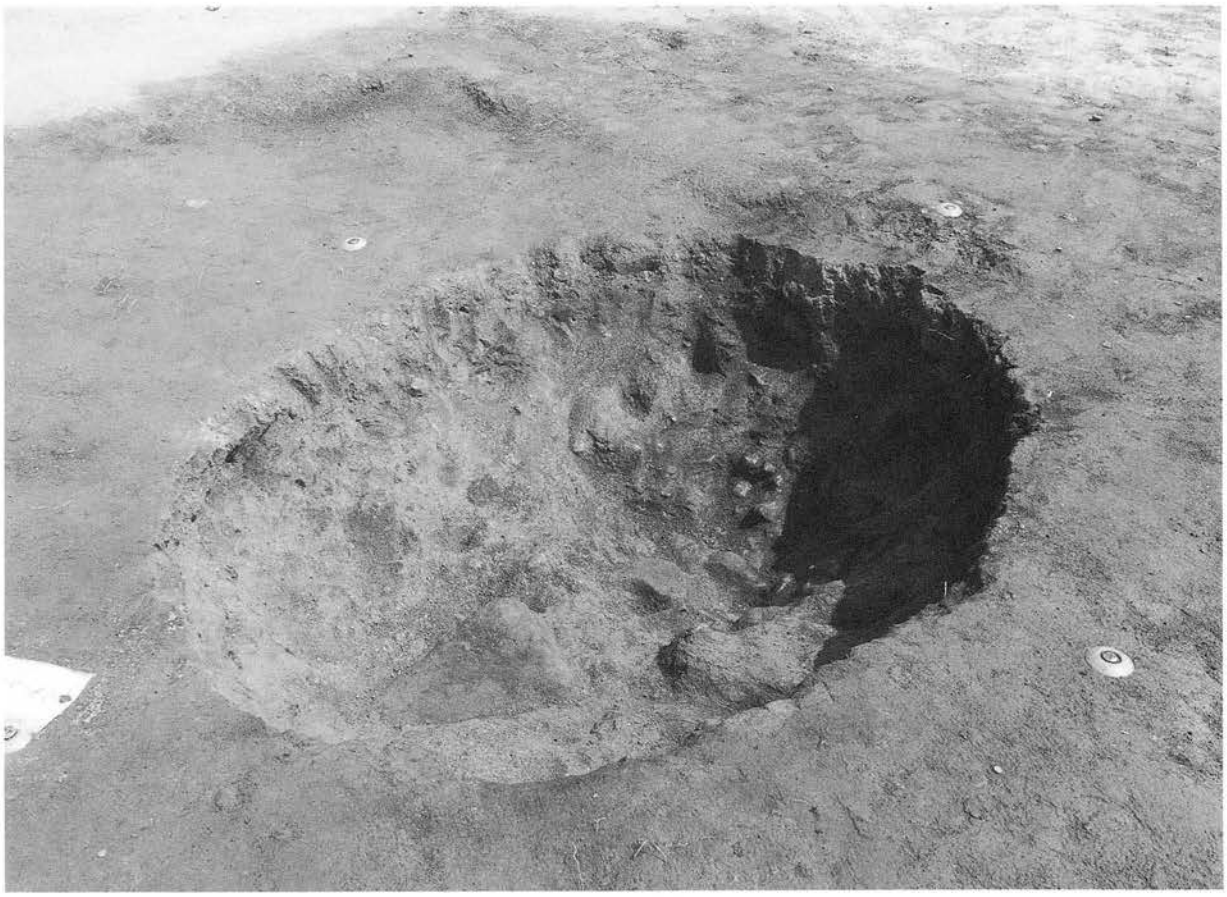
下大内遺跡遠景



225号土坑

225号土坑遺物出土状況

225号土坑遺物出土状況

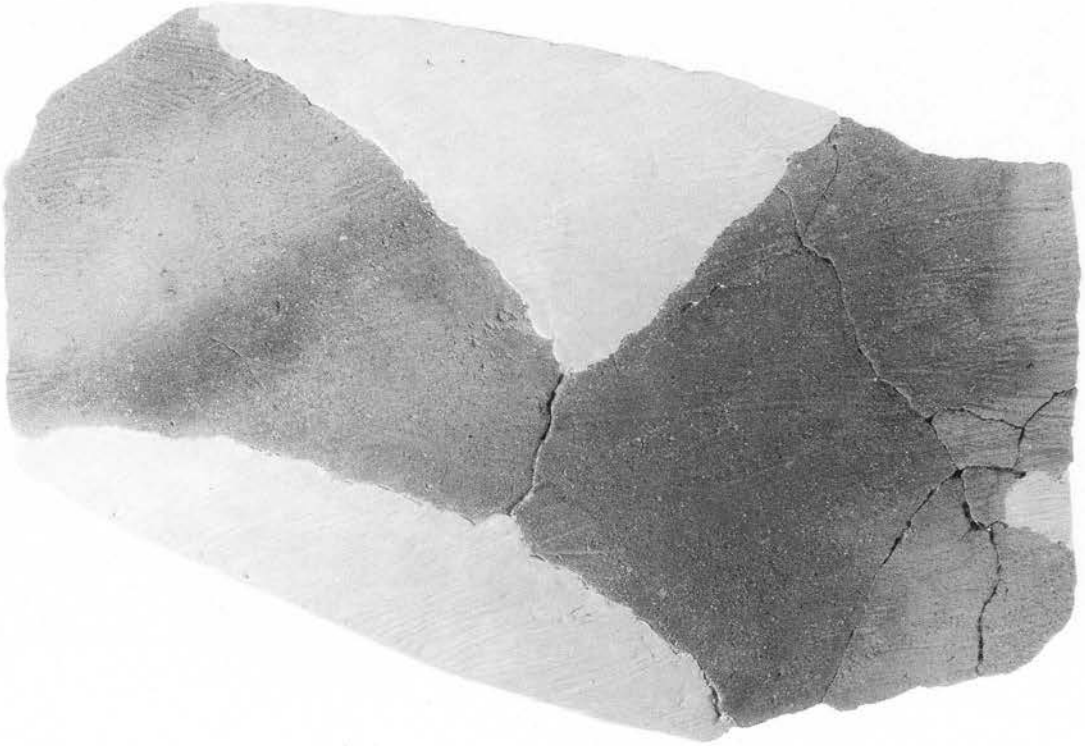


225号土坑完掘

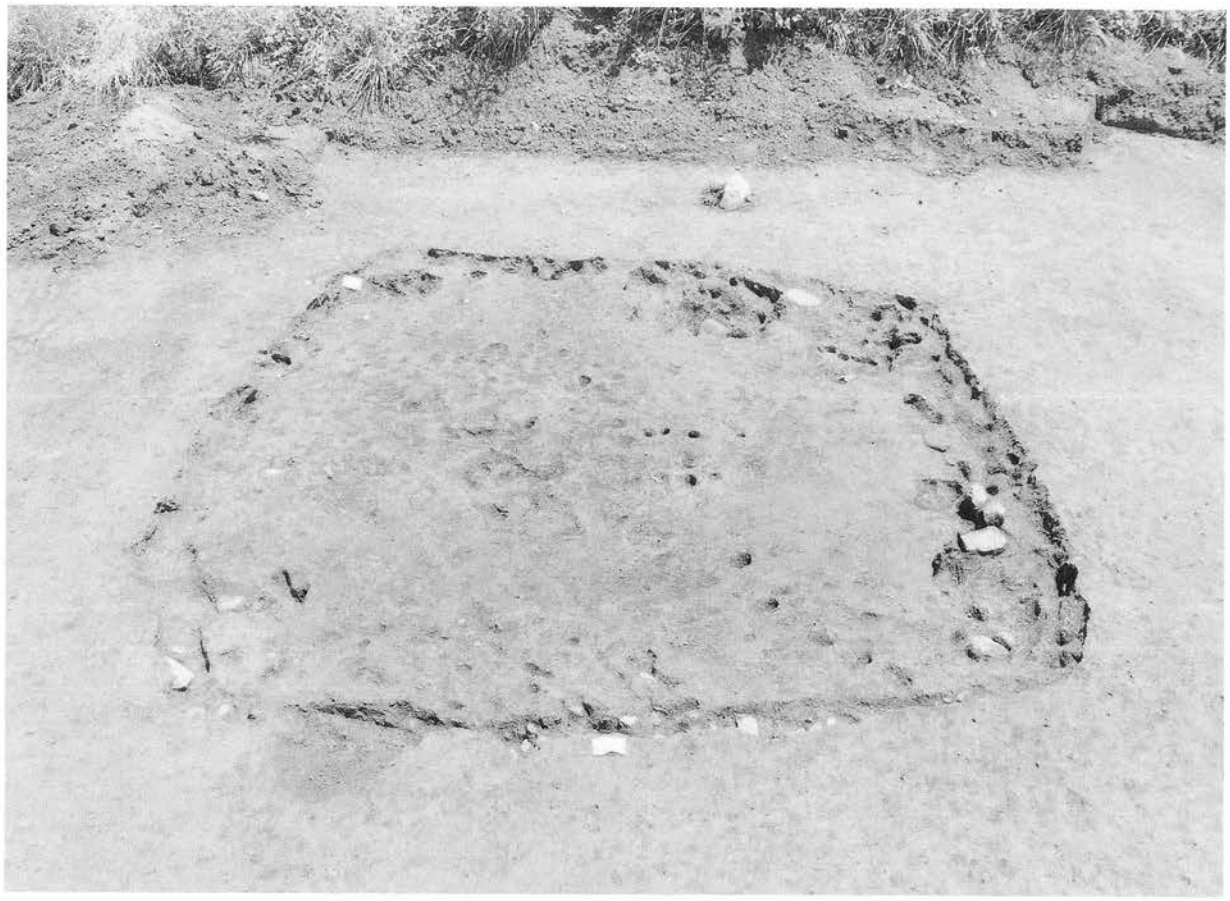
縄文時代の遺物

225号土坑遺物

225号土坑出土広口壷



225号土坑出土遺物



1号住居跡

カマド

1号ピット検出状況

出土遺物

2 号住居跡

カマド

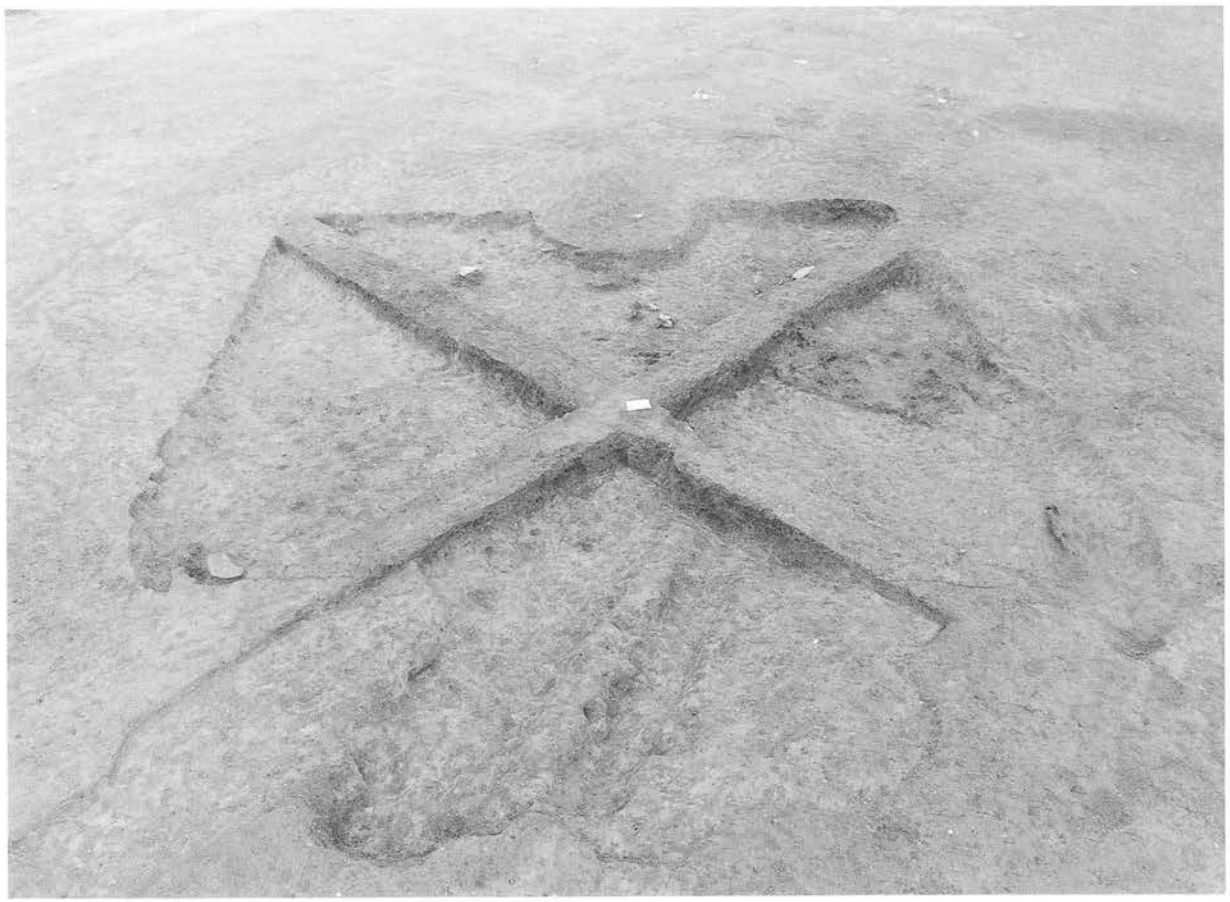
2号住居跡遺物出土状況

出土遺物

3号住居跡

遺物出土状況

4号住居跡



炭化材出土状況

4号住居跡カマド

溝切り合い状況

5号住居跡

カマド

6号住居跡

カマド

6号住居跡遺物出土状況

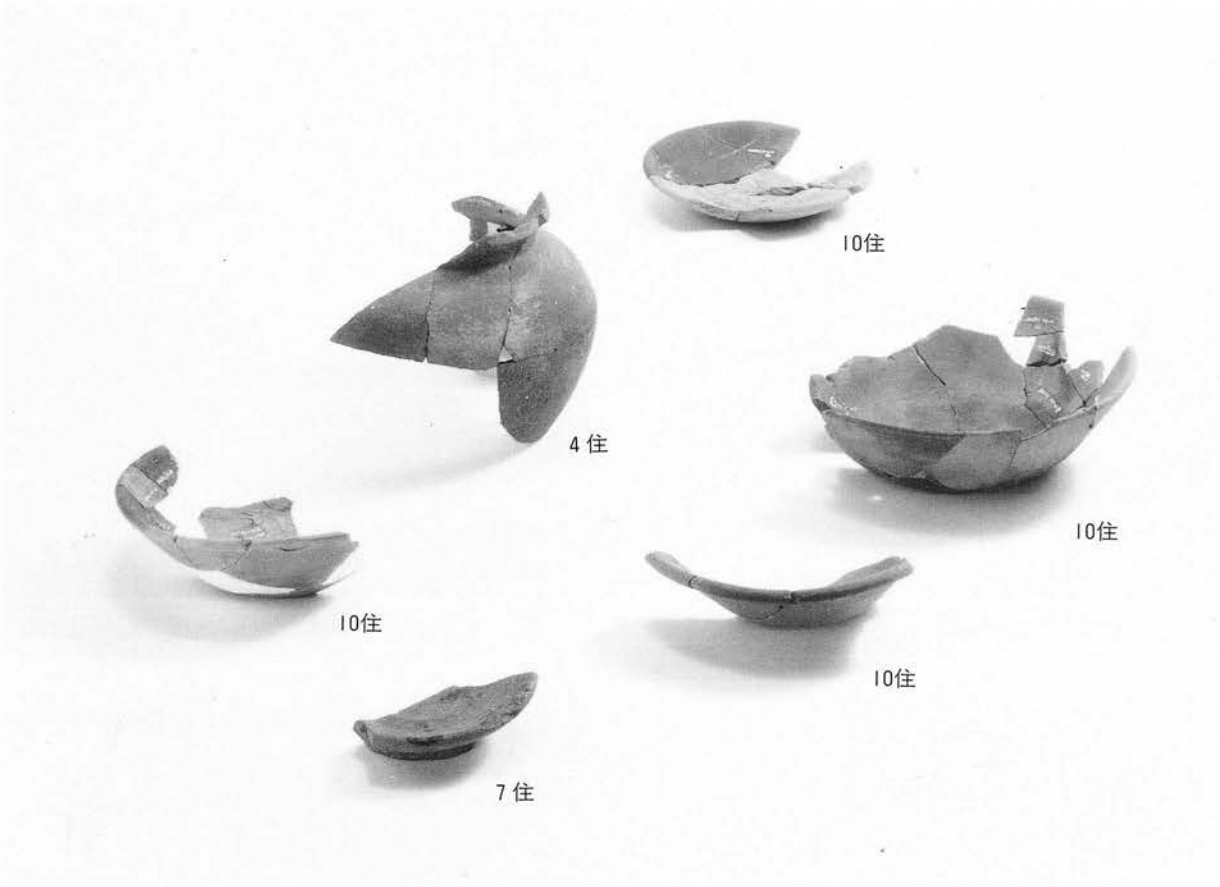
出土遺物

7号住居跡

5号土坑内炭化材出土状況

10号住居跡

カマド



4～10号住居跡出土遺物

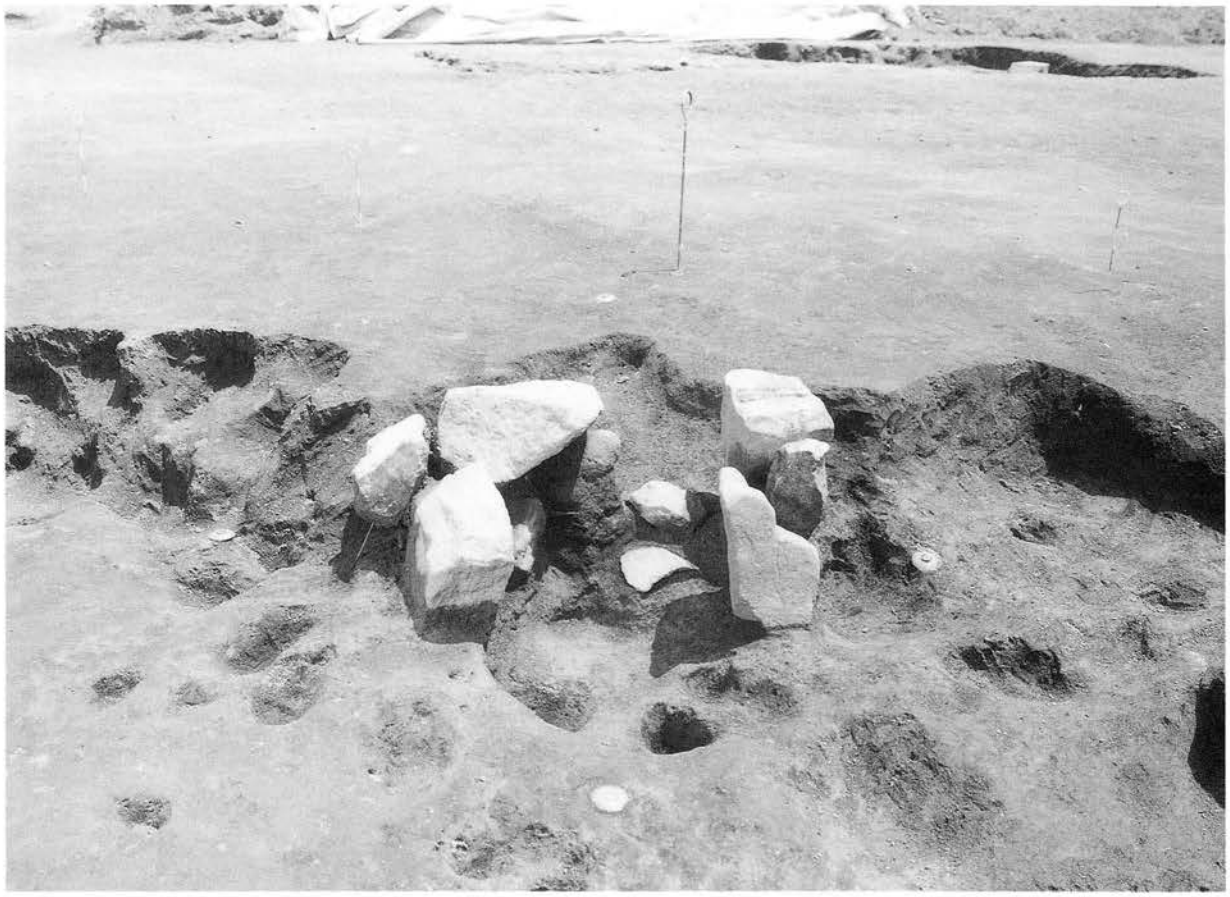
11号住居跡

11号住居跡カマド

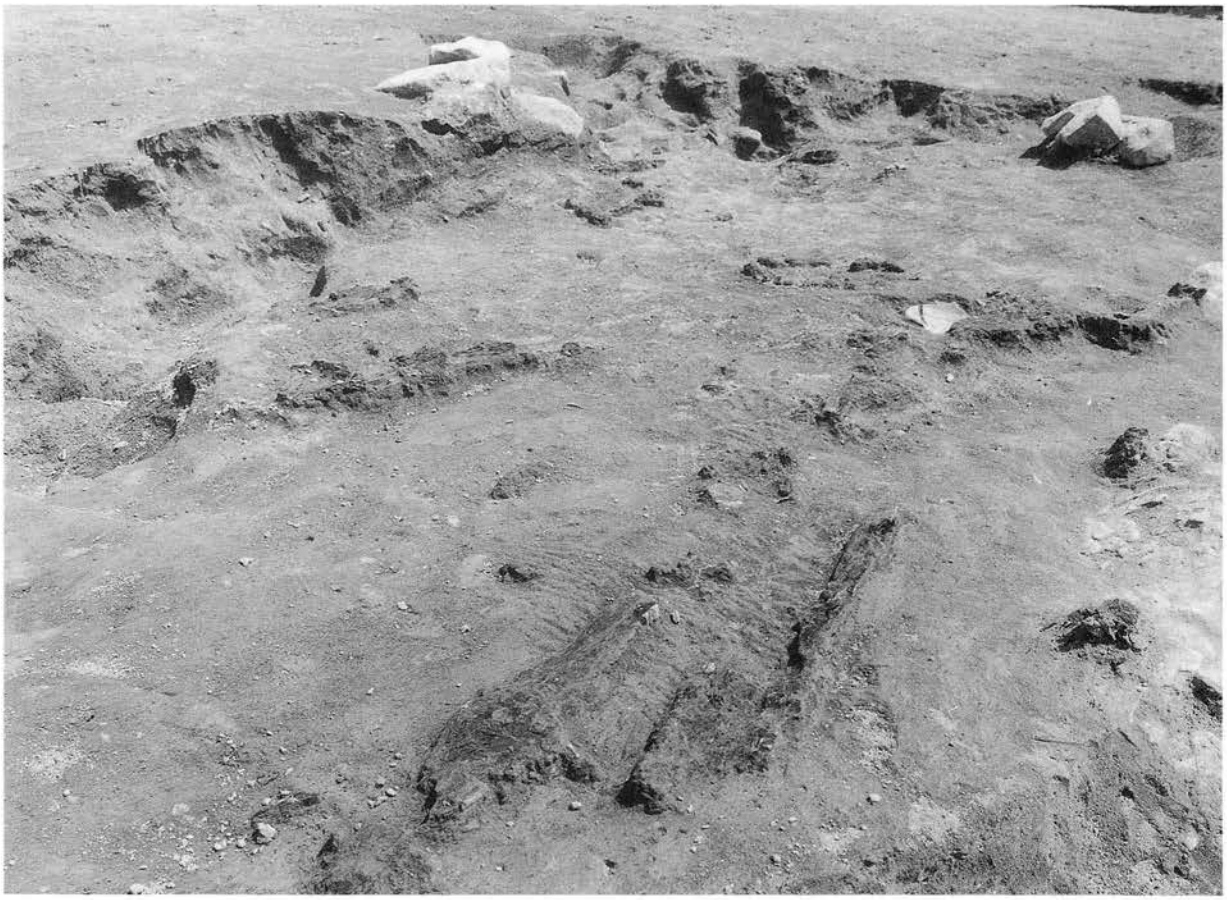
遺物出土状況

11号住居跡遺物出土状況

12号住居跡



12号住居跡カマド



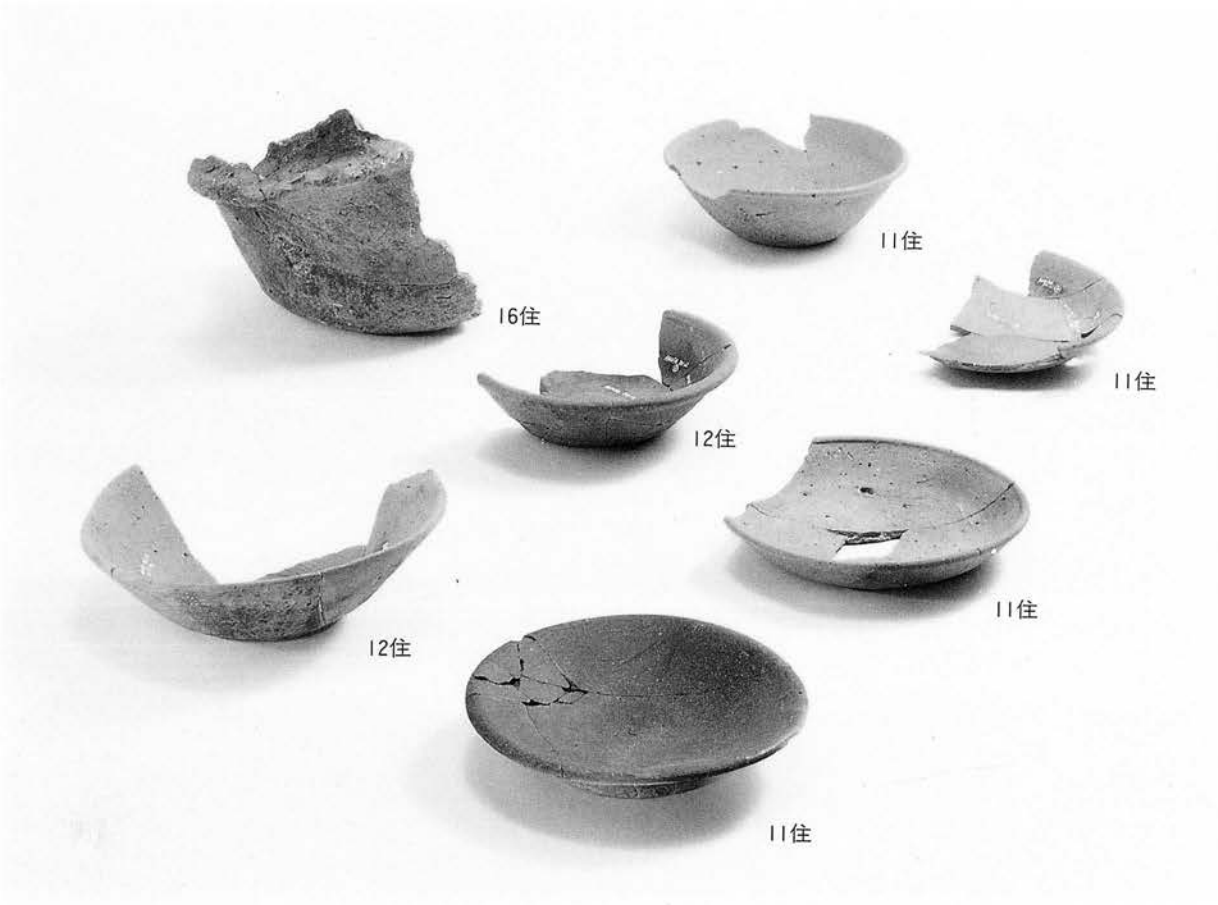
炭化材出土状況

13号住居跡

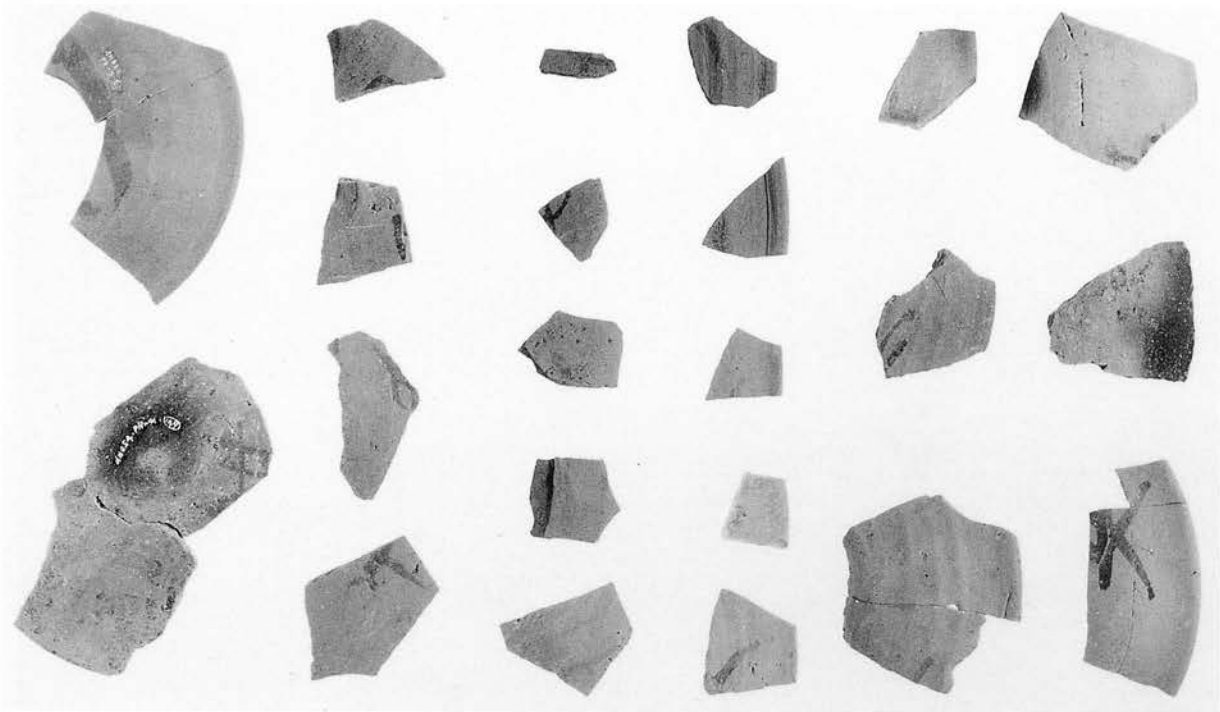
14号住居跡

16号住居跡

18号住居跡

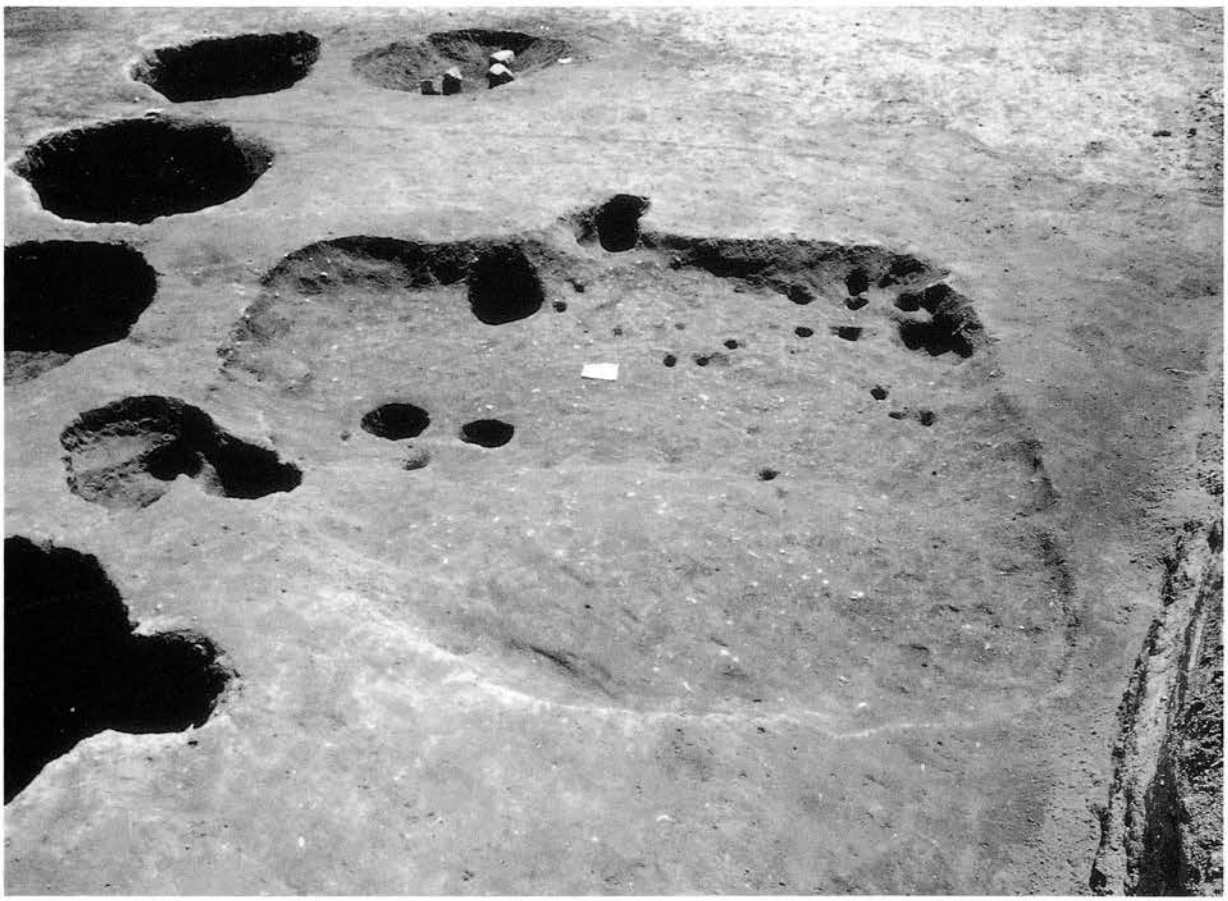


11～16号住居跡出土遺物



遺跡より出土した主な墨書土器片

1号竪穴遺構

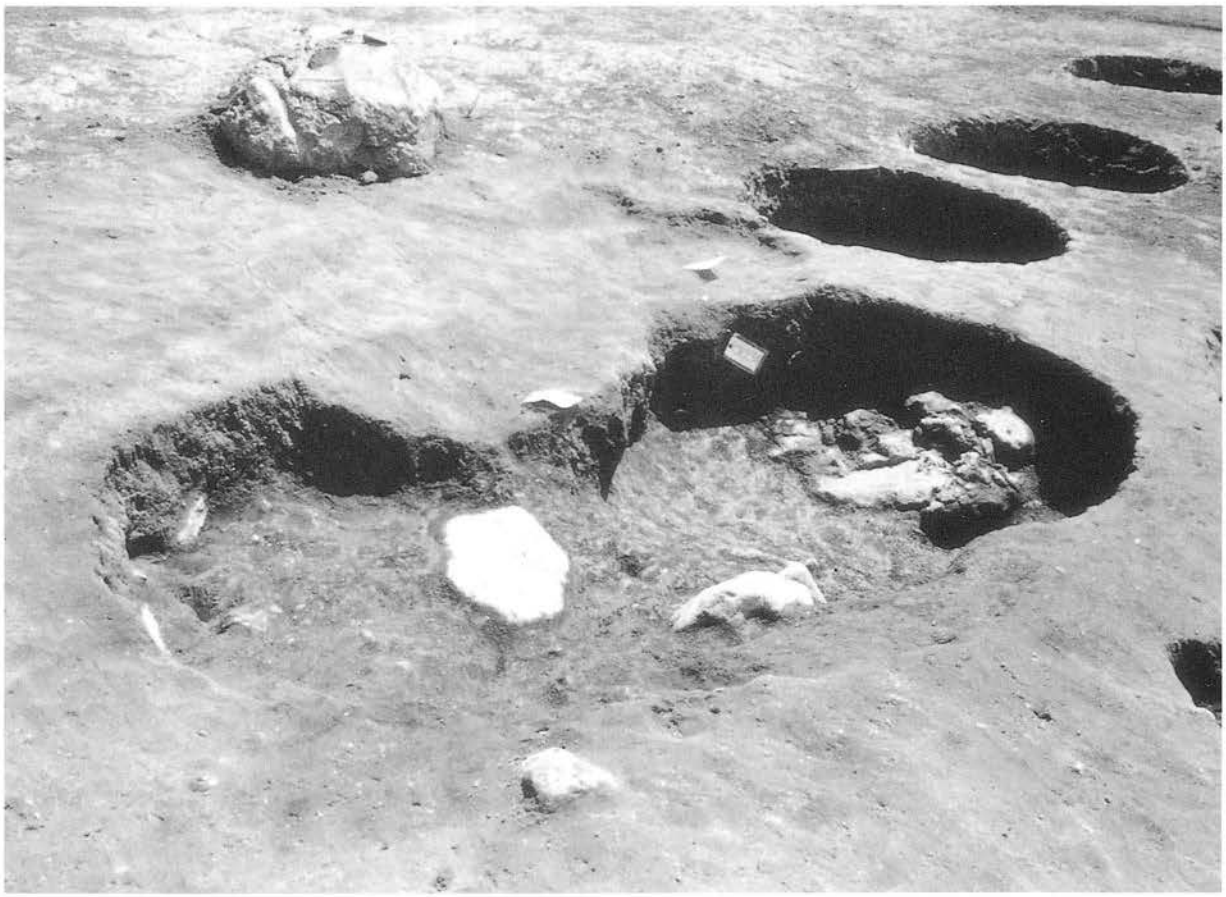


2号竪穴遺構

288・289号土坑

同完掘状況

234号土坑



同完掘状況

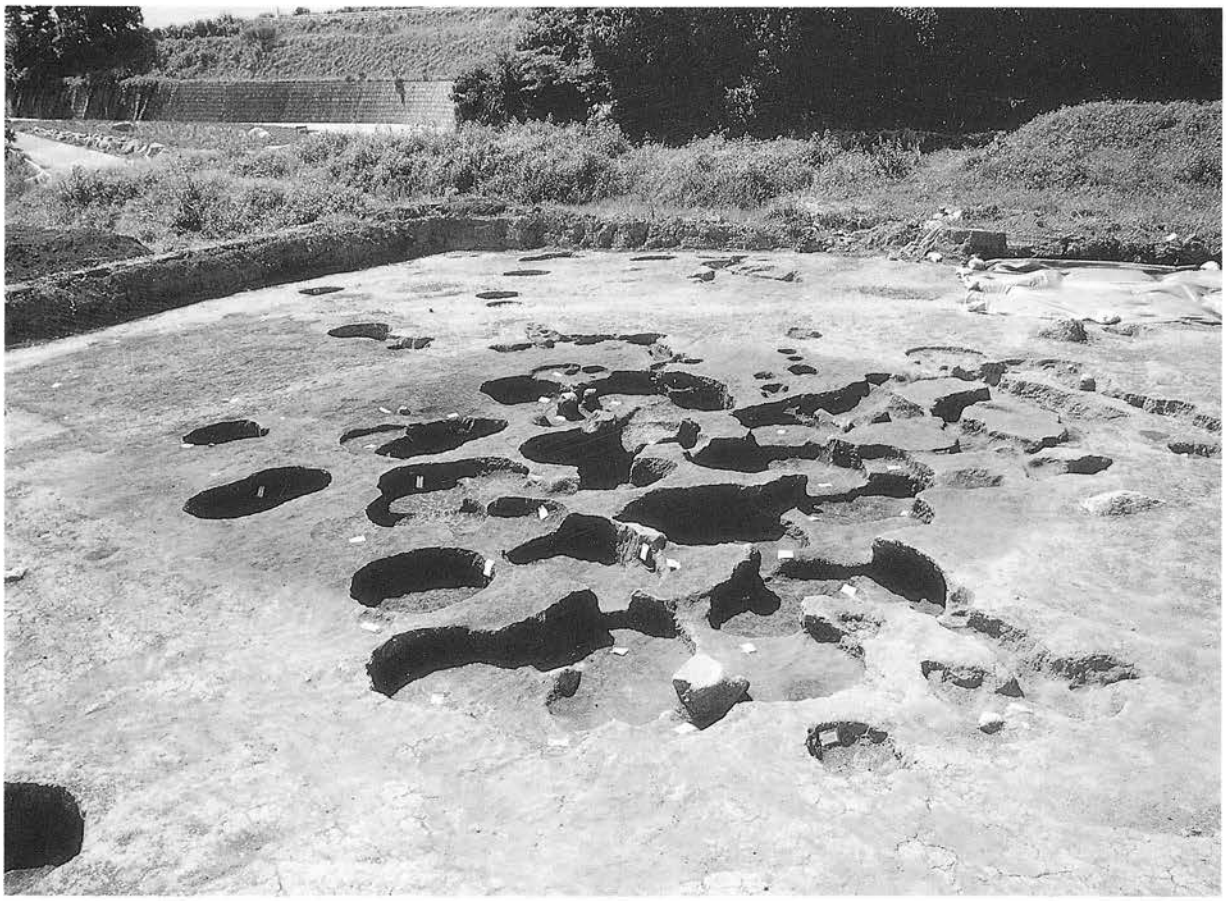
299・300号土坑

300号土坑下層礫

300号土坑完掘状況

299号土坑完掘状況

第2土坑群検出状況



同完掘状況

第 3 土坑群

第 4 土坑群検出状況

第 4 土坑群

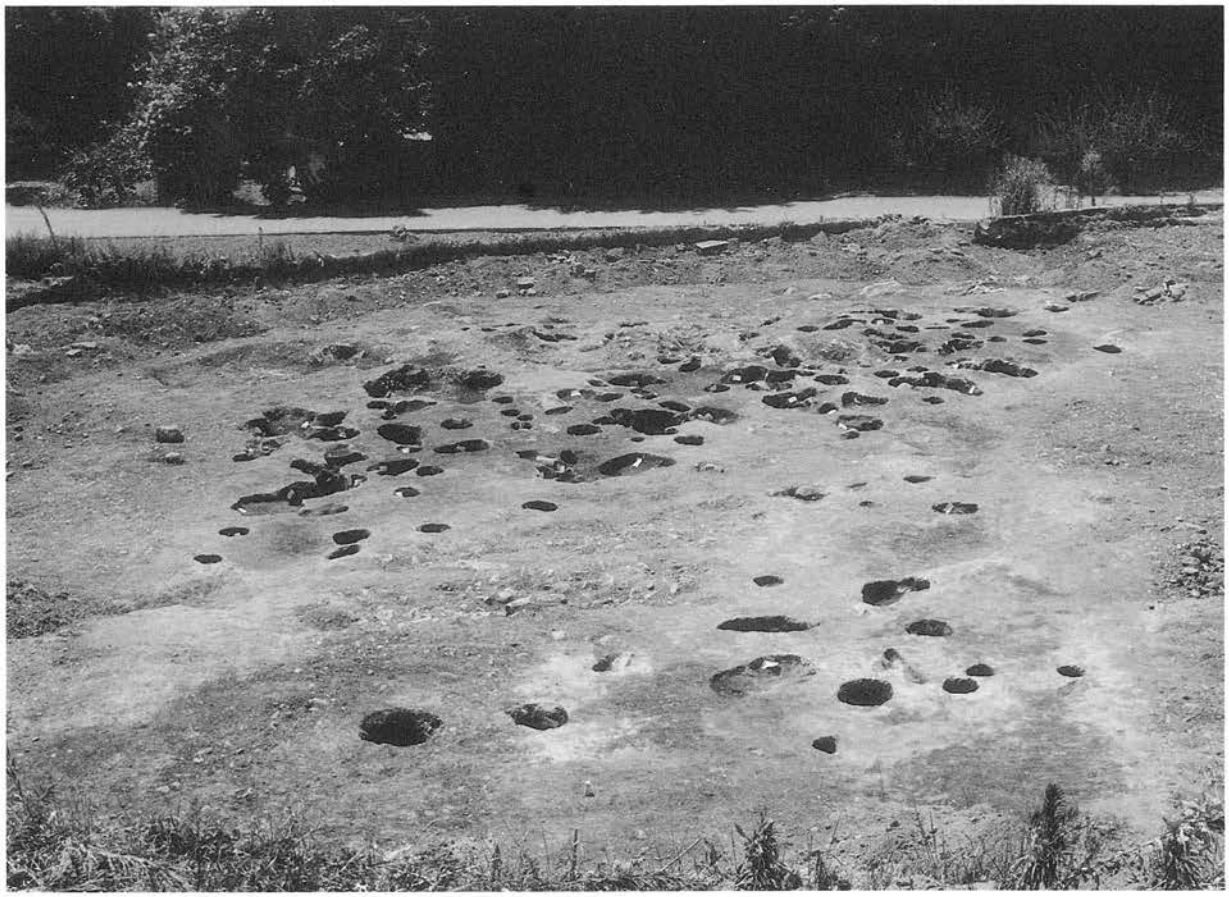
調査参加者

屋敷添第２遺跡１号住居跡

遺物出土状況

2号住居跡遺物出土状況

1・2号住居跡出土遺物

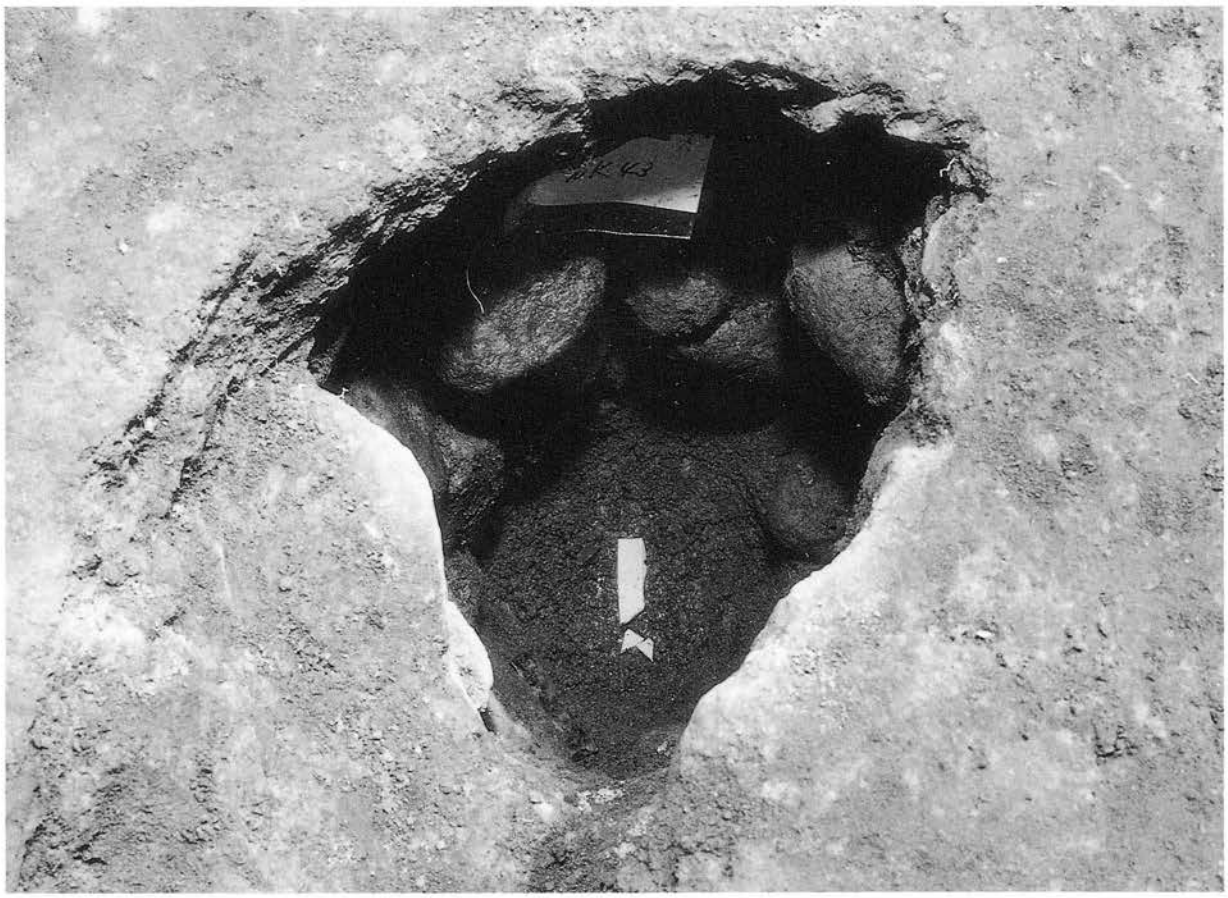


第1調査区近景

20号土坑

20号土坑

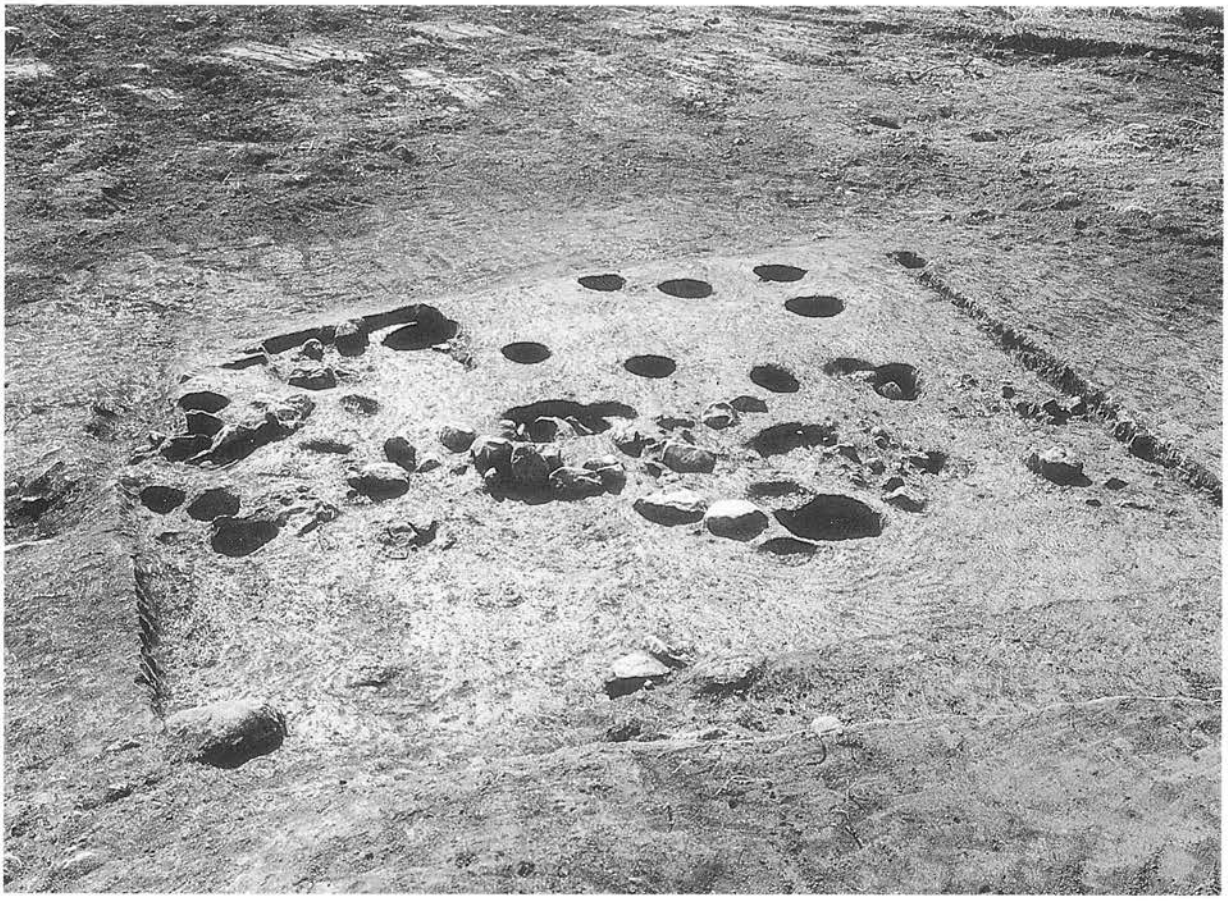
22号土坑



43号土坑

第１調査区出土遺物

中原遺跡遠景



1号住居跡

埋甕炉

同土器

報告書抄録

ふりがな	しもおおうちいせき・やしきぞえだいにいせき・なかはらいせき
書名	下大内遺跡 ・ 屋敷添第2遺跡 ・ 中原遺跡
巻次	
シリーズ名	明野村文化財調査報告
シリーズ番号	第9集
編著者名	佐野 隆
編集機関	明野村教育委員会
所在地	〒407-02 山梨県北巨摩郡明野村上手5219-1 TEL 0551-25-2311
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下大内遺跡（しもおおうち）	明野村小笠原（あけのむらおがさわら）3137ほか	194026	AN054	35°45′20″	138°27′15″	19950529～19950904	16,000	県営圃場整備事業
屋敷添第2遺跡（やしきぞえ）	明野村上手（あけのむらうえで）1306ほか	194026	AN085	35°45′25″	138°26′30″	19960703～19960916	16,000	県営圃場整備事業
中原遺跡（なかはら）	明野村小笠原（あけのむらおがさわら）4072	194026	AN011	35°44′50″	138°27′15″	19961202～19961228	22	県営圃場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下大内遺跡	散布地 墓域 集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代 ～ 中世	再葬墓 竪穴住居 14軒 竪穴状遺構2基 土坑 350基 溝状遺構	曽利式・堀之内式・有舌尖頭器・打製石斧・石鏃 条痕紋系広口壷 土師器・灰釉陶器・須恵器・土師質土器	弥生時代の再葬墓 居住域と墓域の複合遺跡か？
屋敷添第2遺跡	集落跡	平安時代 平安時代 ～ 中世	竪穴住居 2軒 ピット 150基	土師器・灰釉陶器・須恵器 土師器・土師質土器・素焼き陶器・青磁・砥石	
中原遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居 1軒	藤内式土器・打製石斧・削器	

明野村文化財調査報告　11

下大内遺跡
屋敷添第2遺跡
中原遺跡

1997．3．31発行

発　行　明野村教育委員会
　　峡北土地改良事務所
印　刷　ほおずき書籍株式会社
　　〒381 長野県長野市柳原2133-5
　　電話（026）244-0235㈹

女